

秋田県文化財調査報告書第312集

泉野冷水遺跡  
中野遺跡

—主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001・3

秋田県教育委員会

いずみ の ひや みず い せき  
泉 野 冷 水 遺 跡  
なか の い せき  
中 野 遺 跡

—主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001・3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県には先人の残した多くの文化財があります。これらの過去の文化遺産を保護し、研究を進めることは、わたしたちの重要な責務の一つであります。

このたび、秋田県建設交通部により主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業が計画され、その路線が男鹿市北浦相川地区を通ることとなりました。そのため、秋田県教育委員会では事前に計画路線内の埋蔵文化財の分布調査を行い、泉野冷水遺跡と中野遺跡が路線にかかることを確認し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。発掘調査の結果、竪穴住居跡や土坑などが確認され、遺跡が縄文時代中期の集落跡であったことがわかりました。

本書は、この調査結果をまとめたものであります。本県の歴史を研究する上でいささかなりとも役立ち、県民各位の文化財保護への御理解がいっそう深まることとなれば望外の喜びであります。

最後に、発掘調査の実施および本報告書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました秋田県建設交通部秋田建設事務所、男鹿市教育委員会、地域住民の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

## 例 言

1. 本書は、主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書であり、平成10年度(1998年度)に発掘調査された、男鹿市に所在する泉野冷水遺跡と中野遺跡の調査成果をまとめたものである。
2. 調査成果については、すでにその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報17(平成10年度)』および発掘調査報告会資料、新聞報道などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
3. 本書に使用した航空写真は、秋田県土木部秋田土木事務所(現建設交通部秋田建設事務所)道路課提供のものである。
4. 本書に使用した地形図は、秋田県土木部秋田土木事務所(同上)提供の 1,000分の 1 工事計画図と建設省国土地理院発行の 50,000分の 1 『船川』、25,000分の 1 『北浦』、『戸賀』、『寒風山』である。
5. 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1994年版に拠った。
6. 本書の泉野冷水遺跡第3章「自然科学分析」は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した報告である。
7. 本書の作成にあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。  
〔順不同、敬称略、所属は平成10年度。〕  
泉 明 (男鹿市教育委員会)、太田 忠 (男鹿市教育委員会)、磯村朝次郎 (日本海文化研究所)、高橋保雄 (新潟県朝日村教育委員会)、富樫秀之 (新潟県朝日村教育委員会)、塩原知人 (新潟県村上市教育委員会)、竹内 裕 (新潟県村上市教育委員会)、藤原妃敏 (福島県立博物館)、長島雄一 (福島県立博物館)、荒木 隆 (福島県立博物館)、目黒吉明 (福島県考古学会)、川村 正 (宮城県七ヶ浜町教育委員会)、植松暁彦 (財団法人山形県埋蔵文化財センター)、押切智紀 (財団法人山形県埋蔵文化財センター)、中村良幸 (岩手県大迫町教育委員会)、日下和寿 (岩手県立博物館)
8. 本書の草稿執筆は、下記のように分担した。  
栗澤光男 …… 泉野冷水遺跡A区フラスコ状土坑とB区検出遺構の草稿執筆。  
熊谷 誠 …… 泉野冷水遺跡、中野遺跡の各遺構図作成。  
平田有宏 …… 泉野冷水遺跡A区土坑の草稿執筆。  
石澤宏基 …… 泉野冷水遺跡、中野遺跡の上記以外すべての草稿執筆と編集。
9. 本書の編集は、栗澤光男の指導を得て、石澤宏基が行った。

# 凡例

1. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番としたが、精査と整理作業を進める過程で、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

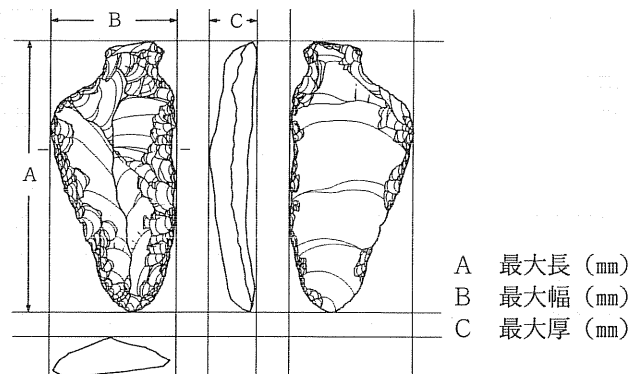
SI……………竪穴住居跡      SKF……………フラスコ状土坑      SK……………土坑  
 SR……………土器埋設遺構      SKT……………陥し穴      SX……………その他の遺構

なお、遺構図面に記したPは竪穴住居跡に伴うピット、Sは礫を示すものである。

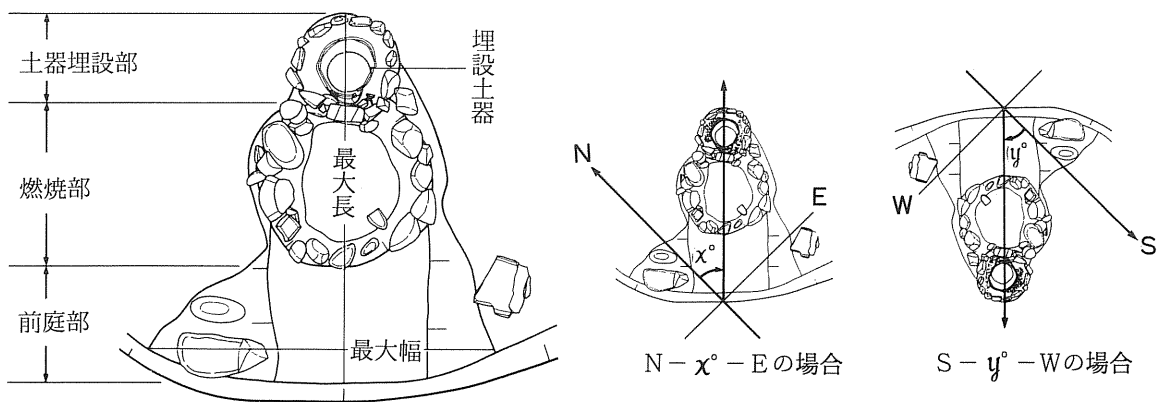
2. 土層番号に用いた数字は、基本土層にローマ数字を、遺構土層に算用数字を使用して区別した。  
 3. 遺構図中の「●」は土器類、「▲」は石器類、「■」は黒曜石製石器・剥片を示したものである。  
 4. 挿図中の遺物番号は、泉野冷水遺跡A区については遺構内出土土器、同石器、遺構外出土土器、同石器ごとに通し番号を付した。同B・C区と中野遺跡については挿図各頁の土器、石器ごとに通し番号を付した。  
 5. 挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。この他については個々の挿図中に示した。



6. 石器の計測部位は下図のとおりである。計測値の単位は長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。



7. 複式炉の各部名称は、煩雑さを避けるため左下図のように記述した。また、複式炉の軸線方向については、炉の最大長を示す軸線と、南北の方位が交わる角度を右下図のように計測し、その値を  $N-x^{\circ}-E$  や  $S-y^{\circ}-W$  のように表した。



複式炉各部の名称とその軸線方向の計測基準

# 目次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図・表目次	v
図版目次	vi

## はじめに

1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	2
遺跡の立地環境	
1. 遺跡の立地	5
2. 歴史的環境	5

## 泉野冷水遺跡

第1章 発掘調査の概要		第3節 遺構外出土遺物	
第1節 遺跡の概観	11	1 A区の遺構外出土遺物	102
第2節 調査の方法	11	(1) 土器	102
第3節 調査の経過	11	(2) 石器	103
第2章 調査の記録		2 B区の遺構外出土遺物	104
第1節 基本層序	15	(1) 土器	104
第2節 検出遺構と遺物	15	(2) 石器	104
1 A区の検出遺構と遺物		3 C区の遺構外出土遺物	104
(1) 竪穴住居跡	18	第3章 自然科学的分析	
(2) 土坑	47	第1節 はじめに	107
(3) フラスコ状土坑	50	第2節 試料	107
(4) 陥し穴	54	第3節 分析方法	107
(5) 土器埋設遺構	54	1 成分分析	107
(6) その他の遺構	57	2 水和層測定	108
2 B区の検出遺構と遺物		第4節 結果	108
(1) 竪穴住居跡	57	1 成分分析	108
(2) 土坑	101	2 水和層測定	110
3 C区の検出遺構と遺物		第5節 考察	110
(1) 竪穴住居跡	101	第4章 まとめ	113
(2) 土坑	102		
(3) 土器埋設遺構	102		

## 中野遺跡

第1章 発掘調査の概要		第2節 検出遺構と遺物	118
第1節 遺跡の外観	115	1 検出遺構	118
第2節 調査の方法	115	(1) 陥し穴	118
第3節 調査の経過	115	(2) 土坑	118
第2章 調査の記録		2 出土遺物	118
第1節 基本層序	118	第3章 まとめ	120

図版	121
報告書抄録	166

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第40図	A区遺構内出土土器(11)	68
第2図	路線と遺跡	3	第41図	A区遺構内出土土器(12)	69
第3図	地形区分図	4	第42図	A区遺構内出土土器(13)	70
第4図	周辺遺跡位置図	7	第43図	A区遺構内出土土器(14)	71
第5図	泉野冷水遺跡の報道記事	12	第44図	A区遺構内出土土器(15)	72
第6図	泉野冷水遺跡遺構配置図	13	第45図	A区遺構内出土土器(16)	73
第7図	泉野冷水遺跡A区基本土層図	16	第46図	A区遺構内出土土器(17)	74
第8図	泉野冷水遺跡B・C区基本土層図	17	第47図	A区遺構内出土土器(18)	75

### 泉野冷水遺跡

第9図	A区S I 01竪穴住居跡および炉	19	第51図	A区遺構内出土土器(22)	79
第10図	A区S I 05竪穴住居跡	22	第52図	A区遺構内出土土器(1)	80
第11図	A区S I 05・10竪穴住居跡炉	24	第53図	A区遺構内出土土器(2)	81
第12図	A区S I 13・15竪穴住居跡炉	26	第54図	A区遺構内出土土器(3)	82
第13図	A区S I 16竪穴住居跡炉	28	第55図	A区遺構内出土土器(4)	83
第14図	A区S I 21・23竪穴住居跡炉	31	第56図	A区遺構内出土土器(5)	84
第15図	A区S I 24・25・41竪穴住居跡炉	32	第57図	A区遺構外出土土器(1)	85
第16図	A区S I 32竪穴住居跡	35	第58図	A区遺構外出土土器(2)	86
第17図	A区S I 34竪穴住居跡	36	第59図	A区遺構外出土土器(3)	87
第18図	A区S I 34竪穴住居跡炉	37	第60図	A区遺構外出土土器(4)	88
第19図	A区S I 38竪穴住居跡	39	第61図	A区遺構外出土土器(5)	89
第20図	A区S I 38竪穴住居跡炉	40	第62図	A区遺構外出土土製品	90
第21図	A区S I 42・43竪穴住居跡	43	第63図	A区遺構外出土土器(1)	91
第22図	A区S I 42・43竪穴住居跡炉	44	第64図	A区遺構外出土土器(2)	92
第23図	A区S I 60竪穴住居跡炉	46	第65図	A区遺構外出土土器(3)	93
第24図	A区S K 17・18・33・35土坑	48	第66図	A区遺構外出土土器(4)	94
第25図	A区S K 36・37・56土坑	49	第67図	B区S I 02竪穴住居跡及び炉、 S K 01土坑	95
第26図	A区S K F 02・04・12 フラスコ状土坑	51	第68図	B区遺構内出土土器	96
第27図	A区S K F 22・26フラスコ状土坑、 S K T 19陥し穴	53	第69図	B区遺構内出土土器、 遺構外出土土器・石器	97
第28図	A区S R 03・07・11・31・57 土器埋設遺構	55	第70図	C区S I 01竪穴住居跡炉、S K 02土坑、 S R 03土器埋設遺構	98
第29図	A区S X 14	56	第71図	C区遺構内出土土器	99
第30図	A区遺構内出土土器(1)	58	第72図	C区遺構内出土土器	100
第31図	A区遺構内出土土器(2)	59	第73図	黒曜石の産地判定図および 水和速度と効果温度の関係	109
第32図	A区遺構内出土土器(3)	60			
第33図	A区遺構内出土土器(4)	61			
第34図	A区遺構内出土土器(5)	62			
第35図	A区遺構内出土土器(6)	63			
第36図	A区遺構内出土土器(7)	64			
第37図	A区遺構内出土土器(8)	65			
第38図	A区遺構内出土土器(9)	66			
第39図	A区遺構内出土土器(10)	67			

### 中野遺跡

第74図	中野遺跡遺構配置図	117
第75図	中野遺跡基本土層図	118
第76図	S K 02土坑、S K T 01陥し穴 遺構外出土土器・土製品	120

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧	8	第3表	B区出土土器計測一覧	106
第2表	A区出土土器計測一覧(1)	105	第4表	C区出土土器計測一覧	106
第2表	A区出土土器計測一覧(2)	106	第5表	黒曜石の成分分析結果および水和層厚	111





図版25	泉野冷水遺跡A区検出遺構(21) …………… 145	図版36	泉野冷水遺跡A区出土遺物(10) …………… 156
1	S R03土器埋設遺構(東→西)	1	L P52地区出土土器
2	S R03土器埋設遺構断面(東→西)	2	L P52地区出土小型土器
3	S R11土器埋設遺構(南西→北東)	3	MD51地区出土小型土器
4	S R11土器埋設遺構断面(南西→北東)	4	L N48地区出土小型土器
5	S R31土器埋設遺構(南東→北西)	5	L P51地区出土小型土器
6	S R31土器埋設遺構断面(南東→北西)	図版37	泉野冷水遺跡B・C区出土遺物 …………… 157
7	S R57土器埋設遺構(南西→北東)	1	B区S I02竪穴住居跡炉埋設土器
8	S R57土器埋設遺構断面(南西→北東)	2	B区S I02竪穴住居跡出土土器
図版26	泉野冷水遺跡B・C区検出遺構 …………… 146	3	C区S I01竪穴住居跡炉埋設土器
1	B区S I02竪穴住居跡(東→西)	図版38	泉野冷水遺跡出土黒曜石水和層断面(1) … 158
2	B区S K01土坑(南→北)	図版39	泉野冷水遺跡出土黒曜石水和層断面(2) … 159
3	C区S I01竪穴住居跡炉(南東→北西)	図版40	泉野冷水遺跡出土黒曜石水和層断面(3) … 160
4	C区S K02土坑(南東→北西)	図版41	泉野冷水遺跡出土黒曜石水和層断面(4) … 161
5	C区S R03土器埋設遺構(西→東)	図版42	泉野冷水遺跡出土黒曜石水和層断面(5) … 162
図版27	泉野冷水遺跡A区出土遺物(1) …………… 147		
1	S I01竪穴住居跡炉埋設土器		
2	S I05竪穴住居跡炉埋設土器		
図版28	泉野冷水遺跡A区出土遺物(2) …………… 148		
1	S I05竪穴住居跡出土土器	図版43	遺跡風景(4) …………… 163
2	S I05竪穴住居跡出土土器	1	中野遺跡遠景(南西→北東)
3	S I10竪穴炉埋設土器	2	中野遺跡近景(西→東)
図版29	泉野冷水遺跡A区出土遺物(3) …………… 149	図版44	中野遺跡検出遺構(1) …………… 164
1	S I13竪穴住居跡炉埋設土器	1	S K T01陥し穴(北西→南東)
2	S I15竪穴住居跡炉埋設土器	2	S K T01陥し穴(北東→南西)
3	S I16竪穴住居跡炉埋設土器	図版45	中野遺跡検出遺構(2) …………… 165
図版30	泉野冷水遺跡A区出土遺物(4) …………… 150	1	S K02土坑(南西→北東)
1	S I21竪穴住居跡炉埋設土器	2	S K02土坑断面(南西→北東)
2	S I23竪穴住居跡炉埋設土器		
3	S I23竪穴住居跡出土土器		
図版31	泉野冷水遺跡A区出土遺物(5) …………… 151		
1	S I24竪穴住居跡炉埋設土器		
2	S I25・41竪穴住居跡出土土器		
3	S I25竪穴住居跡炉埋設土器		
図版32	泉野冷水遺跡A区出土遺物(6) …………… 152		
1	S I32竪穴住居跡炉埋設土器		
2	S I34竪穴住居跡出土土器		
3	S I34竪穴住居跡炉埋設土器		
4	S I34竪穴住居跡出土土器		
図版33	泉野冷水遺跡A区出土遺物(7) …………… 153		
1	S I42竪穴住居跡出土土器		
2	S I42竪穴住居跡炉埋設土器		
3	S I42竪穴住居跡炉埋設土器		
4	S I60竪穴住居跡炉埋設土器		
図版34	泉野冷水遺跡A区出土遺物(8) …………… 154		
1	S K F12フラスコ状土坑出土土器		
2	S R07土器埋設遺構出土土器		
3	S R31土器埋設遺構出土土器		
4	S R57土器埋設遺構出土土器		
図版35	泉野冷水遺跡A区出土遺物(9) …………… 155		
1	S I23竪穴住居跡炉出土小型土器		
2	S I32竪穴住居跡出土小型土器		
3	S I42竪穴住居跡出土小型土器		
4	S K F02フラスコ状土坑出土小型土器		

## 中野遺跡

# はじめに

## 1. 調査に至る経過

秋田県の男鹿半島は、三方が海に面した美しい自然環境と豊かな文化財により、昭和48(1973)年、環境庁から「男鹿国定公園」の指定を受けた。国定公園の指定を一市単独で受けているのは、全国で男鹿市が唯一であり、年間約200万人以上の観光客が訪れる秋田県の重要な観光景勝地となっている。

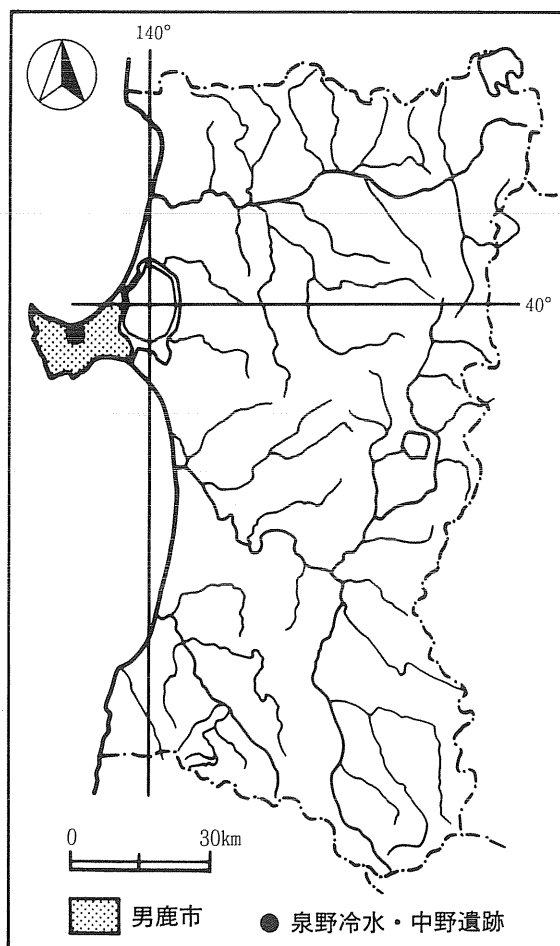
また、この地域は漁業を中心とする水産業や、国家石油備蓄基地を擁する船川港を核とした関連工業が産業基盤となっており、半島振興法に基づく「半島振興地域」にも指定されている。

主要地方道入道崎寒風山線は、この男鹿半島を周回する観光道路を構成するとともに、各種産業の発展に欠かせない物流の基幹道路であり、地域住民にとっては日常生活の交通を支える重要な道路として利用されている。

しかし、男鹿市北浦相川字泉野および冷水地区から同字中野地区までの現道は、幅員が狭隘で大型車両の通行が困難な上、急勾配と急カーブが連続する場所であり、特に冬季は一般車両にとっても通行に支障をきたすほどの隘路となっていた。そのため、秋田県では道路の早急な整備改良が必要であると判断し、平成3(1991)年、事業計画の策定に着手した(なお当初は「県道男鹿公園線バイパス建設事業」という名称であった)。そして平成6(1994)年度には「主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業」とし、総延長1.62kmの計画路線とすることを決定した。

本事業の計画路線上には、既に明治初期から遺跡として知られ、昭和49(1974)年に男鹿市教育委員会によって一部発掘調査が行われた泉野遺跡が存在することが判明していた。さらにその周辺にも埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高かったため、秋田県土木部秋田工事事務所(当時：現建設交通部秋田建設事務所)は、文化財保護法に基づき遺跡存在の確認とその後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導を要請した。

これを受けて秋田県教育委員会は、男鹿市教育委員会とともに平成7(1995)年5月と平成8(1996)年12月の二回わたって計画路線内の遺跡分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡である泉野冷水遺跡と新発見の遺跡である中野遺跡が路線に係る埋蔵文化財包蔵地であり、今後は遺跡の範囲確認調査が必要であること、さらに範囲確認調査の



第1図 遺跡位置図

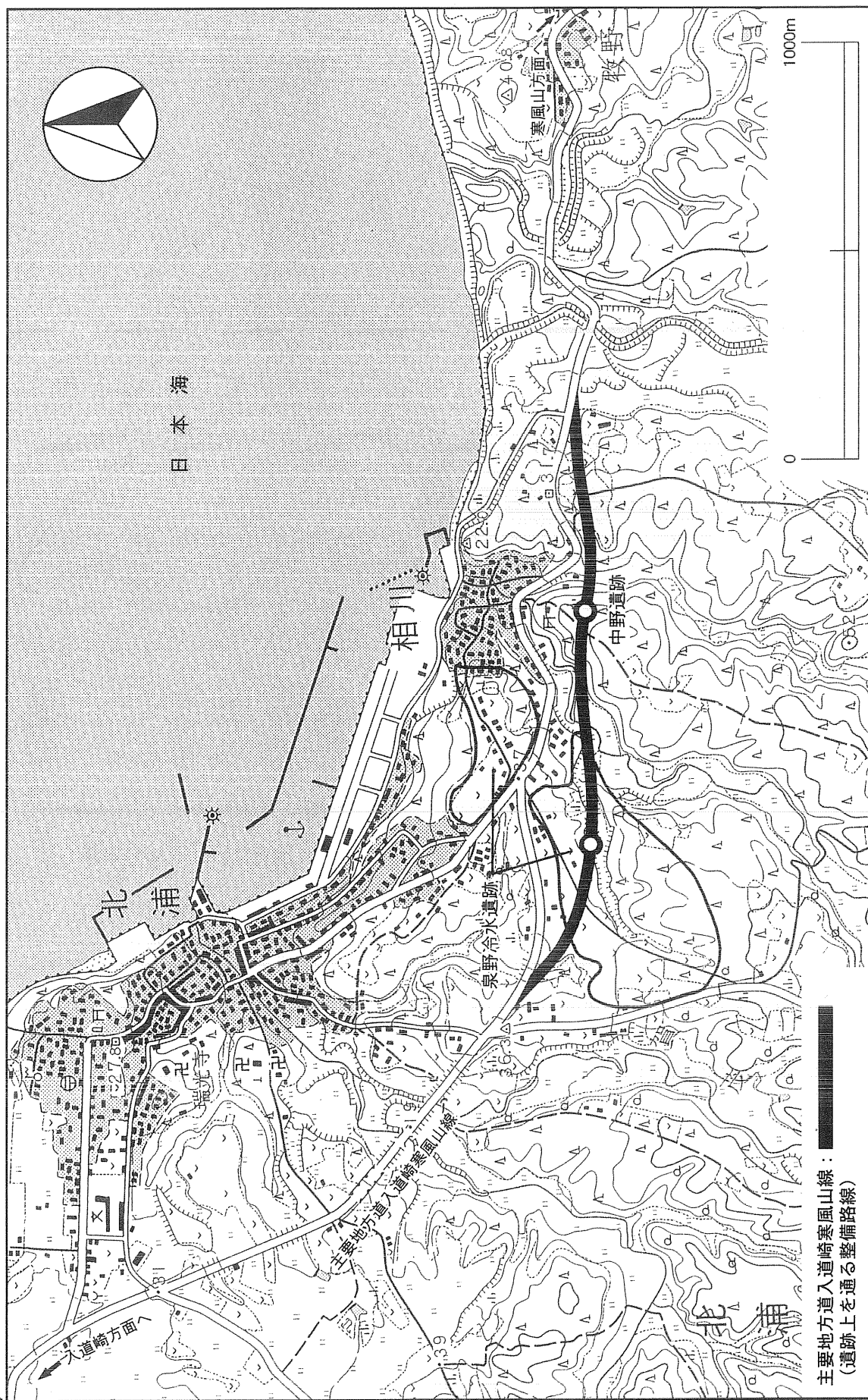
結果によっては遺跡としての記録保存措置が必要であり、その場合は発掘調査を実施しなければならないことを回答した。

この遺跡分布調査結果をふまえ、秋田県土木部秋田工事事務所と秋田県教育庁文化課(当時：現生涯学習課文化財保護室)では、当該遺跡の範囲確認調査を行うこととし、平成9(1997)年11月4日から12月5日まで、秋田県埋蔵文化財センターが泉野冷水遺跡と中野遺跡の範囲確認調査を実施した。調査の結果、両遺跡とも発掘調査による記録保存が必要であることが明らかとなり、工事区内の遺跡面積を確定するとともに、翌年度の発掘調査計画を策定した。

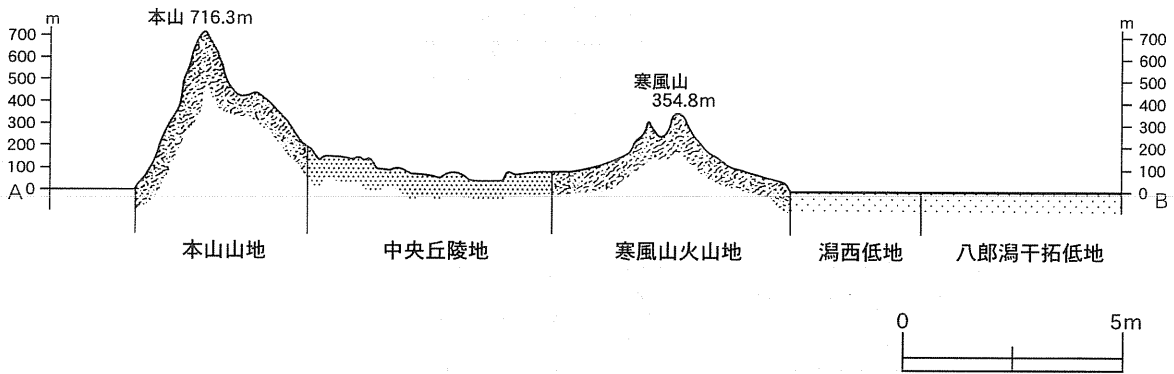
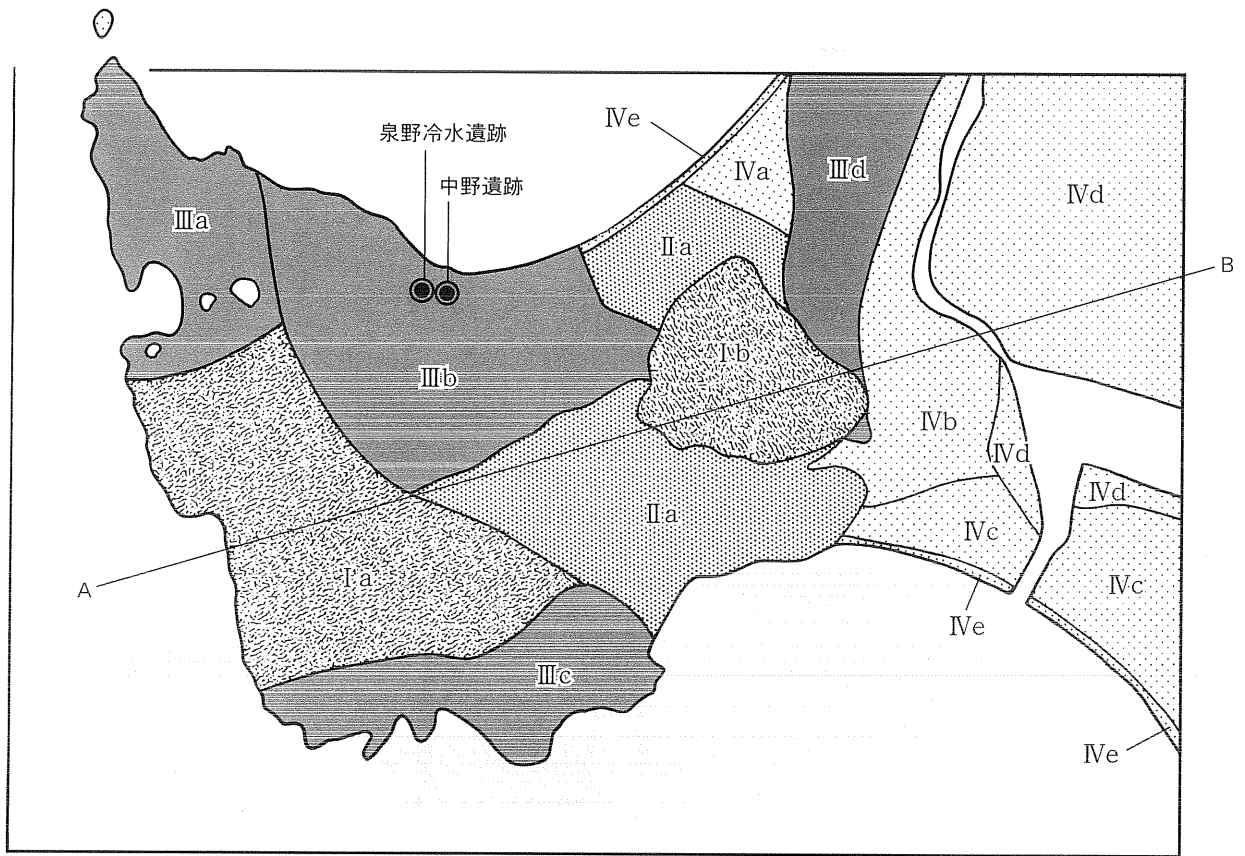
以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、道路整備の工事に先立って平成10(1998)年6月8日から11月18日まで、泉野冷水遺跡および中野遺跡の発掘調査を実施するに至った。





## 2. 調査要項

遺 跡 名	泉野冷水遺跡(いずみのひやみずいせき)：遺跡略号 4 I NHM 中 野 遺 跡(なかのいせき)：遺跡略号 4 NN
遺跡所在地	泉野冷水遺跡：秋田県男鹿市北浦相川字泉野10-3外 北緯39° 57' 09" 東経139° 47' 27" 中 野 遺 跡：秋田県男鹿市北浦相川字中野11外 北緯39° 57' 05" 東経139° 47' 44"
調 査 期 間	泉野冷水遺跡：平成10年6月8日(月)～11月18日(水) 中 野 遺 跡：平成10年9月7日(月)～10月2日(金)
調 査 目 的	主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	泉野冷水遺跡：5,000㎡ 中 野 遺 跡：1,600㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤 光男(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第二科 文化財主査) 石澤 宏基(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第二科 学芸主事) 熊谷 誠(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第二科 非常勤職員) 平田 有宏(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第二科 非常勤職員) (平成11年3月退職 現秋田県公文書館 主事)
総務担当者	佐藤 悟(秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長) 菅原 晃(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主査) (平成12年3月転出 現秋田県立横手工業高等学校 事務長補佐) 佐藤 幸嗣(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事) (平成11年3月転出 現秋田県教育庁福利課 主事) 佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事) 八文字 隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)
調査協力機関	秋田県建設交通部秋田建設事務所 男鹿市教育委員会 男鹿市役所北浦支所



第2図 路線と遺跡



- |   |  |               |
|---|--|---------------|
|  | 本山山地 (I a) 寒風山火山地 (I b)  | — 山地・火山       |
|  | 中央丘陵地 (II a)   | — 丘陵地         |
|  | 八望台台地 (III a) 北浦・安全寺台地 (III b)<br>女川台地 (III c) 潟西台地 (III d)            | — 台地<br>— 段丘地 |
|  | 五里合低地 (IV a) 潟西低地 (IV b) 船越・天王砂丘地 (IV c)<br>八郎潟干拓低地 (IV d) 海浜低地 (IV e) | — 低地          |

第3図 地形区分図

# 遺跡の位置と立地

## 1. 遺跡の立地

泉野冷水遺跡と中野遺跡のある男鹿半島は、第1図のように秋田県沿岸部の中央やや北寄りに位置し、旧八郎潟から日本海に向かって西に約25km突出した本県唯一の半島である。この半島の大部分の面積を男鹿市が占める。両遺跡は、日本海に面する男鹿市北岸の北浦相川地域に所在し、JR東日本男鹿線の羽立駅から北西方向へ約10kmの相川地区に中野遺跡が、そこから西に約1kmの泉野地区および冷水地区に泉野冷水遺跡が位置する。各々の経緯度は、泉野冷水遺跡が北緯39度57分09秒、東経139度47分27秒であり、中野遺跡が北緯39度57分05秒、東経139度47分44秒である。

遺跡の位置する男鹿半島の地形は、地形区分図によると山地・火山地(I)、丘陵地(II)、台地・段丘地(III)、低地(IV)に大きく分けられ、さらに第3図のように細別される。このうち、泉野冷水遺跡と中野遺跡は、北浦・安全寺台地(IIIb)上に属する。

両遺跡は、この北浦・安全寺台地が日本海に向かって注ぎ込むいくつもの小河川によって開析された北向きの舌状段丘面に立地する。泉野冷水遺跡は、真山より発して北浦の市街地を貫流する加茂川と、同じく真山を発して相川集落を貫流する相川に挟まれた標高約35~40mの段丘上にあり、中野遺跡は、その相川と大増川に挟まれた標高約40~45mの段丘上に位置する。

## 2. 歴史的環境

泉野冷水遺跡と中野遺跡が所在する男鹿半島には、周知のものだけでも200以上の遺跡が存在する。両遺跡の周辺に位置する遺跡を第4図と第1表に掲載した。図中、周知の遺跡については秋田県教育委員会発行『秋田県遺跡地図(中央版)』記載の遺跡番号で示し、新発見の遺跡については任意のアルファベット番号A~Fで示した。

男鹿半島で最も古い時代の遺跡としては、旧石器時代のエンド・スクレイパーが出土している大畑台遺跡があげられる。このエンド・スクレイパーは、同遺跡の竪穴住居跡(第10号住居跡)に混在して出土した黒曜石製のもので、上部旧石器時代後半期に比定されている。現在のところ、男鹿半島でこれよりも古い時代に属する遺跡は確認されていない。

縄文時代草創期・早期の遺跡は、男鹿半島で発掘調査された事例がない。しかし、半島南岸の船越から脇本海岸では、早期後半の貝殻沈線文系土器が海岸に打ち上げられていることが、昭和52(1977)年頃から確認されており、現在の海面下にこの時期の遺跡があると考えられている。平成8(1996)年に脇本海岸まで1kmの丘陵上に位置する脇本石館遺跡の詳細分布調査が、男鹿市教育委員会によって実施され、内面に条痕を施し表面には縄文を施した縄文早期末~前期初頭の土器片が出土した。

縄文時代前期の遺跡としては、八郎潟に面した若美町の角間崎貝塚が著名である。既に明治年間に学会に報告され、昭和29(1954)年に琴浜村(当時)と秋田県教育委員会により発掘調査された。角間崎貝塚はハマグリ、オキシジミ、アサリなど海産の貝を主体とし、縄文海進の最も進んだ時期に八郎潟は湾として外海と完全につながっていたことを物語る遺跡である。また、半島北岸の突端に近い小浜

沢遺跡(6-172)は、昭和57(1982)年に発掘調査され、前期前半の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構2基、土坑5基が検出された遺跡である。当該時期の竪穴住居跡は県下でも他に類例が少なく、貴重な事例となっている。このほか前期の遺跡としては、北岸にカブケ柳遺跡(6-174)、琴川銭神沢Ⅰ遺跡(6-134)、縄手の内遺跡(6-133)があり、南岸に中山Ⅱ遺跡などがある。

縄文中期の遺跡としては、半島北岸の泉野遺跡が昭和49(1974)年に発掘調査され、中期後葉～末葉の時期の竪穴住居跡8軒が検出された。泉野とは反対の南岸でも、先述の大畑台遺跡にて中期中葉～後葉を中心とした竪穴住居跡51軒、貯蔵穴10基などが検出されている。男鹿半島は、秋田県域の中央沿岸部にあり、縄文時代前期～中期にかけて東北地方北部の円筒土器と南部の大木式土器が交雑する地域である。この二つの土器文化に加えて、大畑台遺跡では北陸系の新保式・新崎式土器が、泉野遺跡では北陸地方西部に分布する葉脈状文土器が出土し、日本海沿岸の広汎な地域間交流を示す調査結果を得ている。このほか、昭和58(1983)年に発掘調査された三十刈Ⅰ遺跡では中期後葉の竪穴住居跡5軒が、昭和59(1984)年に発掘調査された延命寺台遺跡でも、同時期の竪穴住居跡1軒が検出された。

縄文後期および晩期の遺跡としては、半島北岸に長者森遺跡、南浜野遺跡、大台遺跡(6-175)、苗代沢遺跡(6-176)、地藏台遺跡(6-187)などが、南岸に女川貝塚、鳥屋場遺跡、半島付け根の寒風山西麓に大沢遺跡などがあるが、いずれも発掘調査が行われた遺跡ではなく、遺物が採取されているのみで詳細は不明である。

弥生時代の遺跡としては、男鹿市の東隣、若美町の横長根A遺跡がある。昭和58(1983)年に発掘調査された遺跡で、遠賀川系の壺形土器が出土し、遺跡内の湧水点からは炭化米が出土した。八郎潟沿岸部は八竜町家の下遺跡、若美町志藤沢遺跡、井川町新聞遺跡など、初期稲作の痕跡が古くから知られた地域である。横長根A遺跡の調査は、縄文時代以来の日本海沿岸交流によって東北北部においても津軽平野と並んでこの地域に稲作文化の影響が早くから及んだことを示した。また、三十刈Ⅰ遺跡では5基の土坑が検出された。出土した土器は鋸歯文を特徴とし、横長根A遺跡よりも新しい時期と判断されるものであるが、出土した土器の1点からやはり器面の内外に刃痕が確認された。このほか、半島北岸に上源寺遺跡、十文字松原遺跡、大坂下遺跡(6-183)、南岸に大倉遺跡、向山遺跡、飯ノ町遺跡、根木遺跡などが知られる。

古墳時代の遺跡としては、半島南岸の脇本にある小谷地遺跡がある。昭和56(1981)年の発掘調査により、6世紀代と判断される甕、坏、高坏などを伴って住居用材が出土した。東北北部における古墳時代は、南からの古墳文化と北からの北海道系の文化が交錯して複雑な様相を示す。しかし、県内での当該時期の遺跡の発見はまだ少なく、貴重な事例を追加した遺跡である。

男鹿半島の古代の遺跡としては、昭和8(1933)年に脇本飯ノ町にあった墳墓から蔵手刀が出土したことが報じられている。また、同じ脇本で先述の小谷地遺跡では、昭和34(1959)年に行われた排水路工事によって多量の土師器、須恵器とともに埋没した家屋の用材が出土した。脇本埋没家屋とも呼ばれる。その後、昭和39(1964)年から昭和41(1966)年までの間、3次にわたって発掘調査が行われ、多くの墨書されたものを含む土師器、須恵器が出土した。それらの供給元の一部は若美町海老沢窯跡群と推定され、9世紀中頃から10世紀初頭にかけての年代に比定される。その若美町海老沢窯跡からは、4基の半地下式の須恵器窯が昭和49(1974)年の調査によって検出された。高台付きの皿が特徴的に出土し、その供給先としては小谷地遺跡のほか、五城目町岩野山古墳、能代市大館遺跡などが考えられ





第1表 周辺遺跡一覧

周知の遺跡（秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』平成2(1991)年に掲載されている遺跡）

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物	参考
6-42	浜沢Ⅰ	男鹿市五里合琴川字浜川	遺物包含地	土師器片、石鏃	
6-43	浜沢Ⅱ	男鹿市五里合琴川字浜沢	遺物包含地	縄文土器片、石鏃	
6-50	琴川・銭神沢Ⅱ	男鹿市五里合琴川字銭神沢	遺物包含地	土師器片、須恵器片	
6-65	浜野Ⅲ	男鹿市五里合神谷字浜野	遺物包含地	縄文土器片、土師器片、須恵器片	
6-133	縄手の内	男鹿市五里合琴川字縄手の内	遺物包含地	縄文土器片(前期)、井戸跡、 石鏃、石錘、石匙、石斧、石槍、 土師器片、青磁片、矢板	
6-134	琴川・銭神沢Ⅰ	男鹿市五里合琴川字銭神沢	遺物包含地	縄文土器片(前期)石鏃、石匙、 打製石斧、半円状扁平打製石器、 黒曜石、土師器片、須恵器片	『男鹿市の文化財』第6集 男鹿市教育委員会 1985年
6-140	苗代沢	男鹿市五里合琴川字苗代沢	遺物包含地	土師器片、須恵器片	
6-141	丑沢	男鹿市五里合琴川字丑沢	遺物包含地	土師器片、須恵器片	
6-144	熊の台	男鹿市五里合箱井字熊の台	遺物包含地	土師器片、須恵器片	『八郎潟の研究』八郎潟学術調査会 奈良修介・磯村朝次郎 1965年
6-171	戸沢	男鹿市北浦西黒沢字戸沢	遺物包含地	石匙、石棒、石錘	
6-172	小浜沢	男鹿市北浦西黒沢字小浜沢14-1	遺物包含地	竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、 縄文土器片(前期)、石鏃、石斧、 空濠、青磁片	『小浜沢遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会 1983年
6-174	カブケ柳(打道坂下)	男鹿市北浦野村字打道坂下12	遺物包含地	縄文土器片(早期末～前期)、 石鏃、石匙、石斧、石錘	『男鹿市の文化財』第5集 男鹿市教育委員会 1983年
6-175	大台	男鹿市北浦西水口字大台	遺物包含地	縄文土器片(後期)	『男鹿半島研究』第1号 磯村朝次郎 1972年
6-176	苗代沢	男鹿市北浦西水口字苗代沢	遺物包含地	縄文土器片(後期)	『男鹿半島研究』第1号 1972年 『男鹿市の文化財』第5集 1983年
6-177	西水口	男鹿市北浦西水口字燧板	経塚	一字一石経石	『男鹿研究資料概要』No.10 磯村朝次郎 1973年
6-178	五輪野	男鹿市北浦五輪野51	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土偶、石器剥片	『叢』19の40 奈良修介 1954年
6-180	相馬館	男鹿市北浦西水口字大滝沢	遺物包含地	空堀、段築、須恵器系の壺	『秋田県の中世城館』1981年
6-181	館越館	男鹿市北浦字館越	遺物包含地	空濠、郭、槍、小規	『秋田県の中世城館』1981年
6-182	染川城	男鹿市北浦相川字神田	遺物包含地	空濠、郭、盛土遺構、 土師器片、須恵器片、鉄片 配石遺構、縄文土器片(中～後期)	『染川城跡発掘調査報告書』 男鹿市教育委員会 1995年
6-183	大坂下	男鹿市北浦西水口字大坂下	遺物包含地	弥生土器片	
6-184	雪車坂	男鹿市北浦西水口字雪車坂50	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石鏃	
6-185	上鴨川沢	男鹿市北浦字上鴨川沢	遺物包含地	縄文土器片	
6-186	花取山	男鹿市北浦真山字花取山	遺物包含地	縄文土器片	
6-187	地藏台	男鹿市男鹿中浜間口字地藏台	遺物包含地	竪穴住居跡、フラスコ状ビット、 縄文土器片(後期)、 土師器片、須恵器片	『男鹿市の文化財』第6集 男鹿市教育委員会 1985年
6-189	牧野窯	男鹿市男鹿中山町字芋の沢	遺物包含地	窯跡(近世～近現代)、 甕、壺、播り鉢、瓦、土錐	『男鹿研究資料概要』No.2 磯村朝次郎 1971年
6-190	舟坂	男鹿市男鹿中浜間口字舟坂	遺物包含地	土師器、須恵器	
6-191	神田	男鹿市男鹿中滝川字神田	遺物包含地	柱根、唐津、美濃、絵馬片	『男鹿研究資料概要』No.4 磯村朝次郎 1972年
6-194	杉下館Ⅰ	男鹿市男鹿中滝川字塩戸尻	遺物包含地	空堀、郭	
6-195	杉下館Ⅱ	男鹿市男鹿中滝川字	遺物包含地	空堀、郭	
6-197	打道板上台	男鹿市北浦野村字打道板上台	遺物包含地	炉跡の断面、 縄文土器片(中期末～後期)	

新発見の遺跡（秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』平成2(1991)年に未掲載で、その後の遺跡分布調査によって発見された遺跡）

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物	参考
A	北浦	男鹿市北浦字北浦	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石器剥片	『男鹿市史』男鹿市 1995年
B	茨島	男鹿市北浦茨島	遺物包含地	縄文土器片・弥生土器片	『男鹿市史』男鹿市 1995年
C	真山	男鹿市北浦真山字水喰沢	集落跡	住居跡、伝墳墓群、土坑、 陶磁器、古銭、石鏃	『真山遺跡発掘調査報告書』 男鹿市教育委員会 1998年
D	隠台	男鹿市北浦湯本字隠台	遺物包含地	縄文土器片	『真山遺跡発掘調査報告書』
E	袖ノ沢	男鹿市北浦湯本字袖ノ沢	遺物包含地	縄文土器片(後期)	『男鹿市史』男鹿市 1995年
F	中里	男鹿市北浦湯本字中里	遺物包含地	中世陶磁器片	『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第12号 磯村享 1997年

る。若美町の三十刈Ⅱ遺跡では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟などが昭和58(1983)年の発掘調査で検出され、9世紀代の北陸地域との交流が想定されるタキ目のある砲弾形の土師器甕が出土している。

中世の遺跡としては、男鹿市内に現在37ヶ所の中世城館と目される遺跡があるが、このうち脇本地区にある脇本城は最も広大であり、土塁、濠、虎口等、城館構造がきわめて良く残っている遺跡である。男鹿市教育委員会の調査によって遺跡の重要性について認識が深まり、平成7(1995)年に男鹿市文化財(史跡)指定されたのち、平成9(1997)年には秋田県文化財(史跡)に指定された。現在も市教育委員会によって保存を目的とした調査が継続されている。このほかに半島北岸の相川海岸には、平成4～6(1992～94)年に発掘調査された染川城跡(6-182)が位置する。

### 《参考文献》

- 文 化 庁『全国遺跡地図 秋田県』昭和52(1977)年
- 秋 田 県『秋田県史』考古編 昭和35(1960)年
- 秋 田 県『土地分類基本調査 船川・戸賀』昭和49(1974)年
- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976(昭和51)年
- 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』昭和56(1981)年
- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』平成2(1990)年
- 秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第一次調査概報』秋田県文化財調査報告書第5集 昭和40(1965)年
- 秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第二次調査概報』秋田県文化財調査報告書第6集 昭和41(1966)年
- 秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第三次調査概報』秋田県文化財調査報告書第11集 昭和42(1967)年
- 秋田県教育委員会『小浜沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第100集 昭和58(1983)年
- 秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第110集 昭和59(1984)年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第262集 平成8(1996)年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集 平成9(1997)年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集 平成10(1998)年
- 男 鹿 市『男鹿市史』昭和39(1964)年
- 男 鹿 市『男鹿市史』上・下巻 平成7(1995)年
- 男鹿市教育委員会『泉野遺跡発掘調査概報』男鹿市文化財調査報告書第1集 昭和51(1976)年
- 男鹿市教育委員会『脇本埋没家屋第四次発掘調査報告書(小谷地遺跡)』男鹿市文化財調査報告書第2集 昭和57(1982)年
- 男鹿市教育委員会『男鹿市の文化財』第5集 昭和58(1983)年、同第6集 昭和60(1985)年、同第7集 昭和62(1987)年
- 男鹿市教育委員会『延命寺台遺跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第4集 昭和59(1984)年
- 男鹿市教育委員会『脇本城と脇本城跡』男鹿市文化財調査報告書第9集 平成6(1994)年
- 男鹿市教育委員会『染川城跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第13集 平成7(1995)年
- 男鹿市教育委員会『脇本城と脇本城跡-第2次・第3次調査報告-』男鹿市文化財調査報告書第14集 平成8(1996)年
- 男鹿市教育委員会『脇本石館遺跡詳細分布調査報告』男鹿市文化財調査報告書第16集 平成9(1997)年
- 男鹿市教育委員会『真山遺跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第18集 平成10(1998)年
- 男鹿市教育委員会『脇本城と脇本城跡-第4次～第6次調査報告-』男鹿市文化財調査報告書第19集 平成11(1999)年

遺跡の位置と立地

若美町『若美町史』昭和56(1981)年

若美町教育委員会『若美町史資料』昭和52(1977)年

若美町教育委員会『横長根A遺跡発掘調査報告書』昭和59(1984)年

日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』昭和54(1979)年

奈良修介「遺物より見た男鹿半島の古文化」『叢』19の40 昭和29(1954)年

奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』郷土考古学叢書3 吉川弘文館 昭和42(1967)年

奈良修介・磯村朝次郎「八郎潟周辺の遺跡」『八郎潟の研究』八郎潟学術調査会 昭和40(1965)年

磯村朝次郎「男鹿にある二つの近世の窯跡」『男鹿研究資料概要』No.2 昭和46(1971)年

磯村朝次郎「男鹿半島日潟周辺の遺跡および遺物」『男鹿半島研究』第1号 昭和47(1972)年

磯村朝次郎「男鹿中神田出土の柱根と陶片」『男鹿研究資料概要』No.4 昭和47(1972)年

磯村朝次郎「男鹿半島の経塚所在地名表」『男鹿研究資料概要』No.10 昭和48(1973)年

吉川耕太郎・児玉 準「男鹿市大畑台遺跡出土のエンド・スクレイパーについて」『男鹿』第5号 平成11(1999)年

磯村 享「男鹿市祓川I遺跡出土の中世陶器－特に越前・珠洲系陶器について－」

『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 平成9(1997)年

いずみ の ひや みず い せき  
泉 野 冷 水 遺 跡

(遺跡略号：4 I NHM)

所 在 地：秋田県男鹿市北浦相川字泉野10-3外

調査期間：平成10年（1998年）6月8日～11月18日

調査面積：5,000㎡

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概観

泉野冷水遺跡は、真山から発して日本海に注ぐ加茂川と相川に開析された舌状段丘面に立地する。標高は約40mで、南西―北東方向に伸びる北浦南部段丘の南縁に位置している。遺跡の西側を、市道泉野大沢岱1号線が通過しており、この市道を北東に向かえば、北浦・相川集落中間のY字路交差点につながり、南西に向かえば真山神社や真山・安全寺集落に至る。

発掘調査区は、主要地方道入道崎寒風山線の工事路線に合わせた道路状の平面形を呈し、東西方向に長く南北方向に短い。調査面積は5,000㎡である。調査区北側は、耕作中の畑地と市道沿いの住宅地であり、調査区南側は急峻な谷となっている。この谷下には相川水系の支流があり、本調査区北東端の谷下で相川本流と合流する。相川を挟んだ対面の段丘面には中野遺跡が位置する。なお、発掘調査前の現況は、大部分が旧畑作地で一部は山林であった。

調査区は段丘南縁の谷によって3箇所に分離している。この3つの調査区を便宜上、西からA区・B区・C区と呼称した。このうち西側の台地上に位置するA区の面積が最も広い。これに対し、東側の台地縁辺部に位置するB・C区は、谷に面して僅かに突出した台地の先端だけが調査区となった。

A区の内部には、約80mの距離をおいて東西2つの沢地形が確認されたため、この西側の沢を沢1、東側の沢を沢2と呼称し、さらに沢1以西をA区西部、沢1以东～沢2以西間をA区中央部、沢2以东をA区東部と呼ぶこととした。

## 第2節 調査の方法

調査の方法は、主要地方道入道崎寒風山線工事路線の中心杭 STA.No.60を基点として真北方向をとり、4m四方の方眼杭を打設して遺構を検出するグリッド法を採用した。基点には、MA50の呼称を付し、西に行くに従いMB、MC、MD……というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53……という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号を示した4m四方の方眼杭の南東隅をそのグリッドの名称とした。検出遺構は発見順に一連番号を付し、A～C区の各調査区ごとに区分した。

## 第3節 調査の経過

発掘調査は、平成10年6月8日から同年11月18日までの期間、延べ109日間を費やして行われた。6月8日、男鹿市北浦支所にて現場作業員説明会を開催し、三浦センター所長以下、調査員4名で発掘調査に関する諸説明と事務手続きを行った。男鹿市教育委員会小玉敬太郎教育長と泉明生涯学習課長補佐から御来席いただく。午後、発掘器材の搬入を行った。6月9日、調査開始。粗掘り作業はA区東端から開始した。グリッド杭の打設作業も同時に開始した。6月17日～18日の2日間、柴田陽一郎調査第二科長が調査に加わった。

- 6月23日、A区東部にてS X01~09までを検出した（後日名称変更したものを含む）。
- 6月26日、市道泉野大沢岱1号線(以下、市道)以西の調査区は、著しく現代の攪乱を受けていることが判明し、その後の調査でも遺構が全く検出されず、出土遺物も極めて僅かであった。
- 7月10日、A区西側内部を通過する市道の扱いについて、男鹿市・原因者・文化課・埋蔵文化財センターの4者で協議した結果、市道地下には住宅供給用ガス管が敷設されているため、発掘調査区から除外することを決定した。
- 7月24日、岩手県大迫町教育委員会の中村良幸文化係長が来跡、見学した。
- 7月31日、男鹿市理科センター研修会(男鹿南秋地区小中学校理科教員30名)が来跡、見学した。
- 8月4日、A区中央部から多数の遺構(S I、SK、SKF等)を検出した。
- 8月25日、相馬高道秋田魁新報社男鹿支局長が取材のため来跡、見学した。
- 8月31日、B・C区の発掘調査を開始し、両区でS I、SKを検出した。
- 9月7日、全作業員を2班に分け、泉野冷水遺跡と中野遺跡の並行発掘調査体制に移行する。
- 9月11日、A・B・C区すべての調査区の粗掘りを完了した。
- 9月21日、男鹿市議会議員23名(市議会教育産業委員会)が来跡、見学した。
- 10月2日、B区の検出遺構の精査をすべて完了し、B区発掘調査を終了した。  
また、中野遺跡の発掘調査も終了し、全作業員が泉野冷水遺跡の調査に合流する。
- 11月6日、C区の検出遺構の精査をすべて完了し、C区発掘調査を終了した。
- 11月11日、秋田土木事務所(当時)の木村正道路課道路第二課長補佐と教育庁文化課(当時)小徳晶学芸主事が来跡し、泉野冷水遺跡・中野遺跡発掘調査終了後に関する引き渡し協議を行った。
- 11月16日~18日、全検出遺構の精査を終え、調査区内に安全対策を施した。リース物品を含む発掘調査器材のすべてを撤収する。午前に男鹿市教育委員会の泉明生涯学習課長補佐、太田忠文化係長が来跡し御挨拶をいただく。その場で泉野冷水遺跡の発掘調査終了を伝えた。午後、男鹿市役所北浦支所に挨拶して現場を引き上げた。



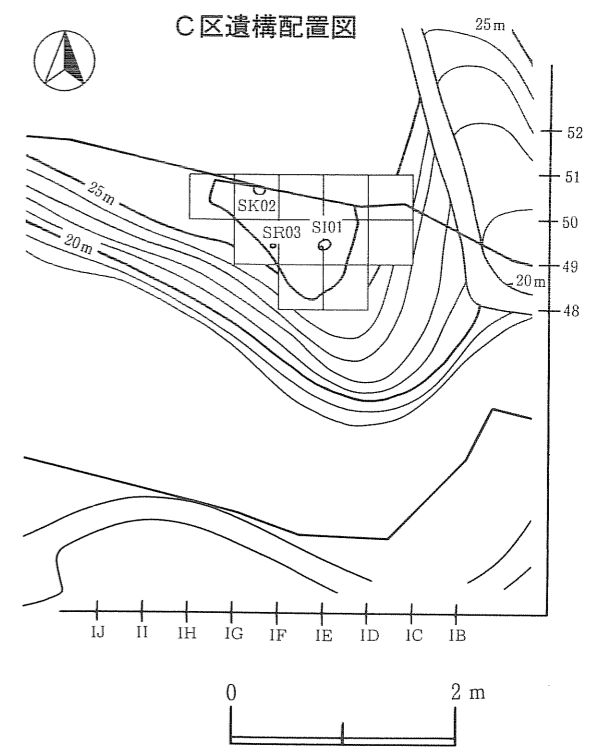
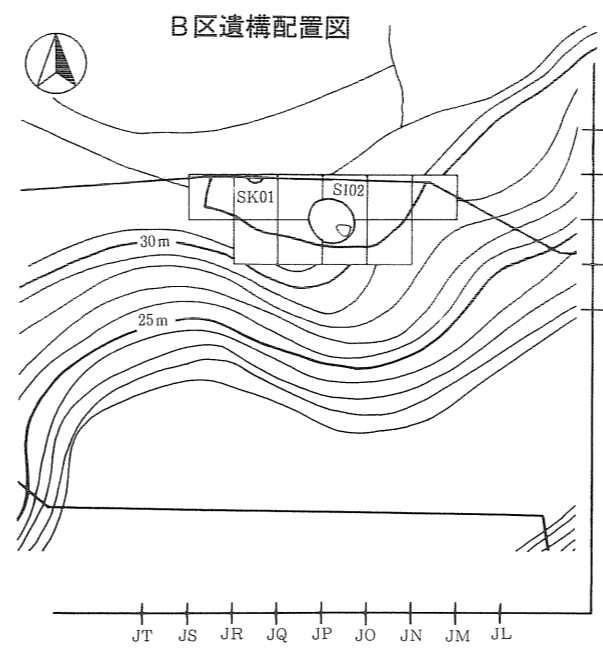
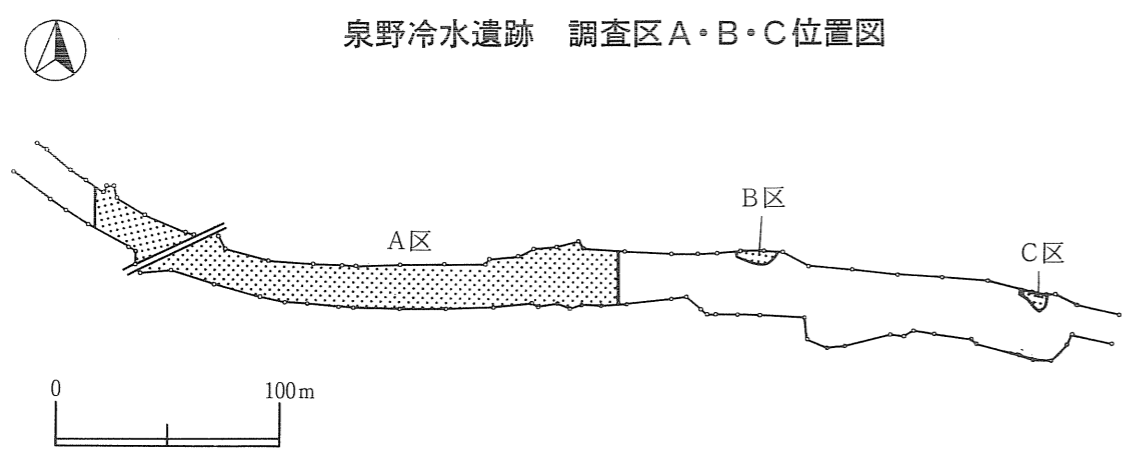
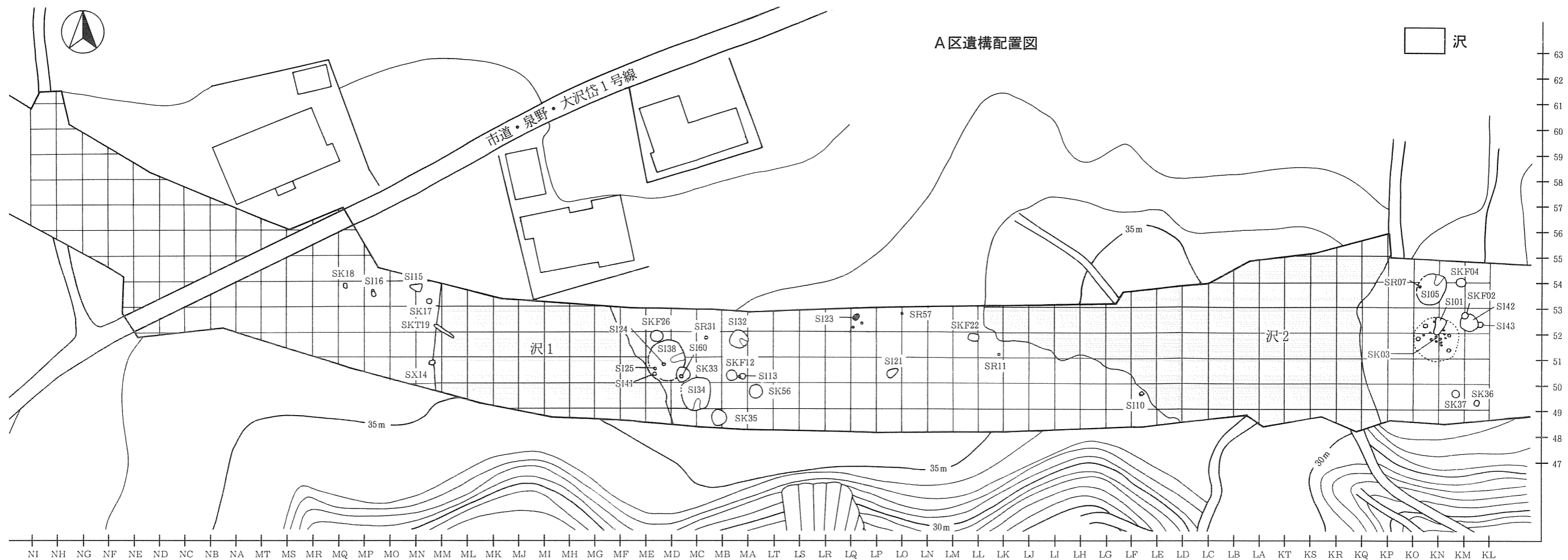
第5図 泉野冷水遺跡の報道記事

(秋田魁新報 平成10年8月27日 夕刊)

### 〇みたり きいたり

〇：縄文人も つもりの未完成品だろう。  
「なまはげ」を 〇：発掘調査はパイパス  
彫っていたのか 工事に先立ってことし六月  
？ 県が発掘調査 から始まった。これまで炉  
を進めている男 跡や狩猟用の落とし穴など  
鹿市北浦の泉野冷水(いずみ の縄文時代中期の遺構が明らか  
みのひやみず)遺跡から、 になっっている。近くには  
なまはげの面そっくりの石 なまはげゆかりの真山神社  
器が出土した。写真。 もあり、作業員たちは「も  
〇：頁岩(けつがん)と う一個見つければ赤鬼、青  
呼ばれる粘土が凝結した石 鬼が完成」と土中に目を凝  
を薄くはがした縦横四角の らしている。

石片で、二つの角が飛び出している。調査を指揮している泉埋蔵文化財センターの栗沢光男さんは「キリがヤシリにする」といっている。



第6図 泉野冷水遺跡遺構配置図

## 第2章 調査の記録

### 第1節 基本層序

遺跡の基本層序は、A区についてはMR51グリッドからMN51グリッドまでの調査区西部の東西ライン、MA51グリッドからLQ51グリッドまでの調査区中央部の東西ライン、KP51グリッドからKL51グリッドまでの調査区東部の東西ラインの3ヶ所で確認した(第6図)。B区についてはJP53グリッドからJP55までの南北ライン、C区についてはIF49グリッドからIF51グリッドまでの南北ラインで確認した(第7図)。

各区での層序は以下の通りである。

A区 …………… I層：黒褐色土(10Y R2/3)、II層：黒褐色土(10Y R2/2)、  
III層：暗褐色土(10Y R3/4)、IV層：黒褐色土(10Y R2/2)、  
V層：黒褐色土(10Y R3/2)、VI層：鈍い黄褐色土(10Y R6/4)、  
VII層：明黄褐色土(10Y R6/6：地山)

以上のうち、遺構確認はII層上面で行った。

B区 …………… I層：黒褐色土(10Y R2/3)、II層：黒褐色土(10Y R2/2)、  
III層：暗褐色土(10Y R3/3)、IV層：明黄褐色土(10Y R6/6：地山)  
以上のうち、遺構確認はII層上面で行った。

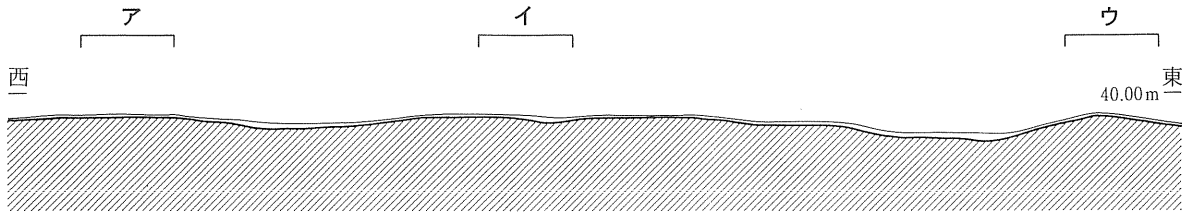
C区 …………… I層：暗褐色土(10Y R3/3)、II層：鈍い黄褐色土(10Y R4/3)、  
III層：黄褐色土(10Y R5/6)、IV層：鈍い黄褐色土(10Y R6/4：地山)  
以上のうち、遺構確認はII層上面で行った。

### 第2節 検出遺構と遺物

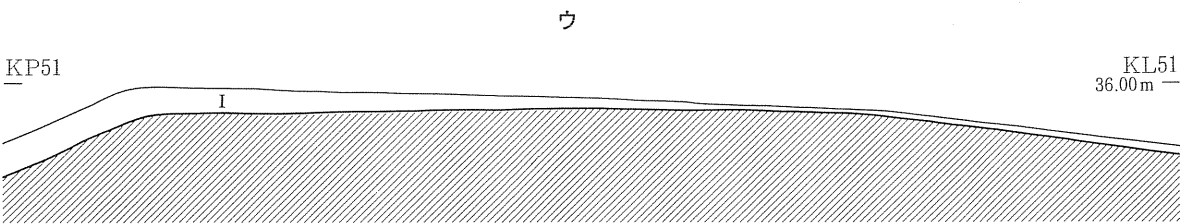
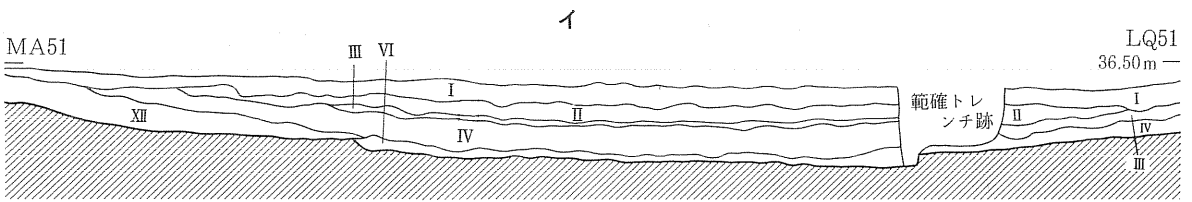
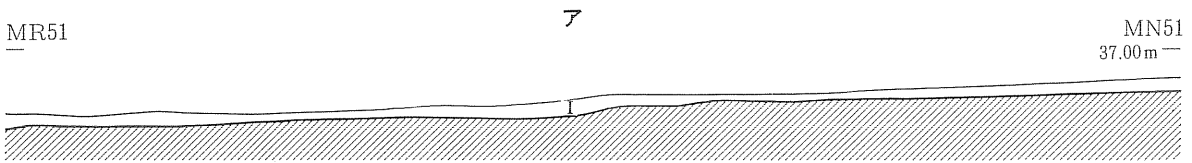
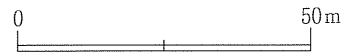
発掘調査の結果、泉野冷水遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡を中心に総数41遺構である。また、出土した遺物は、縄文土器および石器など整理用コンテナで32箱分である。各調査区で検出した遺構の内訳は以下のとおりである。

【A区】	竪穴住居跡……………17軒	土 坑……………7基	
	フラスコ状土坑……5基	陥し穴遺構……………1基	
	土器埋設遺構……………5基	その他の遺構……………1基	(A区36遺構)
【B区】	竪穴住居跡……………1軒	土 坑……………1基	(B区2遺構)
【C区】	竪穴住居跡……………1軒	土 坑……………1基	
	土器埋設遺構……………1基		(C区3遺構)
			計 41遺構

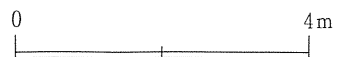




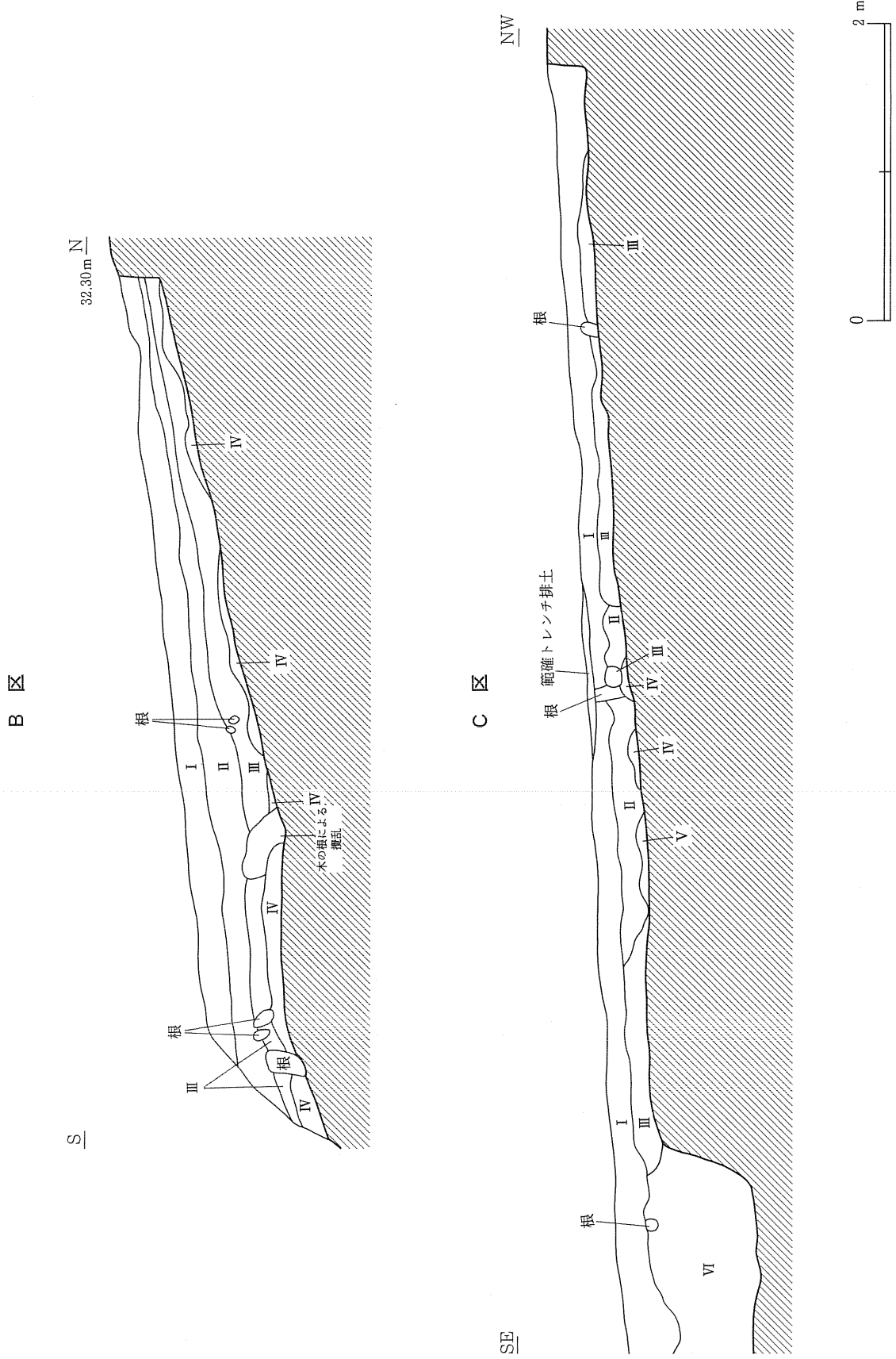
遺跡断面図 (NA51~KK51まで)



※ア、イ、ウは基本層位抽出地区である。



第7図 泉野冷水遺跡A区基本土層図



第8図 泉野冷水遺跡B・C区基本土層図

## 1 A区の検出遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

#### S I 01竪穴住居跡 (第9・30・52図、図版5～7)

《位置と確認》 A区東端部のKM51・52、KN51・52グリッドに位置する。壁は見られないものの炉と柱穴を確認し、竪穴住居跡と判断した。

《重複》 SR03土器埋設遺構が住居範囲に含まれるが新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 壁が確認できなかったため全容は不明であるが、柱穴と複式炉の配列や位置関係から住居の規模を推定すると、その平面形は略円形を呈すると思われ、長軸7.30m、短軸6.60mに及ぶと考えられる。

《土層》 17層に分層した。

《壁》 確認できなかった。耕作によって削平されたものと思われる。

《床面》 平坦であり、炉の周囲が固く締まっていた。炉の位置から東側のS I 42・43竪穴住居跡側に緩く傾斜していた。

《柱穴》 柱穴は16基を確認した。この中でP 1～4の4基(第9図、図版7)は、他の柱穴より規模が大きく、長軸0.53m～0.68m、短軸0.49m～0.60m、床面からの深さは0.52m～0.60mあり、いずれも中央に柱痕が認められた。以上の特徴や炉との位置関係から、この4基は本住居跡の支柱穴と考えられる。P 4の覆土内からは深鉢形土器の胴部破片2点が出土した(第51図141・142)。

これ以外の柱穴P 5～16の12基は、径約0.20～0.31mの小柱穴である。いずれも本住居跡に伴うものと考えられる。P 7の覆土内からは深鉢形土器胴部破片1点が出土した(第51図143)。

《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部から構成される複式炉である。軸長は2.70m、最大幅は1.90mである。炉の軸線方向はS-22°-Wであり、全体は壁に向かって開く撥形を呈していた。

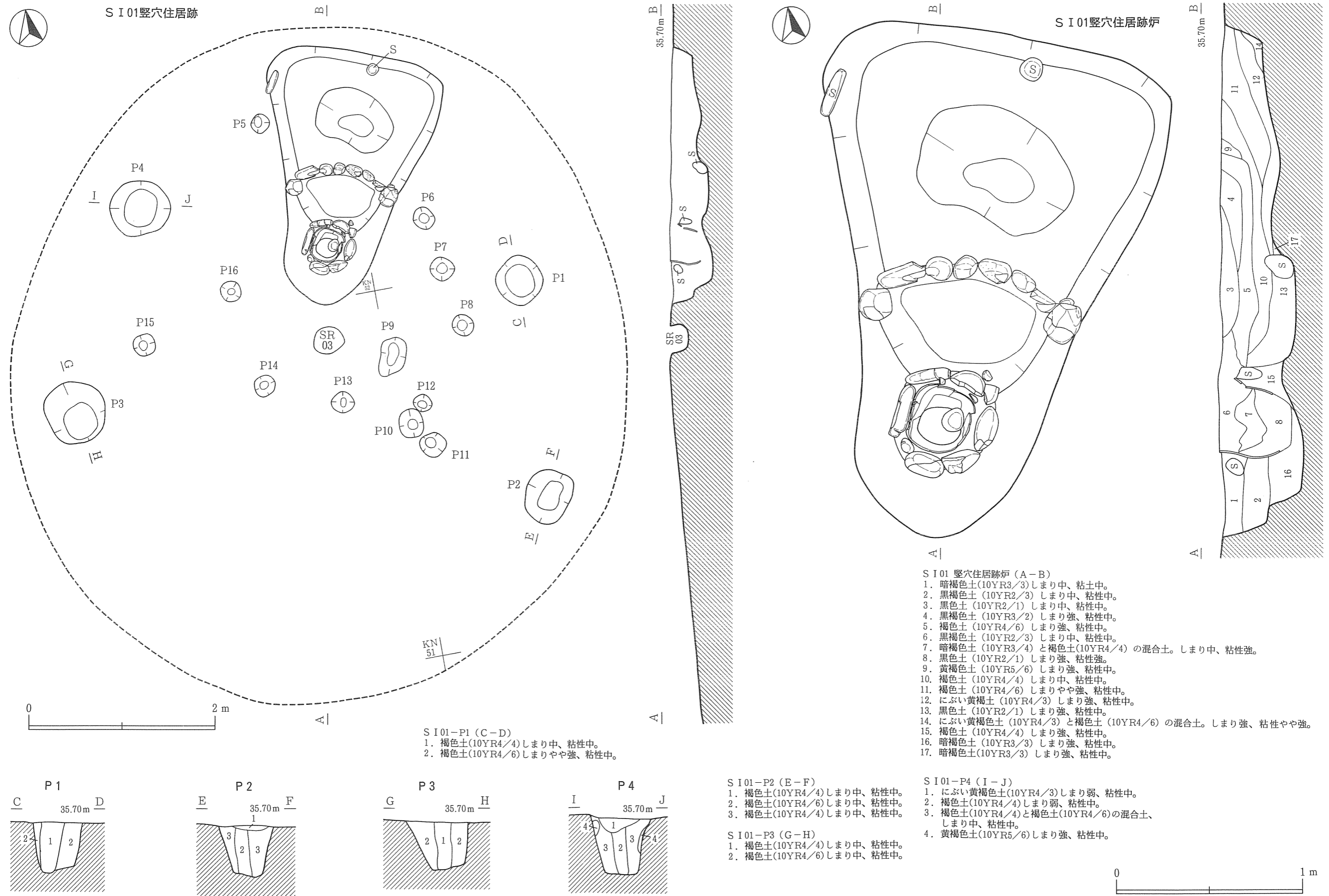
〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第30図1)が正立した状態で埋設され、周囲を8個の礫で囲んでいた。深さは0.45mである。埋設土器の周囲が焼土化していた。

〈燃焼部〉 床面からの掘り込み両端に大型の礫を立て、その間を土器埋設部に向かって開く6個の礫で弧状に結び、前庭部との境界線を構築していた。深さは0.41mである。底面に炭化物が見られた。

〈前庭部〉 深さは0.31mで、土器埋設部や燃焼部より浅い。壁側の端中央に小ぶりの円礫1個を置いていた。底面は固く締まっていた。

#### 《出土遺物》

〈土器〉 第30図1は土器埋設部に埋設されていた土器で、胴部上半で緩く屈曲する深鉢形土器である。口縁部と底部は欠損し、胴部のみ出土した。RL縄文を縦位に回転施文し、その隙間を横位あるいは左上一右下の方向で斜位に回転施文している。胴部下半は被熱し脆い。煮沸用の転用であろうか。この土器は、検出した複式炉内の埋設土器では最も大きいものである。2は、緩く外反する深鉢形土器の口縁部破片である。RL縄文を横位回転施文している。3は、やや丸みをもって下降



第9図 A区S I 01竪穴住居跡および炉

する深鉢形土器の胴部下半の破片である。幅2～3cmの施文具で縦位の条線文が全面に施されている。

〈石器〉

石鏃が1点出土している(第52図1)。丹念な調整剥離を両面に加え、全体を柳葉形に成形している。基部は折損している。ほかに二次加工のある剥片1点が出土している(第52図2)。やや縦長の剥片の両側に腹面側からの剥離を加え刃部を作り出している。

S I 05 竪穴住居跡 (第10・11・30～34・52図、図版8・9・27・28)

《位置と確認》 KM53・54、KN53・54グリッドに位置する。A区の東端部Ⅱ層上面で確認した。

《重複》 竪穴住居内にS R 07土器埋設遺構を含むが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 長軸5.30m、短軸4.66mの不整な楕円形である。

《土層》 柱穴を含む9層に分層した。検出地点は元来畑地だった場所のため、遺構を確認した地山面まで耕作による攪乱が及んでいた。

《壁》 壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側の壁は途中で失われ見えなくなる。住居の西側付近は、畑地に連なる農道であったため削平されたものと思われる。

《床面》 地山まで掘り込んで床面としていた。ほぼ平坦で固く締まっていた。壁上から床面までの深さは、最深部で0.18mである。また、住居内北西側の床面に楕円形(長軸1.45m)の浅い掘り込みを確認した。その浅い掘り込みから深鉢形土器(第31図6、図版9-2、28-2)が割れた状態で出土した。

《柱穴》 炉の土器埋設部をほぼ中心として径0.40～0.60mの主柱穴を3基検出した(P2・9・16)。このほか住居内の床面に径0.20m前後の小柱穴を17基、住居壁外に同規模の小柱穴を4基確認した。

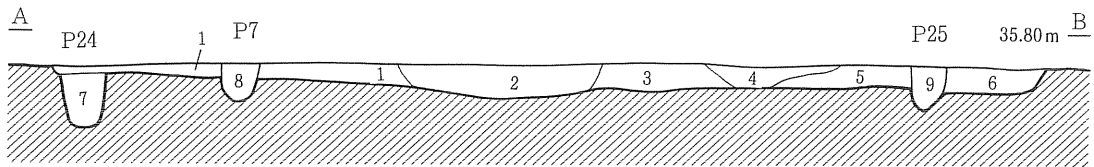
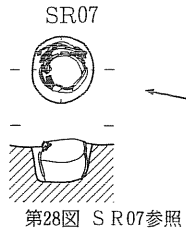
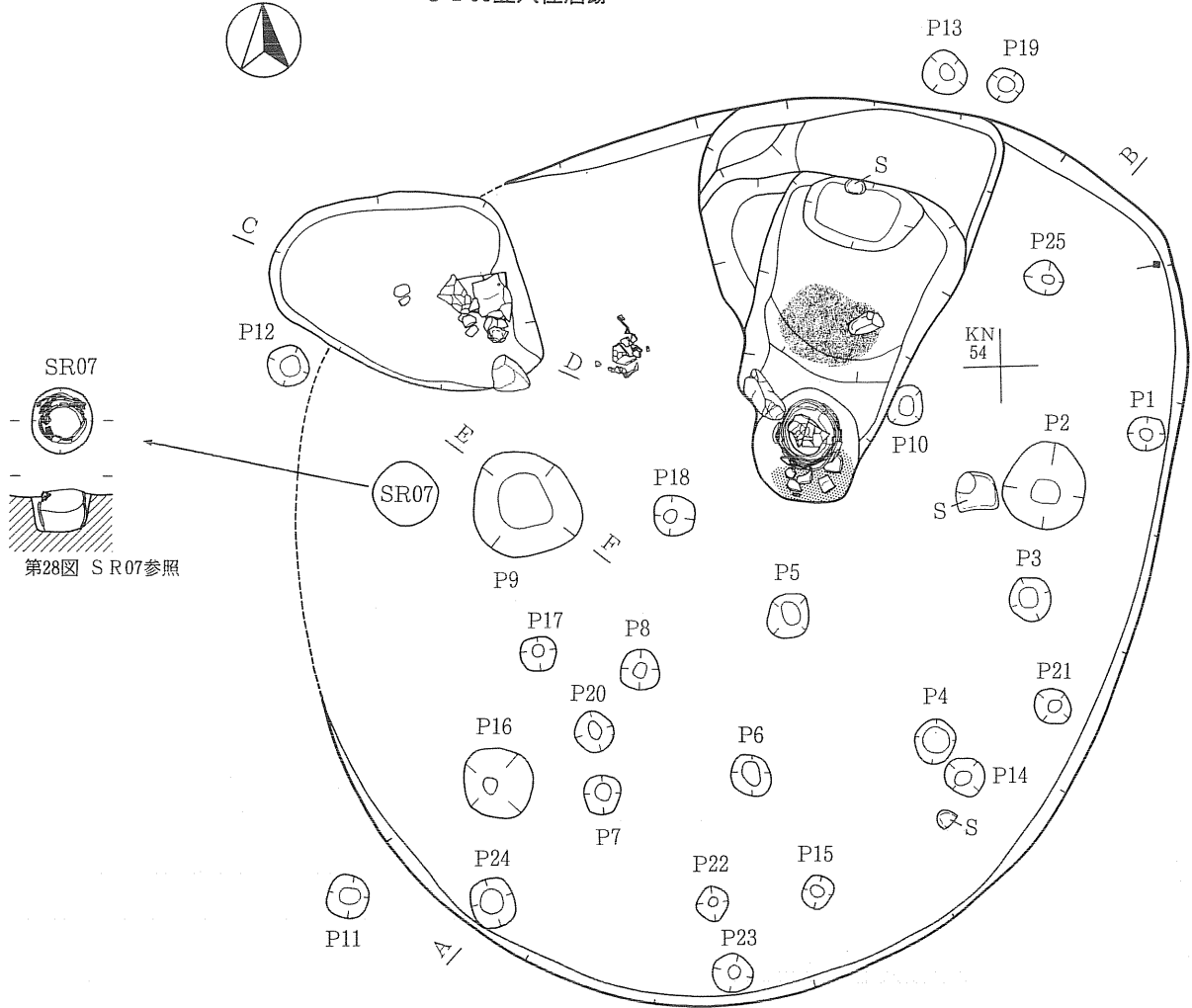
《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部から構成される複式炉である。炉の規模は、軸長2.19m、最大幅1.55mで平面形は不整の撥形を呈する。炉の軸線方向はS-11°-Wである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第33図13、図版27-2)がほぼ垂直に据えられていた。最深部は0.33mである。埋設土器には長さ0.30mの礫1点が北西側に接し、これ以外に石組は確認できなかった。しかし、埋設土器の外周に石を配することが可能な幅の掘り方があり、抜き取られた可能性もある。1層と3層には赤褐色の焼土粒が混入しており、特に埋設土器の南側の焼土化が著しい。

〈燃焼部〉 底面・側面に規則的な配石は見られなかった。土器埋設部側が浅く、前庭部側が深い二段構造である。土器埋設部側の底面近くには炭素分を吸着した焼土が見られ、その上にあった礫1点は赤変していた。覆土中に礫1点が含まれる。前庭部側の掘込みの上面、炉の軸線よりやや西に小ぶりの円礫1点が置かれていた。最深部は住居の床面から0.37mである。西側がテラス状に広げられた形となっている。

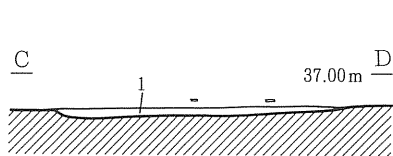
〈前庭部〉 末端が住居の壁に接している。最深部は住居の床面から0.12m、壁外の地山面から0.24mである。

S I 05 竪穴住居跡



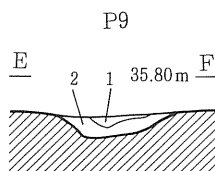
S I 05 竪穴住居跡 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。
5. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性弱。
6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。
9. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。



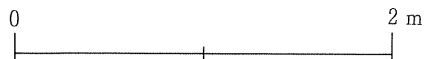
S I 05 竪穴住居跡 (C-D)

1. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。



S I 05 竪穴住居跡P9 (E-F)

1. 暗褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。



第10図 A区S I 05竪穴住居跡

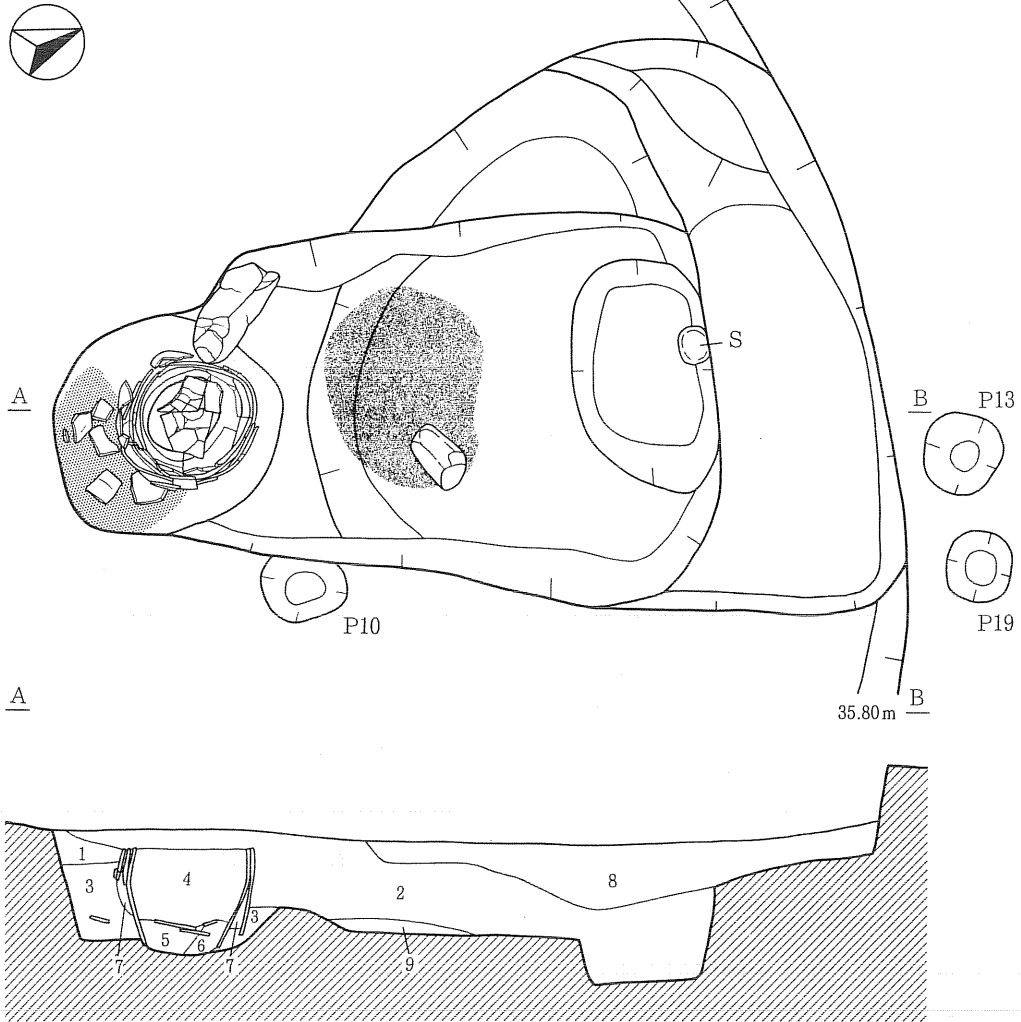
## 《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第30図4は、口縁部がやや外反する深鉢形土器の破片である。胴部は丸みを帯びて膨らむ。口縁下1.5cm程から全面にL R縄文を横位回転施文している。5は、やや外反する深鉢形土器の口縁部破片である。口縁下1.5cm程からR L縄文を横位回転施文している。第31図(図版28-2)は、住居北西側の床面を浅く掘り込んだ場所から出土した深鉢形土器である。胴部上半から口縁部がわずかに外反し、胴半ばで屈曲して底部に向かってすぼまる器形をなす。屈曲部より上位の胴部上半が文様帯となり、充填縄文手法を用いた文様が描かれる。胴部下半はL R縄文を縦位回転施文している。胴部上半の文様帯には、渦巻文やY字、U字、O字状文が6単位あり、幅2~4cmの区画帯で描かれる。縄文の回転方向はこの区画帯に沿って展開することから、縄文は区画帯を作る沈線の施文後に施されたものと判断した。文様帯の下限は、胴部上半に描かれた渦巻文、Y字、U字、O字状文の間に山形にせり上がる沈線によって画される。山形の部分は4単位である。胴部上半に補修孔が1対あけられている。第32図7(図版28-1)は、胴部上半から口縁部へ内湾する深鉢形土器である。最大径が胴部上半にあり、樽形の器形を呈する。口縁は折り返し口縁となる。口縁部分には施文されないが、胴部は全面0段多条のR L縄文が回転施文される。8は、前述の7と同じく胴部上半に最大径をもち、樽形の器形をなす深鉢形土器の破片である。口縁下1cm程から胴部全面にR L縄文が横位回転施文されている。9は胴部上半から口縁部が外反する波状口縁の深鉢形土器破片である。波頂部は4単位になるものと思われる。波頂部下に縦位の楕円文が描かれ、L R縄文が縦位回転施文されている。10は、口縁部がやや外反する深鉢形土器の破片である。口唇部は内削げ気味に尖る。口縁下に弧線が描かれ、その区画内にR L縄文が縦位回転施文されている。11は、口縁部が直線的に開く深鉢形土器の破片である。口縁下2cm程度の無文部分があり、その下の胴部全面にL R縄文が縦位回転施文されている。12は、口縁上部が外反する深鉢形土器の破片である。口縁下に2条の弧線が描かれ、その間に径10mm程の凹文が施される。弧線の区画内にはL R縄文が縦位回転施文されている。第33図13は炉埋設土器である。全面が被熱し赤変している。胴部半ばに最大径をもつものと思われる。口縁から胴部上半は欠損するが、わずかに残った胴部上半の湾曲程度から、やや外側に反って口縁部に続くものと判断される。胴部全面にはL R縄文が縦位回転施文されている。14は、緩く湾曲しながら底部へと向かって下りる深鉢形土器の胴部破片。胴部には幅4cm程の懸垂区画文が描かれており、区画内にはL R縄文が縦位回転施文されている。15は、胴部の緩く膨らむ小型の鉢形土器破片。L R縄文を縦位回転施文した後、竹管状工具によって上下に蛇行する沈線が描かれている。16は、わずかに膨らみながら下りる深鉢形土器胴部破片。L R縄文を左上-右下方向で斜位に回転施文し、横走する縄文が表されている。縄文の施文後、弧線が2条描かれている。同図17は、頸部下で屈曲する深鉢形土器の破片。外反しながら立ち上がる口頸部は無文であり、胴部との境には竹管状工具によって2段の刺突列が施される。18、19は、わずかに膨らみながら下りる深鉢形土器胴部破片。幅2cm程の工具で縦位の条痕文が全面に施されている。第34図20、21は、胴部の緩く膨らむ深鉢形土器破片。懸垂区画文が描かれ、区画内にはL R縄文が縦位回転施文されている。22~24は底部破片である。22と23は深鉢形土器の底部でL R縄文が縦位回転施文されている。24は小型の深鉢形土器底部で、底面が上げ底になっている。

## 〈 石 器 〉

石鏃が2点(第52図3・4)、凹石1点(5)、石皿1点(6)が出土した。第52図3は凸基の石鏃であ

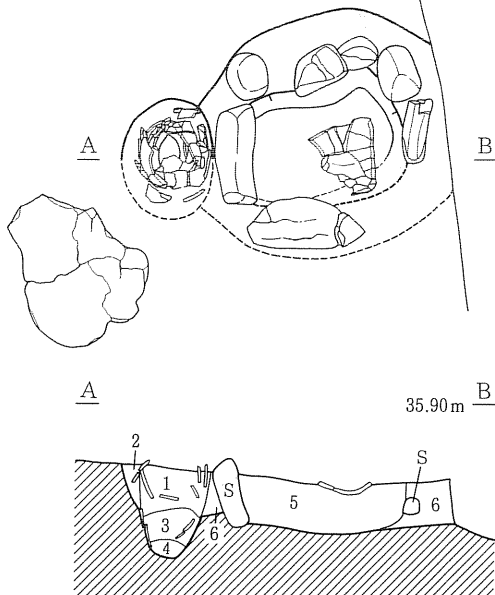
S I 05 竪穴住居跡炉



S I 05 竪穴住居跡炉 (A-B)

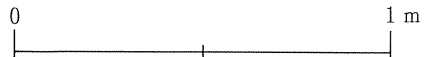
1. 褐色土 (10YR4/4) と赤褐色土 (5YR4/8) の混合土。しまり強、粘性中。
2. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強、粘性中。炭化物若干混入。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。焼土粒子若干混入。
4. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性弱。炭化物若干混入。焼土粒子少量混入。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。焼土粒子若干混入。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。炭化物若干混入。焼土粒子若干混入。
7. 赤褐色土 (5YR4/6) しまり中、粘性中。
8. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物若干混入。小礫(1~2mm) 少量混入。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。炭化物若干混入。焼土粒子若干混入。

S I 10 竪穴住居跡炉



S I 10 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。炭化物混入。
2. 褐色土 (10YR4/6) と焼土 (褐色土7.5YR4/6) の混合土。しまり中、粘性中。
3. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強、粘性中。炭化物混入。焼土粒子少量混入。
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり強、粘性中。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性中。炭化物混入。焼土粒子混入。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物混入。



第11図 A区 S I 05・10 竪穴住居跡炉



る。丹念な調整剥離を両面に加えているが、全体にやや肉厚である。4は、有脚の石鉢で先端を欠損する。調整剥離を加えて全体の形を整えているが、片面には脚部を除いて素材の剥離面が残されている。5はやや扁平な円礫の両面に凹みを作り出した凹石であり、片面には広い擦面が残されている。加撃により凹み部分で半截されている。6は扁平礫を利用した石皿である。

#### S I 10 竪穴住居跡 (第11・34図、図版10・28-3)

《位置と確認》 LE49グリッドで検出した。A区中央部東端の沢2に接する幅杭南側寄りの地山面で、炉のみを確認した。

《床面》 炉の周囲が固く締まっており、当時の床面と判断した。

《炉》 土器埋設部、燃焼部からなる複式炉である。燃焼部は楕円形であり、それに土器埋設部が付設される。前庭部は存在していた可能性があるものの、沢2側の急斜面によって切られ確認できなかった。規模は軸長0.88m、最大幅0.64mで、炉の軸線方向はS-38°-Wである。土器埋設部の南側に、0.40m×0.30m前後の不整形の台石があり、表面には一部叩かれたような痕跡が見られた。その厚さは約0.02mである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第34図25、図版28-3)がほぼ正位に埋設されており、上方からの土圧によって胴上半部が底部側に向かって潰れた状態になっていた。最深部は0.24mである。覆土3層の黒色土に焼土粒が多く含まれていた。

〈燃焼部〉 最深部は0.13mある。南西端の比較的大型の礫が、土器埋設部と燃焼部を仕切っていた。燃焼部の覆土(5層)には炭化物と焼土粒が多く含まれていた。この覆土上面からは、深鉢形土器の胴下半部から底部の破片(第34図26)が出土した。

《出土遺物》

〈土器〉 第34図25は炉埋設土器で底部を欠く深鉢形土器である。強く被熱し全体に赤変している。胴部が緩く膨らみ、口縁部～胴部下半まで全面LR縄文が縦位に回転施文される。26は、前庭部の覆土上面から出土した深鉢形土器の胴部下半～底部である。全面にRの撚糸文が縦位回転施文されている。

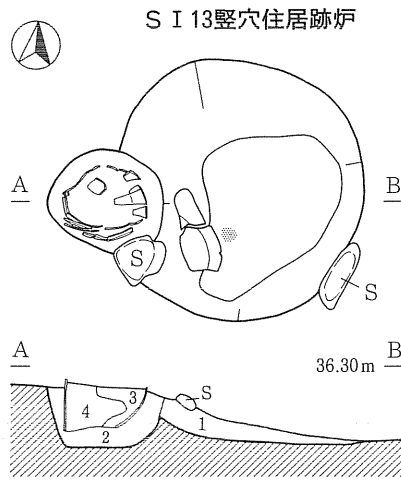
#### S I 13 竪穴住居跡 (第12・35図、図版10・29)

《位置と確認》 MA50グリッドに位置する。地山面で炉のみ確認した。遺構の上面全体と東側は耕作により削平されたものと判断した。

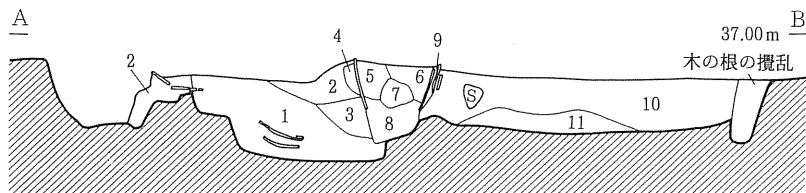
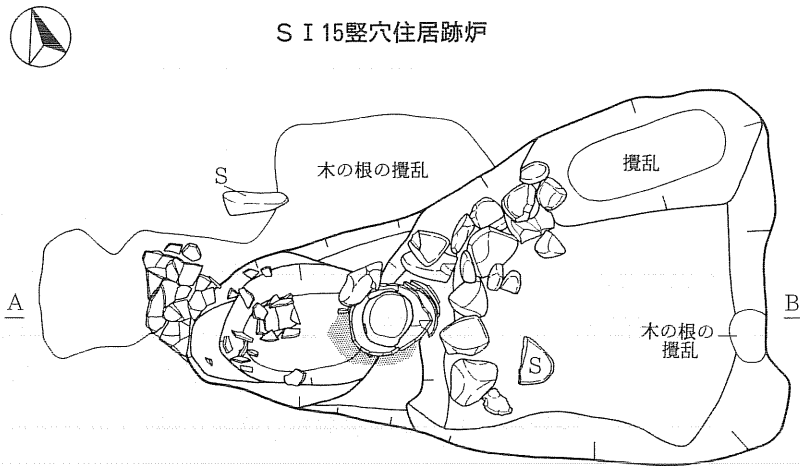
《重複》 西側に位置するSKF12フラスコ状土坑と切り合う関係にある。新旧関係は不明である。

《床面》 炉の周囲が固く締まっており、当時の床面と判断した。

《炉》 土器埋設部と燃焼部からなる複式炉である。径約0.60mの円形を呈する燃焼部に土器埋設部が付設した形態である。燃焼部の東側上面は削平され、失われている。規模は軸長1.05m、最大幅0.88m、軸線方向はS-89°-Wである。



- S I 13 竪穴住居跡炉 (A-B)
1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中、粘性中。
  2. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性中。
  3. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
  4. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱、粘性中。



- S I 15 竪穴住居跡炉 (A-B)
1. にぶい褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性強。小礫(1~2mm)少量混入。
  2. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。極小礫(1mm以下)少量混入。
  3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) と黒褐色土 (10YR2/3) の混合土。しまり中、粘性強。焼土粒子少量混入。極小礫(1mm以下)少量混入。
  4. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) しまり中、粘性弱。極小礫(1mm以下)少量混入。
  5. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中、粘性強。炭化物若干混入。
  6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性強。炭化物若干混入。
  7. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中、粘性強。炭化物若干混入。
  8. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性強。
  9. 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり中、粘性中。
  10. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。炭化物若干混入。極小礫(1mm以下)少量混入。
  11. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性強。炭化物・焼土粒子若干混入。極小礫(1mm以下)少量混入。



第12図 A区S I 13・15竪穴住居跡炉

〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第35図27、図版29-1)をやや斜めに埋設していた。埋設土器に沿うように礫1点が南東側に配されていた。

〈燃 焼 部〉 平面形はほぼ円形である。南東側と土器埋設部寄りに長めの礫2点が置かれていたが、これ以外は確認できなかった。

《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第35図27は炉埋設土器である。胴部半ばに最大径をもち、緩く膨らむ深鉢形土器で、口縁部と底部を欠く。全面にLR縄文が縦位回転施文されている。28は、わずかに外反する口縁の深鉢形土器片。口縁直下からLR縄文が縦位回転施文されている。補修孔があげられている。

S I 15 竪穴住居跡 (第12・35・36・53図、図版11・29)

《 位置と確認 》 MM53、MN53グリッドに位置する。炉のみを確認した。

《壁・柱穴など》 壁は確認できなかった。柱穴は炉の南側に2基、そこから西側に約1.5m離れた位置に1基を確認した。炉の北側にも対応する柱穴が存在すると思われるが、調査範囲外のため確認できなかった。

《 床 面 》 炉の周辺が固く締まっており、これを床面と判断した。

《 炉 》 軸線方向を同じくする新旧2基の複式炉である。古い方の炉は長軸推定0.60m、短軸0.50mほどの楕円形に掘り込まれた燃焼部に土器埋設部が付設され、新しい方の炉は全体が軸長1.93m、最大幅1.24mの撥形を呈し、土器埋設部、燃焼部、前庭部から構成される。旧炉から新炉への作り換えはN-79°-Wの軸線を共通したままで南東側へ移動させる形で行われていた。なお炉の一部は攪乱を受けていた。

〈土器埋設部〉 旧炉の埋設土器は、深鉢形土器の片側のみが埋設部の西側に残されていた(第36図33)。新炉の埋設土器は、深鉢形土器の胴部(第35図31、図版29-2)が旧炉の燃焼部掘込みに接して埋め込まれ、北側を2個の礫で囲っていた。

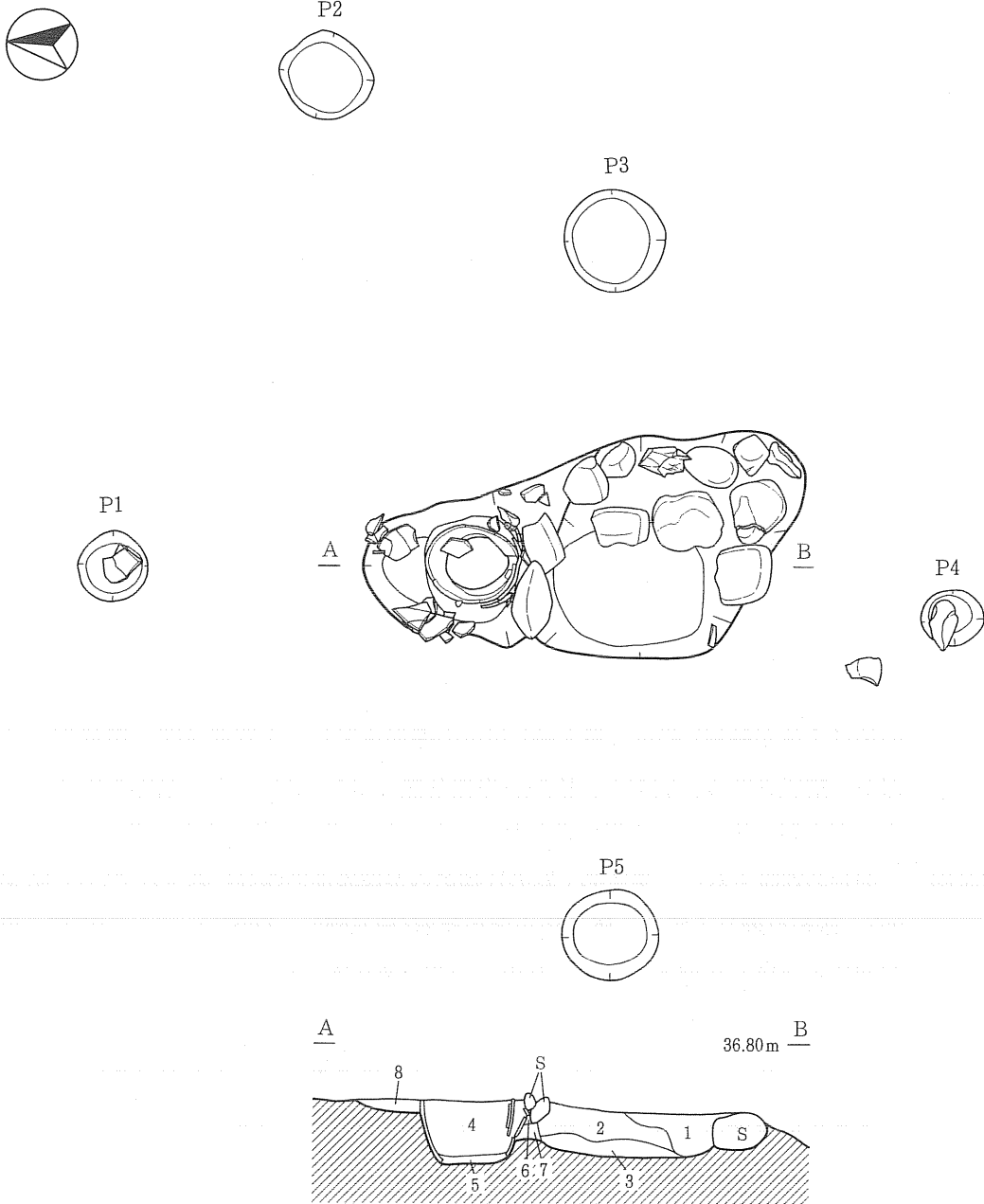
〈燃 焼 部〉 旧炉の楕円形の燃焼部は2段に分かれ、土器埋設部に近い側が0.15m前後高くなっている。新炉の燃焼部の底面のレベルは前庭部と等しく、土器埋設部から0.5mほど東側に前庭部側へ向かって開き、大小16個の礫からなる石組が設けられていた。

〈前 庭 部〉 旧炉の前庭部末端は新炉の土器埋設部によって壊されていた。新炉前庭部の南北2辺のうち、北側の辺には幅0.3m、長さ0.7mほどの掘込みがあり、燃焼部石組からの連続性を考えると礫が埋め込まれていた可能性がある。

《 出土遺物 》

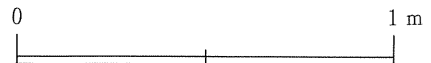
〈 土 器 〉 第35図29は、頸部下で屈曲し、口頸部が外反しながら立ち上がる深鉢形土器片である。口頸部は無文となり、屈曲部の上に沈線が1条巡る。30は、29と同様に口頸部が外反し頸部下に屈曲部をもつ深鉢形土器の胴部破片である。屈曲部のやや上に竹管状工具による刺突列が巡る。31(図版29-2)は、新炉の埋設土器である。胴上部に最大径のある深鉢形土器で口縁部と底部は欠損している。全面にLR縄文が縦位回転施文されている。32と第36図33・34は、深鉢形土器の胴部破片である。32はLR縄文が縦位回転施文されており、多量の煤状炭化物が外面に付着していた。33は旧炉の埋設土器である。LR縄文を縦位回転施文した上に、幅5～6cm程の懸垂文を連ねて描く。懸垂文の間に

S I 16 竪穴住居跡炉



S I 16 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱、粘性中。炭化物少量混入。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) と黒褐色土 (10YR2/3) 混合土。しまり弱、粘性弱。炭化物少量混入。
3. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
4. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
5. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性弱。地山面礫混入。
6. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり弱、粘性弱。炭化物・焼土粒子少量混入。
7. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
8. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性弱。炭化物・焼土粒子少量混入。



第13図 A区S I 16竪穴住居跡炉

縦の沈線を1条加えた部分も見られる。34は摩滅が著しいもののLR縄文が縦位回転施文されている。

〈石器〉 第53図7は凹石である。楕円礫の表裏平坦面ほぼ中央に凹みがあり、側面下方にも凹みが見られる。

#### SI16竪穴住居跡（第13・36・53図、図版11・29）

《位置と確認》 MO53グリッドに位置する。炉および柱穴を確認した。

《柱穴》 炉の周囲に5基のピットを検出した。炉を挟んでほぼ東西南北の4方に各1基、炉の北東方向に1基確認した。炉の軸線上北側にある柱穴からは土器片が出土した。

《床面》 炉の周囲は平坦であり固く締まっている。これを床面と判断した。

《炉》 土器埋設部と燃焼部からなる複式炉である。規模は軸長1.27m、最大幅0.64mで、軸線方向はN-17°-Wである。前庭部は確認できなかった。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器(第36図36、図版29-3)が正位に据えられていた。南側の燃焼部の石組と接する部分には、深鉢形土器の胴部破片(第36図35)が据えられ2重になっていた。深さは0.18mである。

〈燃焼部〉 燃焼部の東側には明瞭な石組があるが、西側には石組が残されていなかった。内部の覆土中には、東側の石組に接して、石組に用いられている礫とは異なる川原石2点が置かれていた。同様の川原石は燃焼部南側の仕切りとして2点配されていた。石組の礫、川原石ともに強い熱を受けた痕跡が見られた。深さは0.14mである。

《出土遺物》

〈土器〉 第36図35は、炉埋設土器本体(36)に密着して埋設されていた深鉢形土器の胴部破片である。U字またはJ字状の区画文が描かれたものと考えられ、LR縄文を縦位回転施文している。36(図版29-3)は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部でLR縄文が縦位回転施文される。37・38は、深鉢形土器の胴部破片である。37はLR縄文の縦位回転施文後に懸垂文が描かれている。38は摩滅が著しいが上部に縄文がわずかに残る。

〈石器〉

第53図8は石皿片。擦面に敲打によって生じた凹みが残される。

#### SI21竪穴住居跡（第14・37図、図版12・30）

《位置と確認》 LO50グリッドに位置する。炉および柱穴を確認した。

《柱穴》 炉の土器埋設部を挟んだ位置に、径約0.40mの柱穴を一对確認した。

《床面》 炉の周囲が平坦で固く締まっており、床面であると判断した。

《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部からなる複式炉である。炉の軸線方向はN-51°-Eで、ほぼ北東方向を示す。規模は軸長1.85m、最大幅1.18mである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器(第37図47、図版30-1)がほぼ垂直に埋設されていた。その周囲には20数点の小ぶりの礫を放射状に配置していた。これらの小礫は強い熱を受けた痕跡が認められた。深さは0.32mである。

〈燃 焼 部〉 全体が方形を呈し、四周に石組がある。土器埋設部との間には、大型の扁平な礫を斜めに置いて区画し、前庭部との間にも被熱し破砕した礫を並べて区画していた。深さは0.35mである。

〈前 庭 部〉 掘り込みは深いものの底面に焼けた痕跡は見られなかった。深さは0.3mである。

《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第37図47は炉埋設土器である。緩く膨らんだ胴部の深鉢形土器であり、口縁部と底部を欠いて埋設されていた。全面にL R縄文が縦位回転施文され、その上に懸垂文が連鎖状沈線によって描かれている。沈線の連結部には一対の円形刺突文が施されている。覆土内からは9点の土器片が出土している。39～44は区画文の描かれた土器、45は縦位の条痕文の施された土器、46と48は、全面R L縄文の施された土器および底部破片であり、いずれも深鉢形土器である。区画文の描かれた土器では縄文施文のもの(R L : 39・41～43、L R : 44)と、列点を加えた方形区画文を描く土器(40)がある。口縁部形状では、口唇端が粘土紐の貼り付けにより肥厚する土器(39)、山形の波頂部をもつ波状口縁の土器(40)、緩く弧を描く内削げの波状口縁の土器(41)、同じく内削げであるが平縁となる土器(42)がある。

S I 23 竪穴住居跡 (第14・38図、図版13・30・35)

《 位置と確認 》 L P 52グリッドに位置する。炉のみを確認した。

《 床 面 》 炉の周囲が固く締まっており、床面と判断した。検出地点は、北側の調査区外と同様、畑地であったため耕作による攪乱が一部地山面まで及んでいた。

《 柱 穴 》 炉の南東側、L P 52グリッド内に2基の柱穴を確認した。P 1は平面形が楕円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.24m、深さ0.15mで、覆土内から深鉢形土器の胴部破片5点が出土した。P 2は平面形がほぼ円形を呈し、規模は長軸0.27m、短軸0.23m、深さ0.12mで、覆土内から黒曜石の剥片1点が出土した。なお2基とも柱痕は見られなかった。

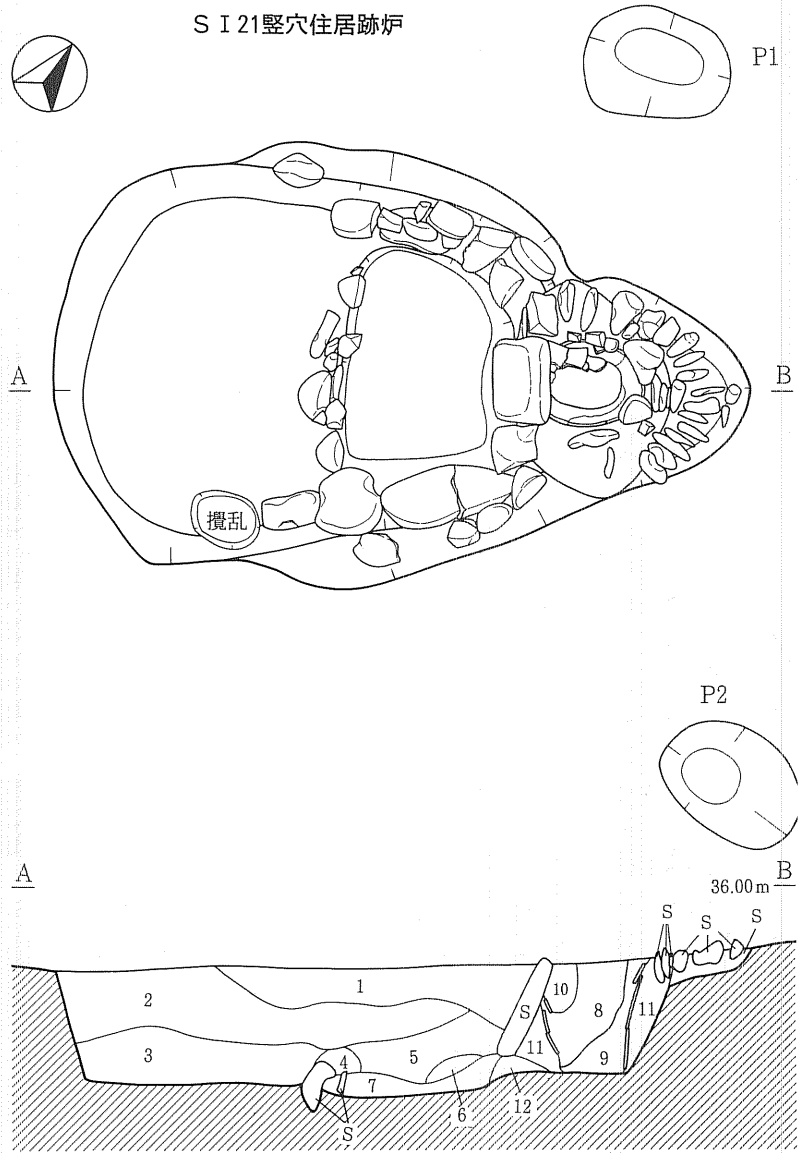
《 炉 》 円形の燃焼部に土器埋設部が付設された複式炉で、軸長が0.77m、最大幅は0.55mある。炉の軸線方向はN-38°-Eである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器の口縁部から胴下半部(第38図49、図版30-2)を正位に埋設していた。深さは0.36mである。

〈燃 焼 部〉 南東側の石組と土器埋設部との区画を示す石組が残されていた。深さは0.23mである。燃焼部の北西側を掘り込む形で深鉢形土器の胴部(第38図50、図版30-3)が埋設され、その内部に小型の深鉢形土器底部(第38図51、図版35-1)が入れ子になって埋設されていた。

《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第38図49は炉埋設土器である。口縁がわずかに屈曲して開き胴部半ばに最大径をもって下りる深鉢形土器である。口縁の屈曲部までが無文となるが、胴部は全面R L縄文が縦位回転施文されている。50は燃焼部を掘って埋め込まれた埋設土器である。胴部半ばでわずかに屈曲し、以下膨らんで下りる深鉢形土器であり、胴部下半までJ字状文を連ねた区画文が施される。区画文内には



S I 21 竪穴住居跡炉

P1

A

B

攪乱

P2

A

B

36.00m



S I 23 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱、粘性中。炭化物微量混入。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) と黒色土 (10YR2/1) の混合土。しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
3. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性弱。底面に炭化物多量混入。
4. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強、粘性中。炭化物・焼土粒子微量混入。
7. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。

S I 23-P1 (C-D)

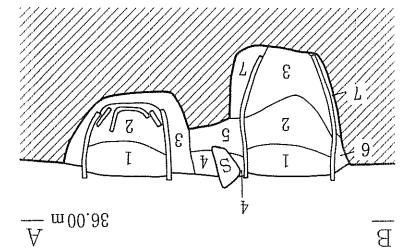
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。

S I 23-P2 (E-F)

1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。

S I 21 竪穴住居跡炉 (A-B)

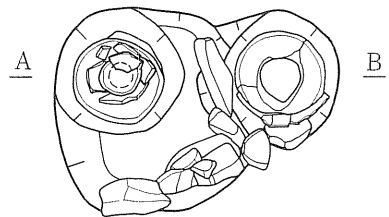
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性弱。炭化物・礫混入。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性弱。炭化物・礫混入。
3. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性弱。炭化物混入。
4. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱、粘性弱。炭化物・焼土粒子混入。礫は強く焼けている。
5. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性弱。炭化物混入。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性弱。炭化物多量混入。
7. 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり中、粘性弱。炭化物・焼土粒子混入。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物多量混入。砕けた土器片が多く混入。
9. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物混入。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性弱。炭化物多量混入。
11. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱、粘性弱。炭化物多量混入。
12. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱、粘性弱。炭化物多量混入。
13. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性弱。炭化物・焼土・小礫多量混入。



36.00m



S I 23 竪穴住居跡炉

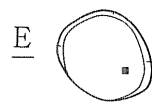


A

B



P2



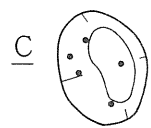
E

F

36.00m



P1



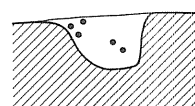
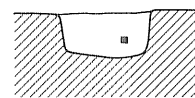
C

D

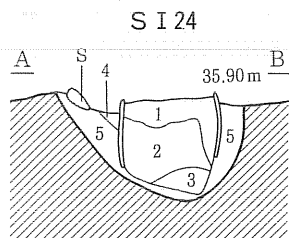
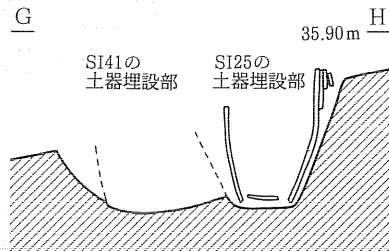
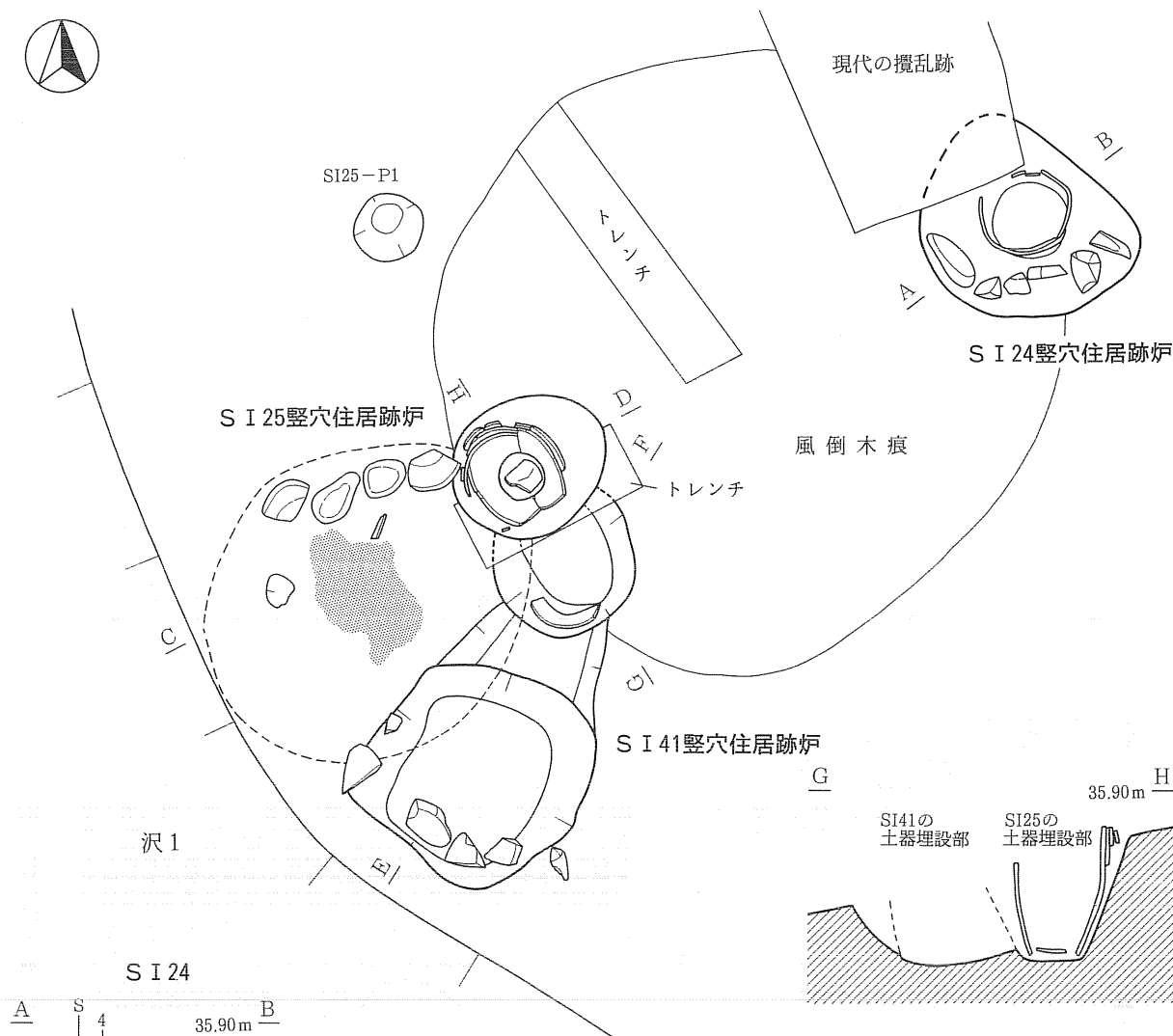
C

D

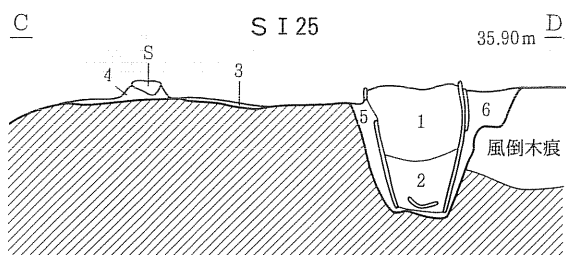
36.00m



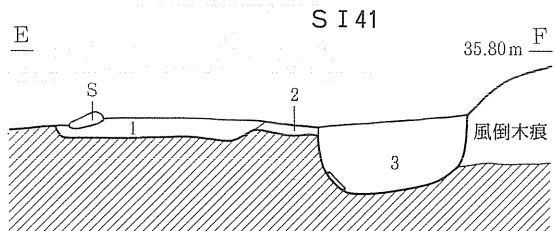
第14図 A区 S I 21・23 竪穴住居跡炉



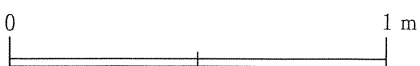
- SI 24 竪穴住居跡炉 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱、粘性中。炭化物少量混入。
  2. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
  3. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
  4. 明赤褐色土 (5YR5/8) しまり強、粘性中。焼土多量混入。
  5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。焼土多量混入。



- SI 25 竪穴住居跡炉 (C-D)
1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。焼土少量混入。
  2. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
  3. 明赤褐色土 (5YR5/8) しまり強、粘性中。焼土多量混入。
  4. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。
  5. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性弱。
  6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性弱。焼土少量混入。



- SI 41 竪穴住居跡炉 (E-F)
1. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性中。炭化物・焼土少量混入。
  2. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中、粘性弱。焼土微量混入。
  3. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性弱。焼土微量混入。



第15図 A区SI 24・25・41竪穴住居跡炉



0段多条のRL縄文が縦位ないし左上-右下の方向で斜位回転施文される。51は直線的に下りる深鉢形土器の胴下半～底部破片である。50の内側に入れられた状態で出土した。LR縄文が縦位回転施文される。

#### S I 24 竪穴住居跡 (第15・39図、図版14・31)

《位置と確認》 MD50グリッドに位置する。A区中央部の西側、沢1に向かって緩やかに下りる地形にある。住居壁は失われており、炉のみを確認した。

《床面》 炉の周囲が固く締まっており、床面であると判断した。

《重複》 S I 38 竪穴住居跡と重複するが、それよりも古い。また、同一の倒木痕プラン上でS I 25・41 竪穴住居跡と隣接する関係にあるが、これとの新旧関係は不明である。

《炉》 土器埋設石囲炉と思われる。深鉢形土器の胴部(第39図52、図版31-1)を埋設し、周囲を礫で囲ったものであるが、礫は南側の部分しか残されていない。土器を埋設した掘込みは長軸0.61m、短軸0.52m、深さ0.27mである。炉の北西側は著しい攪乱によって失われている。

《出土遺物》

〈土器〉 第39図52の炉埋設土器は、胴部半ばでわずかにくびれる深鉢形土器である。縦位に展開する区画文が描かれ、区画文の内部にRL縄文が横位回転施文される。

#### S I 25 竪穴住居跡 (第15・39図、図版14・31)

《位置と確認》 MD50グリッドに位置する。炉のみを確認した。

《重複》 S I 41 竪穴住居跡およびS I 38 竪穴住居跡と重複する。S I 41 竪穴住居跡を切り込んで作られるが、S I 38 住居跡よりも古い。またS I 24 竪穴住居跡とは、同一の倒木痕プラン上で隣接する関係にある。これとの新旧関係は不明である。

《炉》 土器埋設部と燃焼部からなる複式炉である。燃焼部の範囲が不明瞭であったが、軸長推定1.28m、最大幅0.85mの規模と考えられる。軸線方向はN-51°-Eである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器(第39図53、図版31-3)をほぼ垂直に埋め込んでいた。深さは0.36mである。

〈燃焼部〉 掘込みはきわめて浅く、土器埋設部から西に向かって4点の礫が並び、石組を構成する。しかし、これに対応する石組は見られなかった。燃焼部の中央には焼土面を確認した。

《出土遺物》

〈土器〉 第39図53は炉埋設土器である。全体にわずかに膨らみながら下りる深鉢形土器であり、口縁部と底部を欠く。全面にLR縄文を縦位に回転施文する。覆土内からは7点の土器が出土している。第40図55は口縁部～頸部が無文の土器、56・57は胴部以下に区画文を施す土器、59・60は縄文地に横位、縦位の沈線が引かれた土器、54・58は全面に縄文の施された土器である。

54(図版31-2)は深鉢形土器底部の一部で、表面に所々炭化物が付着しており、強い熱を受けた痕

跡が見られる。56・57の破片は同一個体の可能性がある。外反する口縁部～頸部が無文となり、胴部上半に最大径部分を持ち、以下急にすぼまる深鉢形土器である。頸部直下に頸部と胴部を分ける列点文が施され、列点文の下にはRL縄文を縦位に施し、沈線によって矩形区画文が連なって描かれる。矩形区画の間は磨消され、頸部下に凹文が施される。

S I 32 竪穴住居跡 (第16・41・53図、図版15・32・35)

《位置と確認》 MA51・52グリッドに位置する。南東側へ下がる傾斜面上にある。

《重複》 見られなかった。

《規模と平面形》 長軸2.95m、短軸2.74mの略円形を呈する。深さは0.12mである。

《土層》 9層に分層した。遺構の上部は耕作による削平によって覆土ごと失われていた。

《壁》 床面からほぼ垂直に立ち上がる。削平のため浅いが西壁は比較的残りが良い。

《柱穴》 確認できなかった。

《床面》 平坦であり固く締まっていた。炉の周囲では床面の固さが増す。

《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部からなる複式炉である。軸長1.49m、最大幅0.68m、軸線方向はN-62°-Wである。

〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第41図64、図版32-1)をほぼ垂直に埋め込み、その周囲を6点の礫で囲んでいた。深さは0.29mである。

〈燃焼部〉 土器埋設部から南東に向かって撥形に開き、前庭部側以外の周囲に石組が築かれていた。石組内部の土器埋設部側に近い底面に大小数点の礫を敷く。深さは、土器埋設部よりやや浅く0.23mである。

〈前庭部〉 末端が住居の壁に接し、燃焼部よりも浅い方形の掘り込みを持つ。深さは0.12mである。内部の壁に接した片側に3点の礫が置かれていた。なお、前庭部の外側および南に接する住居壁周辺からは、黒曜石の原石と剥片がまとまって出土した。

《出土遺物》

〈土器〉 第41図64は炉埋設土器である。口縁部と胴下部～底部を欠く。全面にLR縄文が縦位に回転施文される。覆土内からは6点の土器が出土している。61(図版35-2)は、樽形の器形を呈する有孔の小型土器、62・66は全面縄文の施された深鉢形土器破片、63は文様帯の下限を竹管状工具による列点を加え2条の平行沈線で限った深鉢形土器の胴部破片、65は縄文地に懸垂文を描いた深鉢形土器胴部破片、67は小形深鉢ないし鉢形土器の底部である。このうち、62はRLの原体を用い口縁直下では横位に胴部では縦位に回転施文している。

〈石器〉 黒曜石の原石および剥片のほか、第53図9の縦長の石匙が出土している。縦長の剥片を用い、打面側に撮み部分を作り出す。腹面側からの剥離で左側縁に刃部を作り出している。

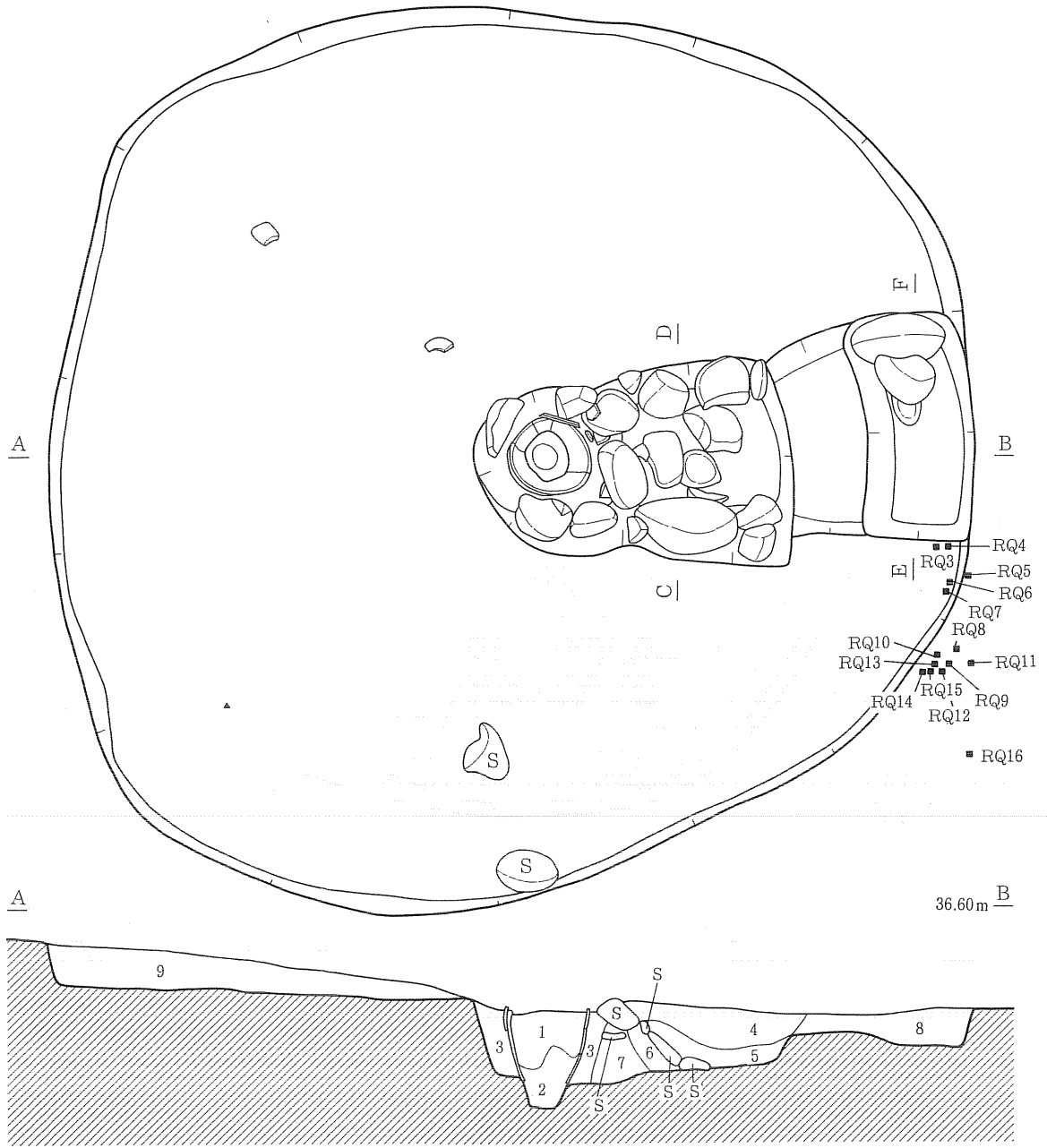
S I 34 竪穴住居跡 (第17・18・42・43・54・55図、図版16・32)

《位置と確認》 MB48～50、MC48～50グリッドに位置する。

《重複》 見られなかった。

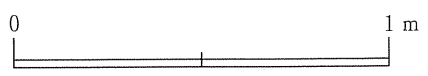
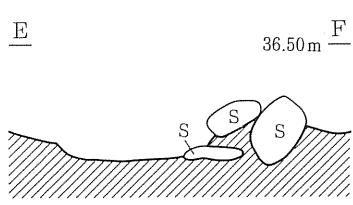
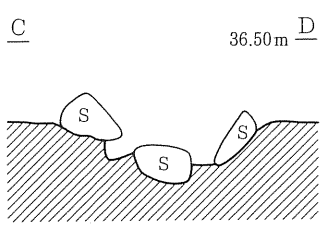
《規模と平面形》 長軸5.46m、短軸5.14mの略円形を呈する。深さは0.3mである。

S I 32 竪穴住居跡



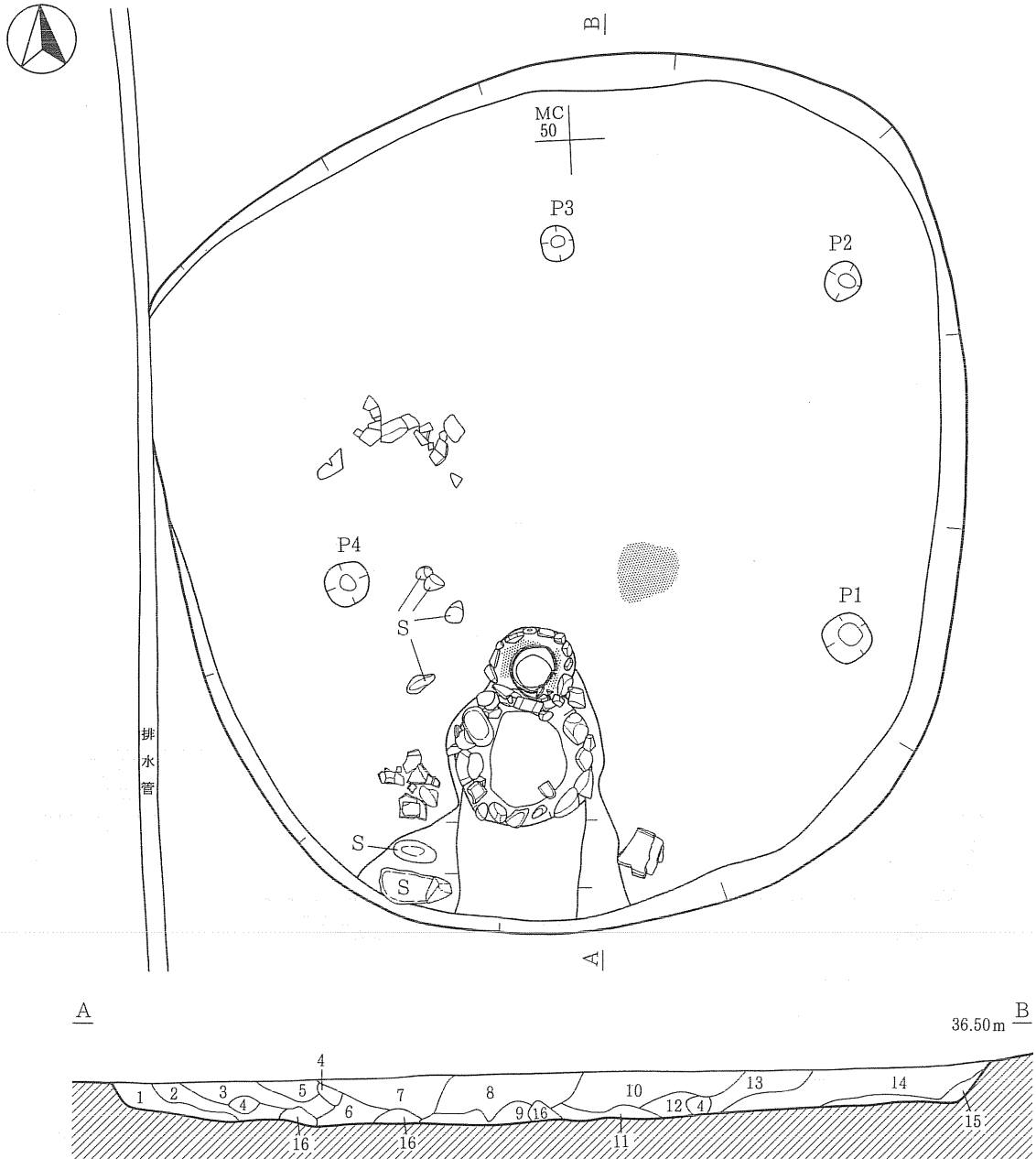
S I 32 竪穴住居跡 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性弱。
2. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
4. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
7. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
8. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
9. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性中。



第16図 A区S I 32竪穴住居跡

S I 34 竪穴住居跡

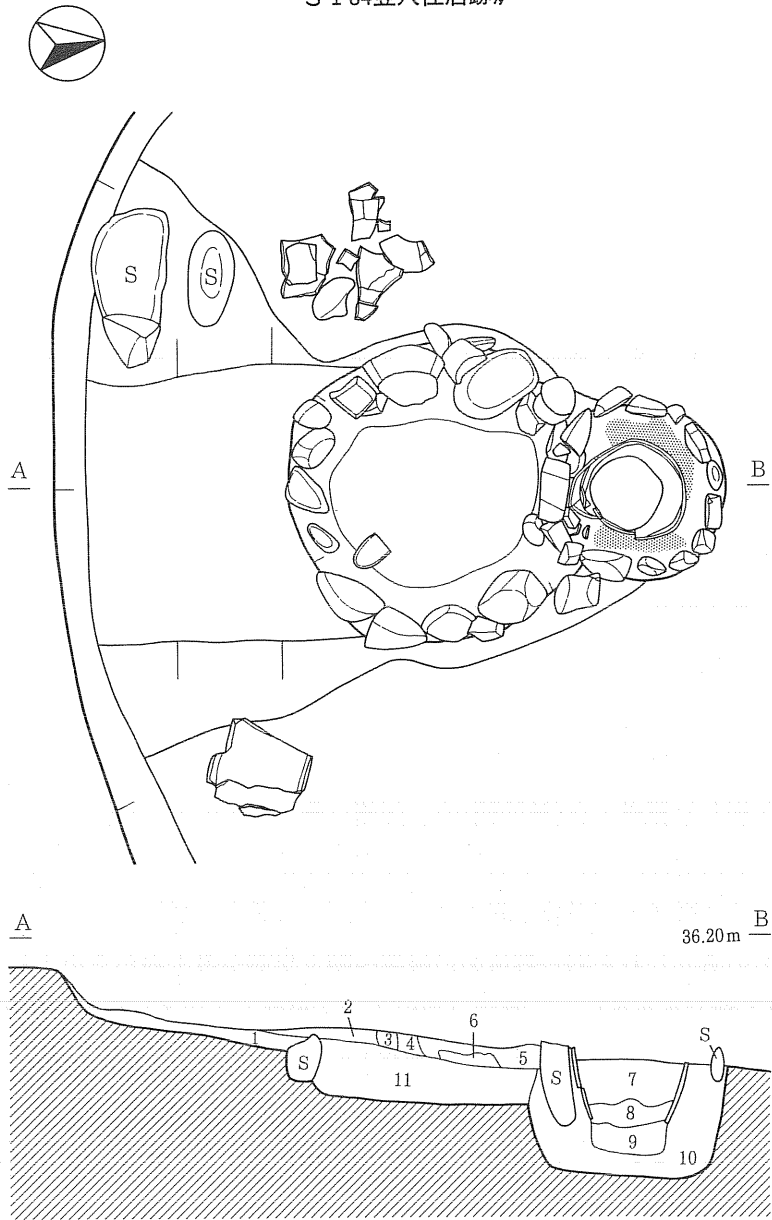


S I 34 竪穴住居跡 (A-B)

1. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性中。炭化物・礫若干混入。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。小礫(1~2mm)若干混入。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。炭化物・極小礫(1mm以下)若干混入。
4. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性弱。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物若干混入。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物・小礫(1~2mm)若干混入。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性中。炭化物・小礫(1~2mm)少量混入。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物・極小礫(1mm以下)若干混入。
9. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物・極小礫(1mm以下)若干混入。
10. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。炭化物・炭土粒子・小礫(1~2mm)少量混入。
11. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物・小礫(1~2mm)少量混入。
12. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) と褐色土 (10YR4/4) 混合土。しまり中、粘性中。炭化物・極小礫(1mm以下)少量混入。
13. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。炭化物・極小礫(1mm以下)少量混入。
14. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。炭化物・小礫(1~2mm)少量混入。
15. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性中。
16. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性弱。やや砂質。

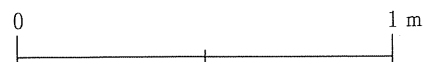
第17図 A区S I 34竪穴住居跡

S I 34 竪穴住居跡炉



S I 34 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性弱。植物根混入。
2. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性弱。植物根若干混入。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり無、粘性無。植物根少量混入。
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり中、粘性弱。炭化物若干混入。植物根少量混入。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性弱。炭化物・植物根多量混入。礫混入。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性弱。炭化物多量混入。植物根少量混入。礫混入。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱、粘性中。土器片と礫混入。植物根少量混入。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性中。土器片と礫混入。植物根少量混入。
9. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまり弱、粘性中。植物根少量混入。
10. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性中。礫と接する上面は焼土粒子多量混入。
11. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり中、粘性中。焼土粒子少量混入。



第18図 A区 S I 34 竪穴住居跡炉

- 《 土 層 》 16層に分層した。一部に耕作による攪乱の痕跡が見られる。
- 《 壁 》 緩い傾斜をもって立ち上がる。西側壁が排水管の敷設によって一部壊されていた。
- 《 柱 穴 》 炉の土器埋設部をほぼ挟んだ位置に一对、炉とは反対側の壁近くに一对の計4基の柱穴を確認した。
- 《 床 面 》 地山まで掘り込んで床面としている。床面は固く締まっており、ほぼ平坦である。
- 《 炉 》 土器埋設部、燃焼部、前庭部からなる複式炉である。達磨形を呈する土器埋設部と燃焼部に壁に向かって開く前庭部が組み合って構成される。軸長1.79m、最大幅1.59m、軸線方向はN-8°-Eである。
- 〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第43図70、図版32-3)をほぼ垂直に埋め込み、周囲を10数点の小ぶりの礫で円形に囲っていた。この囲いの内部に焼土面を確認した。深さは0.32mである。特に燃焼部との仕切りになっている礫が著しく焼けていた。
- 〈燃 焼 部〉 土器埋設部より浅く、ほぼ円形に掘り込み、その立ち上がり際に円形となる石組を構築していた。深さは0.19mである。覆土には多量の炭化物が含まれていたものの焼土面は見られなかった。
- 〈前 庭 部〉 燃焼部から住居壁までの距離や礫・遺物の出土状況から前庭部に相当すると判断した。しかし、典型的な複式炉に見られる、燃焼部から住居壁にかけての一段深い掘り込みは確認されず、むしろ住居の床面よりやや高い台状を呈していた。東側に欠損した石皿1点(第55図15)、西側に礫2点が出土した。

《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第43図70は炉埋設土器である。全面RL縄文を縦位回転施文した深鉢形土器で、胴部のみを埋設している。これと同一個体の口縁部～胴上半部が覆土内から出土している(第42図69、図版32-4)。口縁上端がやや外反し、縄文は口縁下2cm程度から以下に施文されている。

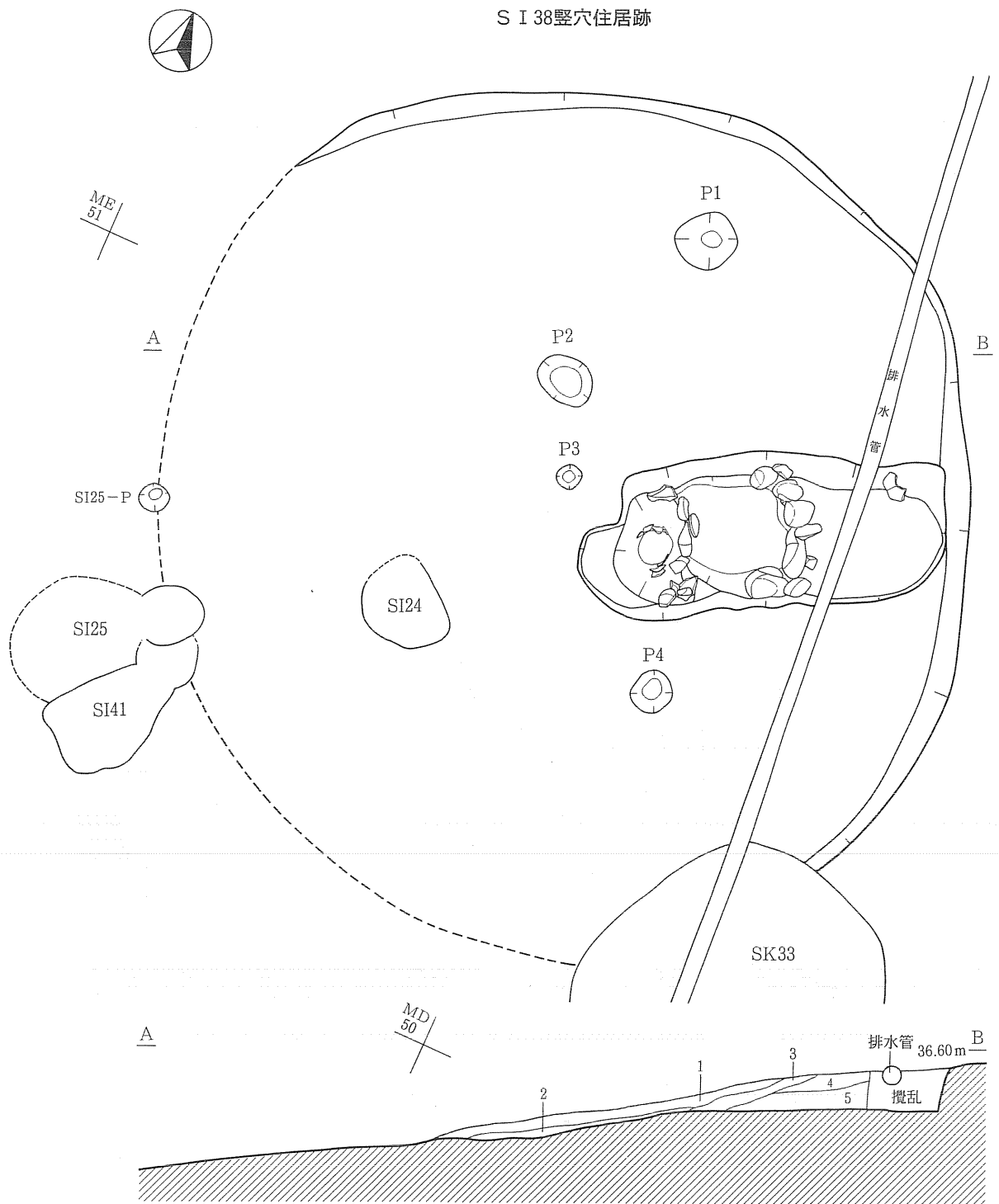
覆土内からは区画文の施された波状口縁の深鉢形土器が出土している(第42図68、図版32-2)。胴部上半～口縁部は外反して立ち上がり、胴部半ばで緩く屈曲して比較的急にすぼまる。口縁端は肥厚し、ほぼ水平に面取りがなされる。口縁下には1条の沈線を巡らし、帯状の無文部分をクランク状に展開させた文様が描かれる。区画内にはRL縄文が縦位あるいは左上-右下の方向で回転施文される。

〈 石 器 〉 第54図10は有脚の石鏃である。両面を丹念な調整剥離によって整形している。基部の抉り部分にはアスファルトが付着する。11は緩い円刃の磨製石斧である。全体が比較的扁平に作られ、側縁には明瞭な稜が残る。基部を折損する。12は、断面カマボコ形の丸鑿に仕上げられた磨製石斧である。13は扁平円礫を用いた凹石。14の石皿は両面に擦面が残る。第55図15の石皿裏面には研ぎ跡が残されていた。

S I 38 竪穴住居跡 (第19・20・43・55図、図版17)

《 位置と確認 》 MC50・51、MD50・51グリッドに位置する。西側の沢1部分に向かう傾斜面にあり、MC48～52グリッド内を南北に縦断する配水管の設置工事によって、攪乱を受けている。

《 重 複 》 S I 24・25・41 竪穴住居跡および S K 33 土坑と重なり、これらより新しい。

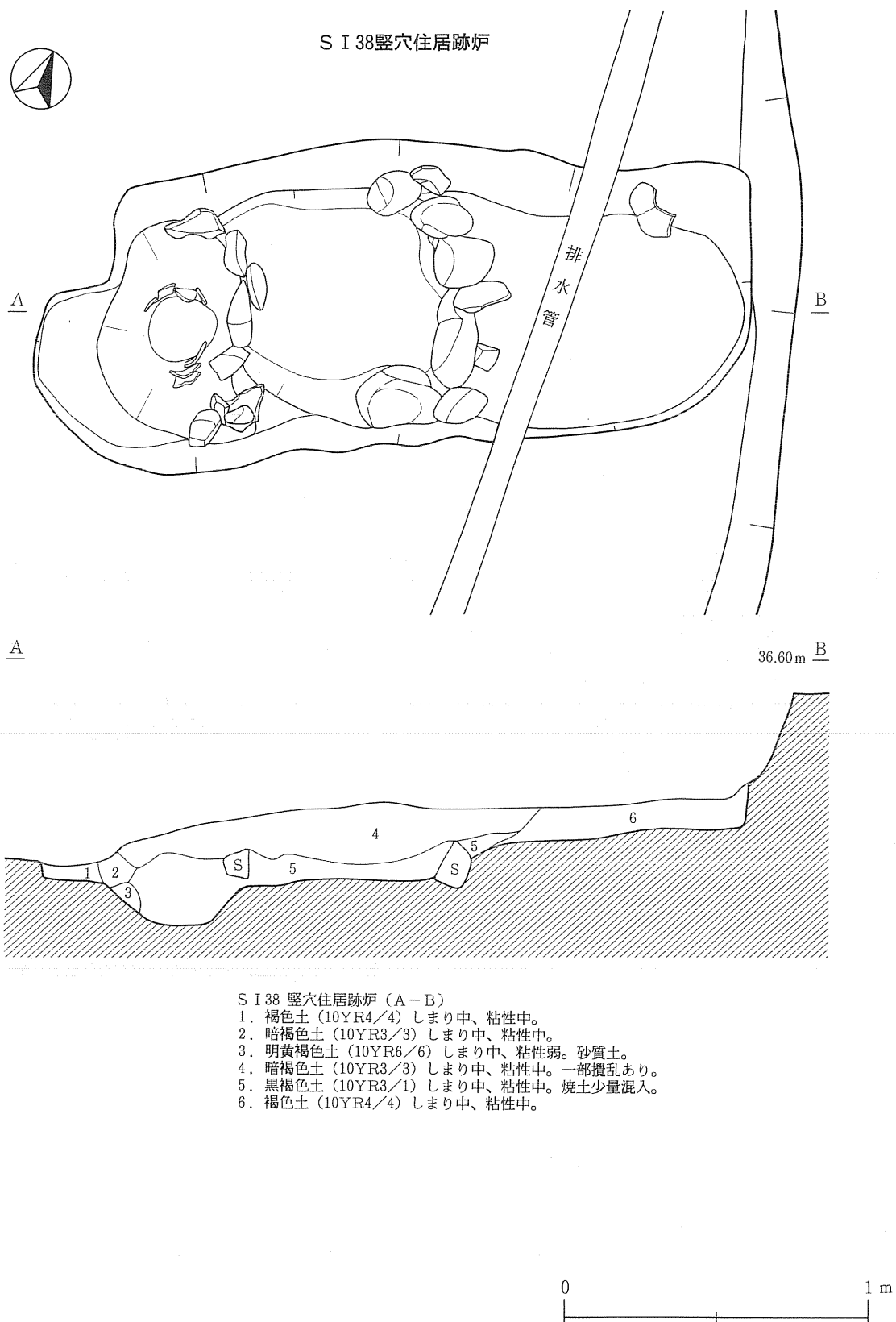


S I 38 竪穴住居跡 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
2. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性中。地山土若干混入。
3. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
4. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。



第19図 A区S I 38竪穴住居跡



S I 38 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。
3. 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり中、粘性弱。砂質土。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。一部攪乱あり。
5. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性中。焼土少量混入。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。

第20図 A区 S I 38住竪穴居跡炉



《規模と平面形》 確認できた住居壁からの推定で、長軸5.69m、短軸5.24mの略円形を呈し、深さは0.24mである。

《土層》 5層に分層した。南西側は覆土が失われており分層できなかった。

《壁》 炉が付設された東壁から北壁にかけては、ほぼ垂直に立ち上がる。しかし、西壁から南壁にかけては壁が失われていた。

《柱穴》 炉の土器埋設部を挟んだ位置に3基、北壁寄りに1基を確認した。

《床面》 炉を含む住居北東側の床面は固く締まっている。しかし住居南西側は攪乱や倒木痕によって不明瞭である。

《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部からなる複式炉である。土器埋設部から前庭部まで一体に掘り込まれ、全体は長楕円形を呈する。軸長2.85m、最大幅2.71m、軸線方向はS-57°-Wである。

〈土器埋設部〉 鉢形に掘り込んだ中に深鉢形土器の胴部破片(第43図74)が残されていた。燃焼部との境界は弧状に並べた9点の礫で区画されていた。深さは0.34mである。

〈燃焼部〉 土器埋設部より浅く、径約0.60m掘り込み、前庭部側との間を9点の礫で区画していた。深さは0.26mである。

〈前庭部〉 末端の一部が住居の壁に接する。掘り込みは燃焼部よりも浅く、深さは0.12mである。

《出土遺物》

〈土器〉 第43図74は、土器埋設部に埋め込まれた土器で、胴部半ばで膨らむ深鉢形土器の破片である。全面にRL縄文が縦位に回転施文される。

このほか覆土内から出土した土器は4点あり、71・72は口縁部がわずかに外反し、口縁以下全面に縄文の施された深鉢形土器破片、73は胴部上半の横位沈線に列点を沿わせた深鉢形土器破片、75は弧線で区画文を施した胴部破片である。

〈石器〉 第55図16は、両側に刃部調整剥離を加えた縦長剥片である。剥離は背面、腹面の両面に施されている。先端を折損する。17は先端部から側縁にかけて調整剥離を施した小型の剥片である。剥離は腹面側に施されている。

S I 41 竪穴住居跡 (第15・44図、図版14)

《位置と確認》 MD50グリッドに位置する。炉のみを確認した。

《重複》 S I 25 竪穴住居跡と重複し、これによって破壊を受けていた。S I 38 竪穴住居跡の推定範囲内でもあり、それよりは古い時期の遺構と考えられる。また、S I 24 とは同一の倒木痕プラン上に位置するが、これとの新旧関係は不明である。

《炉》 土器埋設部、燃焼部、前庭部からなる複式炉である。規模は軸長1.17m、最大幅0.67mで、軸線方向はN-20°-Eである。

〈土器埋設部〉 径約0.4mの掘り込み内に深鉢形土器の口縁部破片(第44図76)が残されていた。深さは0.19mである。

〈燃 焼 部〉 土器埋設部と前庭部とを結ぶ深さ0.03mの浅い掘り込みであり、ここに石組などの区画施設は見られなかった。

〈前 庭 部〉 径約0.50m、深さ0.06mの浅い掘り込みで、南西に5点の礫を確認した。

《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第44図76は土器埋設部に埋め込まれた深鉢形の口縁部破片である。口縁上端やや外反し5cm程度の無文部分を挟んで矩形の区画文が描かれている。区画内にはL R縄文が縦位回転施文される。ほかに覆土内からは、L R縄文を縦位に回転施文した懸垂区画文のある深鉢形土器の胴部片(77)も出土している。

S I 42 竪穴住居跡 (第21・22・44～46・55・56図、図版18・19・33・35)

《 位置と確認 》 K L 52、K M 52グリッドに位置する。

《 重 複 》 S K F 02 フラスコ状土坑およびS I 43 竪穴住居跡と重なり、これらよりも古い。

《 規模と平面形 》 長軸2.99m、短軸2.67mの略円形を呈し、南東側がやや突き出している。

《 土 層 》 7層に分層した。このうち1・4・5層はS I 43 竪穴住居跡の床として貼られた黄褐色～褐色土である。

《 壁 》 傾斜をもって立ち上がる。壁の一部北側はS K F 02 フラスコ状土坑によって、切られ失われていた。

《 柱 穴 》 床面に径0.15～0.20mの柱穴を4基確認した。

《 床 面 》 平坦であり、固く締まっていた。炉の周囲は固さが増す。

《 炉 》 土器埋設部、燃焼部からなる複式炉である。全体が楕円形を呈し、規模は軸長1.39m、最大幅0.63mで、軸線方向はS-84°-Eである。土器埋設部の西側に接し、それを切る形で径約0.55m、深さ0.10～0.15mの掘り込みがある。掘込みの西端立ち上がりには扁平な礫が立てられ、掘り込み中央には深鉢形土器の胴部(第46図88・89、図版33-3)が埋め込まれていた。

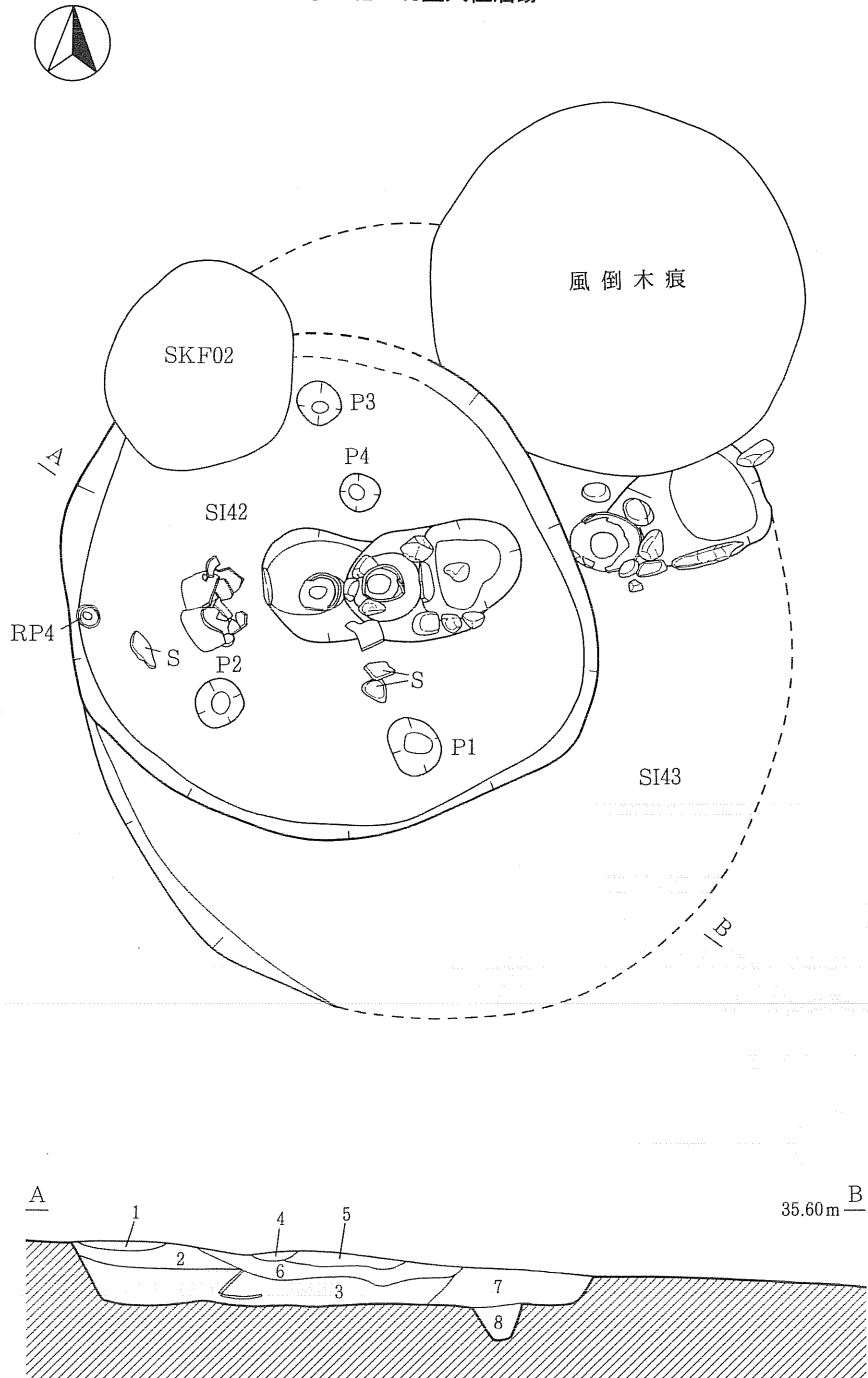
〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部(第45図80、図版33-2)がほぼ垂直に埋め込まれ、その西側を3個の礫で囲んでいた。深さは0.36mである。この土器埋設部を切って西側に掘り込みがあり、この掘込み内部からも埋設土器の一部(第46図88・89、図版33-3)が出土した。

〈燃 焼 部〉 土器埋設部より一段高く、深さ0.27mの掘り込みである。土器埋設部との間に3点の礫を置いて区画し、南側の立ち上がり部分に2点の礫、さらに覆土上中央にも礫1点が見られた。

《 出土遺物 》

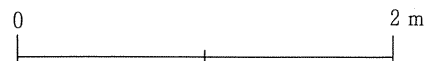
〈 土 器 〉 第45図80は炉埋設土器である。口縁部～頸部は外反内傾し、以下緩く屈曲してわずかに膨らみながら下りる深鉢形土器である。頸部下の屈曲部には1条の沈線が巡り、沈線下でL R縄文を横位回転施文、以下は縦位回転施文している。第46図88と89は、土器埋設部の西側を切った掘り込み中から出土した埋設土器である。胴部の丸く膨らむ深鉢形土器で、口縁部～胴上半部および底部を欠く。胴部には曲線的な帯状区画文による文様が施され、文様帯の下限は大きな波状沈線で画されて

S I 42・43 竪穴住居跡



S I 42 竪穴住居跡 (A-B)

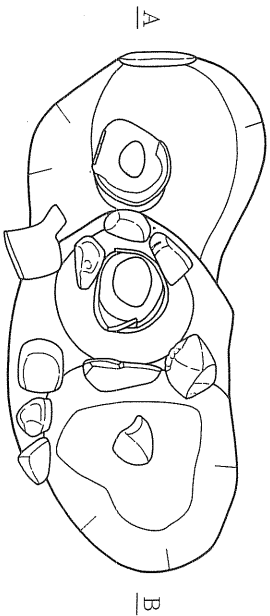
1. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
4. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性中。
5. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
6. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。
7. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
8. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。



第21図 A区S I 42・43竪穴住居跡



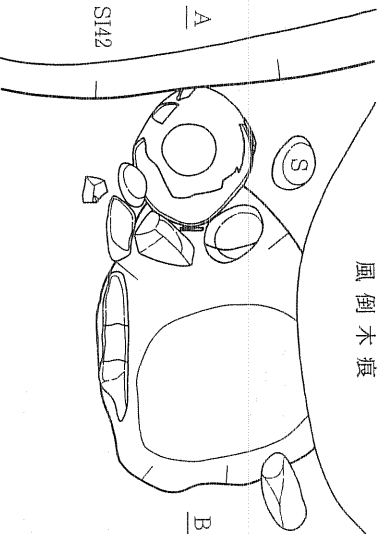
S I 42 竪穴住居跡炉



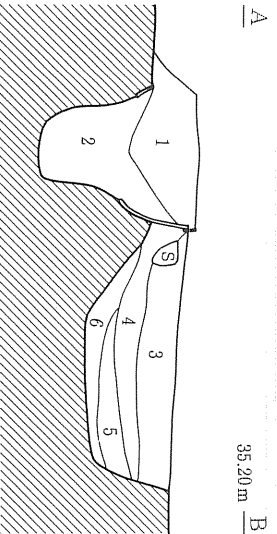
- S I 42 竪穴住居跡炉 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性強。炭化物微量混入。
  2. 黒色土 (10YR2/1) しまり強、粘性強。炭化物少量混入。
  3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性強。炭化物微量混入。
  4. 黒色土 (10YR2/1) しまり強、粘性強。炭化物少量混入。
  5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性強。
  6. 黒色土 (10YR2/1) しまり強、粘性強。
  7. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。焼土粒子少量混入。
  8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。焼土粒子微量混入。
  9. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。焼土粒子少量混入。



S I 43 竪穴住居跡炉



- S I 43 竪穴住居跡炉 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
  2. 炭褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
  3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。炭化物・焼土粒子微量混入。
  4. 黒褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。焼土粒子微量混入。
  5. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。
  6. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。



第22図 A区S I 42・43竪穴住居跡炉

いる。区画文内および胴下半部にはR L縄文を施文するが、胴下半部では縦位に、区画文内ではその展開する方向に沿って回転方向を変えている。

床面上および覆土内から第44図78をはじめとした土器が出土している。

78は口縁部～胴部上半がほぼ直立し、胴部半ばで緩く屈曲してすぼまる深鉢形土器である。口縁下2 cm程から全面にL R縄文を縦位回転施文している。また、第45図79(図版35-3)は西側壁際に正位で出土した小形の鉢形土器である。外反する頸部から口縁にかけては無文で、頸部下に1条の沈線が巡る。急な角度ですぼまる胴下半部にはR L縄文が縦位に回転施文されている。第45図81・82は79・80と同様の器形を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。頸部下に1条の沈線と列点文が施され、その下に縦位回転施文したL R縄文を地として二重の沈線で懸垂文が描かれる。これと同様の土器が、83および第46図92・93である。83は無文の口縁部破片、92・93は沈線と列点文を施した頸部下の破片である。ほかには口縁1～2 cm以下の全面に縄文を施した深鉢形土器(第45図84～87)の破片、幅2～3 cmの縦位帯状区画文を施した深鉢形土器(90)の破片も出土している。

〈石器〉第55図18は両面を加工した筥状石器である。原礫の礫皮を残す剥片を素材として断面カマボコ形に作られている。19は小型細身の磨製石斧である。刃部はわずかに湾曲する。第56図20の石皿は裏面に脚が作り出されている。

#### S I 43 竪穴住居跡 (第21・22・46図、図版18・19)

《位置と確認》 K L 52グリッドに位置する。炉と壁の一部を確認した。

《重複》 S I 42 竪穴住居跡と重なり、これを貼床して作られる。またS K F 02 フラスコ状土坑によって切られていた。

《規模と平面形》 南西壁および炉跡位置から長軸4.27m、短軸3.80m程度の楕円形と推定される。

《壁》 残存する南西壁のみ確認できた。やや傾斜して立ち上がる。

《柱穴》 確認できなかった。

《床面》 炉の周囲は比較的固く締まっており、床面と判断した。

《炉》 土器埋設部、燃焼部からなる複式炉である。土器埋設部から撥形に開く形状で、軸長1.07m、最大幅0.54m、軸線方向はS-62°-Wである。

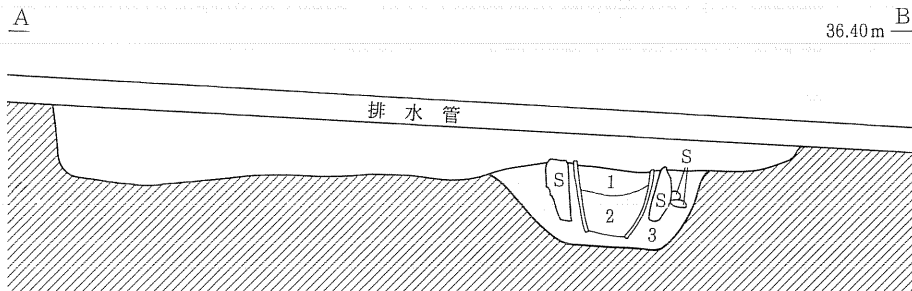
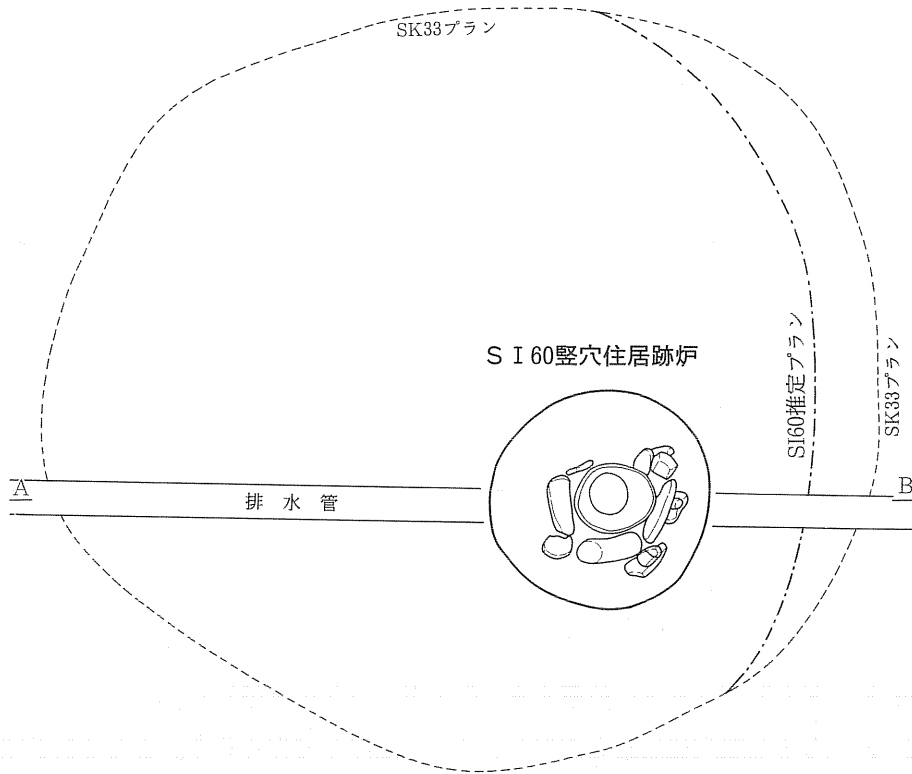
〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴部片(第46図94)が埋め込まれ、その東側を4点の礫で囲っていた。深さは0.43mである。

〈燃焼部〉 土器埋設部側から緩く傾斜し、住居壁側はほぼ垂直に立ち上がる。掘込みの南側に長めの礫を立てかけ、また住居壁側の軸線上にも礫1点を置いていた。深さは、土器埋設部より浅く0.25mである。

《出土遺物》

〈土器〉 第46図94は炉埋設土器である。胴部半ばで緩く屈曲する深鉢形土器であり、R L縄文が縦位回転施文される。

ほかに覆土内から、縄文(95～97)や列点文(98)を施した曲線的な区画文で構成される深鉢形土器の胴部破片が出土している。



S I 60 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. にぶい暗褐色土(10YR4/3)しまり弱、粘性弱。  
炭化物微量混入。
2. 暗褐色土(10YR3/4)しまり弱、粘性弱。  
炭化物微量混入。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり中、粘性中。  
炭化物微量混入。焼土粒子微量混入。



第23図 A区S I 60竪穴住居跡炉

## S I 60竪穴住居跡 (第23・47図、図版20・33)

- 《位置と確認》 MC50グリッドに位置する。S K 33土坑調査中に排水管の直下で炉を確認した。
- 《重複》 S K 33土坑プラン内にあり、これを切っている。またS I 38竪穴住居跡とも重複する関係にあるが、これとの新旧関係は不明である。
- 《規模と平面形》 S K 33土坑の断面でその規模を推定すると、長軸2.0m、短軸1.9mほどの円形であると思われる。
- 《土層》 炉のみ3層に分層した。
- 《炉》 土器埋設石囲炉である。径0.58m、深さ0.22mの円形の掘り込み内に深鉢形土器を埋め込み、まわりを大小11個の礫で囲っていた。
- 《出土遺物》
- 〈土器〉 第47図99(図版33-4)は炉埋設土器である。胴部上半から口縁部は外傾して開き、胴部半ばで緩く屈曲して下りる深鉢形土器である。口縁下3cm程からLR縄文を縦位回転施文している。100はその同一個体と思われる胴部破片である。

## (2) 土坑

## S K 17土坑 (第24・47図、図版21)

MM53グリッドで検出した。平面形は長軸(北西-南東)0.80m、短軸(北東-南西)0.76mの円形を呈し、確認面からの底面までの深さは0.52mである。底面はほぼ平坦だが東へやや傾いている。壁は垂直に立ち上がる。覆土は5層に分けられた。

出土遺物としては縄文土器片8点、黒曜石剥片1点があるが、うち、縄文土器2点を図示する。

第47図101は、曲線的な構図の区画文を描いた深鉢形胴部破片で、区画文内部にはRL縄文を縦位回転施文している。102は胴部上半の外反する深鉢形土器の破片で、横位の楕円区画文が描かれ、内部にLR縄文を横位回転施文している。

## S K 18土坑 (第24・47・56図、図版21・42)

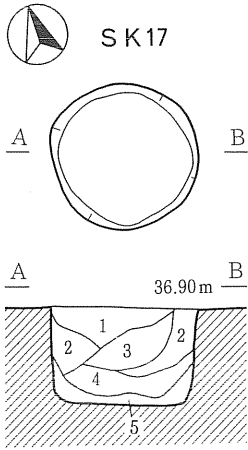
MP53グリッドで検出した。平面形は長軸(南-北)0.81m、短軸(東-西)0.54mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.14mである。底面は平坦であり、壁は急な角度で立ち上がる。覆土は2層に分けられ、2層とも固く締まっている。

出土遺物としては縄文土器片14点、石鏃1点、石皿(破片)1点、剥片2点があるが、うち、縄文土器2点、石鏃および石皿、剥片1点を図示する。

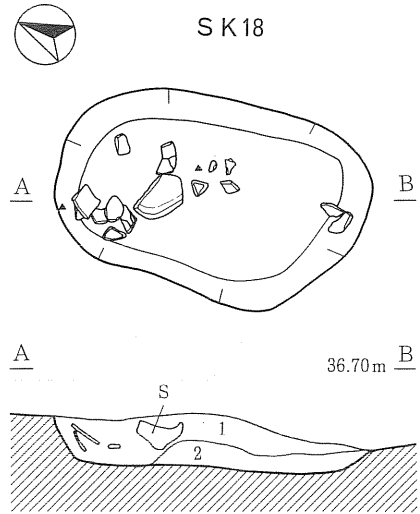
第47図103は、全面RL縄文を縦位回転施文した深鉢形土器の胴部下半破片である。104は縦位の沈線の引かれた深鉢形土器胴部破片である。第56図21は周縁に細かな調整剥離を加えた石鏃である。器体中央には素材剥片の剥離面が残されている。22は、2ヶ所の突起を作り出した剥片であり、石錐の未製品と考えられる(第8図、図版42)。23は裏面に脚の付く石皿破片である。周堤部が大きく立ち上がる。

## S K 33土坑 (第24・47図、図版21)

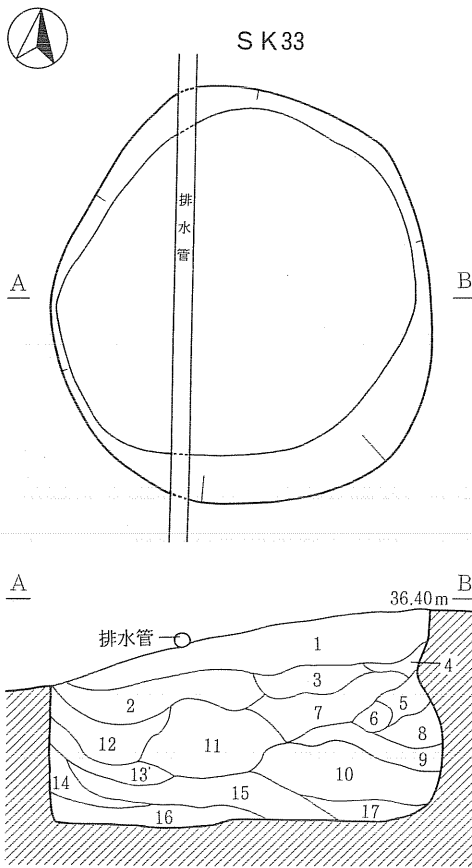
MC49・50グリッドで検出した。S I 60竪穴住居跡がほぼ重なる位置で本土坑プラン内にある。また、遺構の中央部やや西寄りを南北に現代の排水管が敷設されていたため、排水管周辺が攪乱されて



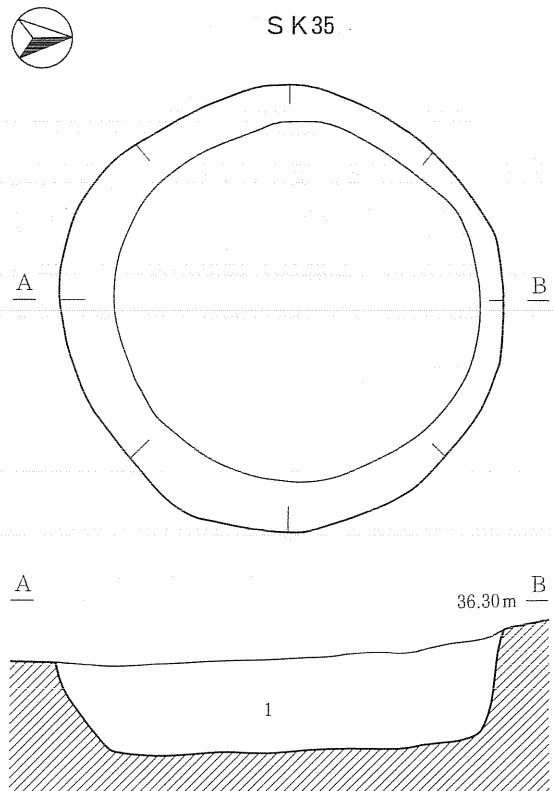
- SK17 土坑 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
  2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
  3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。炭化物・小礫(1~3mm)少量混入。
  4. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。
  5. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。



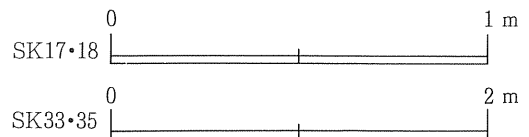
- SK18 土坑 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物微量混入。植物根少量混入。
  2. にぶい黄褐色土 (10YR3/4) 炭化物微量混入。植物根少量混入。



- SK33 土坑 (A-B)
1. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性中。
  2. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
  3. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
  4. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
  5. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
  6. 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり強、粘性中。
  7. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり中、粘性中。
  8. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり弱、粘性中。
  9. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
  10. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱、粘性中。
  11. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性中。
  12. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
  13. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性中。
  14. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性中。
  15. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。
  16. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。
  17. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性中。砂質土。

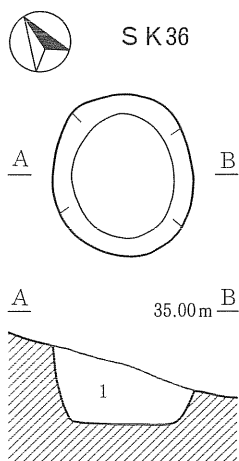


- SK35 土坑 (A-B)
1. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。火山灰少量混入。

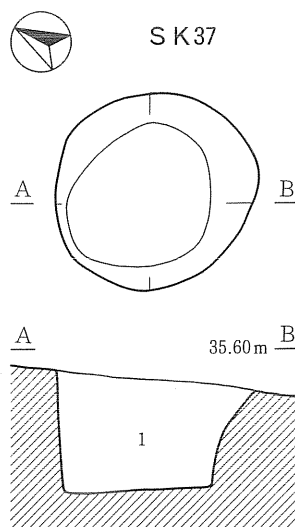


第24図 A区SK17・18・33・35土坑

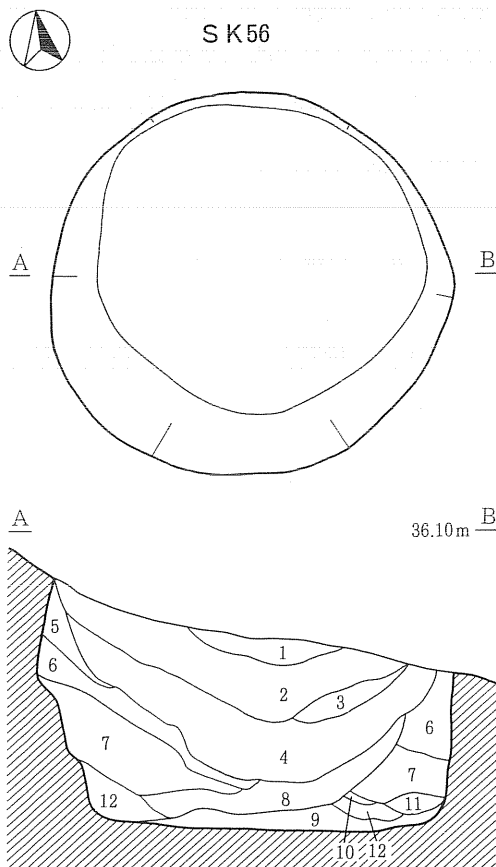
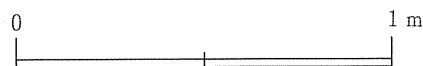




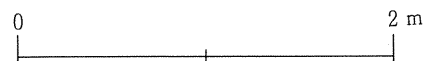
SK36 土坑 (A-B)  
 1. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性強。  
 炭化物微量混入。小礫(1~2mm)・植物根少量混入。



SK37 土坑 (A-B)  
 1. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。  
 小礫(1~2mm)・植物根少量混入。



SK56 土坑 (A-B)  
 1. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。  
 2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。  
 炭化物少量混入。  
 3. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。  
 炭化物少量混入。  
 4. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性中。  
 炭化物少量混入。  
 5. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。  
 炭化物少量混入。  
 6. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。  
 7. 黄褐色土 (10YR5/8) しまり強、粘性中。  
 8. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。  
 9. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。  
 10. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性中。  
 11. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強、粘性中。  
 12. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強、粘性中。



第25図 A区SK36・37・56土坑

いた。平面形は長軸(北西-南東)2.26m、短軸(北東-南西)2.03mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.12mである。底面はほぼ平坦で、壁は東壁を除いてほぼ垂直に立ち上がる。覆土は17層に分けられた。

出土遺物は縄文土器片22点、剥片2点である。縄文土器は大半が細片であり、1点のみを図示した。第47図105は、深鉢形土器の胴部破片で、懸垂区画文と判断される縦位の沈線が施され、RL縄文が縦位回転施文される。

#### S K 35土坑 (第24図、図版21)

MA48、MB48グリッドで検出した。平面形は長軸(北西-南東)2.82m、短軸(北東-南西)2.37mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.49mである。底面は平坦であるが、南へやや傾いていた。壁は北側を除いて緩やかに立ち上がる。覆土は1層である。人為的な埋め戻しが行われたものと判断され、地山ブロックが少量混入している。遺物は出土しなかった。

#### S K 36土坑 (第25図、図版22)

KL49グリッドで検出した。平面形は長軸(北東-南西)0.43m、短軸(北西-南東)0.37mで円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.17mである。底面は平坦で壁は急な角度で立ち上がる。覆土は1層で固く締まっており、粘性が強い。径1~2mmの小礫が僅かに混入している。遺物は出土しなかった。

#### S K 37土坑 (第25図、図版22)

KM49グリッドで検出した。平面形は長軸(北西-南東)0.55m、短軸(北東-南西)0.51mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.31mである。底面は平坦であるが北西へやや傾いていた。壁は北西壁が垂直に立ち上がっており、南東壁は急な角度で立ち上がる。覆土は1層で固く締まっており、径1~2mmの小礫が僅かに混入している。遺物は出土しなかった。

#### S K 56土坑 (第25図、図版22)

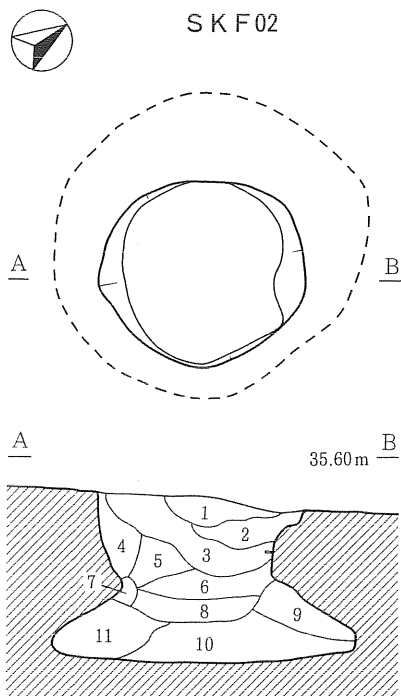
LT49グリッドで検出した。平面形は長軸(北西-南東)2.12m、短軸(北東-南西)2.04mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.02mである。底面は平坦で、壁は西壁を除いて垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けられ、全層が固く締まっている。レンズ状の堆積が主なため、自然堆積と土坑内壁の部分崩落であると判断した。遺物は出土しなかった。

### (3) フラスコ状土坑

#### S K F 02フラスコ状土坑 (第26・47図、図版22・36)

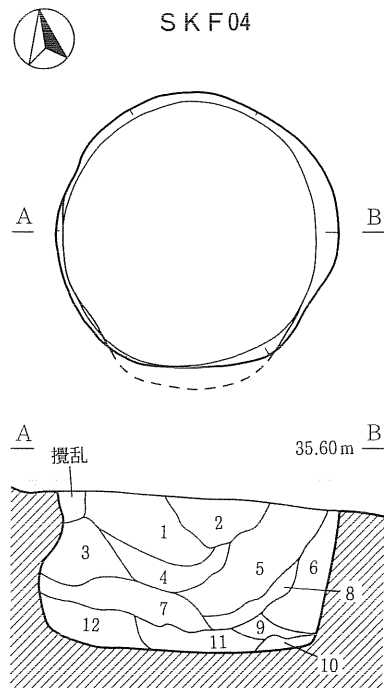
KL52、KM52グリッドで検出した。SI42堅穴住居跡と重複しており、この北西側を掘り込んでいるため、SI42堅穴住居跡よりも新しい遺構であると判断した。開口部の平面形は長軸(北東-南西)1.10m、短軸(北西-南東)0.99mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.89mである。底面は丸みを帯びており、平面形は長軸(北東-南西)1.71m、短軸(北西-南東)1.55mの円形を呈する。底面の土は、にぶい黄褐色土の地山粘土で固く締まっているものの、粘性は弱くサラサラしている。壁は下位がオーバーハングしており、中位から上方は急な角度で立ち上がる。覆土は15層に分けられ、全体的に植物根が少量混入している。

遺物は縄文土器片90点、剥片14点が出土した。このうち深鉢形土器の破片9点を図示する。



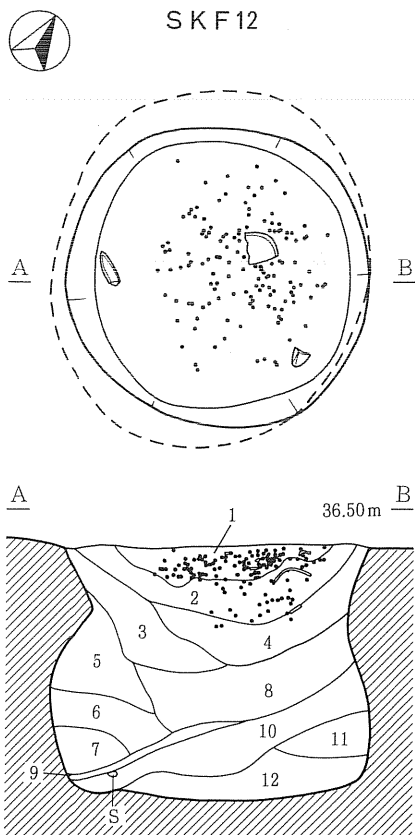
SK F02 フラスコ状土坑 (A-B)

1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性中。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。
4. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。
6. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中、粘性中。
7. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性中。
9. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性強。
10. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性強。
11. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性強。



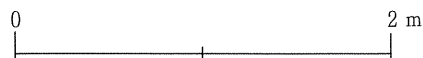
SK F04 フラスコ状土坑 (A-B)

1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。
3. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱、粘性強。
4. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強、粘性中。
6. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱、粘性強。
7. 暗褐色土 (10YR3/4) と褐色土 (10YR4/6) の混合土。しまり中、粘性中。
8. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
9. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
10. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性強。
11. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性中。
12. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性強。



SK F12 フラスコ状土坑 (A-B)

1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中、粘性中。  
炭化物少量混入。
2. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。  
炭化物少量混入。
3. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。  
炭化物・小礫(1~3mm)少量混入。
4. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。  
炭化物微量混入。小礫(1~3mm)少量混入。
5. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱、粘性強。  
小礫(1~3mm)少量混入。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。  
地山ブロック少量混入。小礫(1~3mm)微量混入。
7. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性強。  
地山ブロック多量混入。
8. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。  
地山ブロック・小礫(1~3mm)少量混入。
9. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。  
地山ブロック少量混入。
10. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり中、粘性強。  
地山ブロック少量混入。
11. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性強。  
地山ブロック・小礫(1~3mm)少量混入。
12. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。  
底面に炭化物・焼土粒子少量混入。  
地山ブロック微量混入。



第26図 A区SK F02・04・12フラスコ状土坑

第47図106は、全面縄文の施された口縁部破片である。胴部片には縦位条痕文(112)、網目状撚糸文(113)、頸部と胴部の境に2条の平行沈線を巡らす(107)、沈線と列点文を沿わせる(108)、列点文を1～2列巡らす(110・111)ものがある。また、外反する無文の頸部に縦位の粘土紐貼付文を施したものの(109)もある。114(図版36-4)は、全面LR縄文を縦位回転施文した小形の鉢形土器である。口縁部を欠き、フラスコ状土坑の底面に横たわった状態で出土した。

**S K F 04フラスコ状土坑** (第26・48・56図、図版23)

K M 53・54グリッドで検出した。開口部の平面形は長軸(北西-南東)1.50m、短軸(北東-南西)1.45mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは0.82mである。底面はほぼ平坦であり、平面形は長軸(北東-南西)1.53m、短軸(北西-南東)1.33mの円形を呈する。壁は、南壁・西壁では開口部付近までオーバーハングしているが、北壁・東壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けられた。

遺物は縄文土器片37点、石鏃2点、剥片16点が出土した。深鉢形土器2点、石鏃1点を図示する。第48図115は、LR縄文を左上-右下方向で回転施文した後、懸垂状の縦位の沈線を施した胴部破片である。116は、全面RL縄文を横位回転施文した胴部破片である。第56図24は、両面に丹念な調整剥離を加えた石鏃である。全体に比較的肉厚で基部は凹基となる。

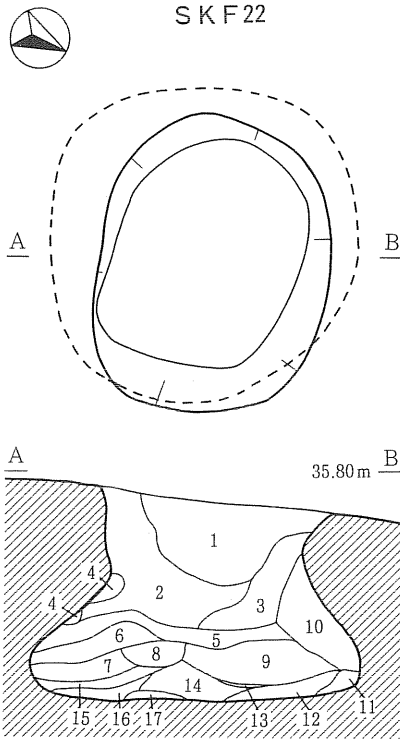
**S K F 12フラスコ状土坑** (第26・48・49・56図、図版24・34)

M A 50グリッドで検出した。開口部の平面形は長軸(北西-南東)1.66m、短軸(北東-南西)1.57mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.35mである。底面はやや凸凹があり、平面形は長軸(北西-南東)1.45m、短軸(北東-南西)1.37mの円形を呈する。壁は、東壁下位が内傾して立ち上がり、中位から上方は急な角度で立ち上がる。東壁を除いては、開口部付近までオーバーハングしている。覆土は12層に分けられ、下層ほど粘性が強い。S I 13と隣接する南東部の確認面では、焼土および炭化物が若干混入している。

遺物は縄文土器片81点、石鏃1点、剥片54点が出土した。深鉢形土器12点、石鏃1点を図示する。第48図117(図版34-1)は、胴部から口縁部にかけて外反して開き、胴部半ばからは緩く膨らみながら下りる深鉢形土器である。口縁部下約3cmから長さ約2cmのLR原体を縦位に回転施文するが、その際約2～4cmの間隔をあけて回転するため、全体に縞状の縄文となる。最大径を示す部位のやや上位に1条の沈線が巡る。118は、口縁部が外反して開き、胴上半部は直立して胴下部にわずかな膨らみを持ちながらすぼまる深鉢形土器である。胴上半部には、幅約3cmの帯状の区画文によって、逆「の」字状の文様帯が描かれている。ほかに縄文の地に懸垂文を施した深鉢形土器(121・127)の同一個体や、口縁下に1条の沈線が巡る土器(124)、無文の口縁部破片(125)、曲線的な構図の区画文が描かれる土器(126)、全面縄文の施された深鉢形土器の口縁部破片(119・120・122・123)がある。このうち122は、口唇部上に凹線が引かれLR縄文が縦位に回転施文された土器で、出土土器のなかでは古手の様相を示す資料である。128は、深鉢形土器の胴下半～底部の資料である。第56図25は、凹基の石鏃である。素材剥片の剥離面が片面に残り、全体に薄手に作られている。

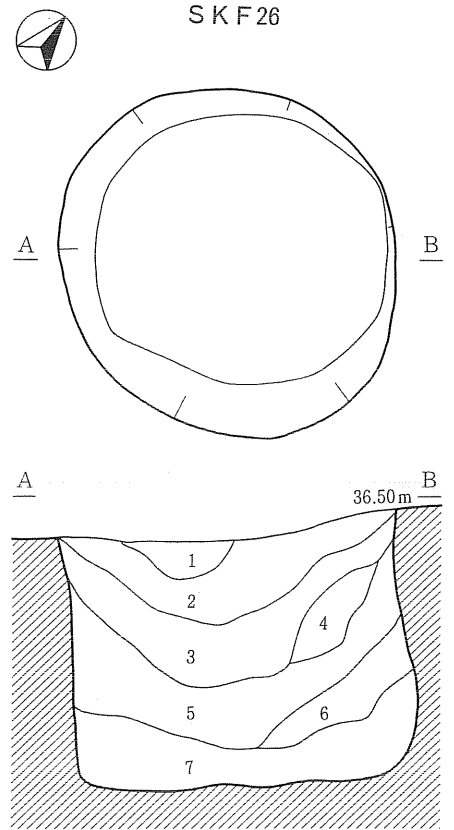
**S K F 22フラスコ状土坑** (第27・49図、図版23)

L L 51・L K 51グリッドで検出した。開口部の平面形は長軸(北東-南西)1.60m、短軸(北西-南東)1.24mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.06mである。底面は平坦で、平面形は長軸(北西-南東)1.23m、短軸(北東-南西)0.96mの楕円形を呈する。壁は下位がオーバーハングしてお



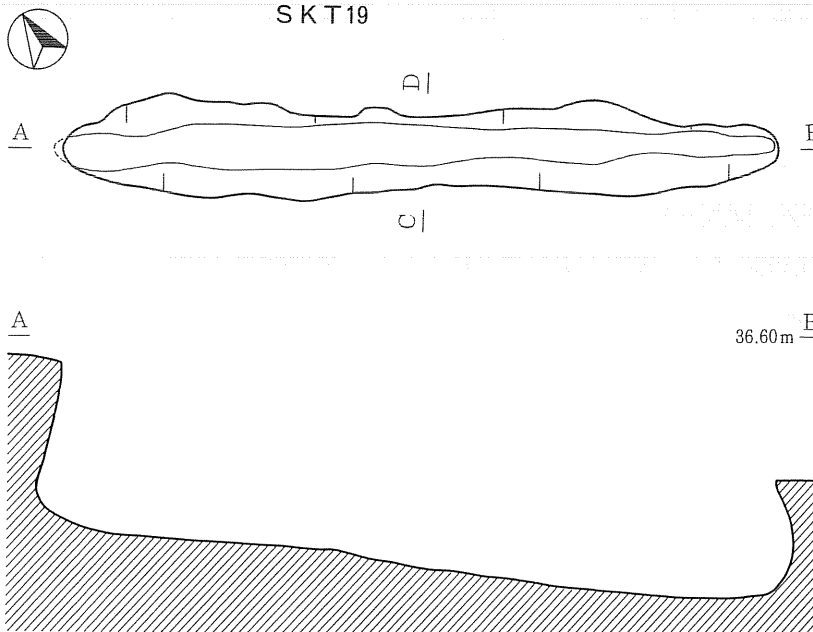
SK F 22 フラスコ状土坑 (A-B)

1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中、粘性中。
4. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強、粘性中。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。
7. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性強。
8. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性強。
9. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性強。
10. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性強。
11. 暗褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。
12. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性強。
13. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱、粘性強。
14. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。
15. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性強。
16. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。
17. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性強。



SK F 26 フラスコ状土坑 (A-B)

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性中。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
3. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性中。
4. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性中。
5. 褐色土 (10YR4/6) しまり中、粘性強。
6. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり中、粘性強。
7. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) しまり弱、粘性強。



SK T 19 陥し穴 (A-B)

1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。
4. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性強。
6. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性強。
8. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) しまり強、粘性弱。



第27図 A区SK F 22・26フラスコ状土坑、SK T 19陥し穴

り、中位から上方はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は17層に分けられ、6層以下の中位～下位の層では粘性が強い。遺物は縄文土器片10点が出土した。1点を図示する。

第49図129は、懸垂区画文の施された深鉢形土器の胴部破片で、区画内にはL R縄文を縦位回転施文している。

#### S K F 26フラスコ状土坑 (第27・49図、図版23)

MD51グリッドで検出した。S I 38竪穴住居跡に隣接するものの重複関係は見られない。開口部の平面形は長軸(北西-南東)1.93m、短軸(北東-南西)1.78mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.33mである。底面は凸凹があり、平面形は長軸(北東-南西)1.61m、短軸(北西-南東)1.50mの円形を呈する。壁は、特に東壁と南壁の下位がオーバーハングしており、中位から上方はほぼ垂直に立ち上がっている。西壁と北壁は垂直に立ち上がる。覆土は7層に分けられ、5層以下は下位ほど粘性が強い。底面地山は砂質土である。

遺物は縄文土器15点、石鏃1点、剥片3点が出土した。うち縄文土器5点、石鏃1点を図示する。第49図130～132は、外反する深鉢形土器の口縁部で、口縁の2～3cm以下に縄文が施文される。133は、L R Lの複節縄文が施文された深鉢形土器の胴部破片である。134は、深鉢形土器の底部である。内面に櫛歯状工具の調整痕が認められる。第56図26は平基式の石鏃である。

#### (4) 陥し穴

##### S K T 19陥し穴 (第27図、図版23)

沢部分に近いM L 51・52、M M 51・52グリッドで検出した。本遺跡唯一の狩猟遺構である。平面形は長軸(北西-南東)3.80m、短軸(北東-南西)0.52mの溝状を呈し、確認面から底面までの深さは、0.87m(北西側)～0.59m(南東側)である。底面は南東側へ傾いている。壁はやや内傾しながら立ち上がる。覆土は8層に分けられ、全層が自然堆積したものと判断した。8層は締まりが強いものの粘性が弱い砂質土である。なお、遺物は出土しなかった。

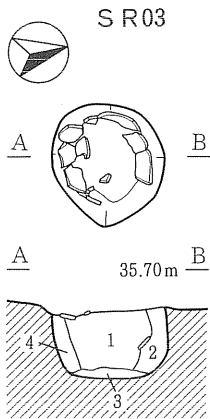
#### (5) 土器埋設遺構

##### S R 03土器埋設遺構 (第28・50図、図版25)

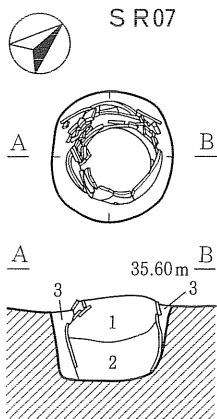
L N 51グリッドのS I 01竪穴住居跡プラン床面中央付近で検出した。新旧関係は不明である。第50図135の深鉢形土器の胴部が、長軸0.33m、短軸0.30m、深さ0.18mの掘り方内に埋め込まれていた。土器は胴部がわずかに膨らむ器形で、全面にL R縄文が縦位回転施文されている。

##### S R 07土器埋設遺構 (第28・50図、図版24・34)

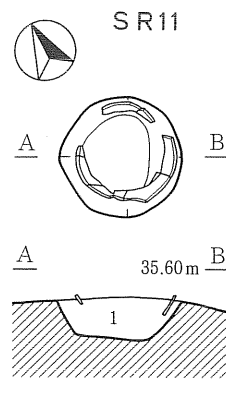
L N 53グリッドのS I 05竪穴住居跡プラン内で検出した。新旧関係は不明である。第50図136(図版34-2)の深鉢形土器が、長軸0.35m、短軸0.33m、深さ0.23mの掘り方内に埋め込まれていた。土器は頸部～口縁部は内傾外反し、胴部以下がわずかに膨らみながら下りる器形をもつ。口縁部～頸部は幅広く無文であり、胴部はL R縄文を縦位回転施文した後、2条の沈線によって懸垂文を描いている。懸垂文の頂部が接する部分には粘土瘤が貼り付けられる。137は、おそらく136の同一個体破片であると思われる。



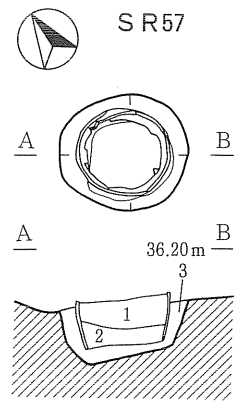
- SR03 土器埋設遺構 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。
  2. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。炭化物・焼土粒子少量混入。
  3. 褐色土 (10YR4/6) しまり強、粘性中。
  4. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。



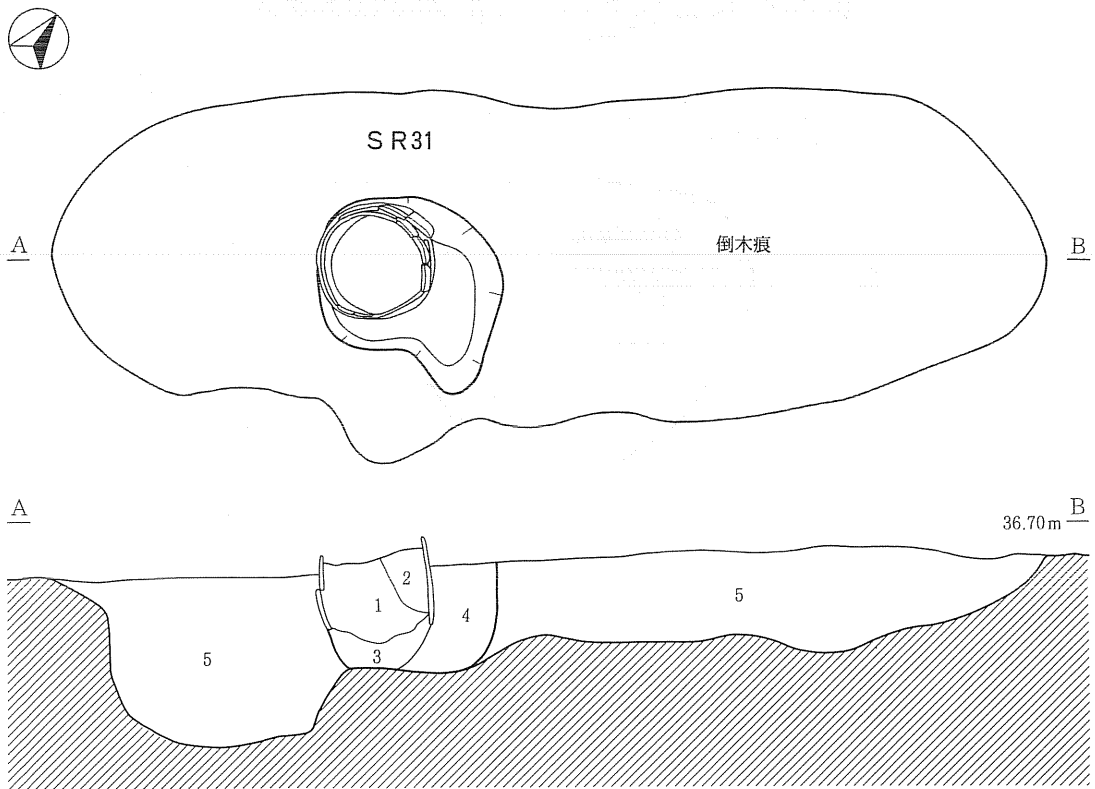
- SR07 土器埋設遺構 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。極小礫(1mm)少量混入。
  2. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強、粘性強。炭化物少量混入。焼土粒子微量混入。
  3. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。炭化物・焼土粒子微量混入。



- SR11 土器埋設遺構 (A-B)
1. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性弱。焼土粒子微量混入。



- SR57 土器埋設遺構 (A-B)
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり弱、粘性中。炭化物微量混入。焼土粒子少量混入。
  2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
  3. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。炭化物・焼土粒子微量混入。

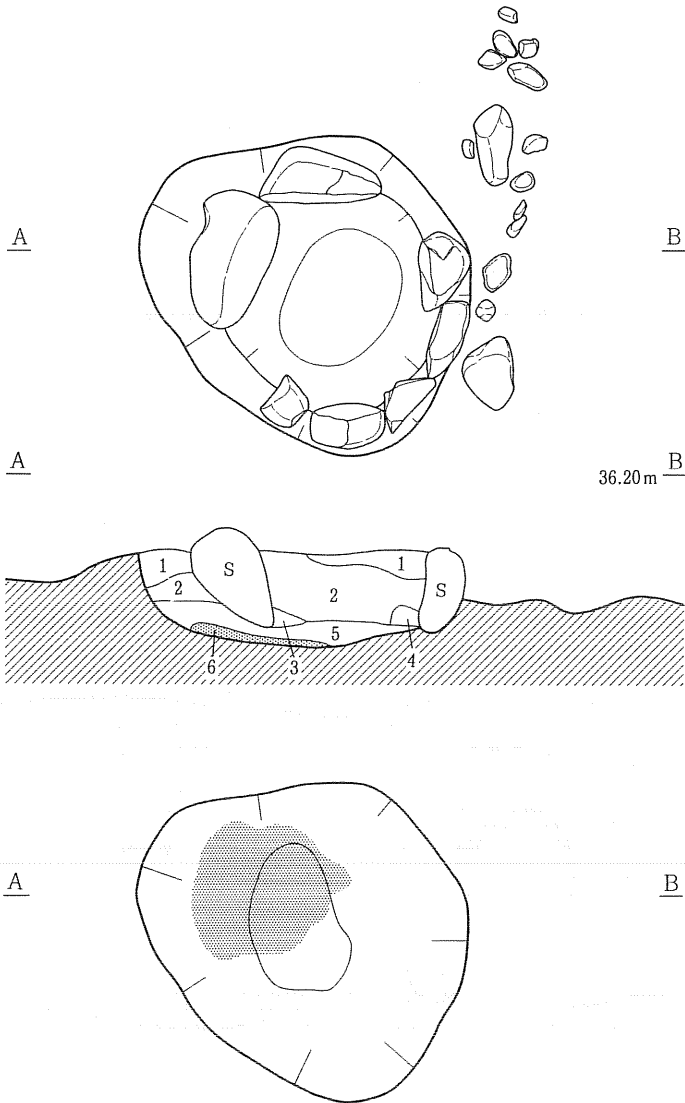


- SR31 土器埋設遺構 (A-B)
1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
  2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。
  3. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強、粘性中。炭化物少量混入。
  4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
  5. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性中。倒木痕。



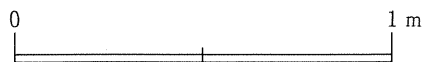
第28図 A区SR03・07・11・31・57土器埋設遺構

S X 14



S X 14 その他の遺構 (A - B)

1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱、粘性中。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。小礫(1~2mm)多量混入。
4. 褐色土 (10YR4/4) しまり強、粘性中。小礫(3~5mm)微量混入。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性中。炭化物微量混入。
6. 赤褐色土 (5YR5/6) しまり強、粘性中。焼土。



第29図 A区SX14



## S R11土器埋設遺構 (第28・50図、図版25)

L K51グリッドで検出した。第50図138の深鉢形土器の胴部が長軸0.33m、短軸0.32m、深さ0.12mの掘り方内に埋め込まれていた。土器に、間に1条の沈線を加えた懸垂区画文を施し、区画内にL R縄文を縦位回転施文して充填している。

## S R31土器埋設遺構 (第28・51図、図版25・34)

M B51グリッドで検出した。おそらく樹根によると判断される古い時期の攪乱坑を掘り込んで、第51図139(図版34-3)の深鉢形土器の胴部が、長軸0.58m、短軸0.47m、深さ0.33mの掘り方内に埋め込まれていた。土器は緩い膨らみをもつ胴部で、全面に0段多条のL R縄文が縦位回転施文されている。

## S R57土器埋設遺構 (第28・51図、図版25・34)

L N52・L O52グリッドで検出した。第51図140(図版34-4)の深鉢形土器の胴部が、長軸0.34m、短軸0.31m、深さ0.16mの掘り方内に埋め込まれていた。土器は緩い膨らみをもって下りる深鉢形土器の胴下半部で、全面にR L縄文が縦位回転施文されている。

## (6) その他の遺構

## S X14 (第29・51図、図版20)

M M50グリッドで検出した。長軸0.92m、短軸0.74m、深さ0.25mの掘り方を6点の礫で囲んでいる遺構である。掘り方下部には径0.40m前後の焼土面が形成されていた。石組の一端から北側に向かって10数点の小礫が間隔を開けて配されていた。第51図146は、掘り方内から出土した深鉢形土器の胴部破片で、L R縄文が縦位回転施文されている。

## 2 B区の検出遺構と遺物

## (1) 竪穴住居跡

## S I 02竪穴住居跡 (第67・68図、図版26・37)

《位置と確認》 J O53・54、J P53・54グリッドに位置する。

《規模と平面形》 長軸4.30m、短軸3.78mの楕円形を呈する。

《壁》 緩い傾斜をもって立ち上がる。北側で0.38mの高さがあった。

《柱穴》 径0.16~0.25mの柱穴を床面で9基、炉内に1基確認した。

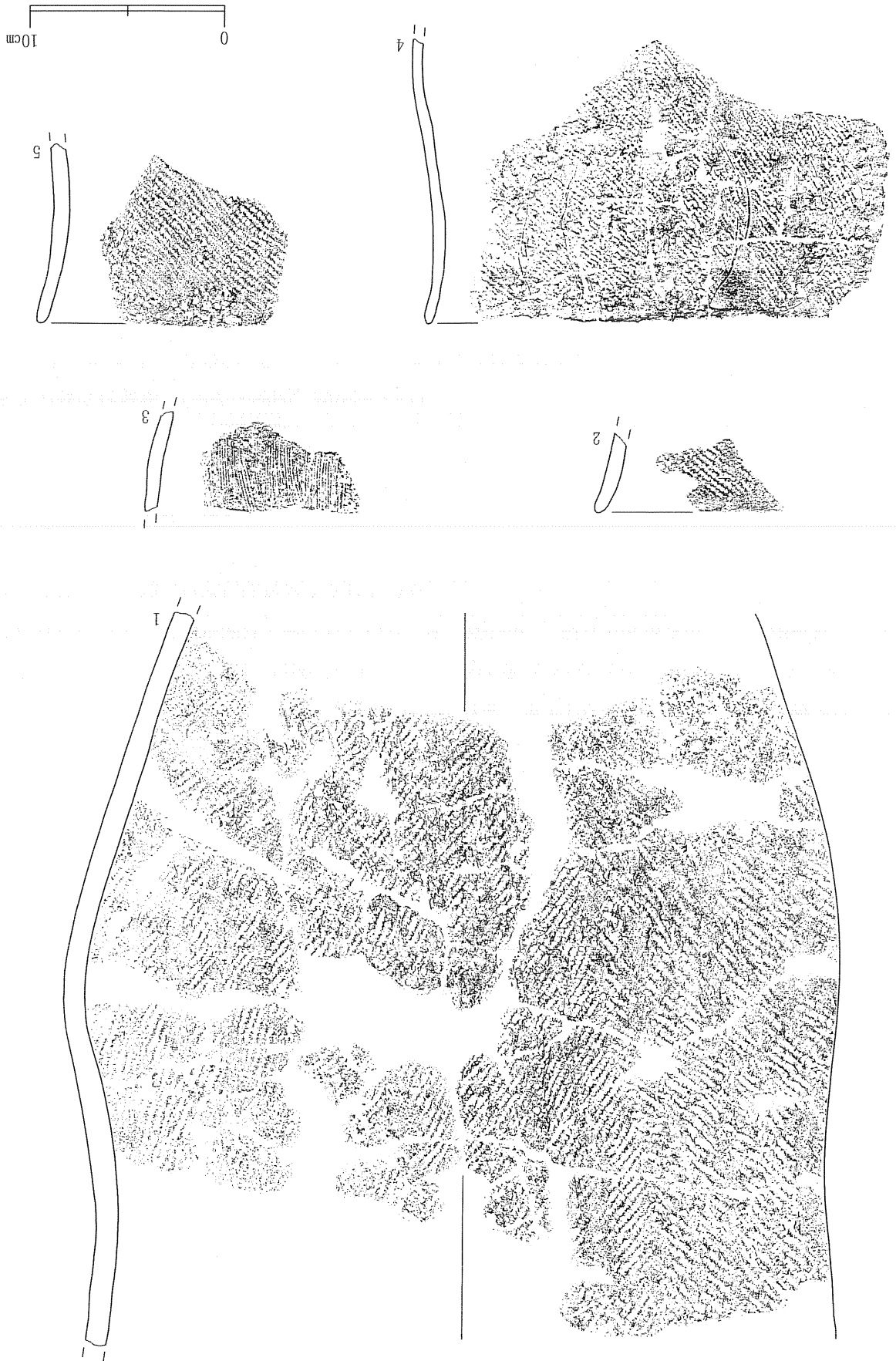
《床面》 全体に平坦で固く締まっており、特に炉の周囲は固さを増す。

《炉》 土器埋設部と燃焼部からなる複式炉と判断した。炉の西壁に略楕円形の焼土をもった掘り込みがあり、その西側に埋設土器を確認した。規模は軸長1.69m、最大幅1.09mで、軸線方向はN-69°-Wである。

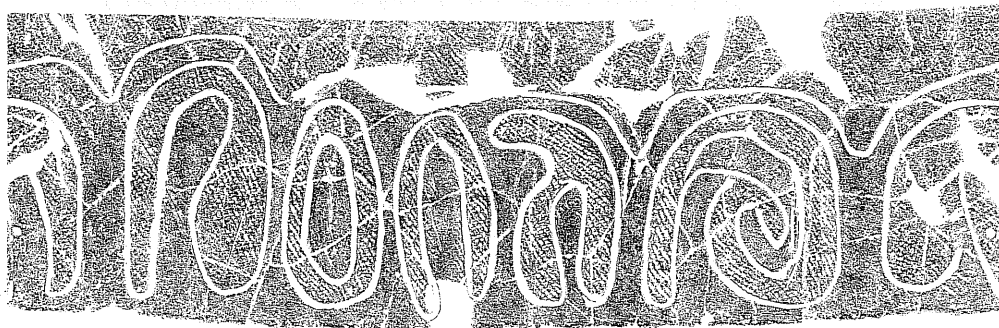
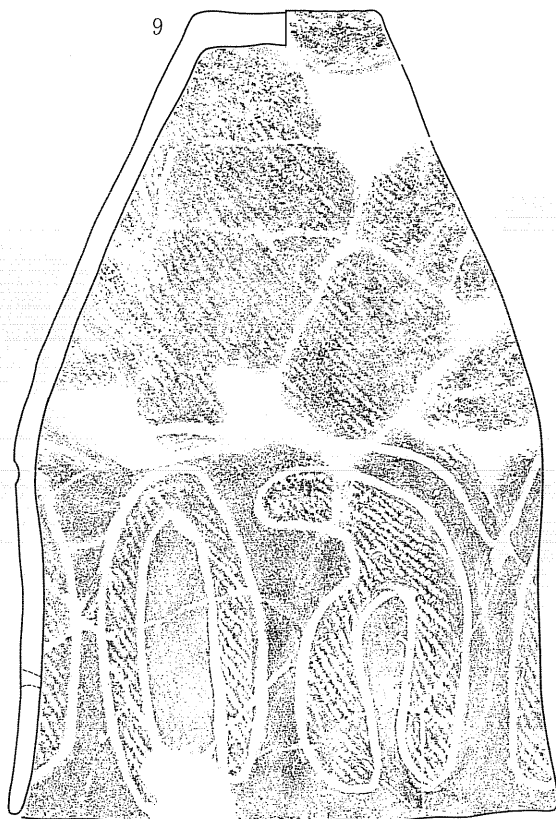
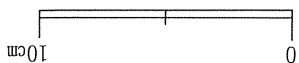
〈土器埋設部〉 深鉢形土器の胴下半部~底部(第68図9、図版37-1)が正位に埋められていた。深さは0.15mである。

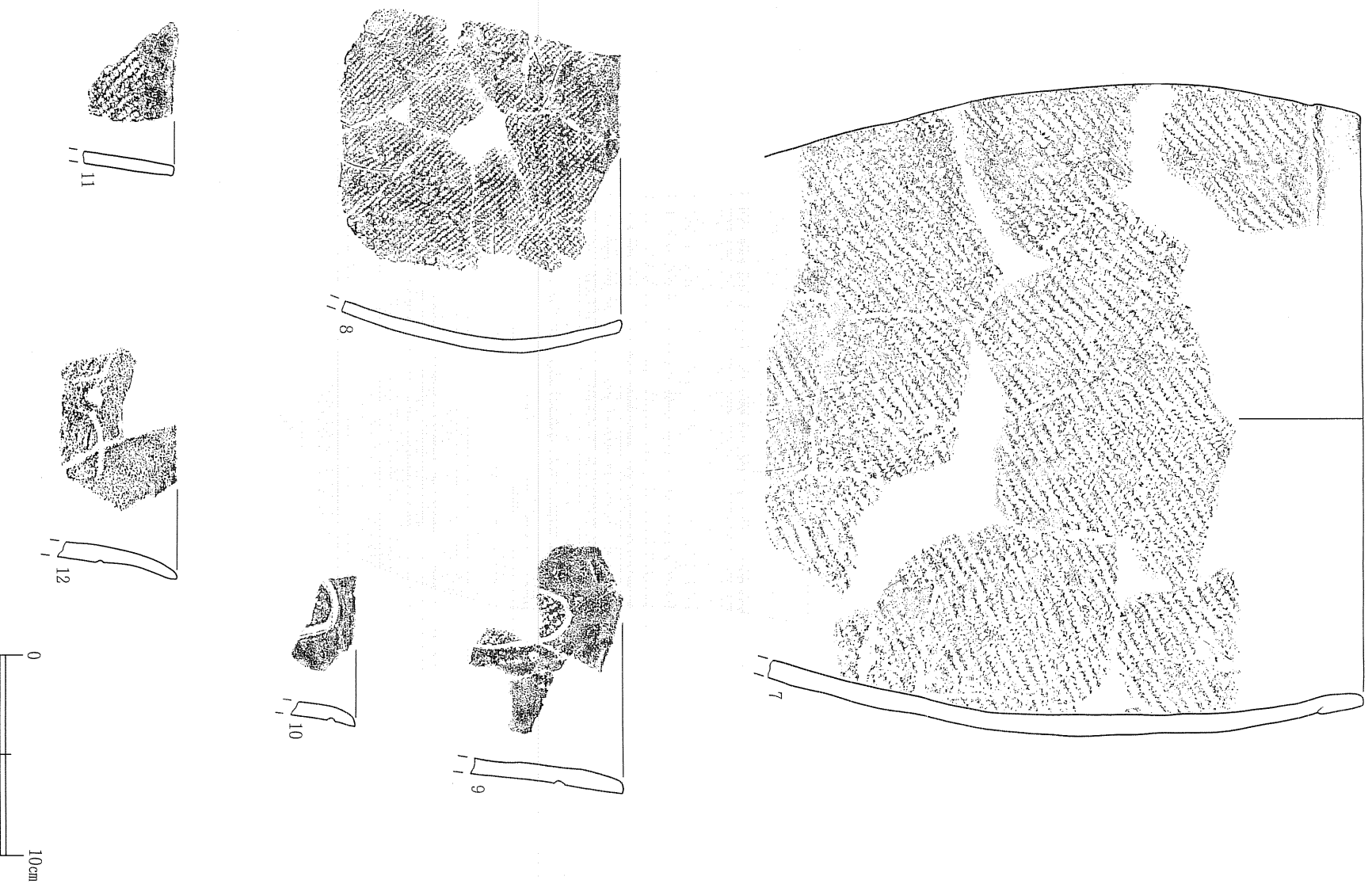
〈燃焼部〉 土器埋設部に接する部分に炭化物が集中して見られた。また、掘り込みの北壁に接して底面の焼土化した部分が認められた。深さは0.12mである。

第30圖 A区遺構内出土土器 (1)

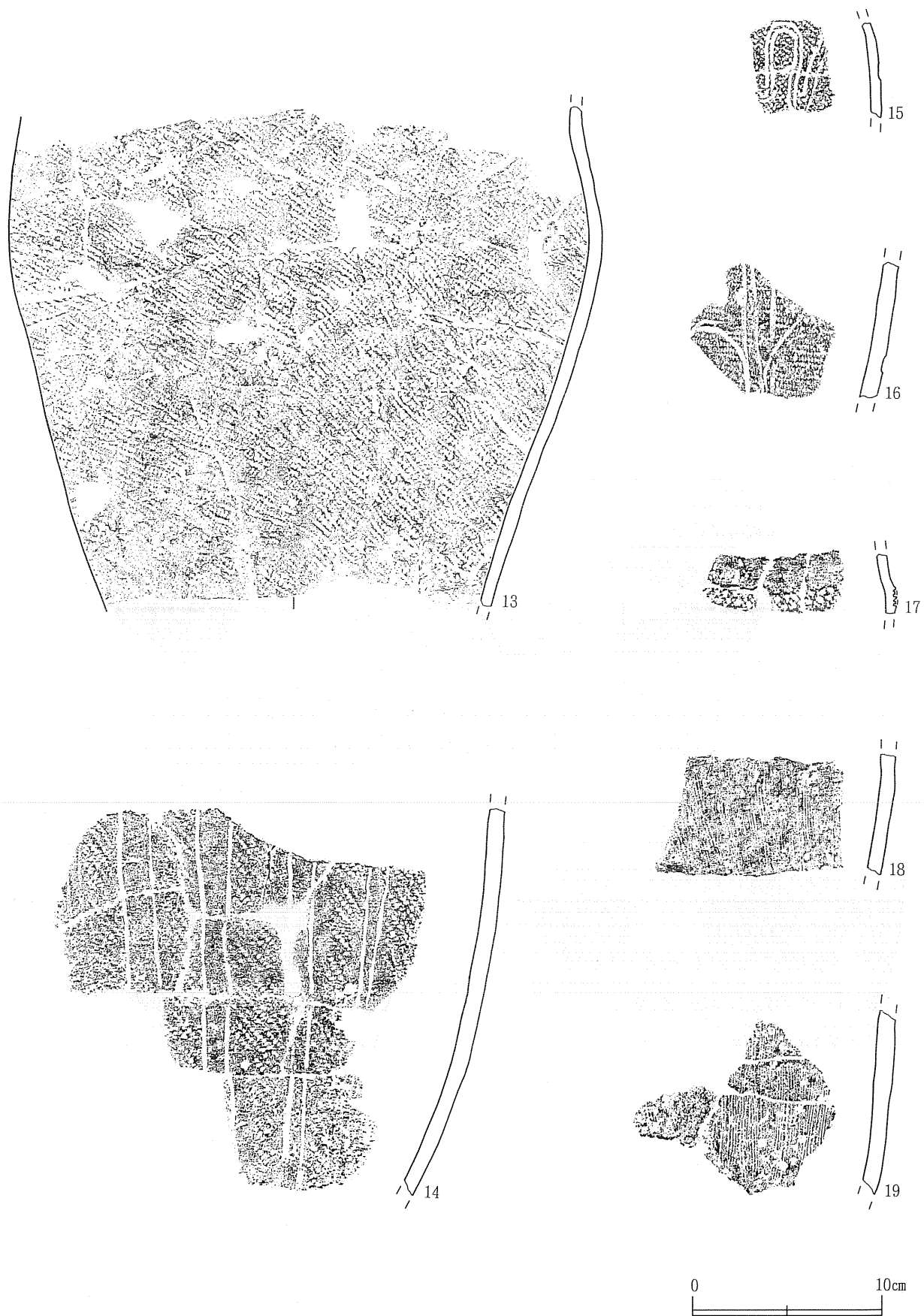


第31図 A区遺構内出土土器(2)



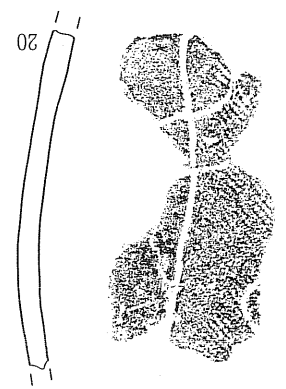
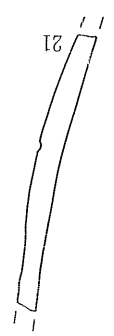
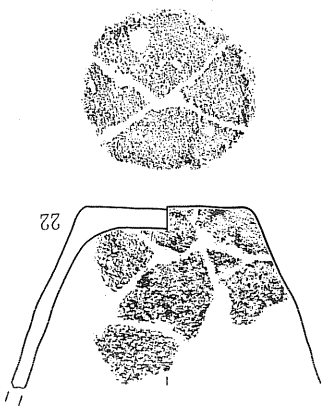
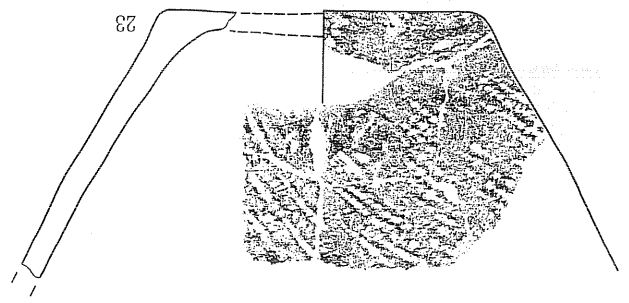
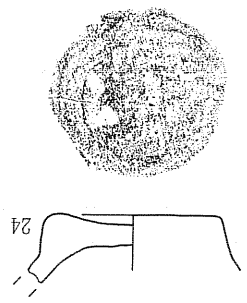
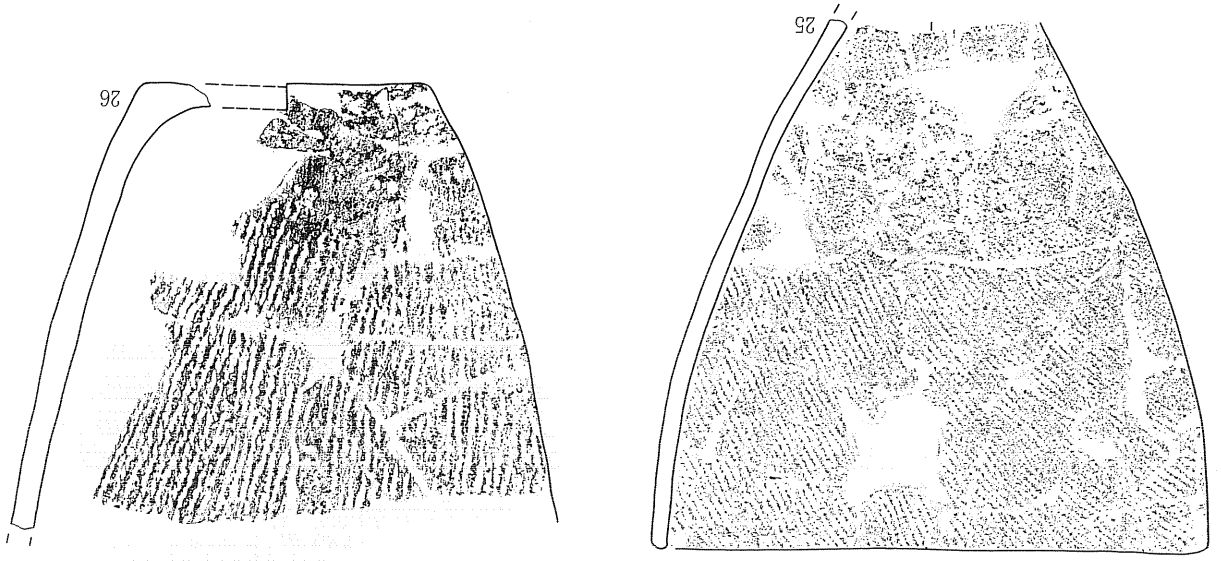
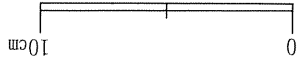


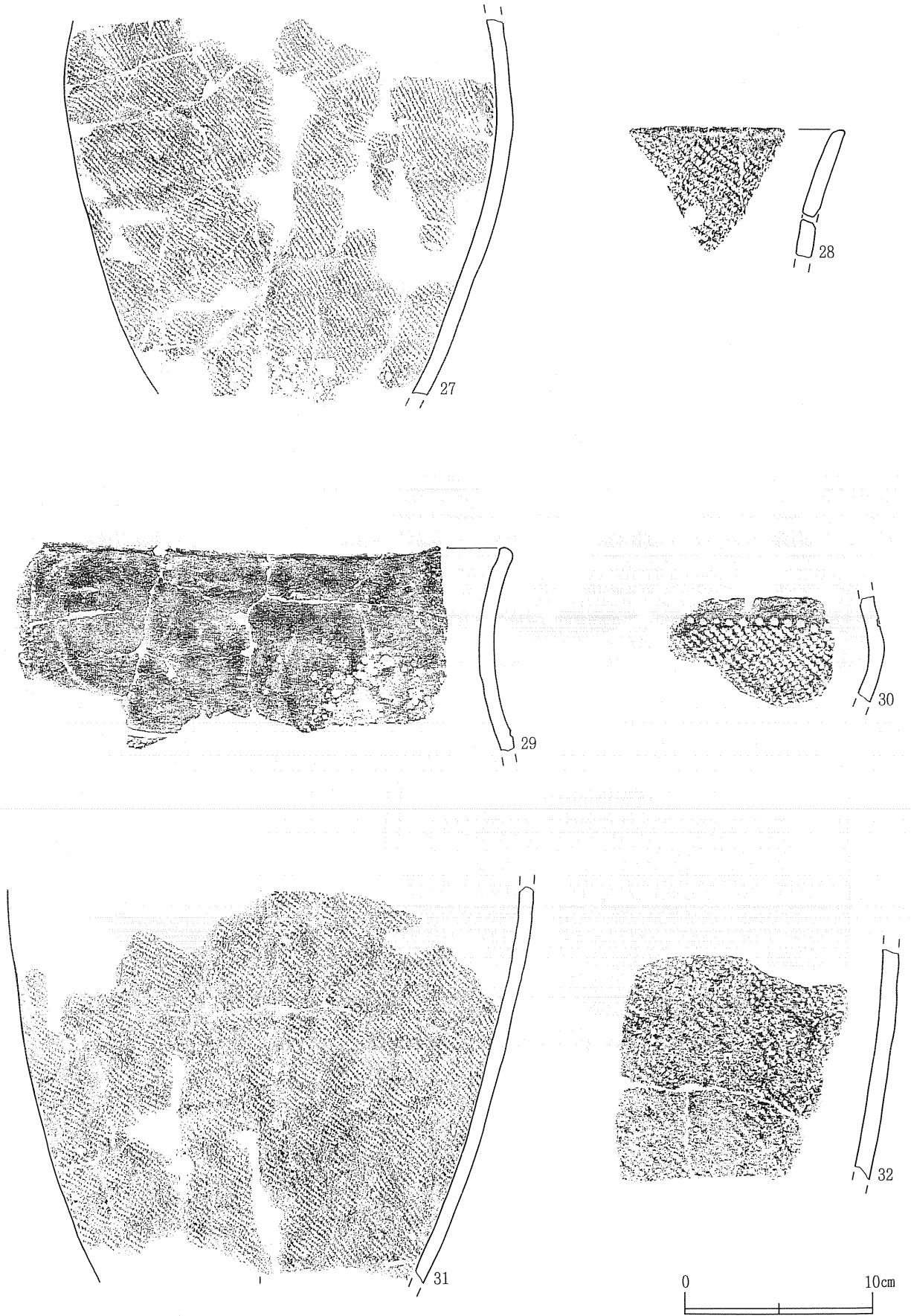
第32図 A区遺構内出土土器(3)



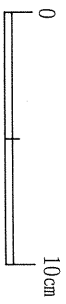
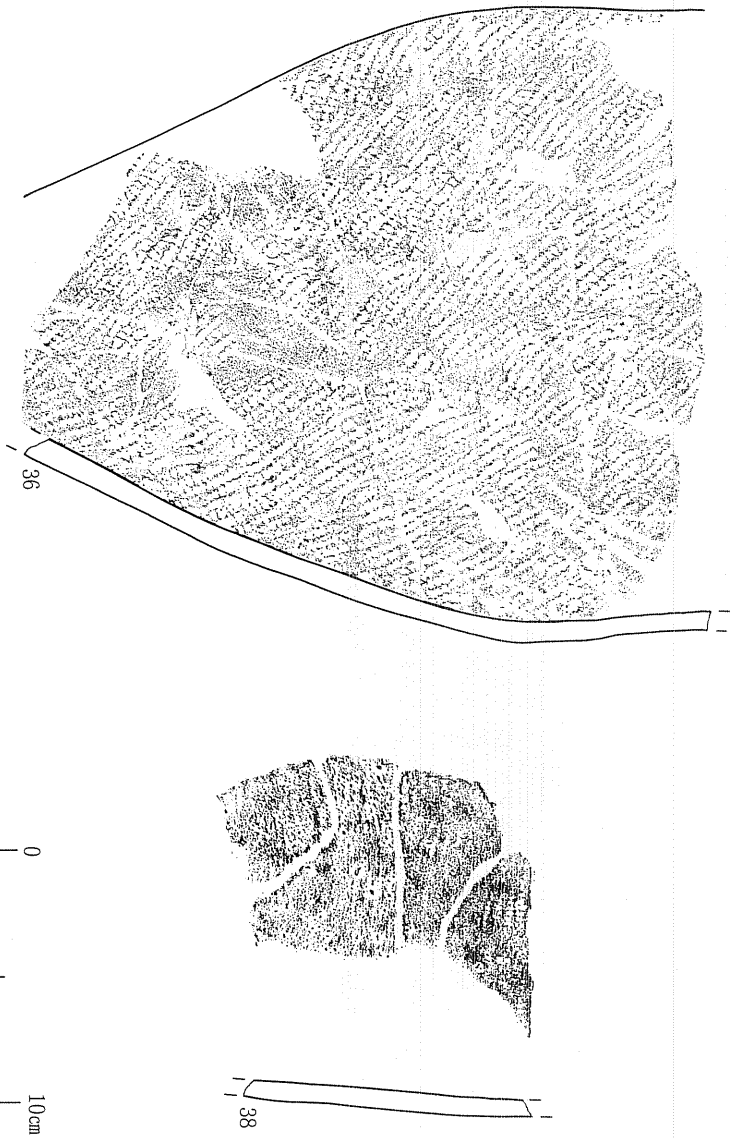
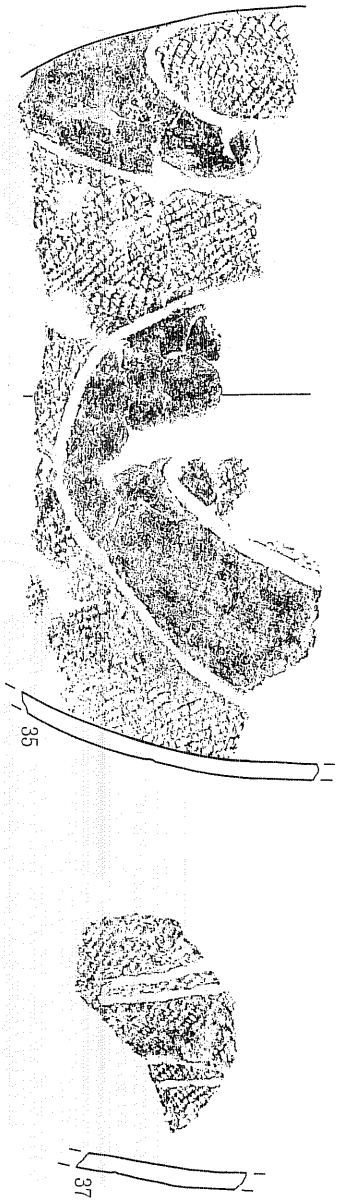
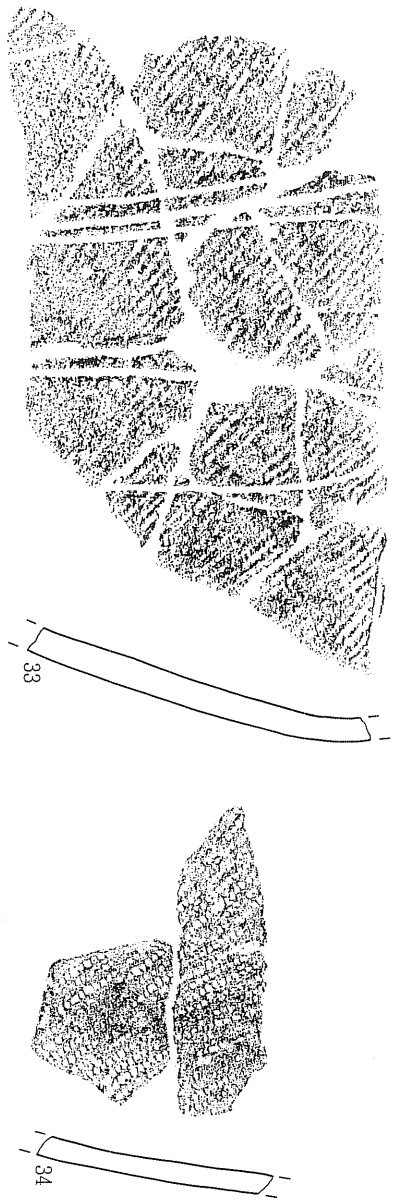
第33図 A区遺構内出土土器(4)

第34图 A区遺構内出土土器(5)



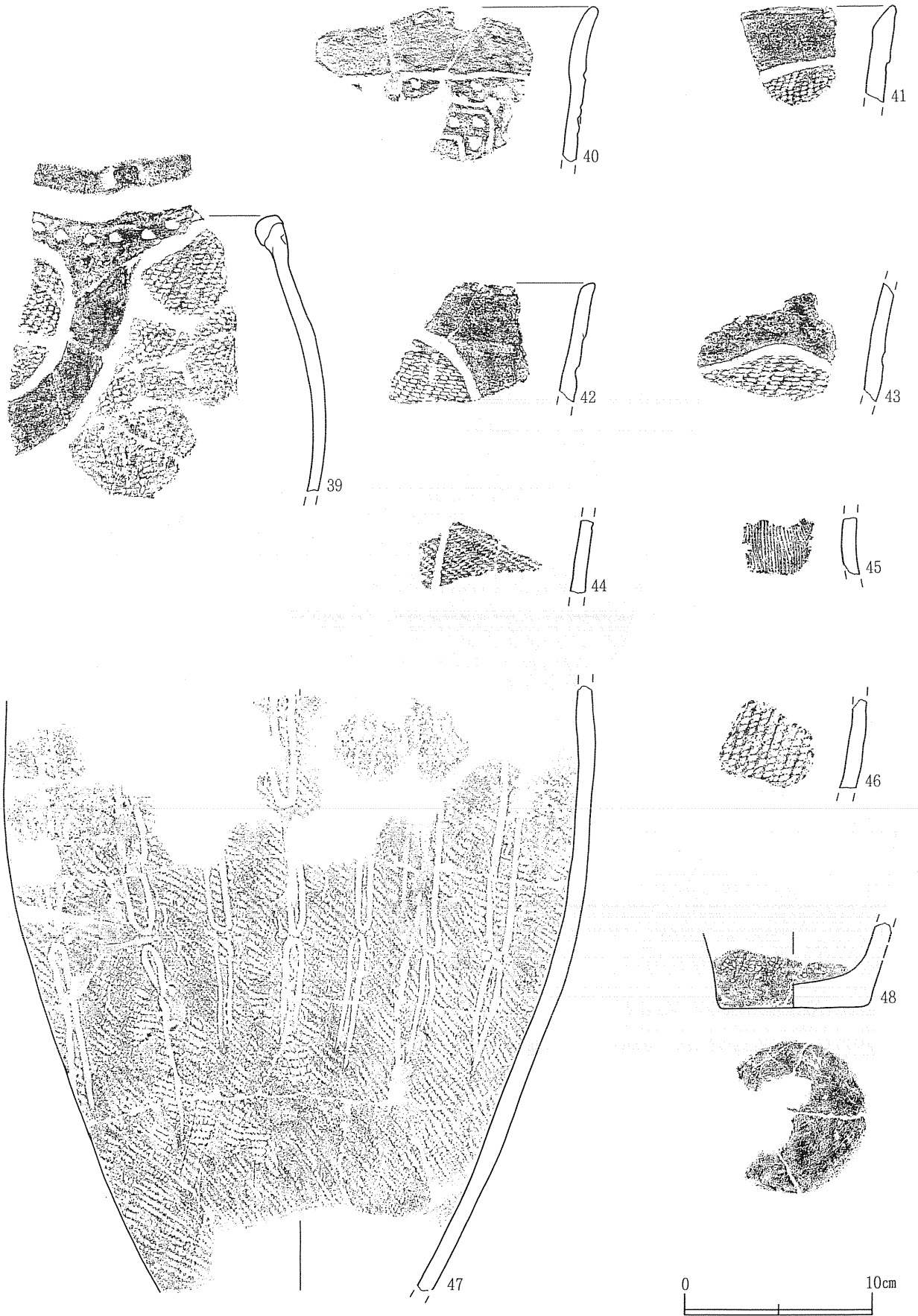


第35図 A区遺構内出土土器(6)

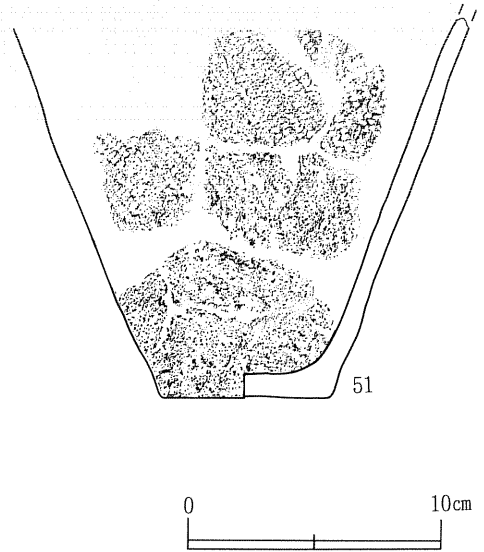
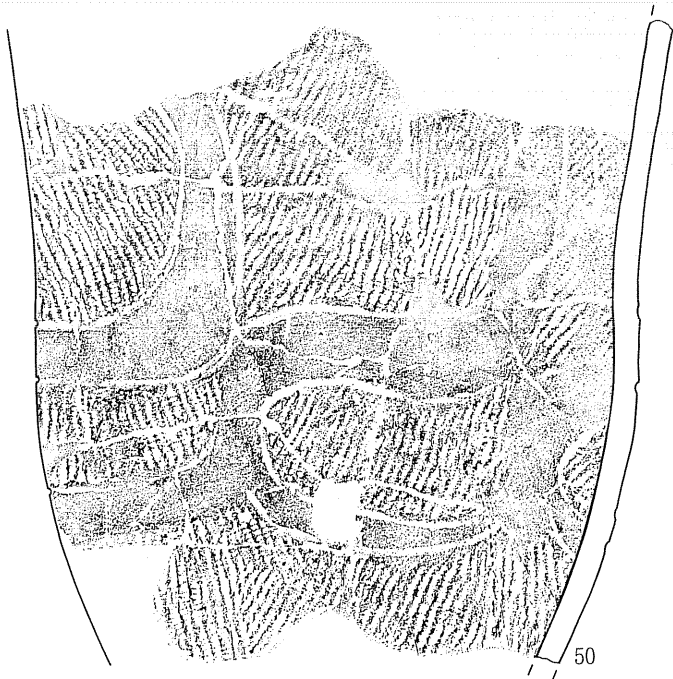
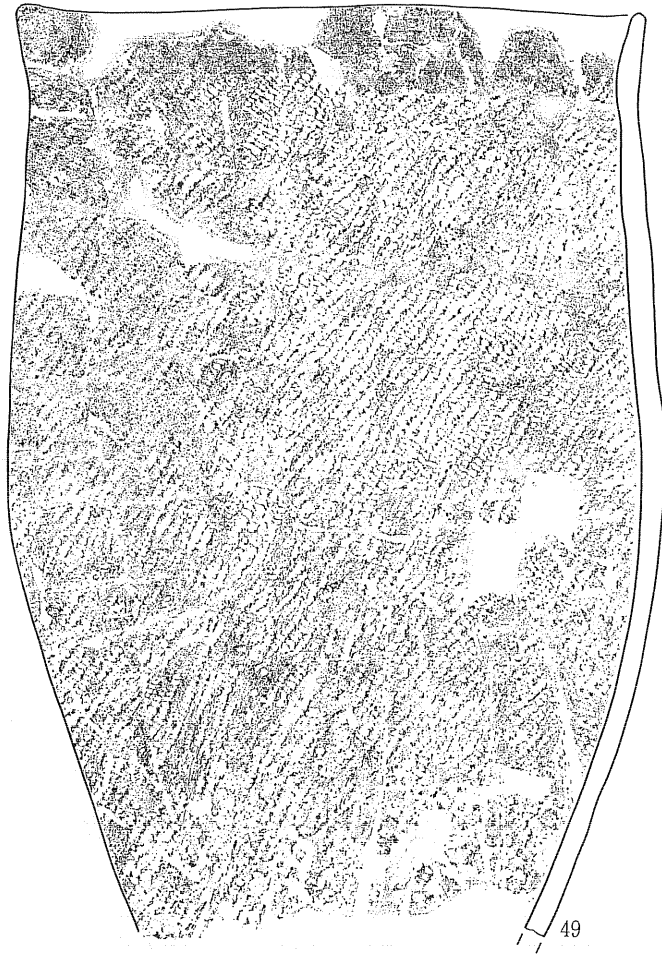


第36図 A区遺構内出土土器(7)

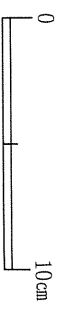
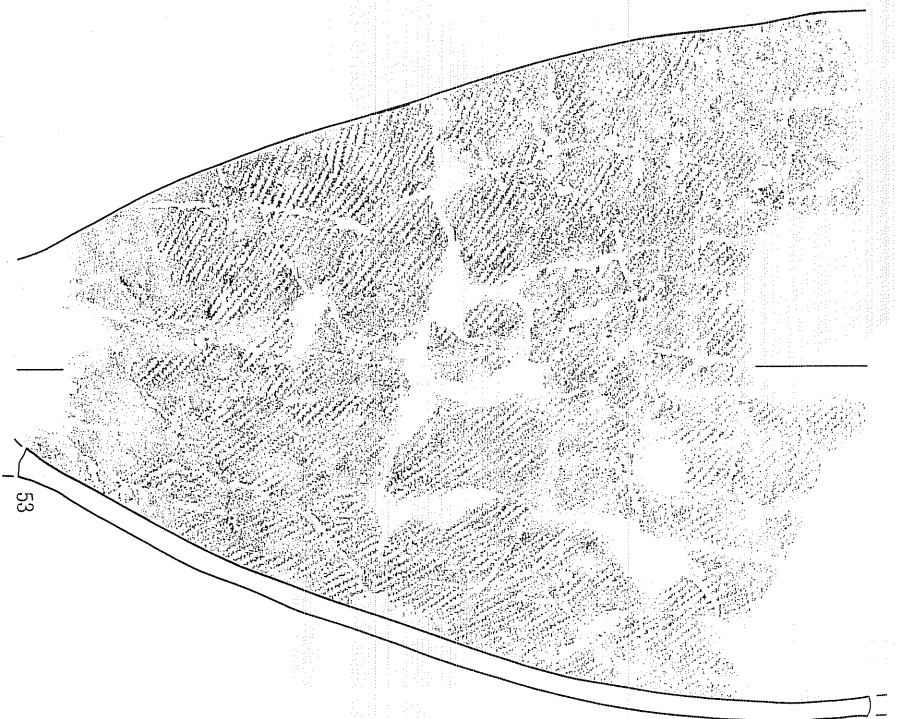




第37図 A区遺構内出土土器(8)

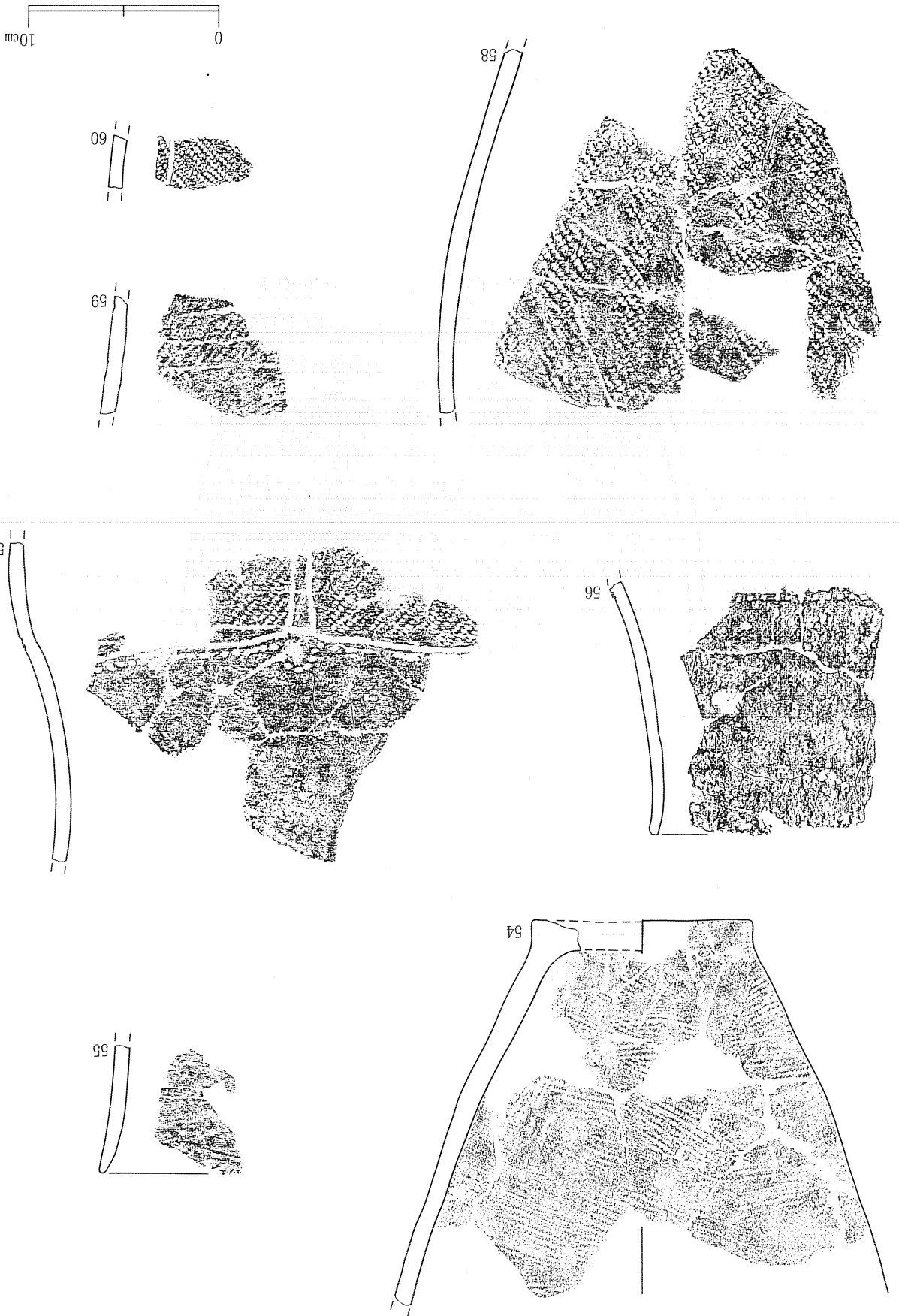


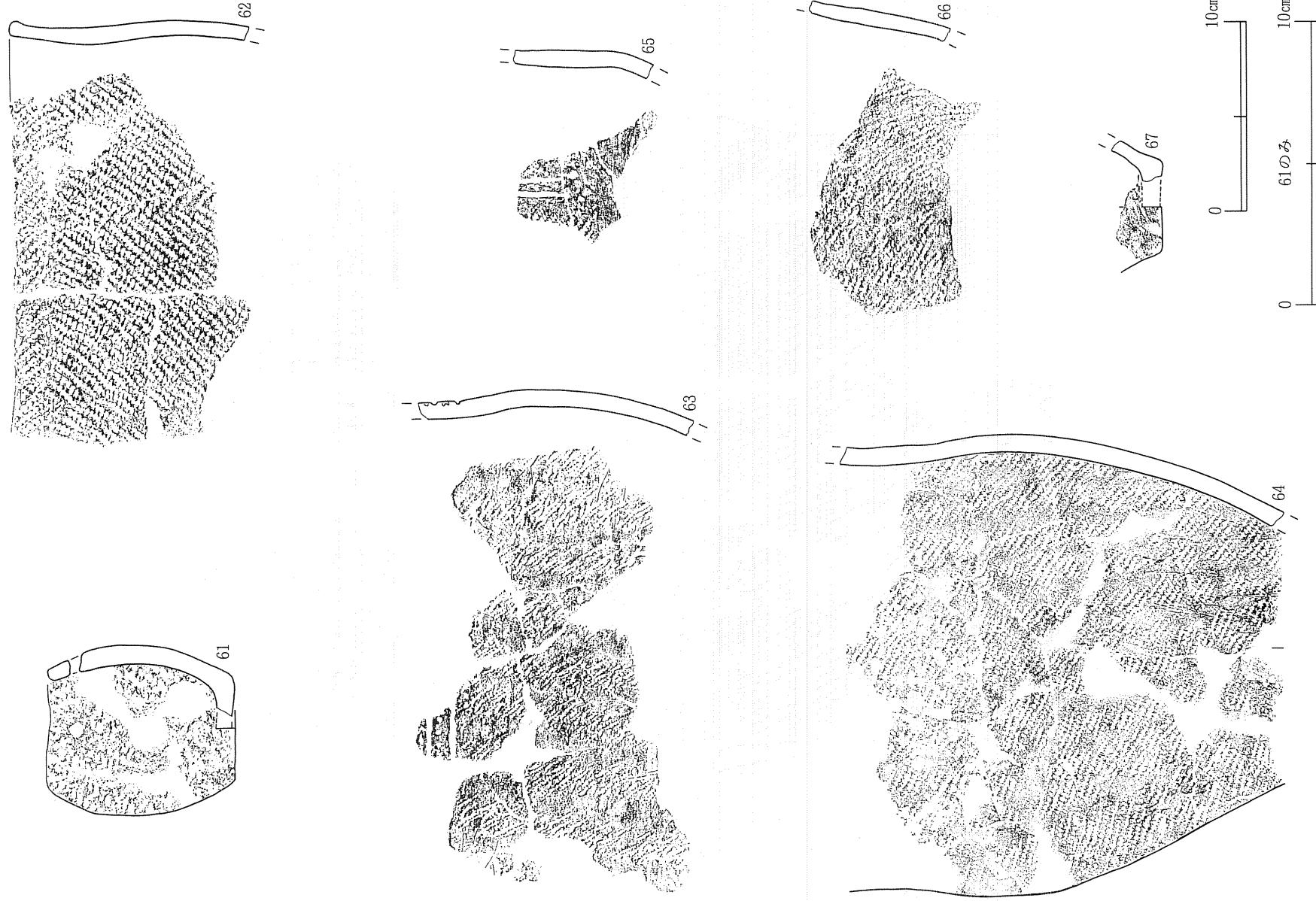
第38図 A区遺構内出土土器(9)



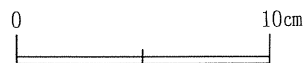
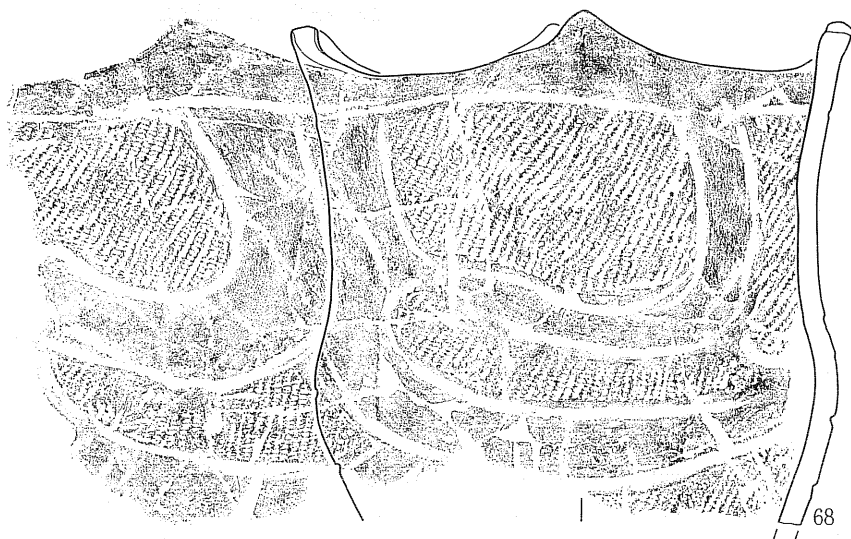
第39図 A区遺構内出土土器 (10)

第40図 A区遺構内出土土器(11)

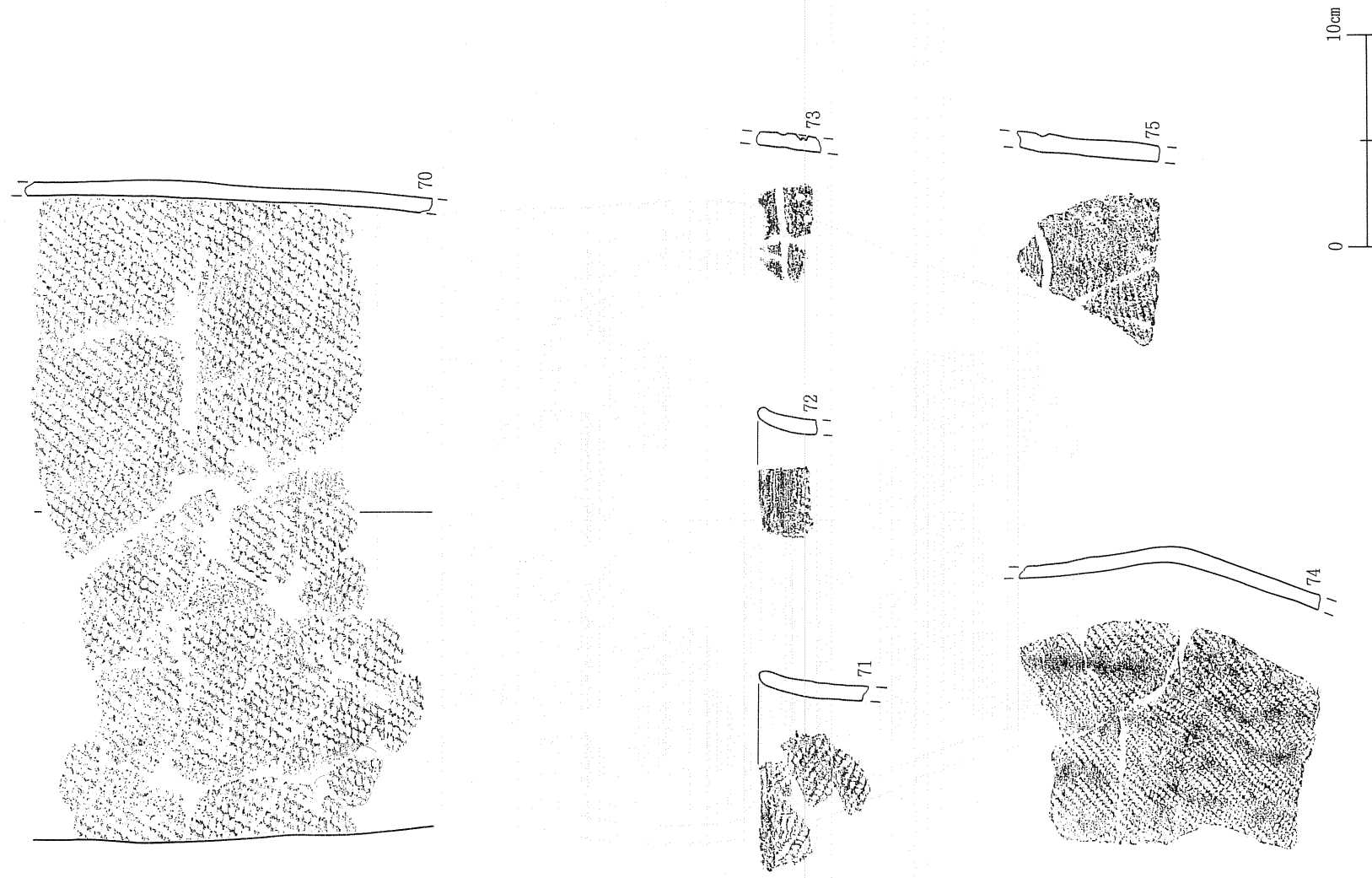




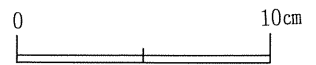
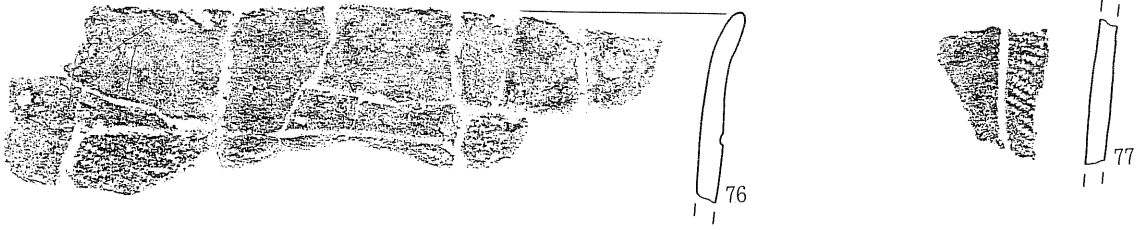
第41図 A区遺構内出土土器(12)



第42図 A区遺構内出土土器 (13)

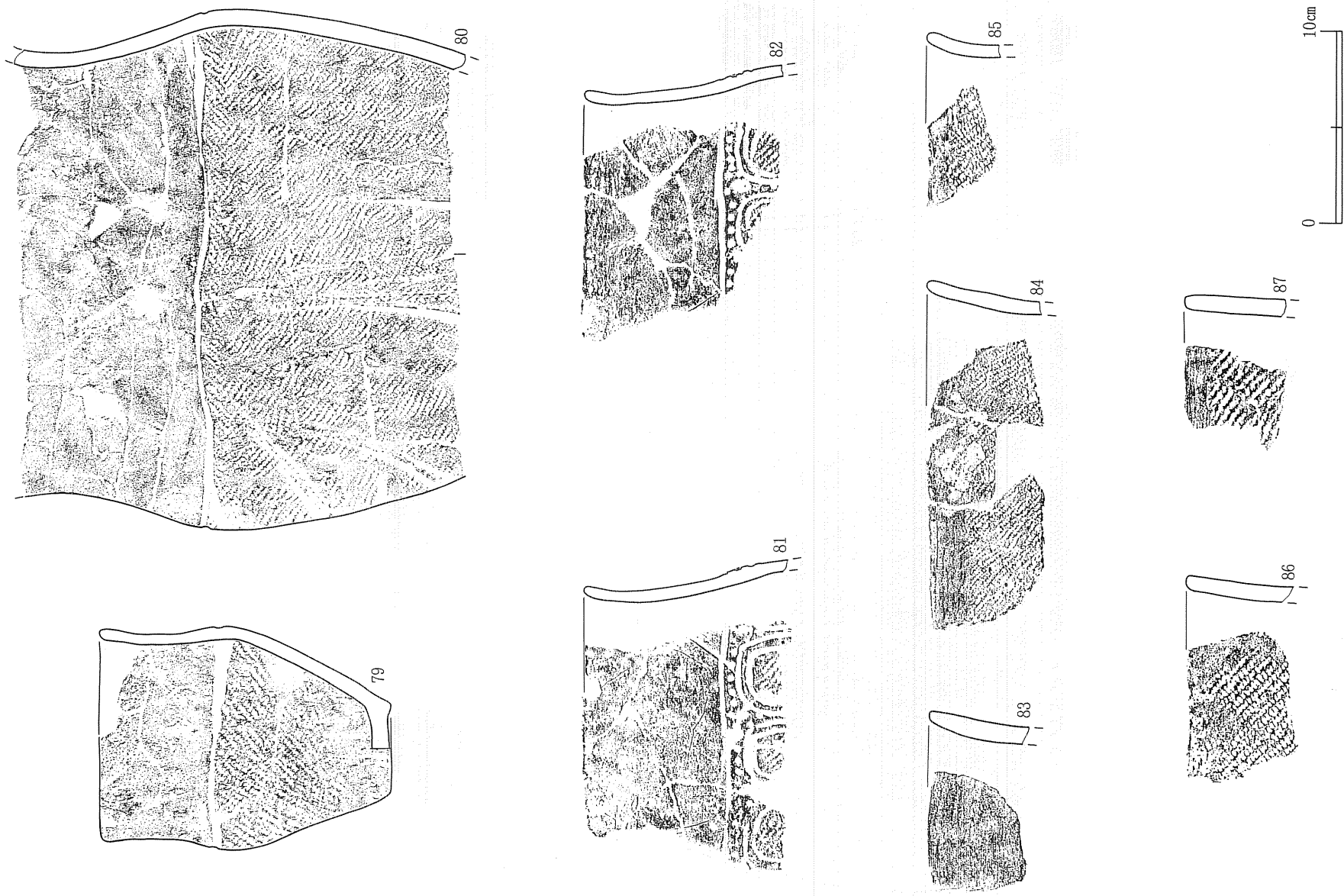


第43図 A区遺構内出土土器(14)

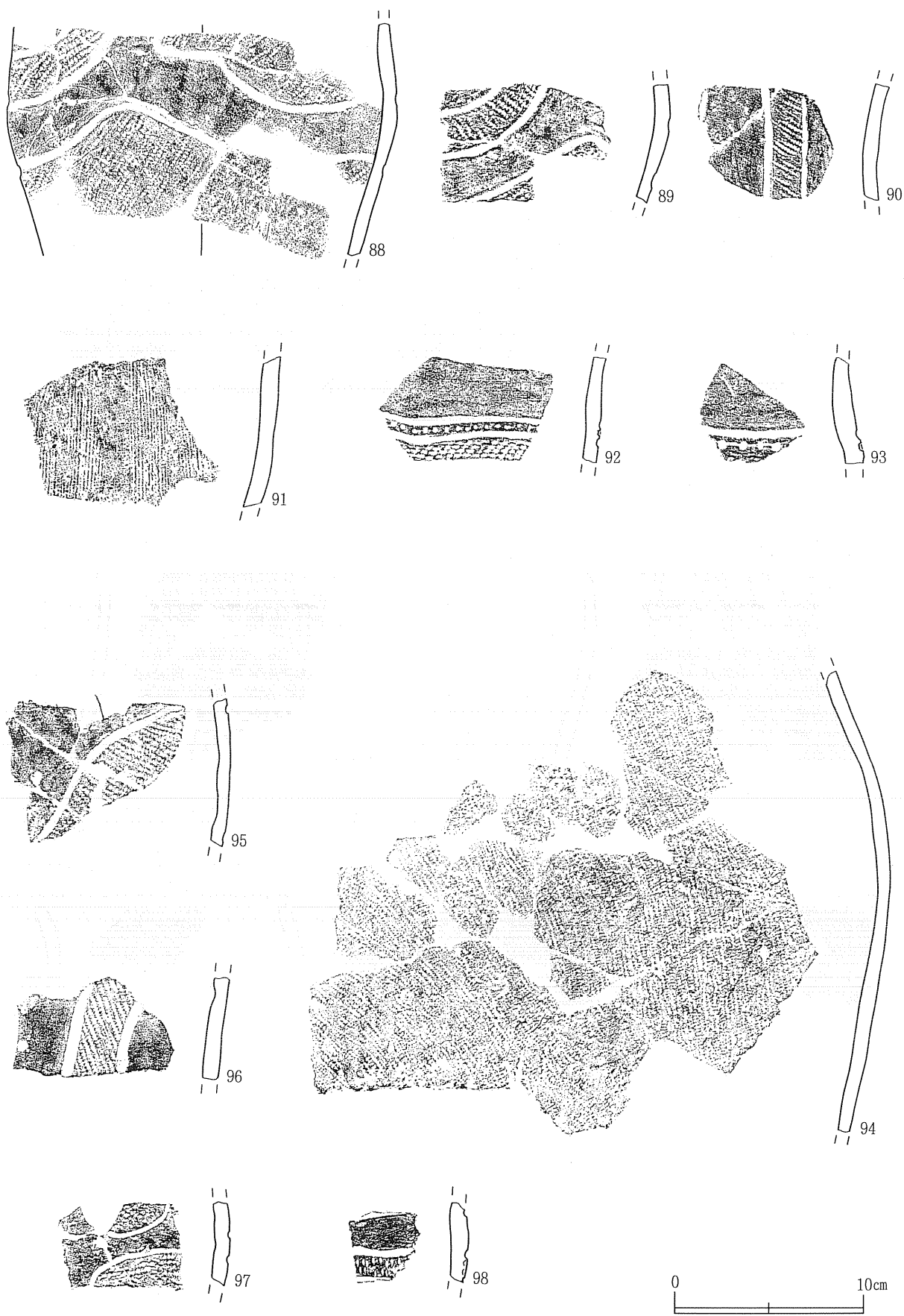


第44図 A区遺構内出土土器(15)

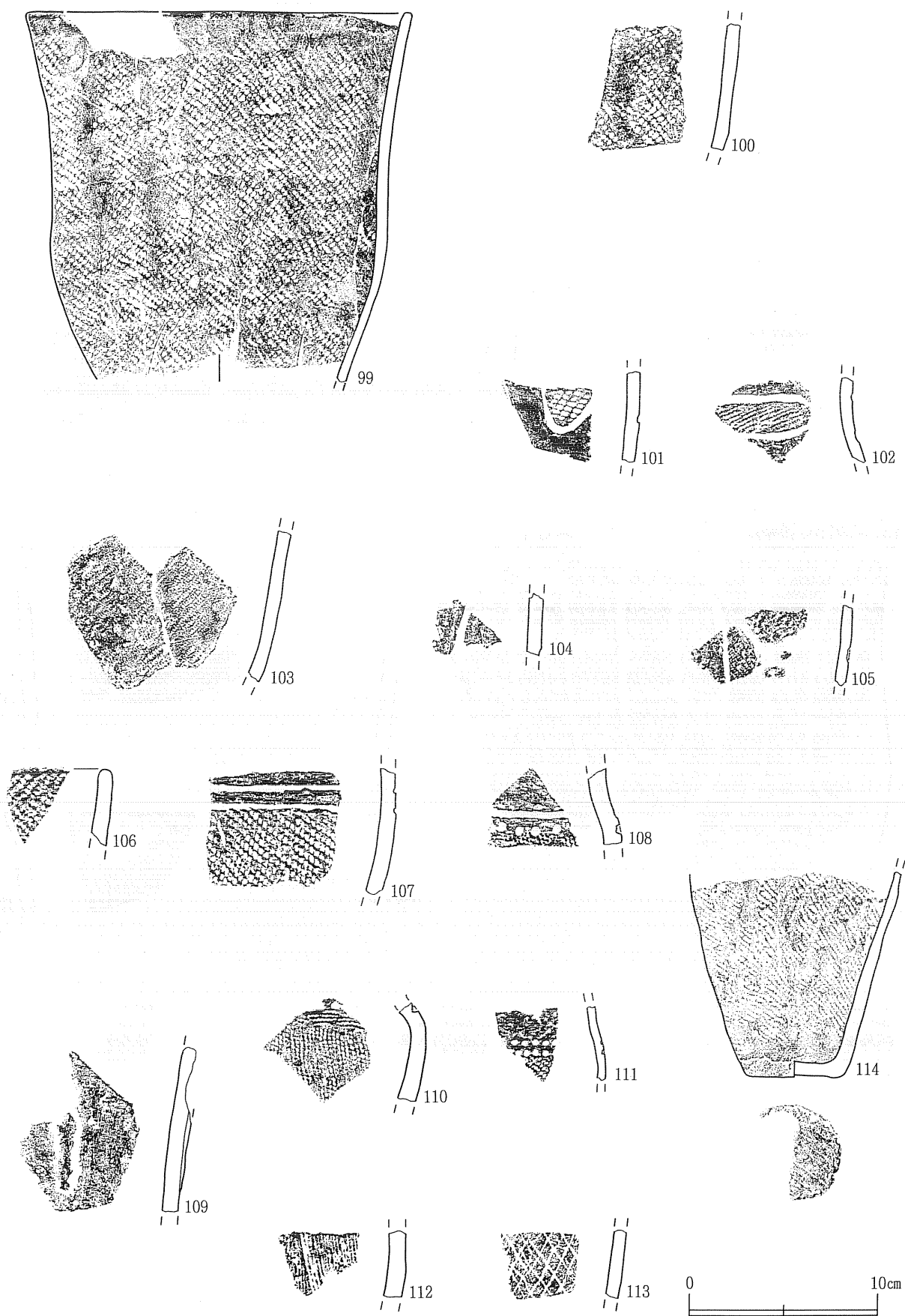




第45図 A区遺構内出土土器(16)

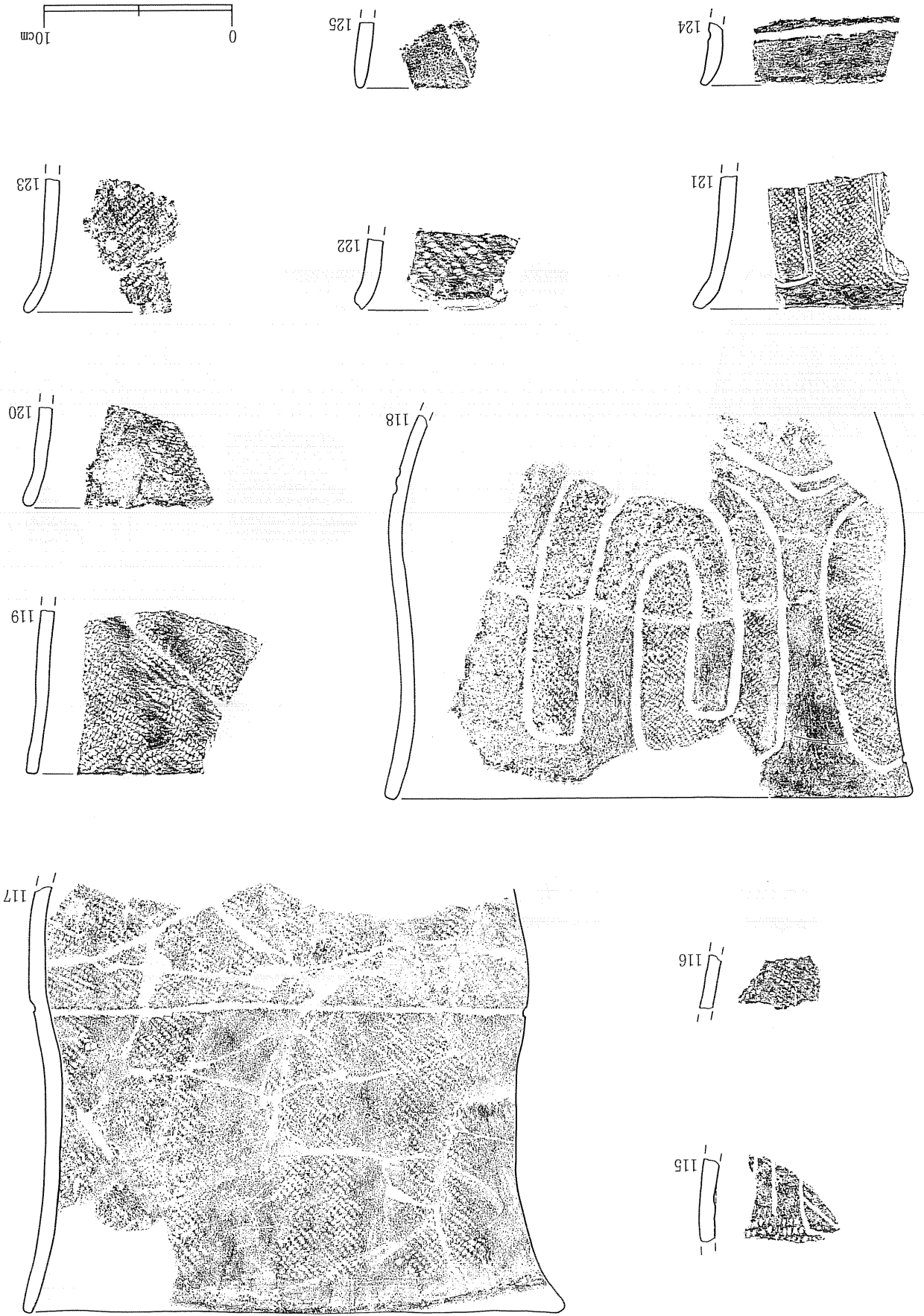


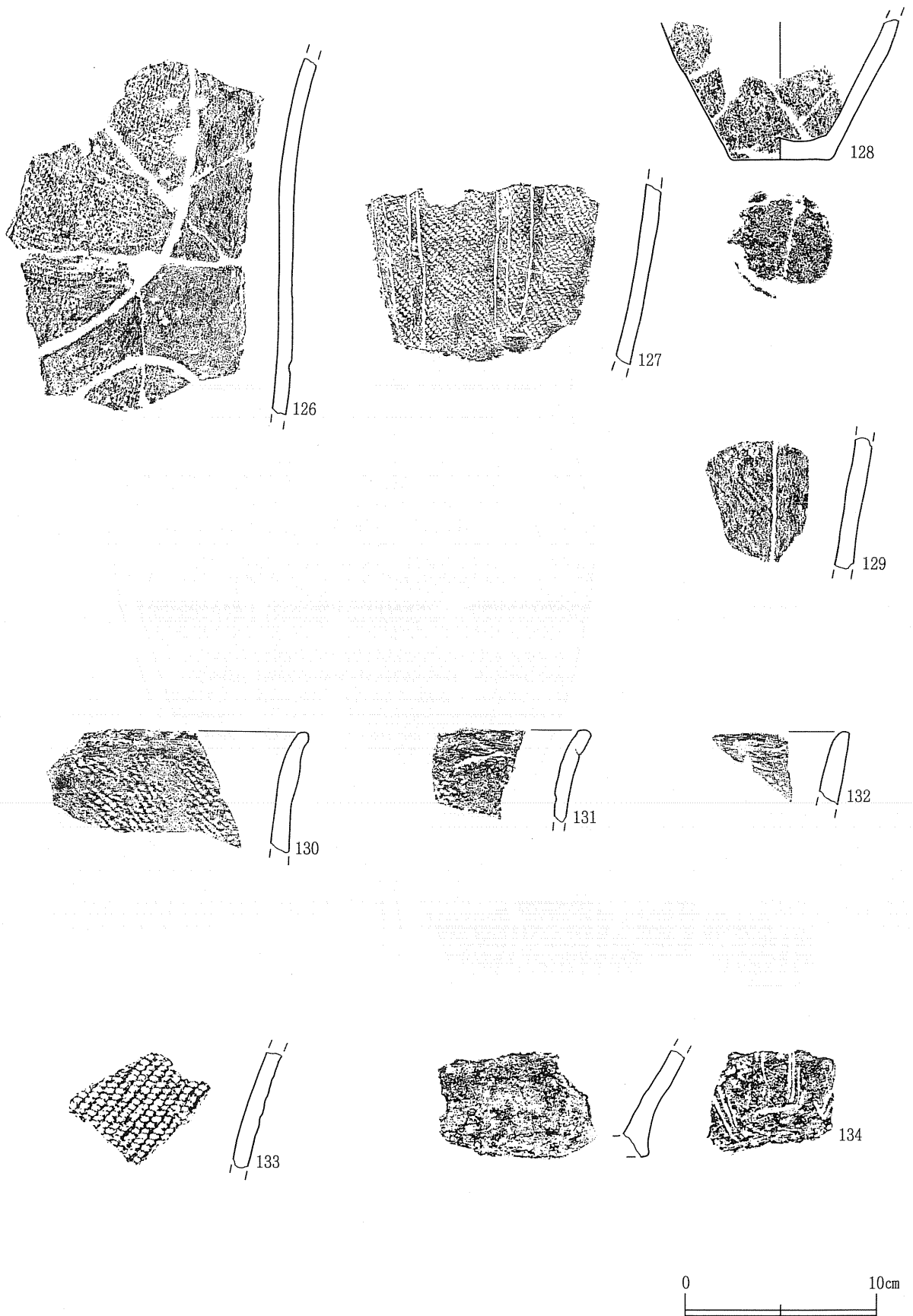
第46图 A区遺構内出土土器 (17)



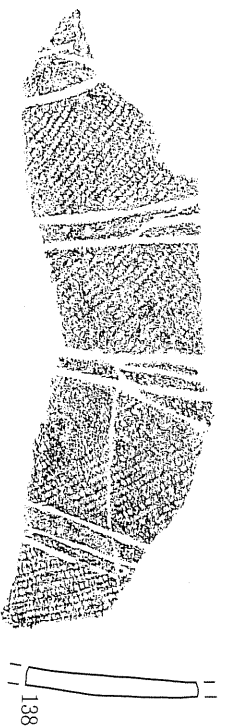
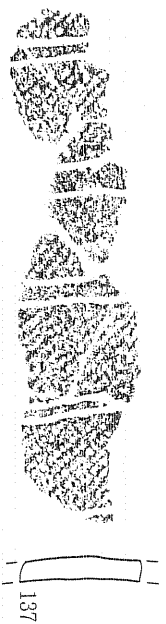
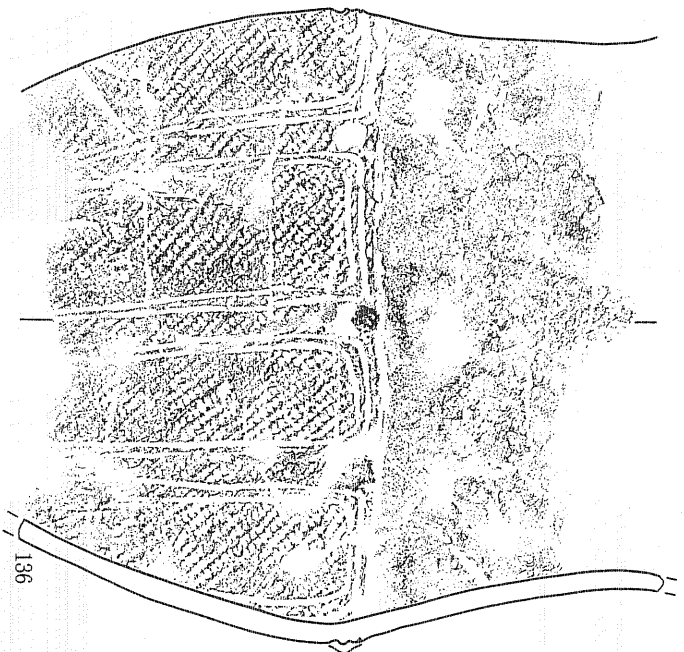
第47図 A区遺構内出土土器 (18)

第48図 A区遺構内出土土器 (19)

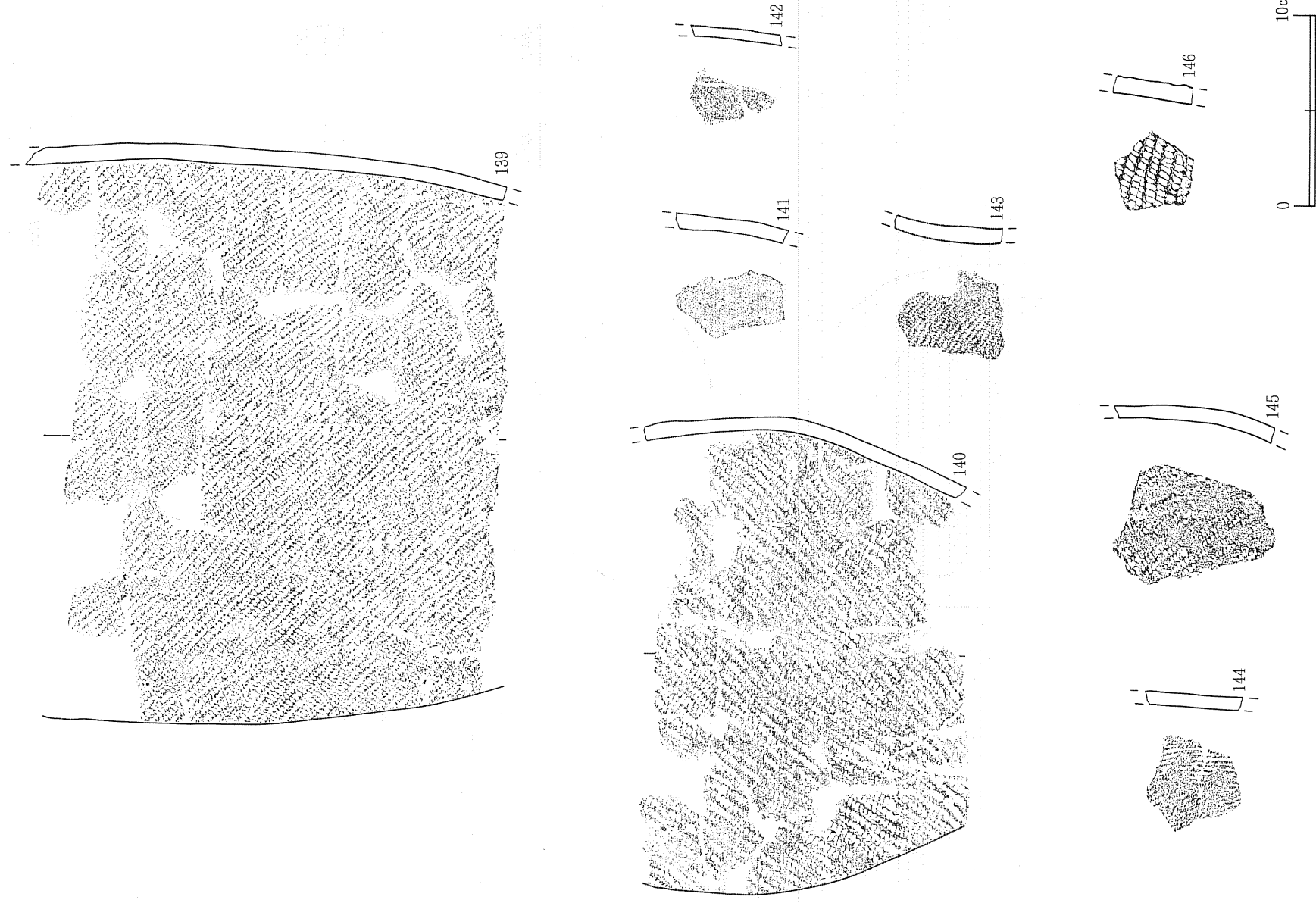




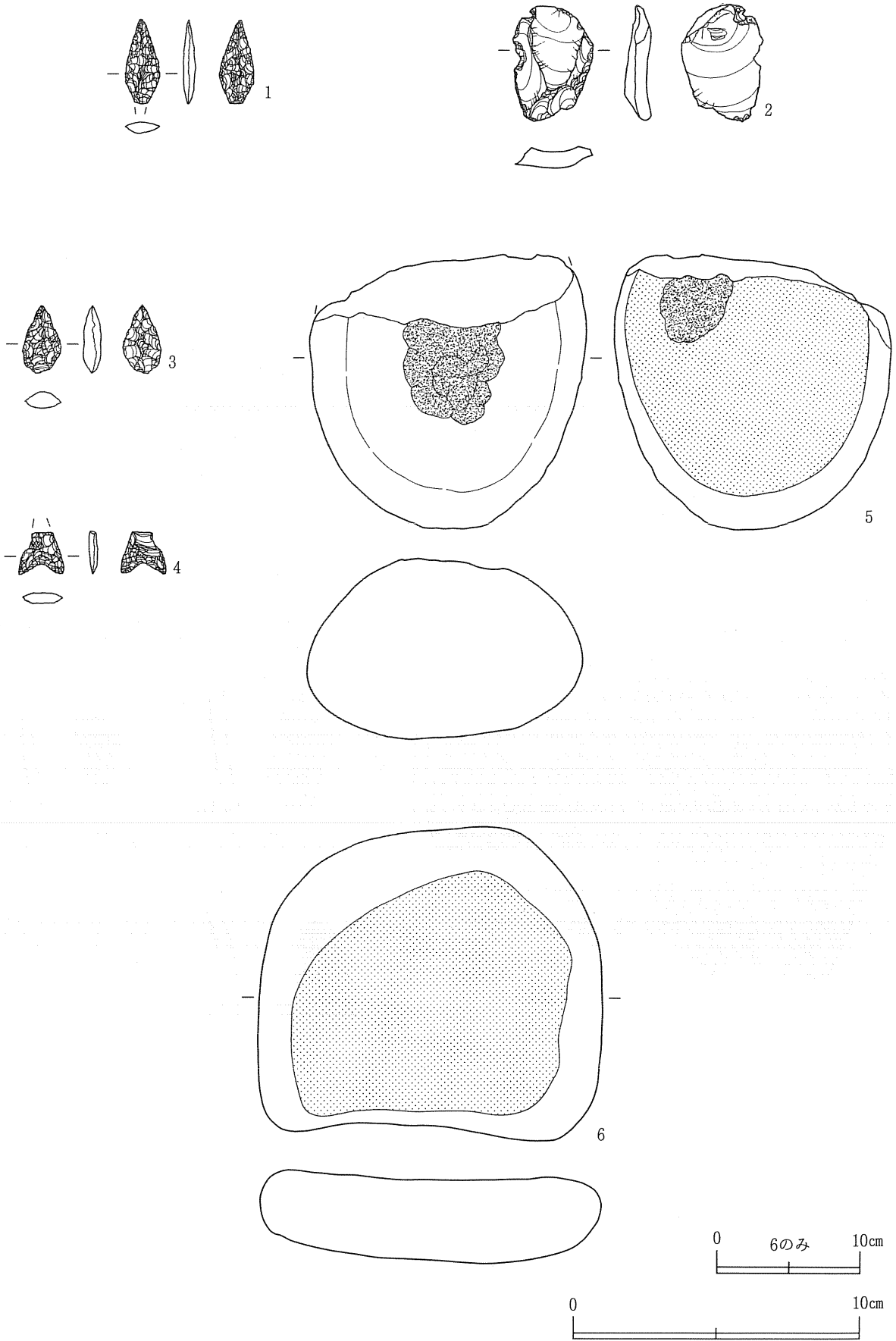
第49図 A区遺構内出土土器(20)



第50図 A区遺構内出土土器 (21)

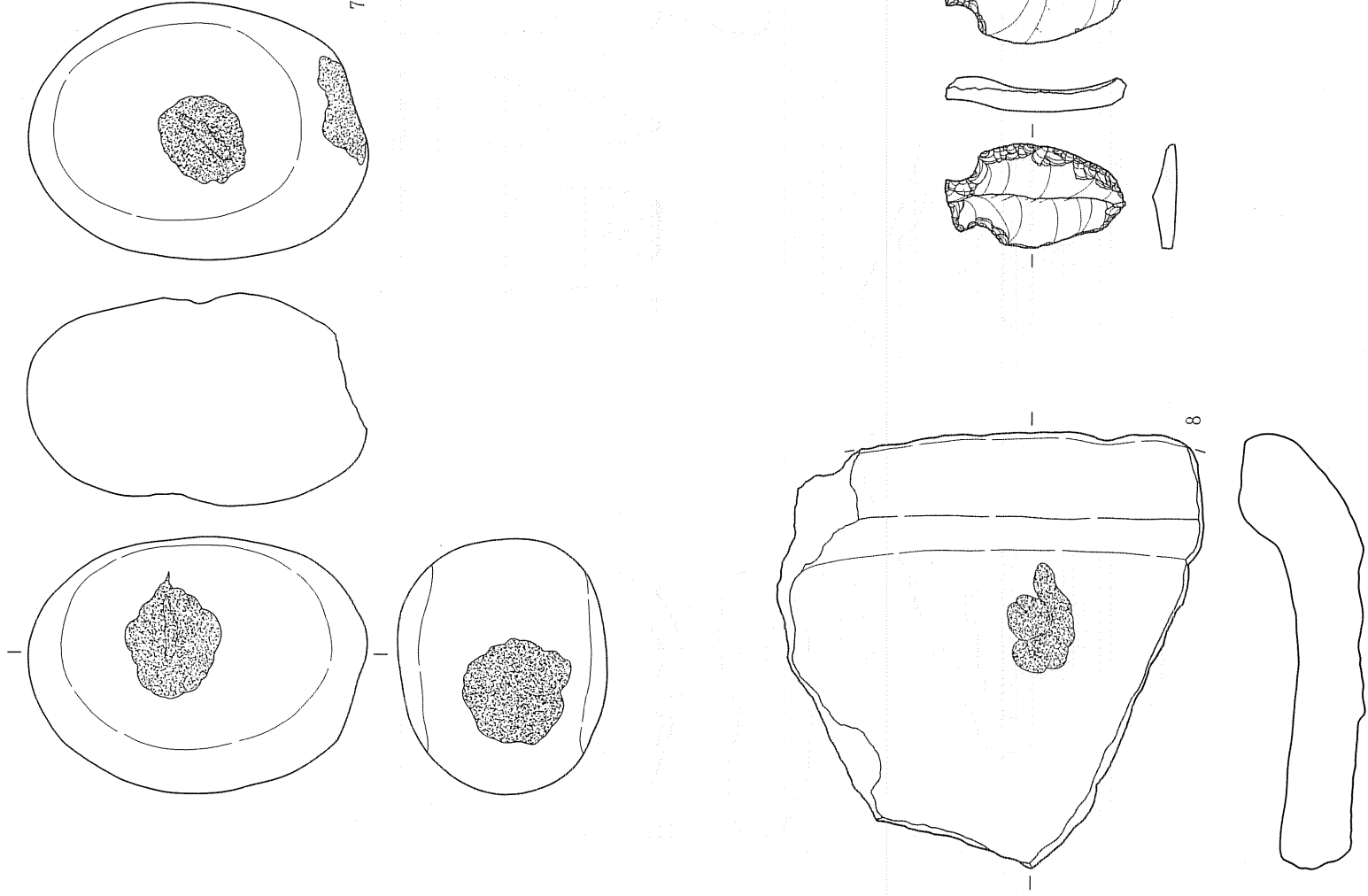


第51図 A区遺構内出土土器(22)

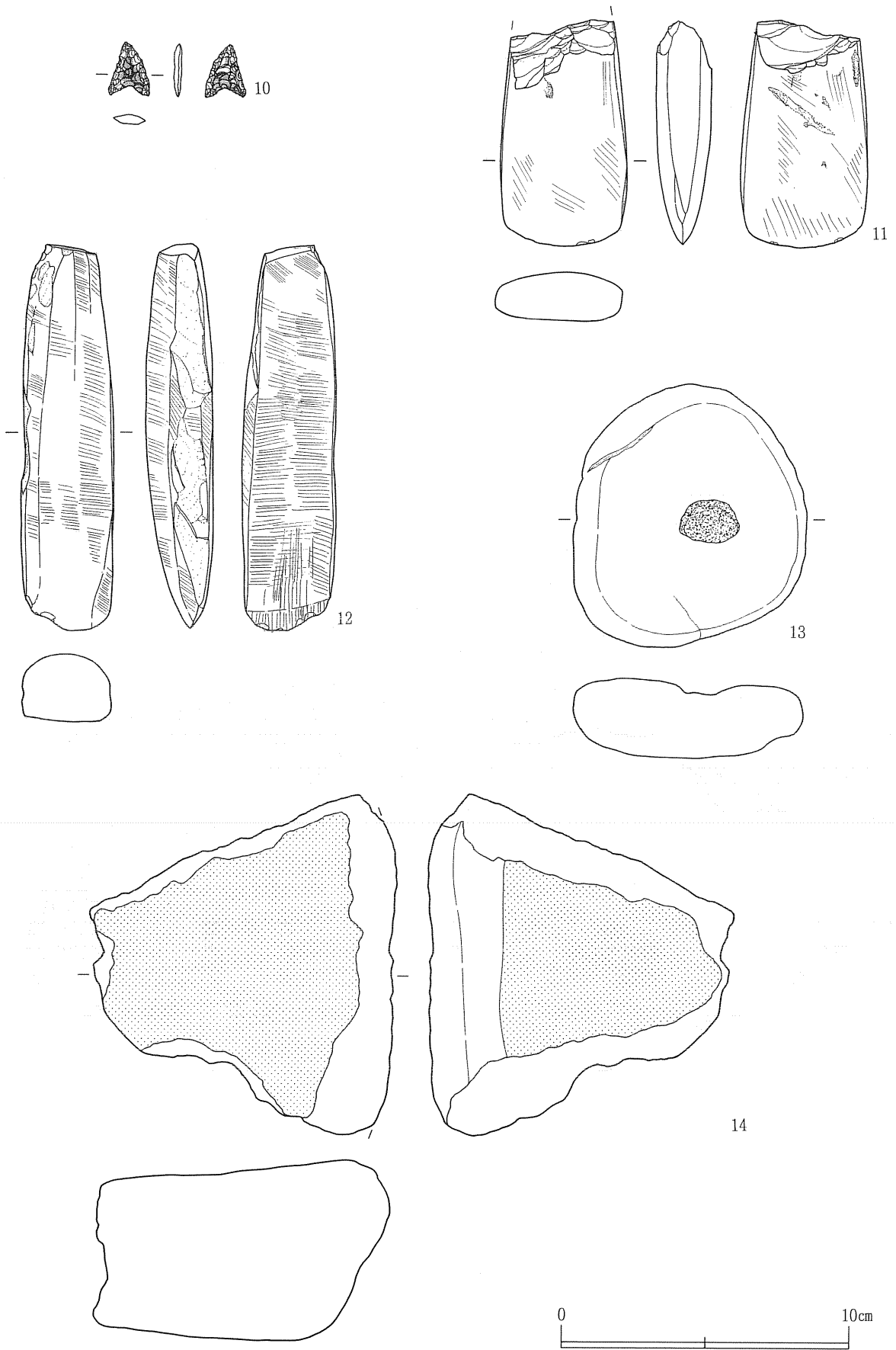


第52図 A区遺構内出土石器(1)

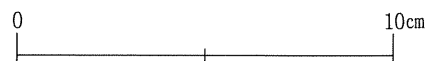
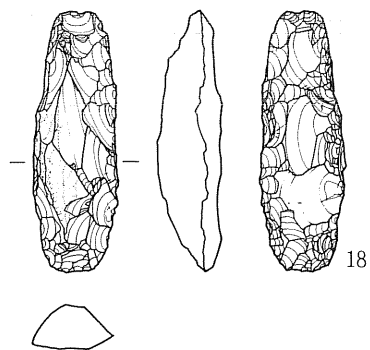
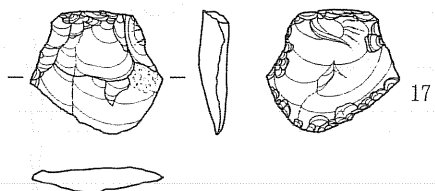
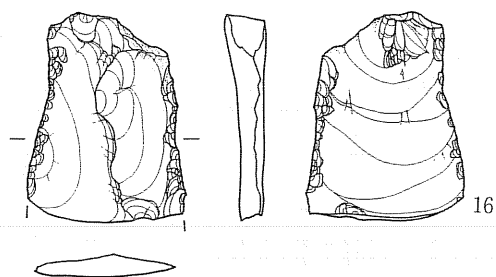
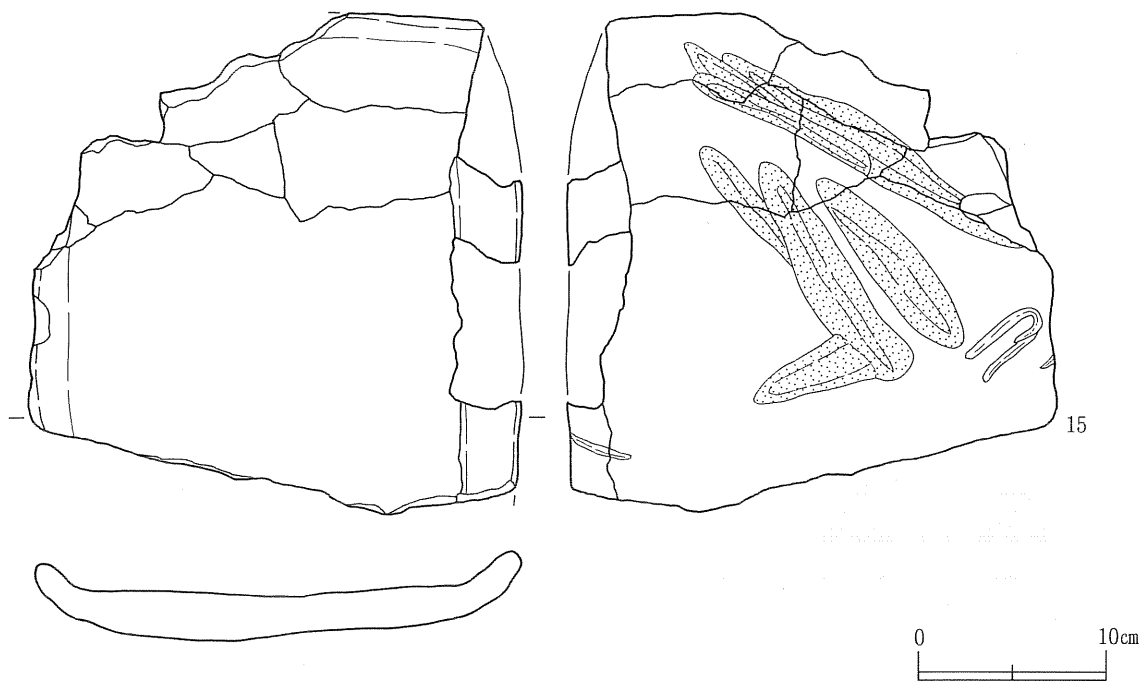




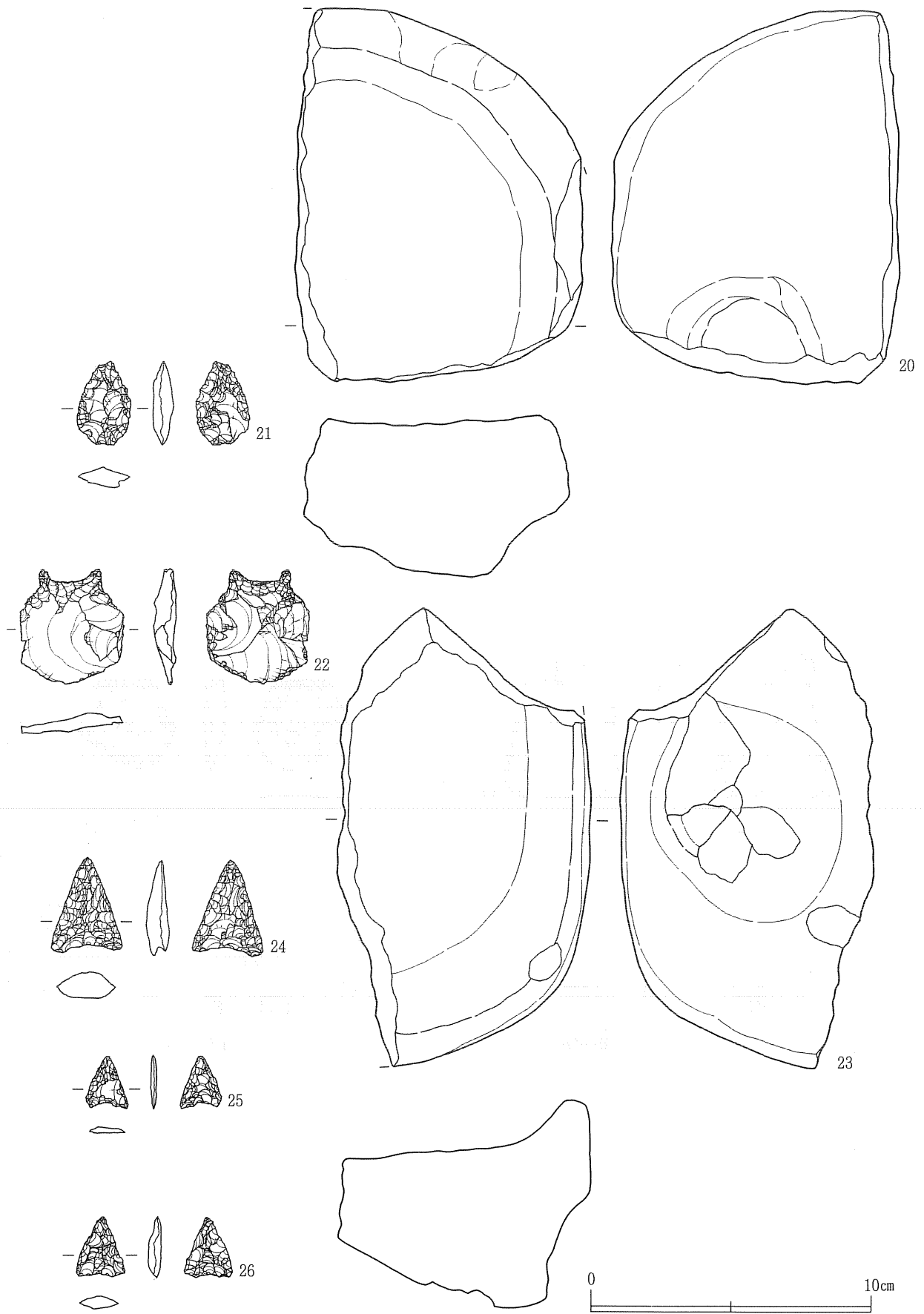
第53図 A区遺構内出土石器(2)



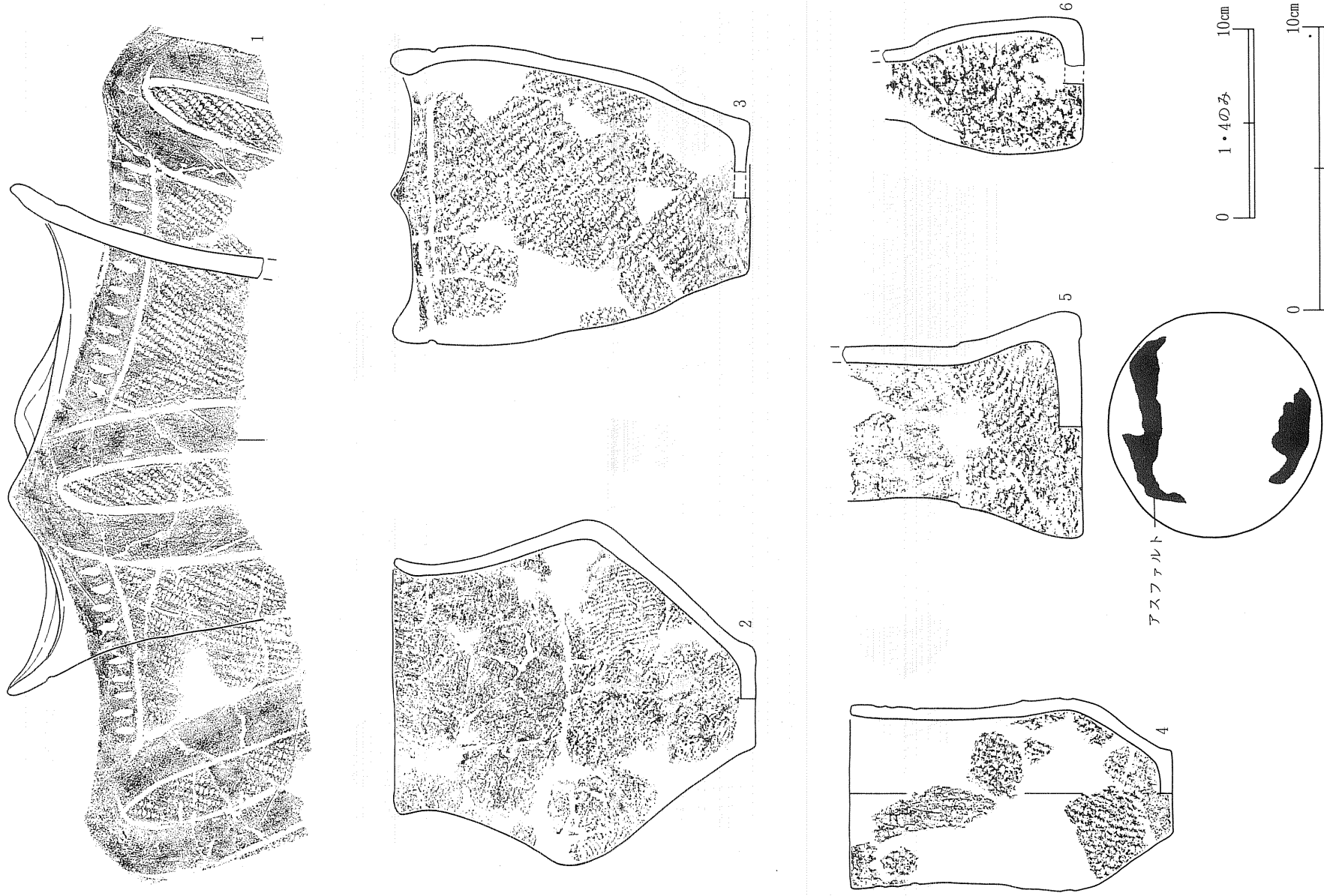
第54図 A区遺構内出土石器(3)



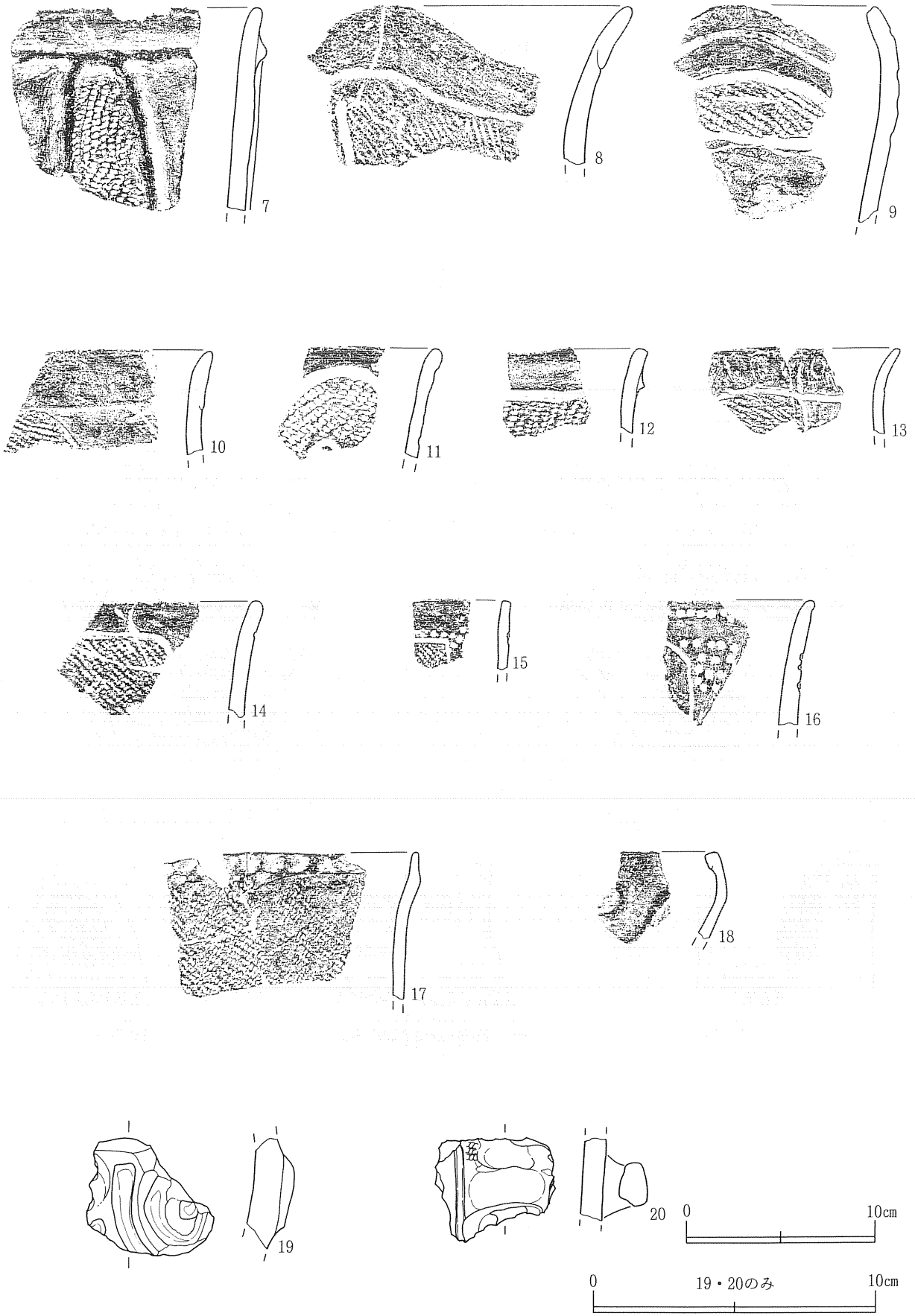
第55図 A区遺構内出土石器(4)



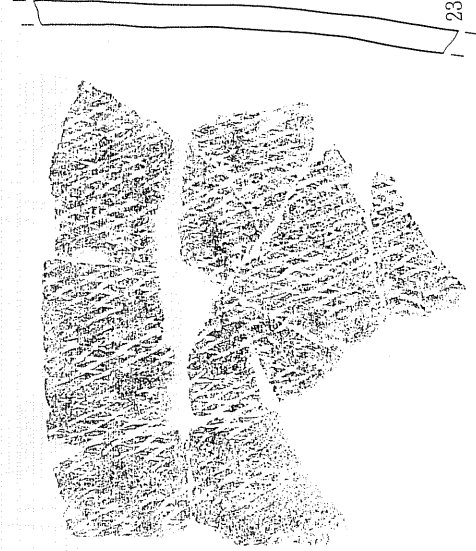
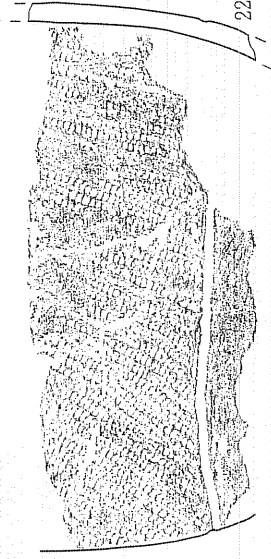
第56图 A区遺構内出土石器(5)



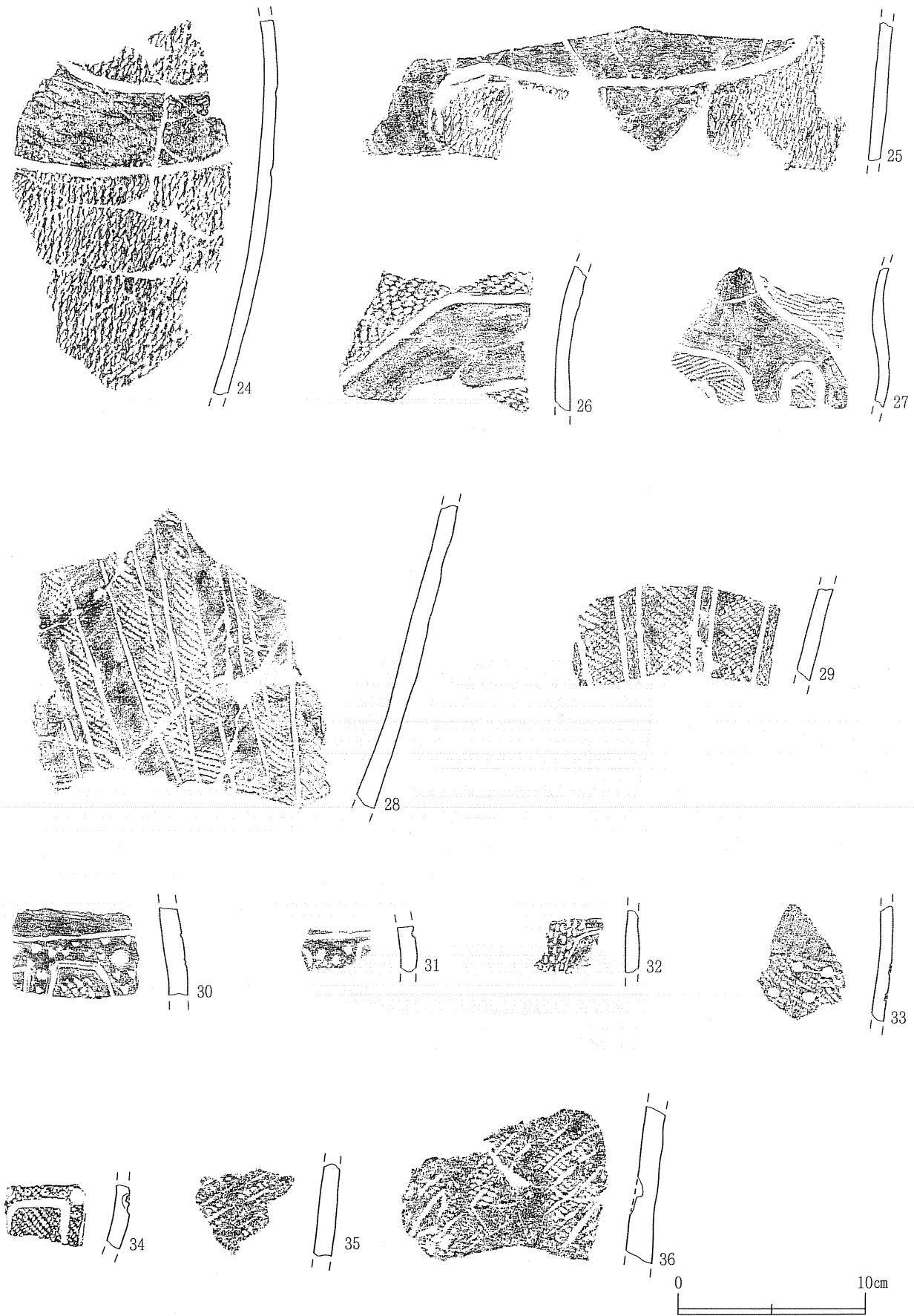
第57図 A区遺構外出土土器(1)



第58図 A区遺構外出土器（2）

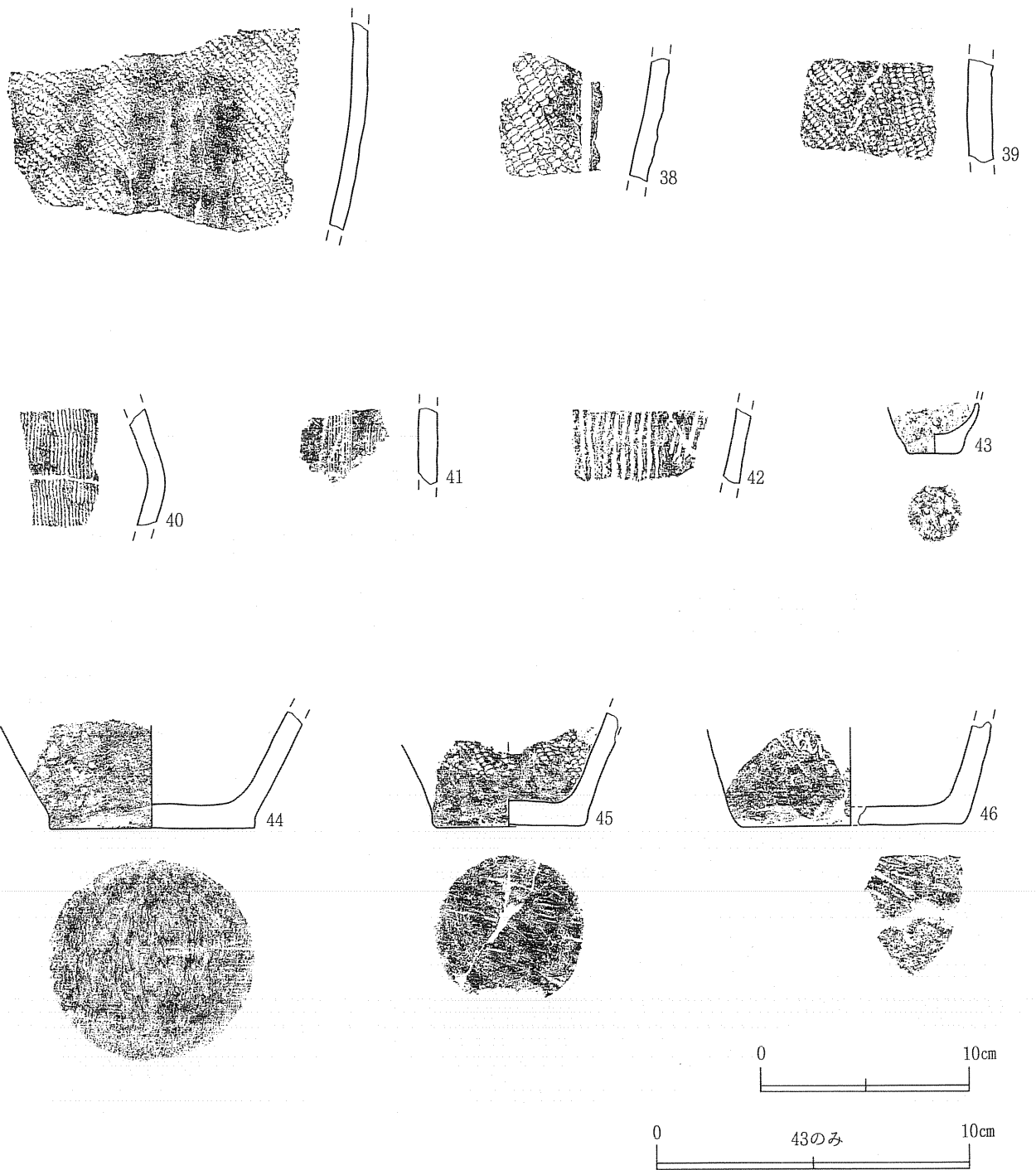


第59図 A区遺構外出土土器(3)

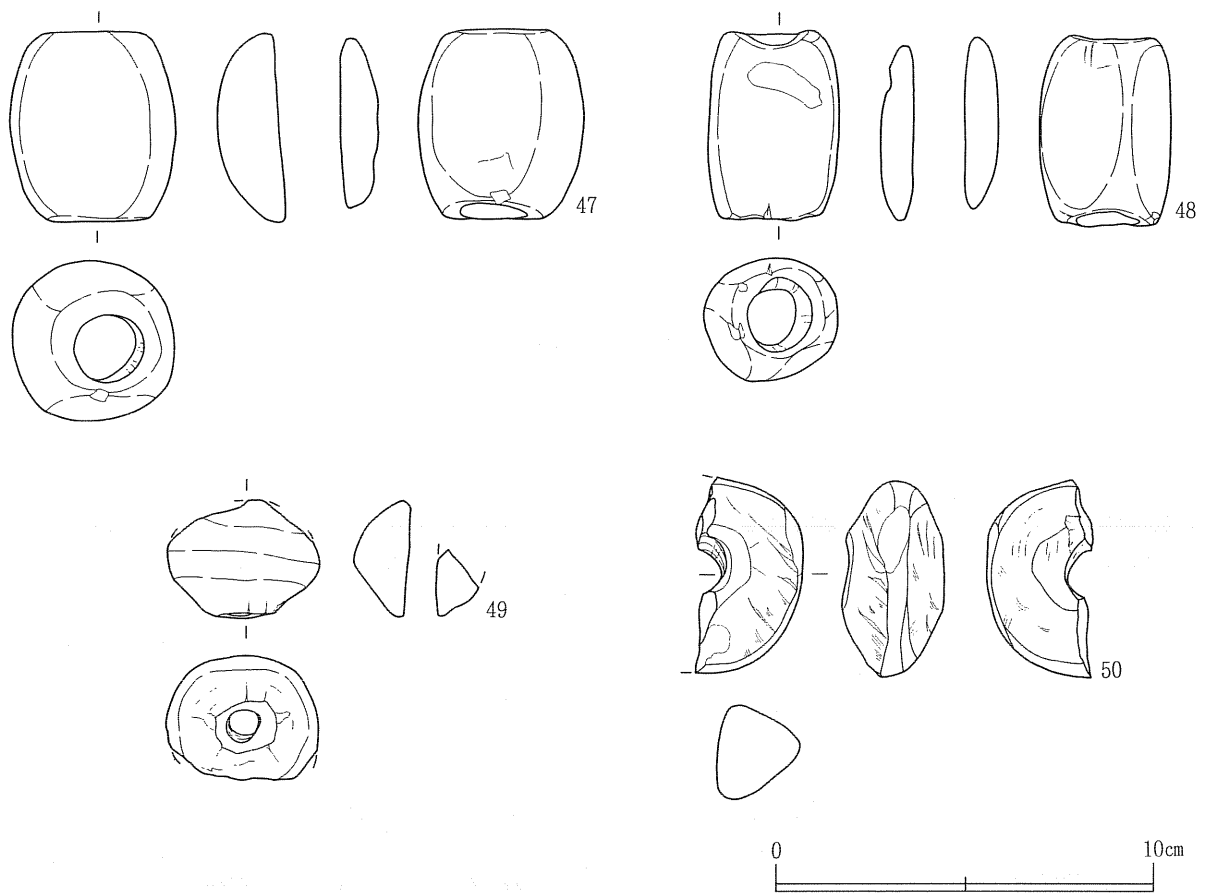


第60图 A区遺構外出土土器(4)

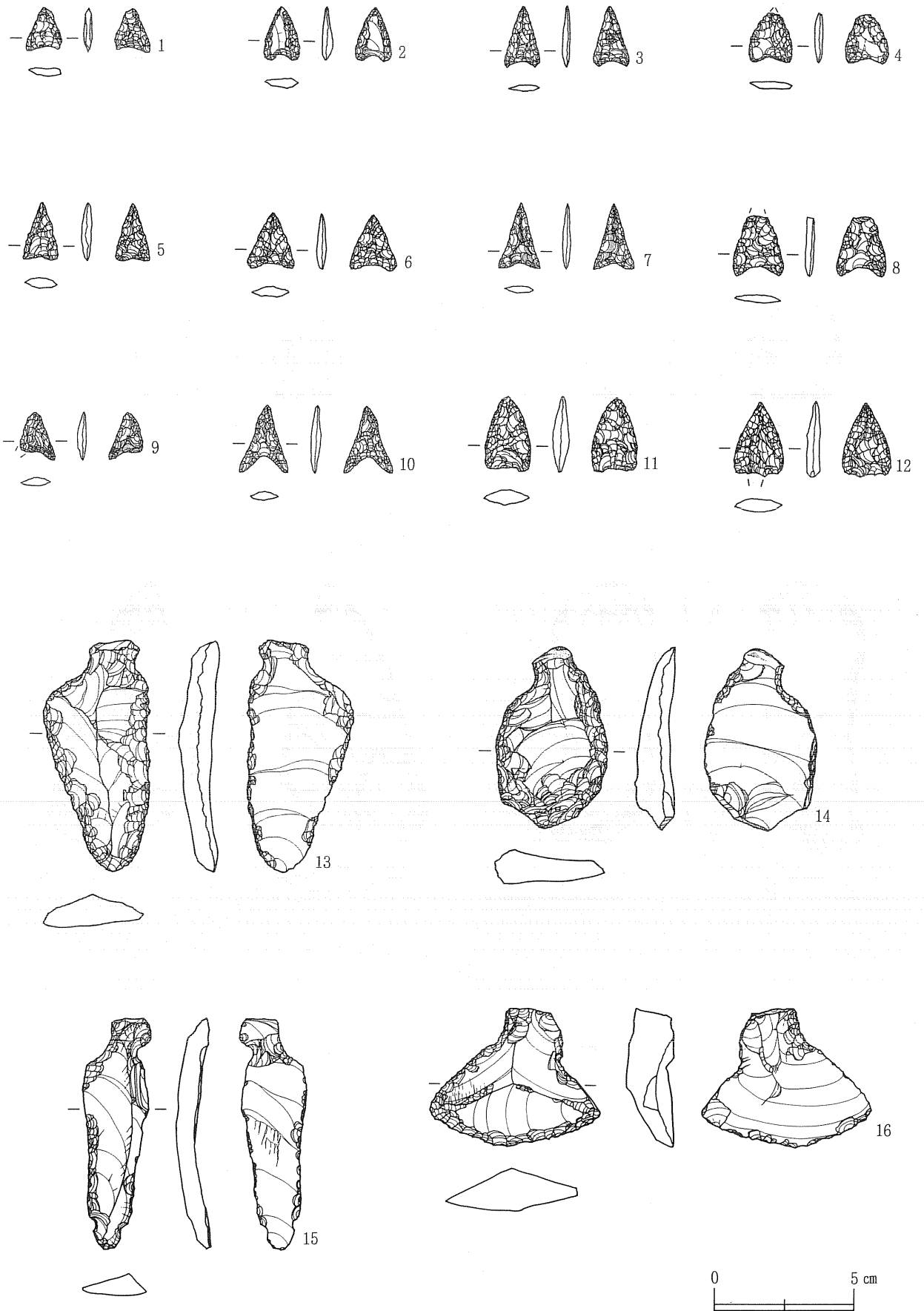




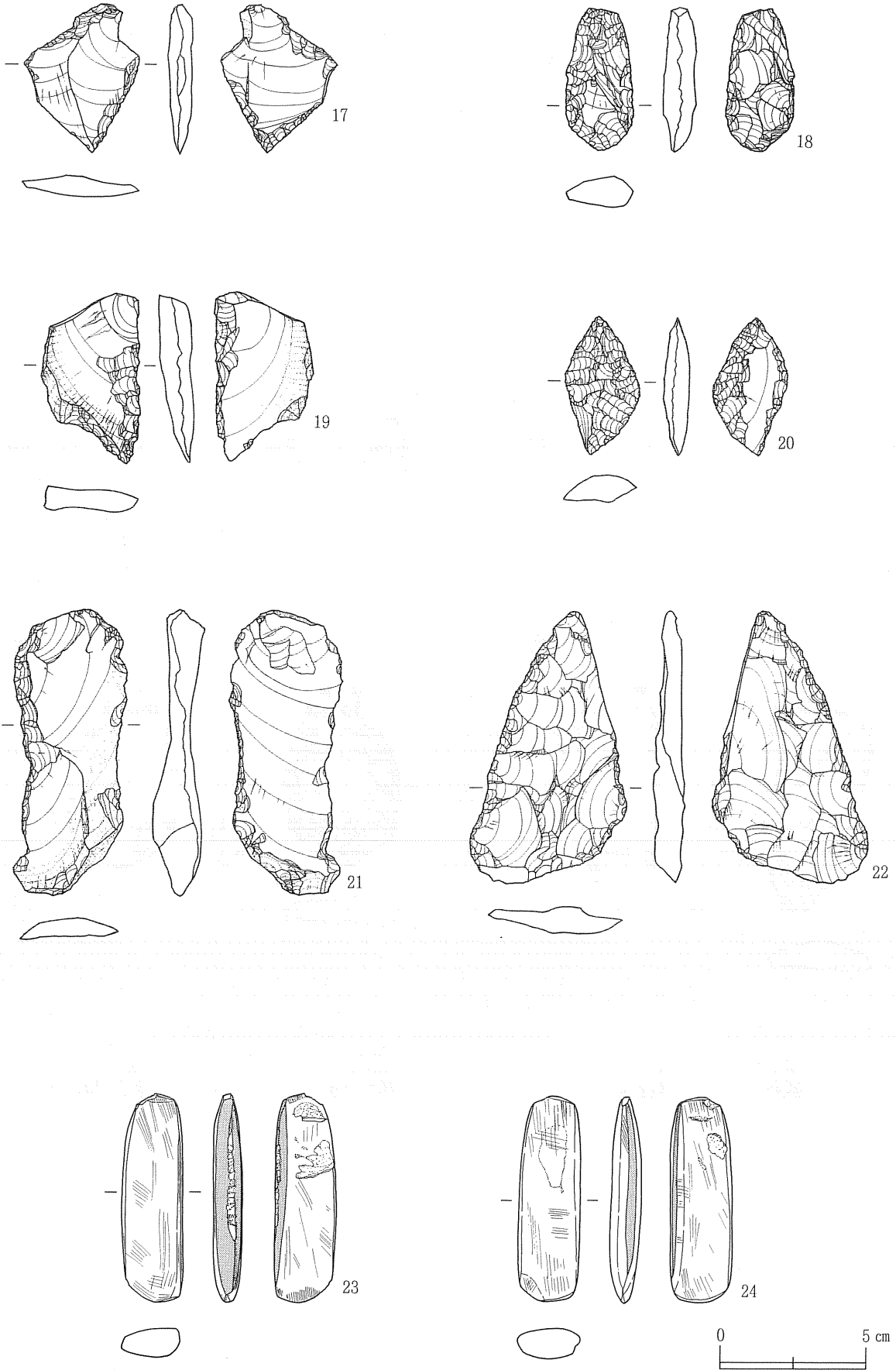
第61図 A区遺構外出土土器(5)



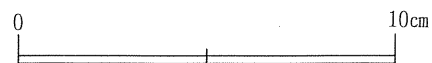
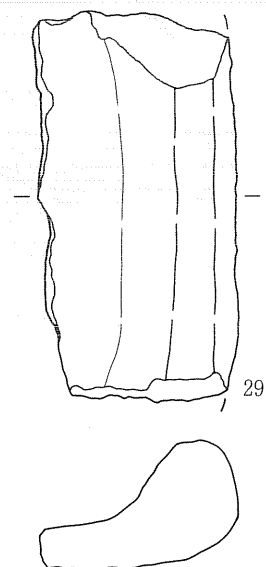
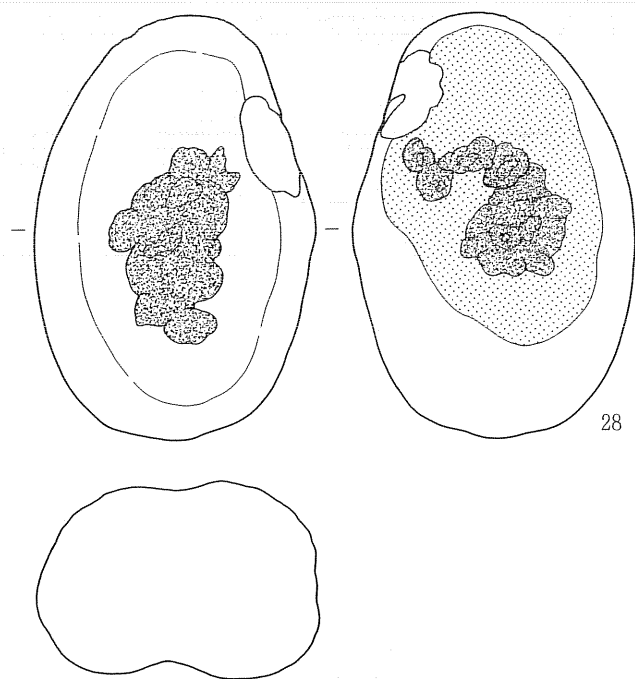
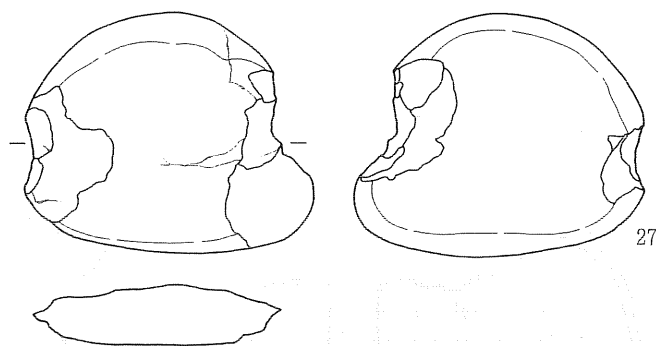
第62図 A区遺構外出土土製品



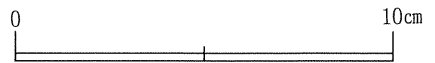
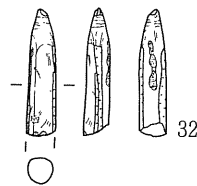
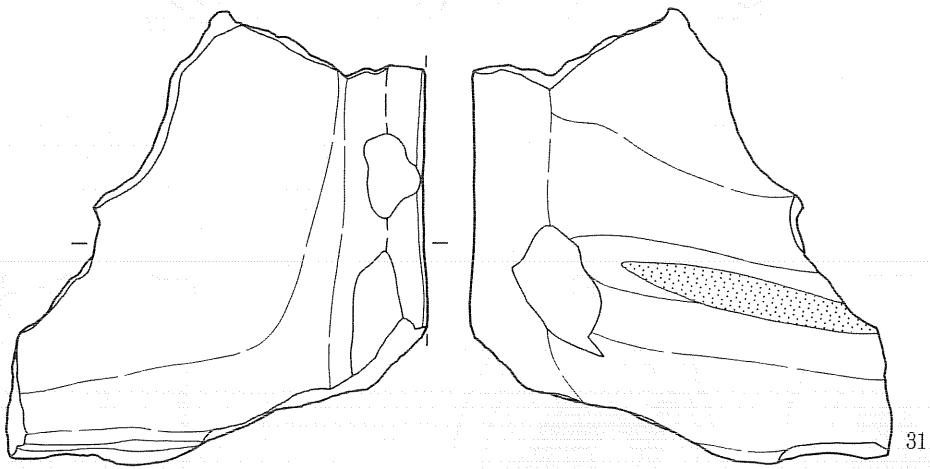
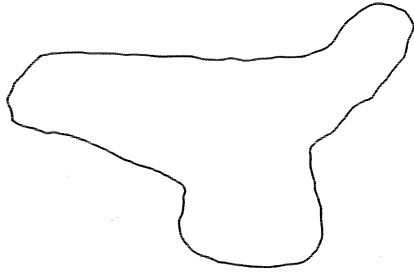
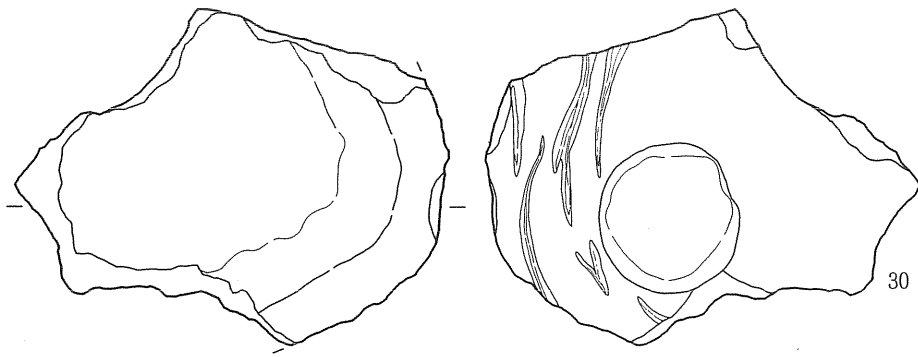
第63図 A区遺構外出土石器(1)



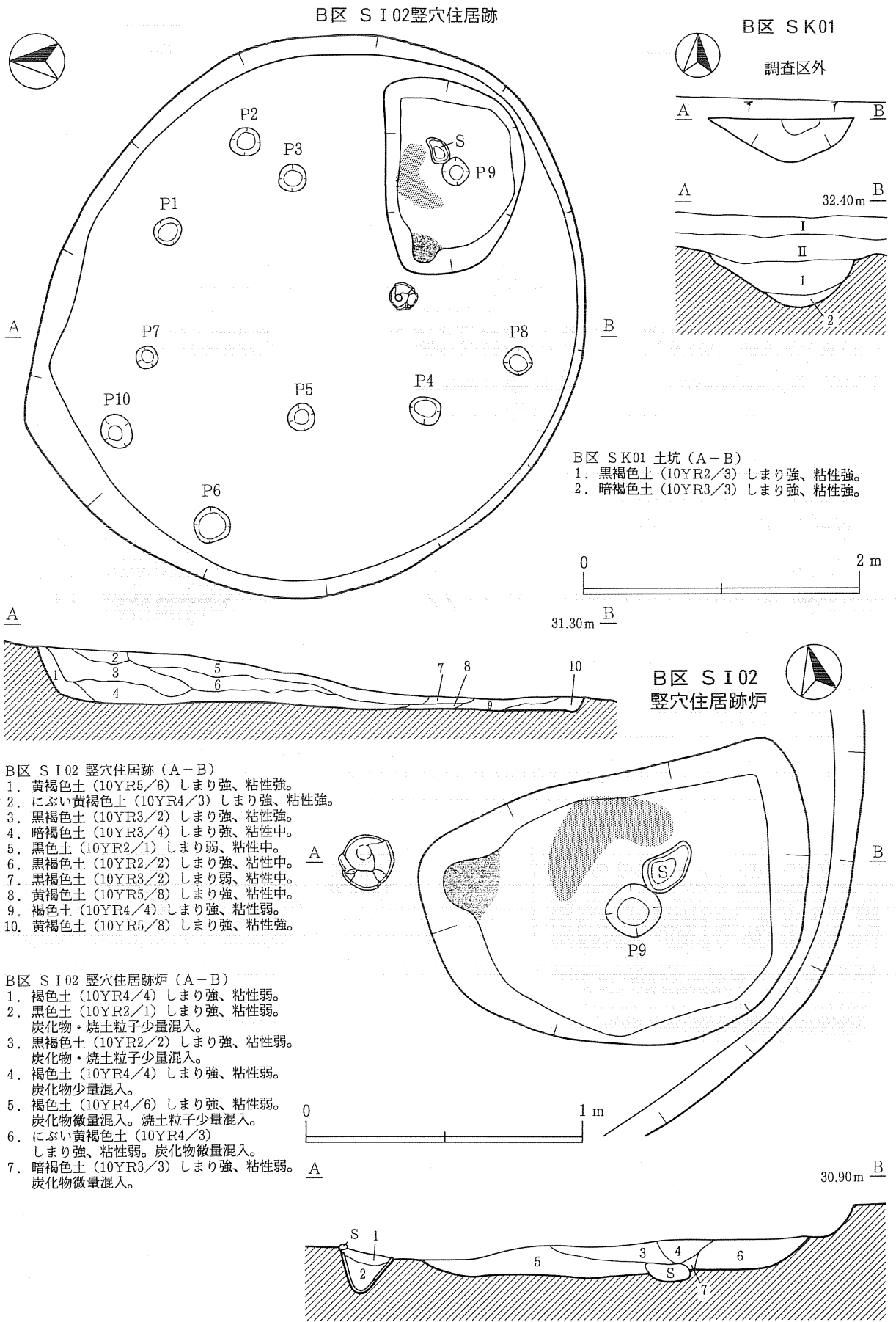
第64図 A区遺構外出土石器(2)



第65図 A区遺構外出土石器(3)



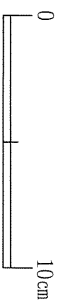
第66图 A区遺構外出土石器(4)



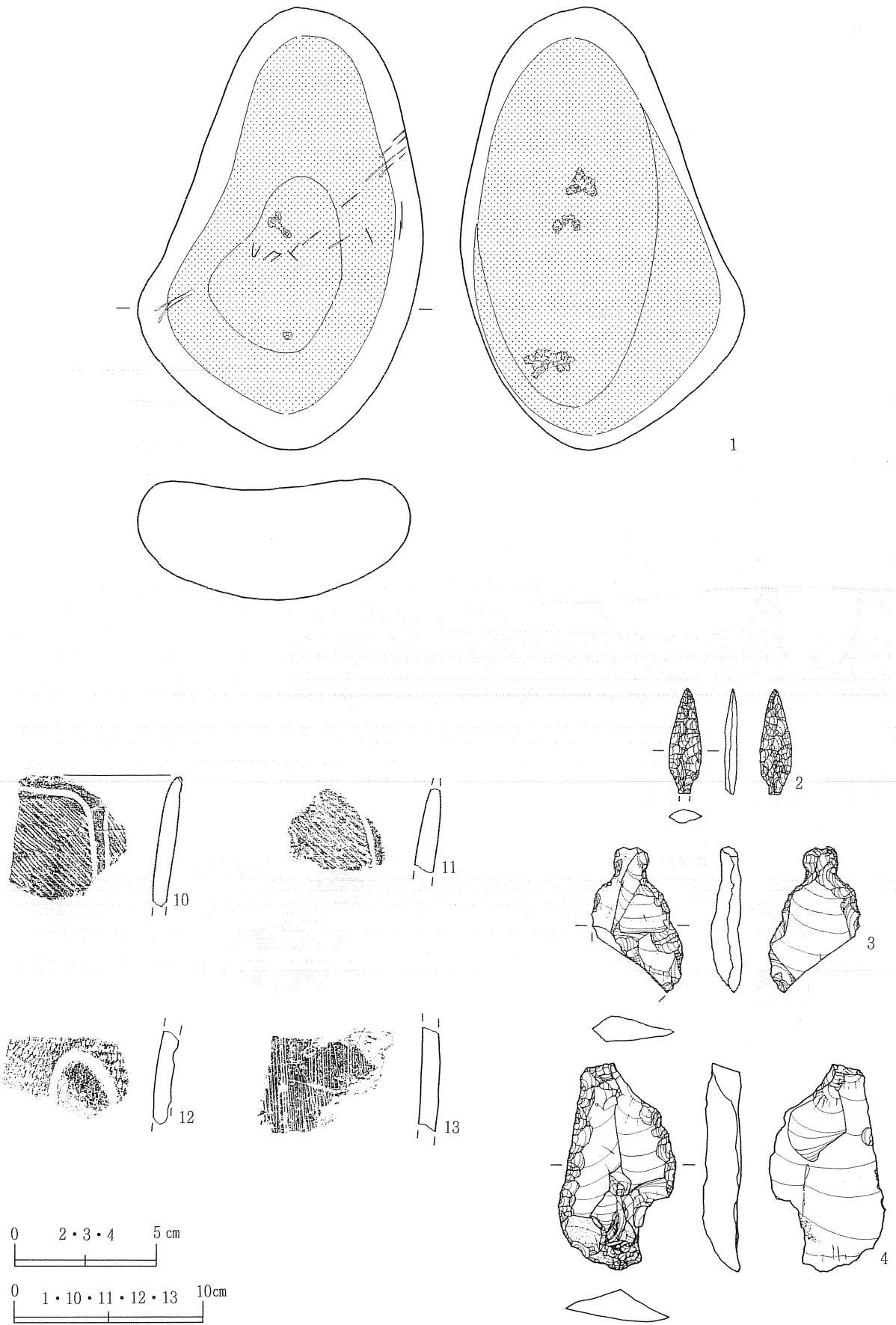
第67図 B区S I 02竪穴住居跡および炉、SK01土坑



第68図 B区遺構内出土土器

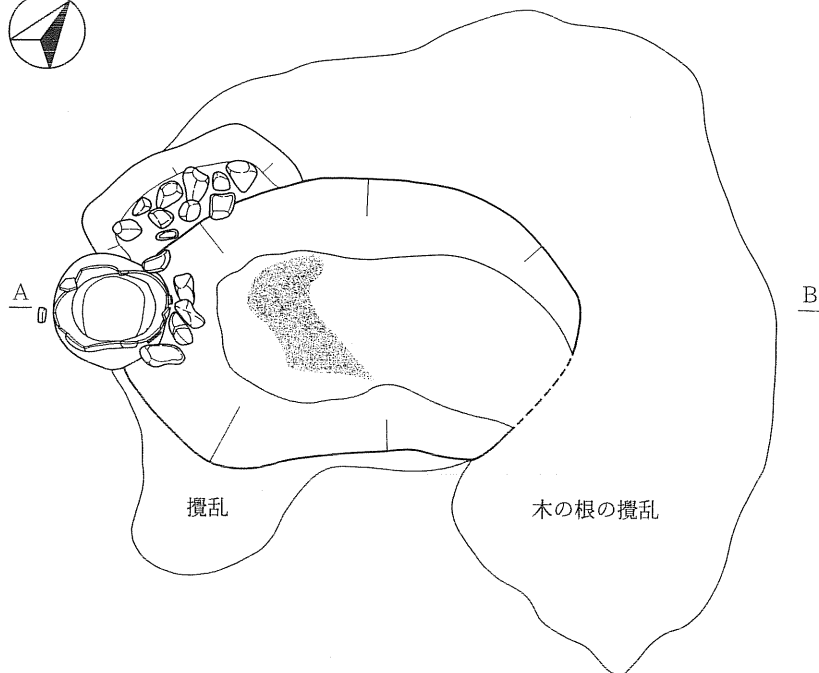






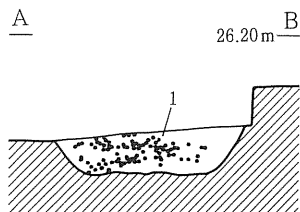
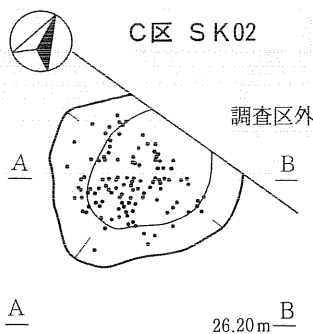
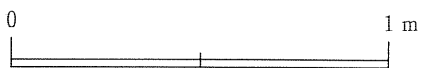
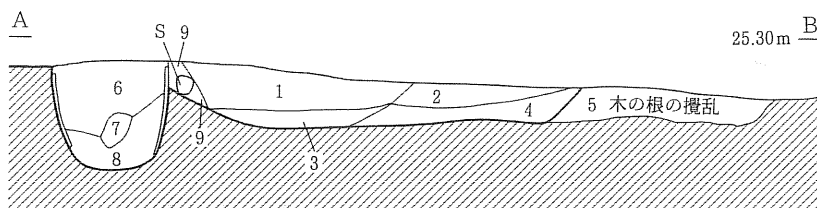
第69図 B区遺構内出土石器、遺構外出土土器・石器

C区 S I 01 竪穴住居跡炉



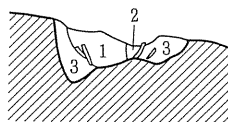
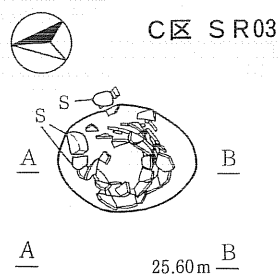
C区 S I 01 竪穴住居跡炉 (A-B)

1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり弱、粘性中。炭化物微量混入。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり中、粘性強。炭化物微量混入。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性強。焼土多量混入。炭化物少量混入。
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまり中、粘性強。小礫(2~3mm)多量混入。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。木の根による攪乱。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
7. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。
9. 黒色土 (10YR2/1) しまり中、粘性中。炭化物少量混入。



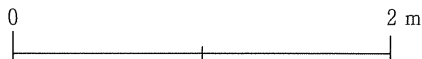
C区 SK02 土坑 (A-B)

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性中。

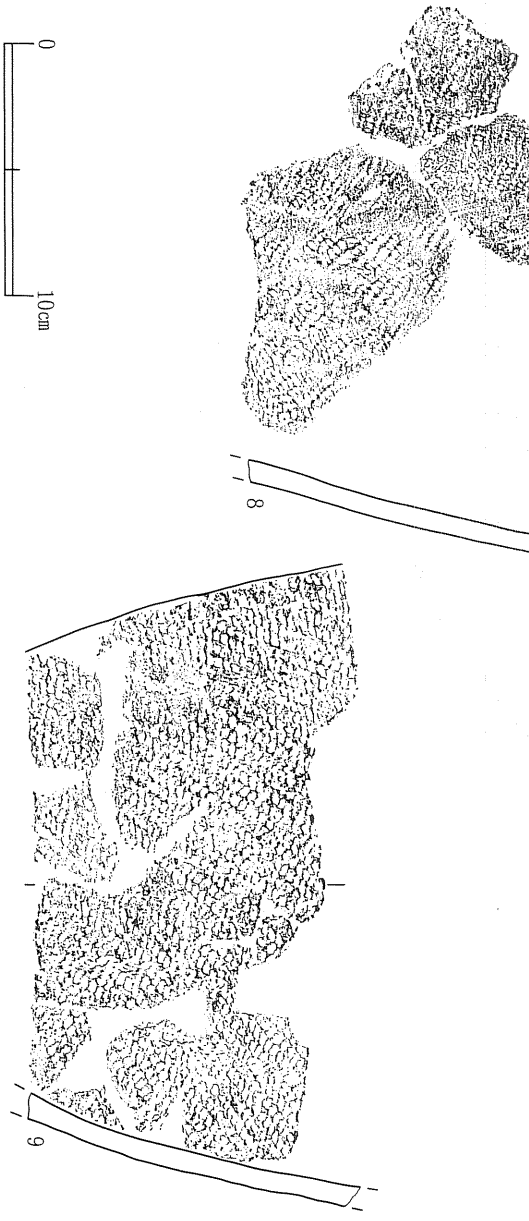
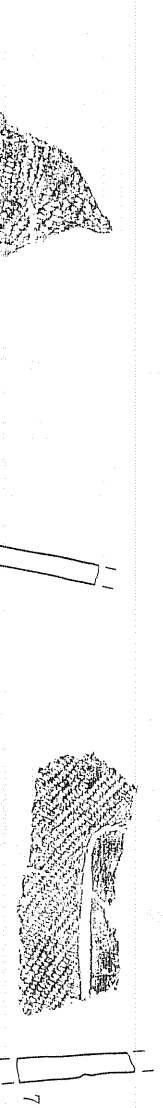
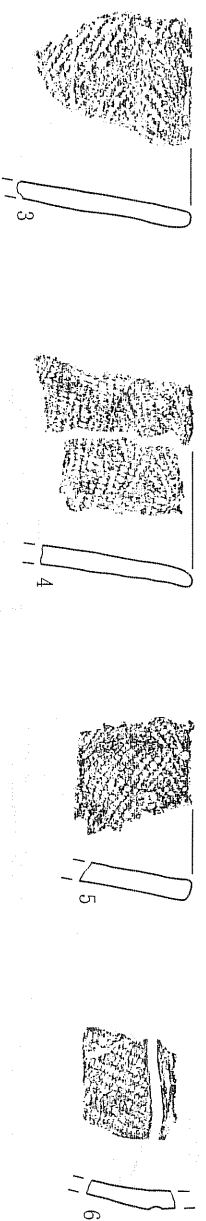
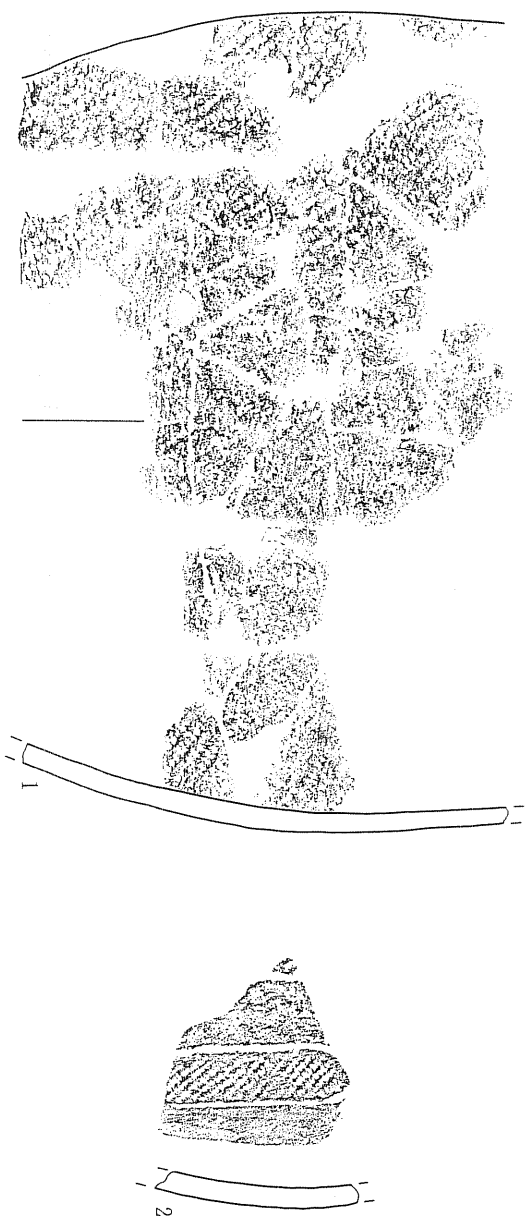


C区 SR03 土器埋設遺構 (A-B)

1. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性中。炭化物少量混入。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中、粘性中。炭化物微量混入。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中、粘性中。

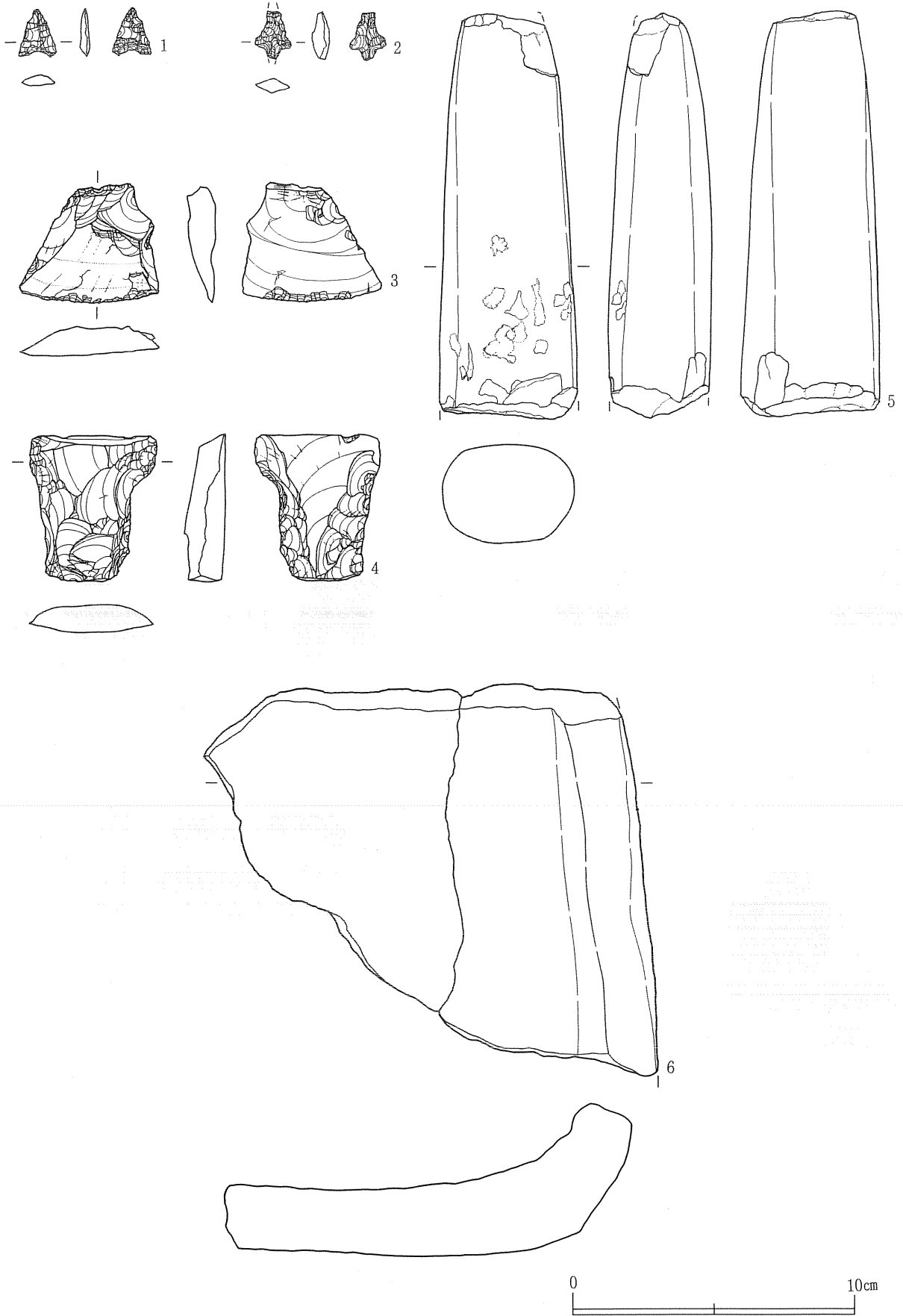


第70図 C区C I 01竪穴住居跡炉、S K 02土坑、S R 03土器埋設遺構



第71図 C区遺構内出土土器

泉野冷水遺跡



第72図 C区遺構外出土石器

## 《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第68図9は炉埋設土器である。やや膨らんで下りる深鉢形土器の胴部下半～底部で、地文としてL縄文が縦位回転施文された上に懸垂区画文が描かれる。区画文の下端は隣り合い同士で連結している。底部近くは無文となる。4はその同一個体と思われる。第68図1(図版37-2)は、口頸部が外反し、頸部下でわずかに屈曲してやや膨らみながら下りる深鉢形土器である。口縁部を欠き、頸部下の屈曲部には1条の沈線が巡る。その下にはL R縄文を縦位回転施文し懸垂区画文を描く。頸部下の沈線と懸垂区画文の間には列点文が施されるが、列点文は懸垂区画文と懸垂区画文の間にも頸部下約5 cmまで施される。ほかに深鉢形土器の口縁部および胴部破片が出土している。第68図2と3は折り返し口縁気味に作られた深鉢形土器の口縁部破片である。3では口縁上部にR L縄文を横位回転施文し、口縁下では右上-左下の方向で斜位に回転施文している。5と6は懸垂区画文の描かれた深鉢形土器の胴部破片である。5ではL R縄文が、6ではR L縄文が縦位回転施文されている。7と8は同一個体と思われ、全面に縦位の条痕文が施されている。

〈 石 器 〉 第69図1は、燃焼部のほぼ中央、柱穴P9の北東に接していた磨石である。表裏ともに磨り面があり、磨り面上の一部には加撃による凹みも見られる。

## (2) 土坑

## SK01土坑 (第67図、図版26)

JQ54グリッドの調査区際で検出した。平面形は計測可能部分で最大長1.05m、深さ0.33mである。断面形は楕円形を呈し、覆土は2層に分層できた。いずれも粘性の強い黒褐色ないし暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

## 3 C区の検出遺構と遺物

## (1) 竪穴住居跡

## SI01竪穴住居跡 (第70・71図、図版26・37)

《 位置と確認 》 ID49、IE49グリッドに位置する。炉跡のみの確認である。

《 床 面 》 炉の周囲が固く締まっており、床面と判断した。

《 炉 》 土器埋設部と燃焼部で構成される複式炉である。規模は軸長1.4m、最大幅0.92mで、軸線方向はS-51°-Wである。

〈土器埋設部〉 第71図1(図版37-3)の深鉢形土器胴部が、深さ0.29mの掘り方内に埋め込まれていた。燃焼部側に5個の礫が囲み、土器埋設部の北側にはこぶし大の礫10個の集積が認められた。

〈燃 焼 部〉 土器埋設部に接して楕円形の浅い掘込みがあり、中央よりやや土器埋設部に寄った側に焼土面が確認された。深さは0.16mである。

## 《 出土遺物 》

〈 土 器 〉 第71図1は炉埋設土器である。やや丸みを帯びて下りる深鉢形土器の胴下半部であり、口縁部～胴部上半と底部を欠く。全面にL R縄文が縦位回転施文される。2は丸みを帯びて下りる深鉢形土器の胴部破片である。縦位回転施文されたL R縄文を地文として懸垂区画文が描かれる。

## (2) 土坑

### S K 02土坑 (第70・71図、図版26)

I F 50グリッドの調査区際で検出した。規模は最大長1.03m、深さ0.21mを測る。断面形は鍋底形を呈し、覆土は1層である。覆土内からは破碎された土器片が多量に出土した。第71図3～5、8は同一個体と思われる。口縁以下がほぼ直線的にすぼまる深鉢形土器であり、全面にL R縄文が回転施文されている。回転方向は一定しないが、口縁直下では横位、胴部以下では縦位を主とする。6は緩く膨らむ深鉢形土器の胴部破片である。横位の沈線が1条引かれており、以下はL R縄文が横位回転施文され、それより上位は無文となる。7は磨消縄文によって飾られた深鉢形土器の胴部破片である。地文の縄文はR L縄文の横位回転施文で、反転する沈線内は磨り消されて無文となる。

## (3) 土器埋設遺構

### S R 03土器埋設遺構 (第70・71図、図版26)

I F 49グリッドで検出した。深鉢形土器の半周分の胴部(第71図9)が径0.26m、深さ0.18mの掘り方に埋め込まれていた。土器はわずかな膨らみをもって下りる深鉢形土器であり、全面にR L縄文が縦位回転施文されている。

## 第3節 遺構外出土遺物

### 1 A区の遺構外出土遺物

#### (1) 土器 (第57図～第62図)

第57図1(図版36-1)は、4単位の波状口縁をなす深鉢形土器の口縁部から胴部上半の破片である。波頂部下には沈線で区画された無文帯があり、その枠内にR L縄文を充填している。また、波頂部間の口縁下に沿って刻み目が施されており、その下方にも沈線によって画された中にR L縄文が充填されている。

2～6は小形土器である。2(図版36-3)は、口縁部上端が小さく外反し、胴部半ばが大きく張り出しながら、胴下半部は小さな底部へ向かって急激にすぼまる鉢形土器である。底部は小さく張り出す。口頸部は無文となり、胴下半部は細かなR L縄文が横位を中心にして施文される。3(図版36-2)は、4単位の波頂部を持ち、胴部～口縁がわずかに内湾する鉢形の小型土器である。口縁部下には1条の沈線が巡り、胴部には底部近くの段差までL R縄文が縦位回転施文される。4は、筒形の胴部下半～口縁部までがわずかに外反し、胴下半部で膨らんで小さな底部へ向かいすぼまる小型土器である。縦長の波頭状あるいはJまたはU字状の区画文が、内部にR L縄文を伴って施されている。5(図版36-4)はL N 48グリッドから出土した。筒形の胴部から大きな底部へ向かい裾広がりを開く。底部近くの広がり部分と胴部との間にわずかに段差があり、以下にR縄文が横位回転施文される。底部外面は平らであるが、周縁は器胎が露出するほどに擦り減り、その内側にはアスファルトの付着が認められる。6(図版36-5)は、頸部の細い徳利形の小型土器である。全面にR L R縄文が縦位回転施文されている。

第58図7～18は、深鉢形もしくは鉢形土器の口縁部である。第58図7～16、18は隆線もしくは沈線による区画文を施した土器であり、口縁部が直線的に開くもの(7・11・12、14～16)、外反するもの(8・10・13)、内湾するもの(9)、内屈するもの(18)がある。口縁部の作りには粘土帯を貼り付けて折返し口縁状に作り出したもの(8・10)や、区画文の上部に断面を三角に整形した粘土紐を貼り付けたものがある(12)。いずれも口縁部の無文部分を強調した例である。また区画文の外側に点列を加えたもの(15・16)もある。18は区画文の外側、無文部分を粘土帯を貼り付けて作りだした例である。区画文内部の縄文にはR L、L Rの両方の撚りの縄文が施文されている。17は、口縁上端を指頭によってつまみあげて作りだした深鉢形土器の破片である。外反する胴上半部にはL R縄文が縦位回転施文されている。

第58図19は、隆起線によって渦巻き状の形を作りだした口縁部近くの破片である。20は、横位に橋状の突起を付けた鉢形土器の胴部上半の破片である。

第59図21～23および第60図24～36、第61図37～42は、深鉢形もしくは鉢形土器の胴部破片である。全面縄文のみを施す例(21・23、35～37、39・40・42)や区画文を描いた例(22、24～32、34・38)、縄文地に刺突文を加えた例(33)、条痕文を施した例(41)がある。縄文には、R LもしくはL R縄文のほか、24・25および40・42の撚糸文、23の網目状撚糸文、L R原体に0段の撚紐を巻きつけ縦位回転施文した35・36、原体開端が結び目となって綾絡文となって表れた39がある。なお24と25、35と36はそれぞれ同一個体と思われる。30～32および34は、区画文の外側に刺突文が加えられたものである。

第61図43～46は、深鉢形ないし鉢形土器の底部である。44～46では、なでられて消された笹葉圧痕が底面にかすかに残るが、44ではなでの調整は圧痕部分に限られ、笹葉があたらなかった部分は無調整のまま残されている。

第62図47～50は、A区遺構外出土の土製品である。土製の漁網錘であり、胎土の状況から極めて新しい時期のものと判断される。47と48は樽形を呈するもの、49と50は算盤玉形を呈するものである。

## (2) 石器 (第63図～第66図)

石鏃12点、石匙5点、筥状石器1点、削器4点、磨製石斧4点、石錘1点、凹石1点、石皿3点、石錐1点を図示した。

石鏃は、凹基または有脚が10点(第63図1～10)、平基が1点(11)、有茎1点(12)である。薄く剥ぎ取られた剥片を素材とし、両面からの丹念な調整剥離で薄手に仕上げられているが、2および4のように素材となった剥片の剥離面を残すものもある。

石匙は、縦型4点(第63図13～15、第64図17)、横型1点(第63図16)である。素材剥片の表面側に刃部を作る剥離が施されるが、ほぼ全周にわたって施されるもの(第63図13・14・16)と素材剥片の縁辺を残すもの(第63図15、第64図17)がある。また、撮み部は素材の打面側に設けられるのが通例であるが、第63図14は素材の先端側に撮み部が作られている。

筥状石器(第64図18)は、図左の中央下部に素材の剥離面が、上部に素材剥片の打面が残るほかは両面に成形のための調整剥離を施している。

削器は、縦長剥片の側縁に刃部作り出しの調整剥離を加えたもの(第64図19・21)、両面に調整剥離を加えて尖頭状に成形したもの(20・22)がある。20は素材剥片の表面側に加えられた剥離で平面形が菱形に整えられている。22は薄手大型の剥片を素材とし、両面に剥離を加え、また図上部の一側縁を

折断して尖頭状に仕上げている。

磨製石斧には小型細身のもの(第64図23・24)、大型の円刃のもの(第65図25)、および基部(26)がある。第64図23・24は板状礫を素材とし、切り離した際の擦切り面が側縁に残されている。第65図25は折損した基部を再生しようとしたものか、破断面の縁を擦った痕跡(図上部)が残されている。

石錘(第65図27)は、扁平な楕円礫の長軸両端・両面を打ち欠いて抉り部を作り出している。

凹石(第65図28)は、肉厚の楕円礫の両面に凹みが残る。片面には磨り面も残されている。

石皿片(第65図29・第66図30・31)は、いずれも周堤部分の破片である。30の裏面には脚が、31の裏面には砥石に使われた筋が残されている。

石錐(第66図32)は、径約8mmの丸棒状に仕上げた一端に、回転してできた尖端部が残されている。

## 2 B区の遺構外出土遺物

### (1) 土器(第69図)

第69図10・11は、外傾しながら開く深鉢形土器の口縁部破片である。口唇はやや薄手に作られ、口縁下からL縄文を地文として幅広に展開する区画文が描かれる。区画文は方形区画を展開させたものと思われる。12は0段多条のLR縄文を地紋として、曲線的な構図で描かれた区画文の施された深鉢形土器の胴部である。13は全面に条痕文の施された深鉢形土器である。

### (2) 石器(第69図)

第69図2は、素材両面に加えられた丹念な調整剥離によって、器体を柳葉形に仕上げた有茎の石鏃である。3は縦長剥片を素材とし、その縁辺に刃部作り出しの調整剥離を施した石匙である。調整剥離は両面に施されているが、素材剥片の表面、裏面ともに大部分が残されている。4は、縦長剥片の縁辺に刃部を作り出した削器である。素材の打面側には剥離の際の折損痕が残り、先端側には礫皮が残されている。

## 3 C区の遺構外出土遺物(第72図)

石鏃2点、削器1点、微細剥離痕のある剥片1点、磨製石斧1点、石皿1点が出土している。

石鏃には凹基(1)と有茎(2)がある。1は両面に丹念な調整剥離を加えて薄手に仕上げている。

2は両翼が伸びた形のいわゆる飛行機鏃である。先端部を欠損している。

3の石器は、横長剥片の先端部縁辺に使用による微細な剥離痕が残されている。

削器(4)は、素材剥片の打面側及び先端側を切断し、両側縁両面に刃部作り出しの剥離を加えている。図左面右側縁は剥離によって湾曲した抉り部となっている。

磨製石斧(5)は乳棒状の大型石斧である。基部及び刃部ともに折損している。

石皿(6)は周堤部の破片である。周堤部はやや傾斜をもって作り出されている。



第2表 泉野冷水遺跡A区出土石器計測一覧(1)

挿図 番号	出土位置	遺構 内/外	器種	大 き さ			重量(g)
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	
52-1	S I 01	遺構内	石 鏃	(30.0)	12.0	5.0	(1.30)
52-2	S I 01	遺構内	R F	41.0	28.5	10.0	5.60
52-3	S I 05	遺構内	石 鏃	24.0	18.5	6.0	1.80
52-4	S I 05	遺構内	石 鏃	(16.0)	15.0	3.5	(0.70)
52-5	S I 05	遺構内	凹 石	(97.0)	92.0	65.0	(715.90)
52-6	S I 05	遺構内	石 皿	220.5	235.0	58.0	6002.10
53-7	S I 15	遺構内	凹 石	102.0	77.0	64.0	547.20
53-8	S I 16	遺構内	石 皿	(139.0)	(131.0)	(33.0)	(605.90)
53-9	S I 32	遺構内	石 匙	54.0	31.0	10.0	13.60
54-10	S I 34	遺構内	石 鏃	18.5	14.0	3.0	0.70
54-11	S I 34	遺構内	磨製石斧	(79.0)	45.0	19.0	(112.80)
54-12	S I 34	遺構内	磨製石斧	136.5	33.0	23.5	181.90
54-13	S I 34	遺構内	凹 石	92.5	81.0	26.0	300.50
54-14	S I 34	遺構内	石 皿	(119.0)	(108.0)	(61.0)	(799.60)
55-15	S I 34	遺構内	石 皿	(269.0)	(264.0)	(38.0)	(1769.30)
55-16	S I 38	遺構内	U F	55.0	42.0	11.0	19.00
55-17	S I 38	遺構内	U F	33.0	35.0	7.5	8.30
55-18	S I 42	遺構内	篋状石器	70.0	23.0	17.0	26.70
55-19	S I 42	遺構内	磨製石斧	58.0	17.0	8.0	16.50
56-20	S I 42	遺構内	石 皿	(135.0)	(104.0)	(58.0)	(823.00)
56-21	S K 18	遺構内	石 鏃	30.0	18.5	7.0	3.60
56-22	S K 18	遺構内	石 錐	41.8	37.0	8.6	9.50
56-23	S K 18	遺構内	石 皿	(165.0)	(90.0)	(74.0)	(860.20)
56-24	S K F 04	遺構内	石 鏃	34.0	25.5	9.0	4.70
56-25	S K F 12	遺構内	石 鏃	18.5	15.0	2.0	0.50
56-26	S K F 26	遺構内	石 鏃	21.5	17.0	4.5	1.50
63-1	M L 53	遺構外	石 鏃	(16.0)	(12.3)	3.0	(0.60)
63-2	表採	遺構外	石 鏃	19.5	13.0	4.0	0.80
63-3	M M 49	遺構外	石 鏃	22.0	13.0	3.0	0.60
63-4	M B 51	遺構外	石 鏃	(17.8)	15.5	3.0	(0.80)
63-5	L T 50	遺構外	石 鏃	20.5	12.8	4.0	0.70
63-6	表採	遺構外	石 鏃	20.0	17.0	3.5	0.80
63-7	表採	遺構外	石 鏃	23.4	15.0	3.0	0.60
63-8	L S 50	遺構外	石 鏃	(22.0)	18.0	3.0	(1.20)
63-9	L T 51	遺構外	石 鏃	17.0	(12.0)	3.0	(0.50)
63-10	N A 55	遺構外	石 鏃	24.0	17.5	4.0	0.80
63-11	K S 54	遺構外	石 鏃	27.0	16.2	6.0	2.10
63-12	L R 50	遺構外	石 鏃	(27.0)	18.0	5.0	(1.40)

※( )内の数値は残存値である。R F : 二次加工痕のある剥片、U F : 微細剝離痕のある剥片。

第2表 泉野冷水遺跡A区出土石器計測一覧(2)

挿図 番号	出土位置	遺構 内/外	器種	大 き さ			重量(g)
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	
63-13	MD51	遺構外	石 匙	83.0	38.5	14.3	33.40
63-14	KP52	遺構外	石 匙	66.0	40.0	14.5	31.10
63-15	LT50	遺構外	石 匙	83.0	24.0	12.0	13.20
63-16	LF49	遺構外	石 匙	50.0	60.5	17.0	31.40
64-17	LO50	遺構外	石 匙	51.5	40.0	8.0	11.90
64-18	KM52	遺構外	籠状石器	50.0	23.5	11.0	13.70
64-19	MC51	遺構外	削 器	34.0	59.0	11.5	16.80
64-20	LS50	遺構外	削 器	47.5	9.0	25.0	9.00
64-21	LM51	遺構外	削 器	99.0	39.0	17.54	1.50
64-22	表採	遺構外	削 器	94.0	53.0	9.0	34.50
64-23	LE49	遺構外	磨製石斧	71.5	21.0	10.5	27.70
64-24	LE49	遺構外	磨製石斧	70.0	22.0	10.0	29.40
65-25	KP52	遺構外	磨製石斧	(95.0)	60.5	28.0	(280.60)
65-26	LS52	遺構外	磨製石斧	(57.0)	(40.5)	(28.0)	(78.50)
65-27	ND53	遺構外	石 錘	64.0	77.0	20.0	119.20
65-28	MP53	遺構外	凹 石	114.0	75.0	58.0	511.60
65-29	ML52	遺構外	石 皿	(104.5)	(55.0)	(32.0)	(197.90)
66-30	KN51	遺構外	石 皿	(90.0)	(115.0)	(70.0)	(343.40)
66-31	MC50	遺構外	石 皿	(123.0)	(112.0)	(36.0)	(257.80)
66-32	表採	遺構外	石 錐	(33.5)	(7.5)	(6.5)	(2.50)

第3表 泉野冷水遺跡B区出土石器計測一覧

挿図 番号	出土位置	遺構 内/外	器種	大 き さ			重量(g)
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	
69-1	SI02	遺構内	磨 石	235.0	151.0	65.5	2970.90
69-2	JO53	遺構外	石 鏃	(37.0)	11.5	4.5	(1.90)
69-3	JO53	遺構外	石 匙	(52.0)	(32.0)	(10.5)	(12.00)
69-4	JO53	遺構外	削 器	74.0	41.0	13.0	28.90

第4表 泉野冷水遺跡C区出土石器計測一覧

挿図 番号	出土位置	遺構 内/外	器種	大 き さ			重量(g)
				最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	
72-1	IF49	遺構外	石 鏃	(17.0)	13.5	3.0	(0.50)
72-2	表採	遺構外	石 鏃	(17.5)	13.0	6.0	(0.60)
72-3	IF50	遺構外	U F	43.0	49.0	10.0	17.00
72-4	IE49	遺構外	削 器	52.5	45.0	14.5	29.40
72-5	IE48	遺構外	磨製石斧	(145.0)	49.5	36.0	(493.60)
72-6	IE49	遺構外	石 皿	(140.0)	(163.0)	(47.0)	(693.90)

※( )内の数値は残存値である。RF:二次加工痕のある剥片、UF:微細剥離痕のある剥片。

# 第3章 自然科学的分析

—泉野冷水遺跡出土黒曜石試料の分析—

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 第1節 はじめに

男鹿市北浦相川字泉野に所在する泉野冷水遺跡は、縄文時代中期後半の集落跡と考えられており、土器(大木10式期のものなど)や石器が多数出土している。遺物の中には、黒曜石の剥片や原石なども比較的多量に出土しているが、遺跡の近傍には黒曜石の産地として知られている脇本があることから、それらの産地の検証が必要とされている。本報告では、これらの黒曜石試料について成分分析を行うことにより、その産地を推定する。また、成分分析とともに水和層の測定も行い、これら黒曜石試料に関する年代資料も得ることを試みる。

## 第2節 試料

試料は泉野冷水遺跡から出土した黒曜石試料41点(試料番号1~41)と脇本~船越に至る海岸で採取された黒曜石の原石1点(試料番号42)の合計42点である。遺跡から出土した試料のうち、試料番号1~9までの9点は遺構内から出土した原石であり、試料番号10~41は遺構外から出土した剥片である。

成分分析による産地推定は全点について行い、水和層の測定は25点の試料を選択した。各試料の出土位置、層位および水和層測定に選択した試料は分析結果を示した第5表に併記する。

## 第3節 分析方法

### 1 成分分析

蛍光X線分析および放射化分析による黒曜石の産地推定は近年数多く報告されている〔例えば大沢ほか(1991)など〕。特に蛍光X線分析は、測定操作が簡単で、多元素を同時に定量することが可能であることから盛んに活用されている。蛍光X線分析は、試料を非破壊で測定することも可能ではあるが、粉体により精度の高い分析値を得ることができる。今回の分析では、試料を粉体にしてガラスビードを作製するガラスビード-FP法により、 $\text{SiO}_2$ ,  $\text{TiO}_2$ ,  $\text{Al}_2\text{O}_3$ ,  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ,  $\text{MnO}$ ,  $\text{MgO}$ ,  $\text{CaO}$ ,  $\text{Na}_2\text{O}$ ,  $\text{K}_2\text{O}$ ,  $\text{P}_2\text{O}_5$ ,  $\text{Rb}$ ,  $\text{Sr}$ ,  $\text{Zr}$ の13元素を測定した。以下に処理手順を述べる。

#### a) 装置

理学電機工業社製 RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

#### b) 試料調製

試料を超音波洗浄した後、振動ミル(平工製作所製TI100; 10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎し、以下の条件でガラスビードを作成した。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率；融剤(ホウ酸リチウム) 5.000g：試料0.500g

剥離剤；LiI (溶融中1回投入)

溶融温度；1200℃ 約7分

c) 測定条件

X線管；Cr(50Kv-50mA)

スペクトル；全元素K $\alpha$

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge

検出器；F-PC,SC

計数時間；PeaK40sec,Back20sec

d) FeとRbによる黒曜石産地推定

黒曜石は流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面主産物質としてのマグマの生成過程および分化過程で化学組成の挙動が異なることが期待される。大沢ほか(1991)の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb(ルビジウム)、La(ランタン)、Ce(セリウム)、Eu(ユウロピウム)、Th(トリウム)、Sc(スカジウム)の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標成分としてコンパティブル元素であるFeとインコンパティブル元素であるRbを選択し、黒曜石の産地判定図(第73図1参照)を作成した。本判定図は大沢ら(1991)の原産地黒曜石370試料、当社保有の原産地黒曜石110試料および様々な文献を参照に計480試料以上の黒曜石の化学組成の分析データを用いて作成した。作成した判定図は縦軸にRb(ppm)、横軸にFe(%)をとると指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる(五十嵐, 未公表)。

2 水和層測定

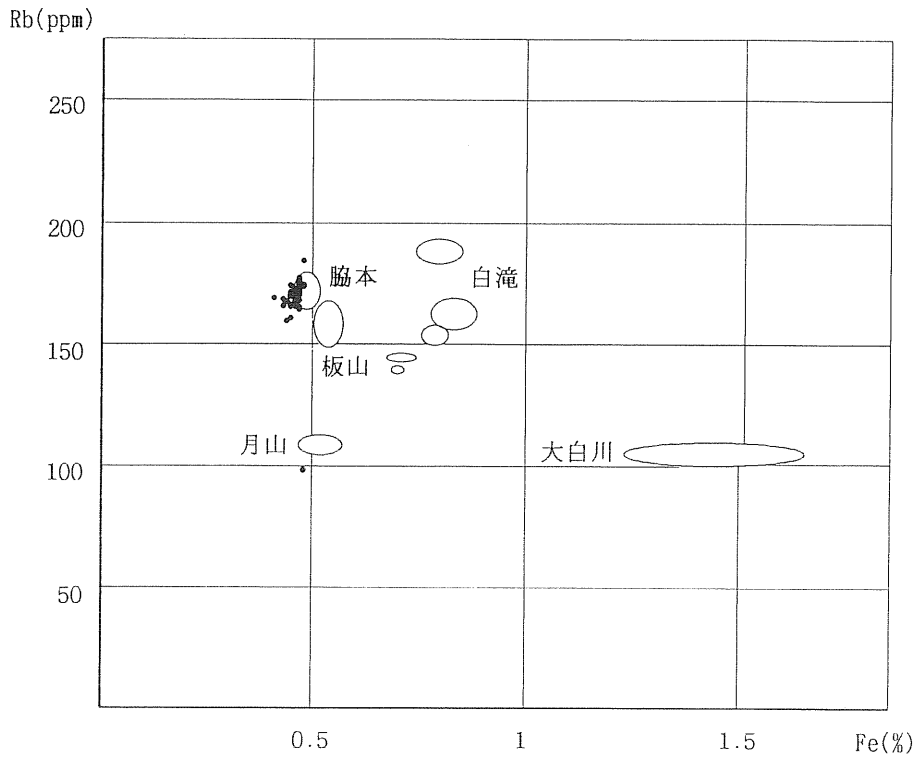
試料を樹脂に包埋し固化した後、ダイヤモンドカッターで切断、研磨して厚さ0.02mmの薄片を作製する。薄片を対物100倍(油浸)、接眼10倍の総合倍率1000倍の顕微鏡下で観察し、水和層を識別する。識別した水和層を写真撮影し、2000倍まで引き伸ばした写真上で水和層の厚さを測定した。

## 第4節 結果

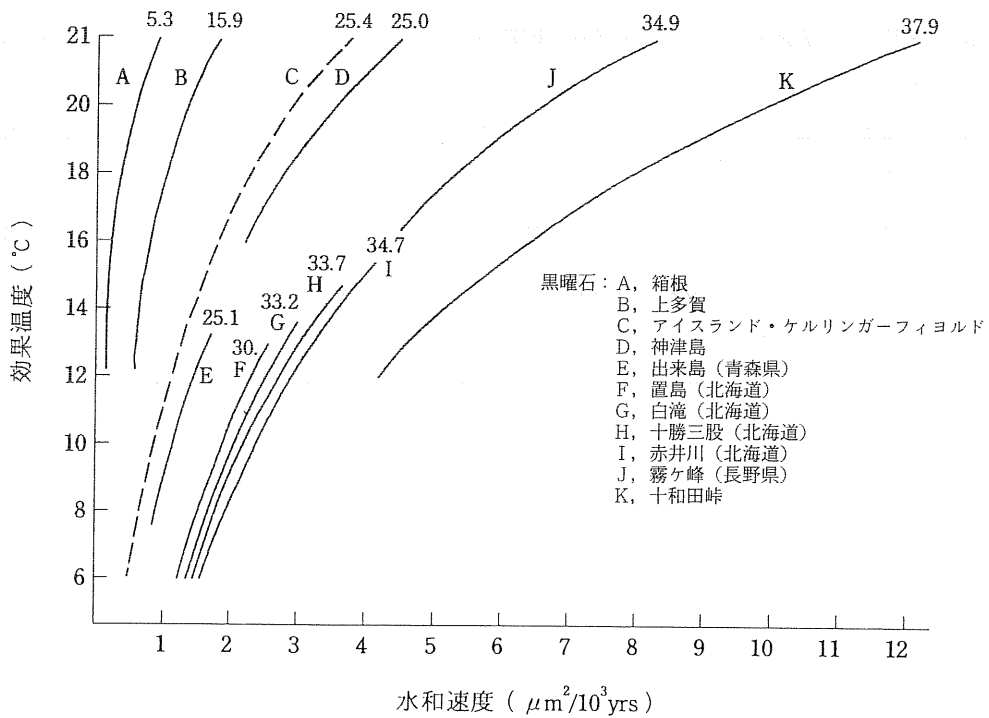
### 1 成分分析

分析結果を第5表に示し、産地判定図を第73図1に示す。なお、今回の分析では試料番号4について測定に必要な量が得られないと判断したために測定の対象とはしなかった。

産地推定した41試料のうち、39試料が「秋田県脇本海岸」産と確定される。試料番号1についても「秋田県脇本海岸」の領域からやや外れるものの、同地域産である可能性が高い。一方、試料番号32については他の試料と比べ化学組成が異なり、他の黒曜石とは異質なものと位置付けられる。試料番号32は本判定図上では産地判定外ではあるものの、おそらく「山形県月山」産であると推定される。



1. 黒曜石の産地判定図



(註) 黒曜石のカリ/アルミナ比(%)は各曲線の上に表示した。破線はFriedman and Long (1976) による室内実験の結果を示す。

2. 水和速度と効果温度の関係 (近藤, 1984)

第73図 黒曜石の産地判定図および水和速度と効果温度の関係

## 2 水和層測定

試料はいずれも石器表面の劣化が激しく、水和層も部分的に認められるのみであり、水和層の境界線も比較的不明瞭なものが多かった。その中で最も状態のよい部分を選択し、層厚を測定した。通常は多数の測定点を出して平均層厚やその標準偏差などを算出するが、今回は上述のような状態であったことから多数の測定値を取ることはできなかった。

各試料の測定値を第5表に示す。試料番号1～9までの遺構内から出土した試料では、試料番号1、3、8、9の4点が3.3～3.8 $\mu\text{m}$ の範囲にあり、試料番号2、4、5、7の4点が5.0～5.3 $\mu\text{m}$ の範囲にある。すなわち、水和層に2つのグループが存在することが示唆される。一方、遺構外出土試料では、3.0～5.5 $\mu\text{m}$ の範囲の中でばらつきがありグループの存在は見出せない。なお、遺構内試料では試料番号6の水和層層厚が31.0 $\mu\text{m}$ と他の試料に比べて突出しており、また遺構外試料では試料番号13が7.0 $\mu\text{m}$ で他の試料に比べてやや大きな値を示す。なお、海岸で採取された原石である試料番号42は1.5 $\mu\text{m}$ であり、石器試料に比べて非常に薄い。

## 第5節 考察

今回の黒曜石試料の原産地推定結果は、手近なところに適当な石材があれば、それを利用するというを検証したものといえる。それだけに「山形県月山」産と考えられる黒曜石が1点とはいえ検出されたことは、泉野冷水遺跡において何らかの事情があったことを示唆しているのかもしれない。今後、男鹿半島の縄文時代の遺跡における黒曜石の原産地分析例が蓄積されるとともに伴出した土器や石器の考古学上の解析が進めば、今回のような「山形県月山」産の意味が明らかになるかも知れない。

一方、黒曜石の水和層については、その厚さの測定により石器の年代を推定しようという試みがSuzuki(1973)や近堂ほか(1980)などに述べられている。これらによれば、水和層の層厚を測定した石器文化層と同一層準の試料の放射性炭素年代を規準にして水和層の形成する速さ(水和速度)を算出し、年代を推定している。また、水和速度を規制する重要な要素は、黒曜石の化学組成と黒曜石が埋積した後の地中の温度であるとも述べられている。したがって、水和速度を算出するためには、黒曜石の産地別および出土地域別の検量線を描かなければならない。これまでの研究例では、関東地方における信州系の黒曜石や北海道における白滝産や十勝産の黒曜石などについて検量線が描かれ、水和速度が算出されている。今回のような秋田県における脇本産の黒曜石については水和速度が算出されていないため、現時点では試料の水和層の層厚から正確な年代を算出することはできない。

ただし、近堂(1984)では、これまでに得られた成果より描かれた化学組成( $\text{K}_2\text{O}/\text{Al}_2\text{O}_3\%$ )と地中温度(効果温度)と水和速度との関係を示す曲線(第73図2)から、年代測定例のない黒曜石試料の水和速度を推定している。ここで、効果温度はSuzuki(1973)にある公式( $T_e = T_{s1} + \Delta T_e$   $T_{s1} = 2.5 + 0.96 T_a$   $T_e$ : 効果温度、 $T_{s1}$ : 地中1mの温度、 $\Delta T_e$ : 気温の年較差の指数、 $T_a$ : 年平均気温)によりその地域の年平均気温から求められ、化学組成は今回の分析結果から算出可能である。ここで、理科年表にある秋田市の年平均気温11.0 $^{\circ}\text{C}$ とSuzuki(1973)にある諏訪市の $\Delta T_e$ (秋田市と諏訪市の気温とその年較差がほぼ同様であった)の1.4から効果温度を約14.5 $^{\circ}\text{C}$ とし、今回の脇本産とした

第5表 黒曜石の成分分析結果および水和層層厚

試料番号	出土位置	遺構内/外	土層	日付	SiO <sub>2</sub> %	TiO <sub>2</sub> %	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> %	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> %	MnO %	MgO %	CaO %	Na <sub>2</sub> O %	K <sub>2</sub> O %	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> %	Rb ppm	Sr ppm	Zr ppm	推定原産地	Fe* %	Rb* ppm	水和層層厚 μm	水和層年代 ** 年前
1	SKF02	遺構内	倒木痕	980625	76.96	0.07	13.77	0.58	0.12	0.25	0.76	3.51	3.95	0.03	169.0	88.7	71.3	(脇本)	0.41	169.0	3.3	2720
2	SKF04	遺構内	RQ06	980623	76.48	0.07	13.28	0.63	0.13	0.24	0.89	3.94	4.31	0.03	167.6	88.7	64.0	脇本	0.44	167.6	5.3	7020
3	SI05	遺構内	覆土中	980910	75.94	0.07	13.08	0.66	0.14	0.31	0.90	4.23	4.64	0.03	167.4	88.6	67.9	脇本	0.46	167.4	3.5	3060
4	SI15	遺構内	確認面	980826	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	SI21	遺構内	プラン内	981013	76.09	0.07	13.08	0.66	0.14	0.28	0.88	4.18	4.59	0.03	166.9	87.0	65.7	脇本	0.46	166.9	5.0	6250
6	SI32	遺構内	RQ15	981030	76.01	0.07	13.10	0.67	0.14	0.25	0.89	4.22	4.62	0.03	166.7	86.5	62.4	脇本	0.47	166.7	31.0	
7	SI34	遺構内	北東	981012	76.17	0.07	13.11	0.67	0.14	0.25	0.87	4.15	4.54	0.03	165.5	87.5	65.4	脇本	0.47	165.5	5.0	6250
8	SI42	遺構内	覆土中	981116	76.29	0.07	13.09	0.64	0.14	0.25	0.87	4.09	4.53	0.03	157.8	85.7	62.8	脇本	0.45	157.8	3.8	3610
9	SI23-P2	遺構内	覆土中	981111	76.58	0.07	13.12	0.63	0.13	0.27	0.84	3.94	4.39	0.03	161.1	86.3	66.9	脇本	0.44	161.1	3.3	2720
10	KM54	遺構外	表土(1層)	980618	76.69	0.07	13.27	0.62	0.13	0.29	0.82	3.82	4.26	0.03	165.9	87.9	67.5	脇本	0.43	165.9	5.0	6250
11	KN52	遺構外	表土(1層)	980619	76.36	0.07	13.10	0.65	0.14	0.24	0.86	4.04	4.51	0.03	161.5	85.9	65.0	脇本	0.45	161.5		12250
12	KN53	遺構外	I層下	980910	76.52	0.07	13.11	0.64	0.14	0.20	0.84	4.04	4.41	0.03	166.1	87.7	66.5	脇本	0.45	166.1	5.5	7560
13	KP53	遺構外	盛り土	980804	76.36	0.07	12.98	0.66	0.14	0.26	0.88	4.00	4.62	0.03	165.7	84.6	66.6	脇本	0.46	165.7	7.0	12250
14	LA50	遺構外	II層	980623	75.99	0.07	12.92	0.66	0.14	0.31	0.90	4.24	4.72	0.03	172.6	91.2	70.1	脇本	0.46	172.6		
15	LE50	遺構外	II層	980623	75.91	0.07	12.87	0.66	0.15	0.29	0.92	4.36	4.74	0.03	170.7	90.3	69.0	脇本	0.46	170.7		
16	LM50	遺構外	表土(1層)	980729	76.11	0.07	12.82	0.67	0.15	0.29	0.91	4.18	4.77	0.03	176.2	89.1	72.5	脇本	0.47	176.2		
17	LO48	遺構外	表土(1層)	980721	76.07	0.07	12.78	0.67	0.15	0.33	0.90	4.32	4.69	0.03	169.6	86.5	67.1	脇本	0.47	169.9	4.8	5760
18	LP51	遺構外	表土(1層)	980731	76.33	0.07	12.78	0.66	0.14	0.31	0.89	4.15	4.64	0.03	166.6	88.5	67.6	脇本	0.46	166.6		
19	LQ50	遺構外	III層	980824	76.07	0.07	12.75	0.67	0.15	0.31	0.92	4.26	4.76	0.03	173.5	91.5	67.7	脇本	0.47	173.5		
20	LQ51	遺構外	表土(1層)	980730	76.00	0.07	12.70	0.67	0.15	0.27	0.93	4.43	4.76	0.03	172.2	89.8	71.3	脇本	0.47	172.2		
21	LQ52	遺構外	I層	981111	76.21	0.07	12.70	0.66	0.14	0.28	0.90	4.33	4.67	0.03	169.4	90.4	69.8	脇本	0.46	169.4	4.0	4000
22	LS50	遺構外	II層	981005	76.06	0.07	12.68	0.67	0.14	0.26	0.91	4.44	4.74	0.03	174.7	90.7	69.7	脇本	0.47	174.7		
23	LS51	遺構外	表土(1層)	980729	76.61	0.07	12.71	0.65	0.14	0.30	0.87	4.06	4.56	0.03	163.6	87.3	65.3	脇本	0.45	163.6	3.8	3610
24	LS52	遺構外	表土(1層)	980729	76.03	0.07	12.68	0.68	0.15	0.24	0.91	4.45	4.75	0.03	175.0	90.5	70.1	脇本	0.48	175.0		
25	LT51	遺構外	II層	980804	76.10	0.07	12.68	0.67	0.14	0.29	0.91	4.39	4.74	0.03	173.9	90.6	68.7	脇本	0.47	173.9		
26	MA51	遺構外	表土(1層)	980727	76.13	0.07	12.63	0.69	0.15	0.26	0.90	4.43	4.72	0.03	173.0	91.9	66.9	脇本	0.48	173.0	4.5	5060
27	MB51	遺構外	表土(1層)	980727	76.37	0.07	12.88	0.65	0.14	0.28	0.87	4.17	4.54	0.03	173.7	91.0	73.3	脇本	0.45	173.7		
28	MB52	遺構外	表土(1層)	980724	76.38	0.07	12.70	0.66	0.14	0.27	0.89	4.18	4.67	0.03	169.9	88.3	66.3	脇本	0.46	169.9	3.5	3060
29	MC48	遺構外	—	981028	76.24	0.07	12.68	0.67	0.15	0.27	0.90	4.28	4.71	0.03	171.8	92.3	67.7	脇本	0.47	171.8		
30	MC49	遺構外	—	981029	76.04	0.07	12.65	0.67	0.14	0.29	0.91	4.44	4.75	0.03	175.4	91.8	69.2	脇本	0.47	175.4		
31	MC51	遺構外	表土(1層)	980727	77.15	0.07	13.15	0.61	0.13	0.23	0.80	4.71	4.12	0.03	168.2	89.1	66.2	脇本	0.43	168.2		
32	MC52	遺構外	表土(1層)	980729	77.16	0.08	12.81	0.70	0.10	0.34	0.67	4.42	3.66	0.06	98.6	89.1	60.3	(月山)	0.49	98.6	4.0	*** 7000
33	ML52	遺構外	耕作土(1層)	980722	76.72	0.07	12.76	0.64	0.14	0.25	0.86	4.04	4.49	0.03	171.1	88.2	70.6	脇本	0.45	171.1	5.0	6250
34	ML53	遺構外	耕作土(1層)	980722	76.30	0.07	12.69	0.67	0.14	0.26	0.90	4.27	4.68	0.03	174.0	89.4	69.9	脇本	0.47	174.0		
35	MM51	遺構外	耕作土(1層)	980722	76.49	0.07	12.68	0.68	0.14	0.25	0.88	4.18	4.61	0.03	172.1	86.7	68.9	脇本	0.47	172.1	4.5	5060
36	MM53	遺構外	表採	980706	76.29	0.07	12.60	0.67	0.14	0.25	0.89	4.40	4.65	0.03	172.8	89.2	68.6	脇本	0.47	172.8	5.0	6250
37	MQ50	遺構外	耕作土(1層)	980723	76.70	0.07	12.72	0.65	0.14	0.25	0.86	4.06	4.52	0.03	164.9	88.2	67.3	脇本	0.45	164.9		
38	ID48	遺構外	表土(1層)	980903	76.30	0.07	12.59	0.67	0.15	0.26	0.90	4.39	4.63	0.03	165.2	93.1	66.3	脇本	0.47	165.2	3.0	2250
39	IE49	遺構外	表土(1層)	980902	75.91	0.08	12.41	0.69	0.15	0.28	0.93	4.19	5.33	0.03	183.5	96.4	68.9	脇本	0.48	183.5		
40	IF49	遺構外	表土(1層)	980907	76.71	0.07	12.47	0.67	0.14	0.27	0.88	4.12	4.65	0.03	167.9	87.7	65.7	脇本	0.47	167.9	4.5	5060
41	IF50	遺構外	表土(1層)	980904	76.01	0.08	12.37	0.67	0.15	0.31	0.93	4.61	4.84	0.03	176.3	94.9	74.5	脇本	0.47	176.3	3.0	2250
42	脇本~船越海岸採取	遺跡外	比較用サンプル原石	981118	76.95	0.07	12.59	0.65	0.14	0.23	0.84	4.09	4.41	0.03	171.8	88.7	70.3	脇本	0.45	171.8	1.5	560

\* 産地判定図参考値

\*\* 水和速度 4.0 μm<sup>2</sup>/1000年で計算。

\*\*\* 水和速度 2.3 μm<sup>2</sup>/1000年で計算。

試料の $K_2O/Al_2O_3\%$ の平均値35.6から、近堂(1984)の曲線に従い、泉野冷水遺跡における脇本産の黒曜石の水和速度を約 $4 \mu m^2/1000年$ としてみた。この水和速度と水和層の層厚から各試料の年代を算出すると第5表に示す値となる。遺構内出土試料については、結果の項で述べた水和層の層厚の2つのグループは年代に直すと約3,000~3,500年前のグループと6,000~7,000年前のグループとに分かれる。また、遺構外出土の試料については、約2,500年前から約8,000年前までの非常に広い年代幅の中にばらつく。このような状況は、縄文時代中期後半とされている発掘調査所見とは調和しない。調和しないことの説明として現時点で考えられることは、第一に各試料における水和層の状態があまり良くなかった(すなわち境界線が不明瞭)ことがあげられる。これにより、写真上での測定の誤差が比較的大きくなってしまったと考えられる。これに加えて脇本産の黒曜石の化学組成が水和速度の大きくなる値であったことと水和年代が層厚の2乗に比例することから、厚さの差がより大きな年代の差になって現れたといえる。一方で、今回の測定精度では様々な要因を考慮すれば水和層層厚 $\pm 1 \mu m$ の幅で考えてもよい。その場合、水和層層厚 $3 \sim 5 \mu m$ の試料はほぼ同時期になり、その年代も中間の $4 \mu m$ を取れば4,000年前に集約することができ、発掘調査所見とほぼ一致する。

なお、試料番号6の特異な水和層の厚さは、化学組成以外の特別な条件によるものかあるいは切断方向(斜めに切断すると厚くなる)によるものかと考えられるが、現時点では説明できない。また、試料番号13については、他の試料よりも古い時期の遺物である可能性がある。試料番号32については、化学組成が他の試料とは異なるため、水和速度も上述の近堂(1984)の曲線から $2.3 \mu m^2/1000年$ とした。したがって、水和層の層厚は $4 \mu m$ であるが、年代は他の試料よりも3000年ほど古くなる。さらに、海岸で採取された原石の試料番号42が礫となった時期は、他の黒曜石試料が示す年代よりもかなり新しい時期(500年前頃?)である可能性がある。

今回の水和層の測定については、測定方法および年代値への換算方法などにおいていくつかの課題があり、今後これらの課題が解決され、より精度の高い測定をすることができれば、今回の測定結果も再吟味することができるであろう。

#### 《引用文献》

五十嵐俊雄(未公表) 化学組成を用いた黒曜石の産地判別. 火山岩の化学—黒曜石の微量成分による産地同定のための岩石化学—, 22p. (\*平成12年度刊行予定の小社発行雑誌「PALYNO vol.4」に掲載予定)

近堂祐弘(1984) 黒曜石水和層による年代測定. 古文化財の自然科学的研究, p.817-821, 同朋舎.

近堂祐弘・勝井義雄・戸村健児・町田 洋・鈴木正男・小野 昭(1980) 黒曜石石器の年代測定と産地分析. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究, 文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」, p.68-81.

大沢眞澄・渡辺賢寿・齋藤昭・二宮修治・綱干守・藁科実・友廣秀尚(1991) 黒曜石の化学組成、遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として, 平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書, 69p.

Suzuki, M. (1973) Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan PART I-Frame work for Reconstructing Prehistoric Human Activity in Obsidian. Journal of the Faculty of Science, The University of Tokyo Sec. V, Vol. IV, Part 3, p.241-318.



## 第4章 まとめ

泉野冷水遺跡は、男鹿半島北岸の海岸段丘を開析してできた標高約40mの台地上に営まれた遺跡である。調査は遺跡西側からA・B・C区と分けて実施した。調査面積は5,000㎡である。

調査の結果、A区から竪穴住居跡17軒、土坑7基、フラスコ状土坑5基、陥し穴1基、土器埋設遺構5基、性格不明遺構1基の計36遺構を検出した。B区からは竪穴住居跡1軒、土坑1基の計2遺構を検出した。C区からは竪穴住居跡1軒、土坑1基、土器埋設遺構1基の計3遺構を検出した。本遺跡全体では41遺構である。

これらの遺構・遺物は、主に縄文時代に属するものであり、それ以外の時代に属するものは、ほとんど見られなかった。以下、遺構の種類ごとに本遺跡の様相を概観し、出土土器について述べる。

竪穴住居跡は、19軒のうち竪穴状のものを8軒、炉跡のみのものを11軒検出した。特にA区中央部の西側では7軒が集中して検出された。これらはほとんどが複式炉であり、土器埋設部+燃焼部+前庭部で構成されるもの(A区S I 01・05・21・32・34・38、B区S I 02)と、土器埋設部+燃焼部で構成されるもの(A区S I 10・13・15・16・23・25・41~43、C区S I 01)の2種類に大別できる。また、後世の攪乱等によって不明な部分もあるが、土器埋設石囲炉の例(A区S I 24・60)もある。

他には土坑9基、フラスコ状土坑5基を検出した。どちらも竪穴住居跡に近接した場所に位置しており、集落遺跡としての特徴を示している。特にSKF12は、内部から出土した多くの土器片から、隣接する竪穴住居跡との時期的関連が認められた。

土器埋設遺構は6基検出した。このうちSR03とSR07は、各々S I 01と05住居跡プラン内で検出したものである。しかし、それら竪穴住居跡との時期的な関係は判別できなかった。

陥し穴は、調査区西側と沢部分の境界で1基検出した。このことは遺跡の一部が狩猟場として利用され、機能していたことを示している。

その他の遺構としてSX14を検出した。しかし、その性格を特定できなかった。礫を配した掘り方の下部に焼土面を確認したため、住居に伴う炉の可能性も考慮したが判別できなかった。

遺物はコンテナ32箱分が出土した。本遺跡の時期を最も良く表している資料は、住居跡の覆土や床面から出土した土器、複式炉の土器埋設部・燃焼部から出土した土器、フラスコ状土坑および土器埋設遺構から出土した土器である。これらは縄文時代中期後葉～末葉に位置付けられ、大木9式期から10式期の土器および中の平Ⅲ式土器に比定されるものである。以下、その主要な土器について述べる。

大木9式から10式に移行する時期の土器は、胴上半部が外反する形態で、その部位が文様帯となつて、区画文としていわゆるアルファベット文等が描かれる(第31図6、第46図88・89、第48図118)。

大木10式土器になると、先述の9～10式においてアルファベット文などを構成した区画文の沈線あるいは隆起線が連結し、幅広の区画文に変化する。文様帯も上半部から下方へ広がる傾向が見られ、全体の器形も胴下半部が膨らみを増すようになる(第38図50、第42図68、第57図1)。

これに対し、中の平Ⅲ式は外反する口縁部～頸部が幅広く無文となり、胴部以下に大木9式と共通の懸垂文が描かれる土器であるが(第35図29、第40図56・57、第45図81・82、第50図136、第68図1)、胴部から懸垂文が欠落するもの(第45図79・80)、口縁部～頸部にも縄文が施されるもの(第48図117)

も見られた。

以上のことから、本遺跡では大木9式期から10式期の土器と中の平Ⅲ式土器に比定される土器が、相半ばして存在し、縄文時代中期後半における東北地方南部と北部の土器様相を共に表す内容となっている。これは、昭和49(1974)年に調査された泉野遺跡の出土遺物と時期的に重複する。ただし、泉野遺跡で出土した沈線による葉脈状文の施された土器片や円筒上層式土器は、本遺跡では出土しなかった。

このほか調査区内からは、地文が縄文のみの粗製土器や摩滅の著しい土器片などが多数出土している。それらの時期を特定することは難しいが、層位的関係や共伴した遺物などから、おおむね縄文時代中期後半に属するものと考えられる。

泉野冷水遺跡は、A～C区とも遺跡の立地する台地南側の縁辺部にあたり、検出した遺構は昭和49年の泉野遺跡発掘調査の際に検出された遺構と同一台地上に分布していることが判明した。よって、調査区の北側には、同時代の集落跡遺構や遺物が存在する可能性がある。

### 《参考文献》

- 男鹿市教育委員会『泉野遺跡発掘調査概報』男鹿市文化財調査報告書第1集 昭和51(1976)年
- 秋田県教育委員会『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第63集 昭和54(1979)年
- 秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第82集 昭和56(1981)年
- 秋田県教育委員会『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－上熊ノ沢遺跡－』  
秋田県文化財調査報告書第213集 平成3(1991)年
- 鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26 昭和59(1984)年
- 鹿角市教育委員会『天戸森の土器－天戸森遺跡出土縄文土器図録－』鹿角市文化財調査資料41 平成2(1990)年
- 青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県文化財調査報告書第25集 昭和50年(1975年)
- 宮城県教育委員会『上深沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第52集 昭和53(1978)年
- 宮城県教育委員会『菅生田遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ－』宮城県文化財調査報告書第92集 昭和57(1982)年
- 二本松市教育委員会『上原遺跡概報』二本松市文化財調査報告書 昭和44(1969)年
- 福島県教育委員会「塩沢上原A遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第47集 1975年
- 福島県教育委員会『84塩沢上原A遺跡発掘調査概報』福島県立博物館調査報告書第10集 昭和60(1985)年
- 福島県教育委員会『法正尻遺跡－東北横断自動車道遺跡調査報告11－』上・中・下巻 福島県文化財調査報告書第243集 平成2(1991)年
- 梅宮 茂「複式炉文化論」『福島考古』第15号 福島県考古学会 昭和50(1975)年
- 丹羽 茂「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 昭和56(1981)年
- 日黒 良明「住居の炉」『縄文文化の研究』5 雄山閣 昭和56(1981)年
- 森 幸彦「複式炉小考」『論集しのぶ考古－日黒良明先生頌寿記念－』論集しのぶ考古刊行会 平成8(1996)年

なか の い せき  
中 野 遺 跡

(遺跡略号：4 NN)

所在地：秋田県男鹿市北浦相川字中野11外

調査期間：平成10年（1998年）9月7日～10月2日

調査面積：1,600㎡

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概観

中野遺跡は、真山から発して日本海に注ぐ相川と大増川に挟まれた、北向きの舌状段丘面先端部に立地する。遺跡の西に接して市道冷水1号線(林道)が南北に通過しており、この市道を北に向かえば宇賀神社や相川集落につながり、南に向かえば真山神社や真山・安全寺集落に至る。

発掘調査区の平面形は不整な楕円形を呈し、東西方向に長く南北方向に短い。調査面積は1,600㎡である。標高は約43mであり、調査区西側の谷下を流れる相川を挟んだ対面の段丘面には、泉野冷水遺跡が位置し、調査区東側の谷下を流れる大増川河口の海岸には、中世城館の染川城が位置する。

本調査区はかつて畑地として利用され、戦後に松や杉などが植林されたことから、現況は一面が山林であった。主要地方道入道崎寒風山線の計画路線が決定したのち、新発見の遺跡として調査が行われることとなった。その後、平成9(1997)年の範囲確認調査の実施に先立って、路線内の樹木は伐採された。

## 第2節 調査の方法

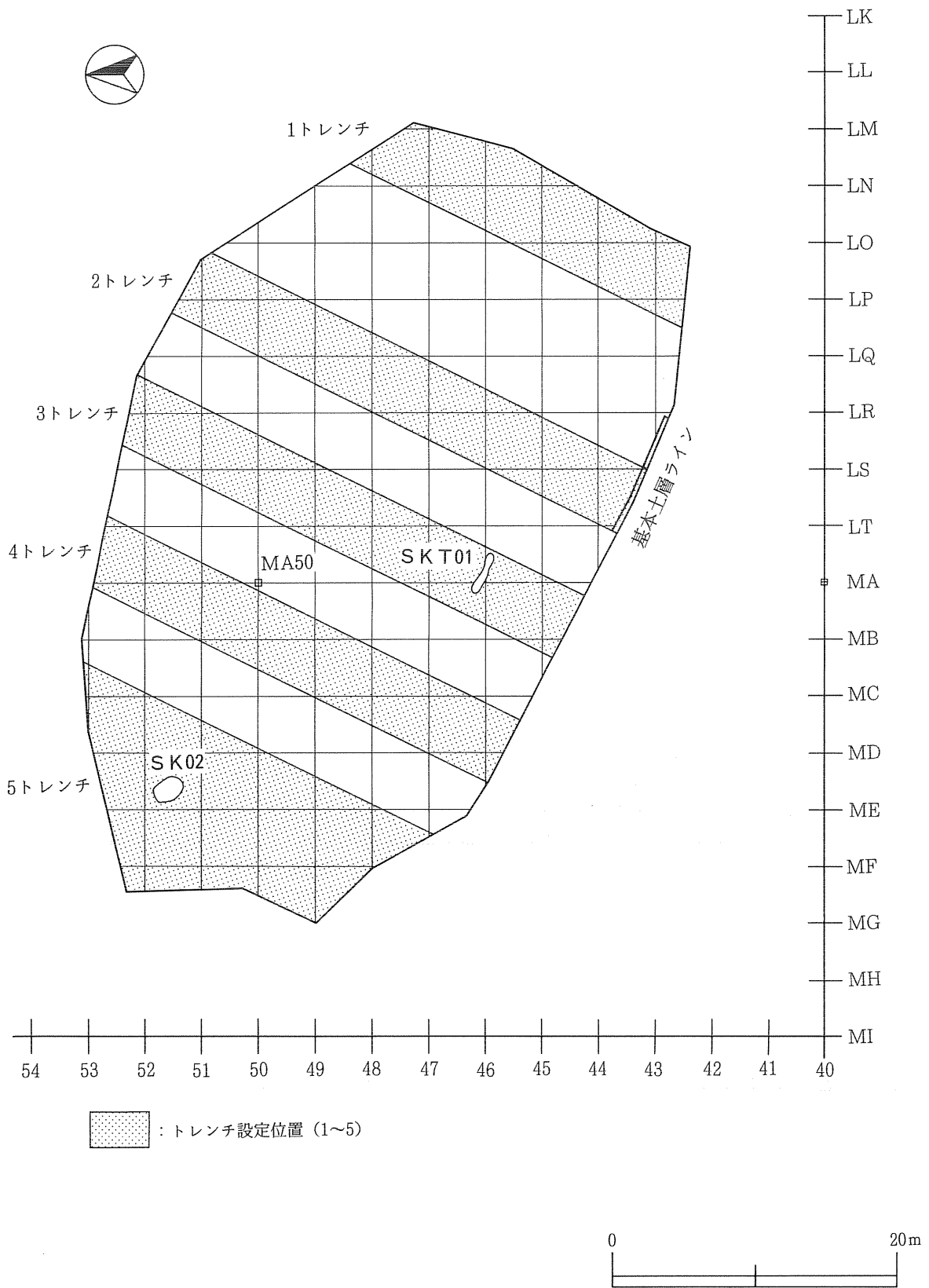
本遺跡は以前山林だったため、調査区全体に多数の切り株が残存していた。よって、調査の方法は、発掘調査期間が短いことや、泉野冷水遺跡との並行発掘調査であることなどの諸条件から、これらの切り株をすべて人力で処理することは調査工程上不可能と判断し、事前に重機を用いて表土除去を行った。この表土除去の実施後、トレンチを設定して人力で掘り下げるトレンチ調査法を採用した。その際は、平成9(1997)年の範囲確認調査結果をふまえ、明らかに遺構遺物が希薄な地点を避けてトレンチを設定し、調査を行った(第74図)。

遺構の検出については、基本的に泉野冷水遺跡と同様のグリッド法を採用した。調査区内に打設済みの主要地方道入道崎寒風山線工事用の中心杭(STA.No.31+14.36杭)を基点とし、この杭から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設けて4m四方の方眼杭を設定した。基点となった中心杭にはMA50の呼称を与え、以後の各杭に、東から西に向かって東西方向を表すL L……L T・MA……MGというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す42……49・50……53という二桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m四方の方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

## 第3節 調査の経過

中野遺跡の発掘調査は9月7日から10月2日の期間、泉野冷水遺跡の発掘調査と並行して行った。調査期間中に台風が通過するなど天候には恵まれなかったものの、無事故・無災害で予定期間内に調査を終了することができた。

9月7日、中野遺跡の発掘調査を開始した。工事路線内に現場テントを組み立てて完成後、発掘調査



第74図 中野遺跡遺構配置図

器材をテントに搬入した。また、調査前の遺跡近景写真を撮影し、南北の工事路線幅杭とセンター杭を確認、これに基づき調査区的全周囲に安全対策を施した。

9月8日、各トレンチを設定して粗掘りを開始した。これと併行してトランシットによるグリッド杭の打設を行った。午後、陥し穴1基と土坑1基を検出し、それぞれSKT01とSK02の名称を付した。

9月11日、第1・2番トレンチの粗掘りが完了する。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

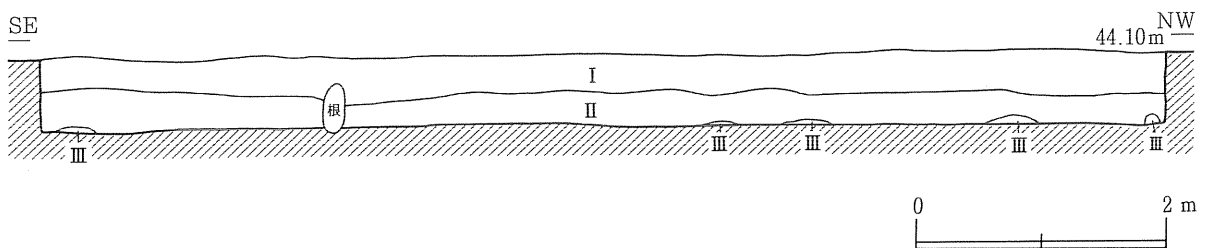
9月14日、台風5号の接近による強風と大雨のため、現場の発掘作業を一時中止した。この台風によって、調査区内および調査区に通ずる林道上に多数の木が倒れた。それら倒木は翌15日にすべて撤去した。

9月18日、第3～5番トレンチの粗掘りを完了した。以後、検出遺構の精査と遺構確認精査の作業に移行した。

9月29日、SKT01陥し穴の調査を終了した。

9月30日、SK02土坑の調査を終了した。本日まで遺構確認精査を継続してきたが、これ以外に遺構は確認できなかった。

10月2日、すべての検出遺構の調査を完了し、遺跡の調査終了状況写真を撮影した。また、調査区全体と陥し穴・土坑など深掘り箇所安全対策を施して、中野遺跡の発掘調査を終了した。翌週より、調査員・作業員ともに並行して発掘調査中の泉野冷水遺跡へ再び合流した。



第75図 中野遺跡基本土層図

## 第2章 調査の記録

### 第1節 基本層序

遺跡の基本層序は、L R43グリッドからL T43グリッドの間で観察した(第75図)。基本的に3層に分かれる。Ⅰ層は暗褐色土(10Y R3/3)、Ⅱ層は褐色土(10Y R4/4)、Ⅲ層は褐色土(10Y R4/6:地山)である。このうち遺構の確認はⅡ層上面で行った。

### 第2節 検出遺構と遺物

#### 1 検出遺構

発掘調査の結果、中野遺跡で検出した遺構は陥し穴1基、土坑1基の計2遺構である。

##### (1) 陥し穴

###### S K T01陥し穴 (第76図、図版44)

MA45・46、MB45・46グリッドにて検出した。平面形は、細長い楕円形の溝状を呈し、規模は長軸3.04m、短軸0.60m、深さ0.80mである。覆土は6層に分けられ、遺構内から遺物は出土しなかった。

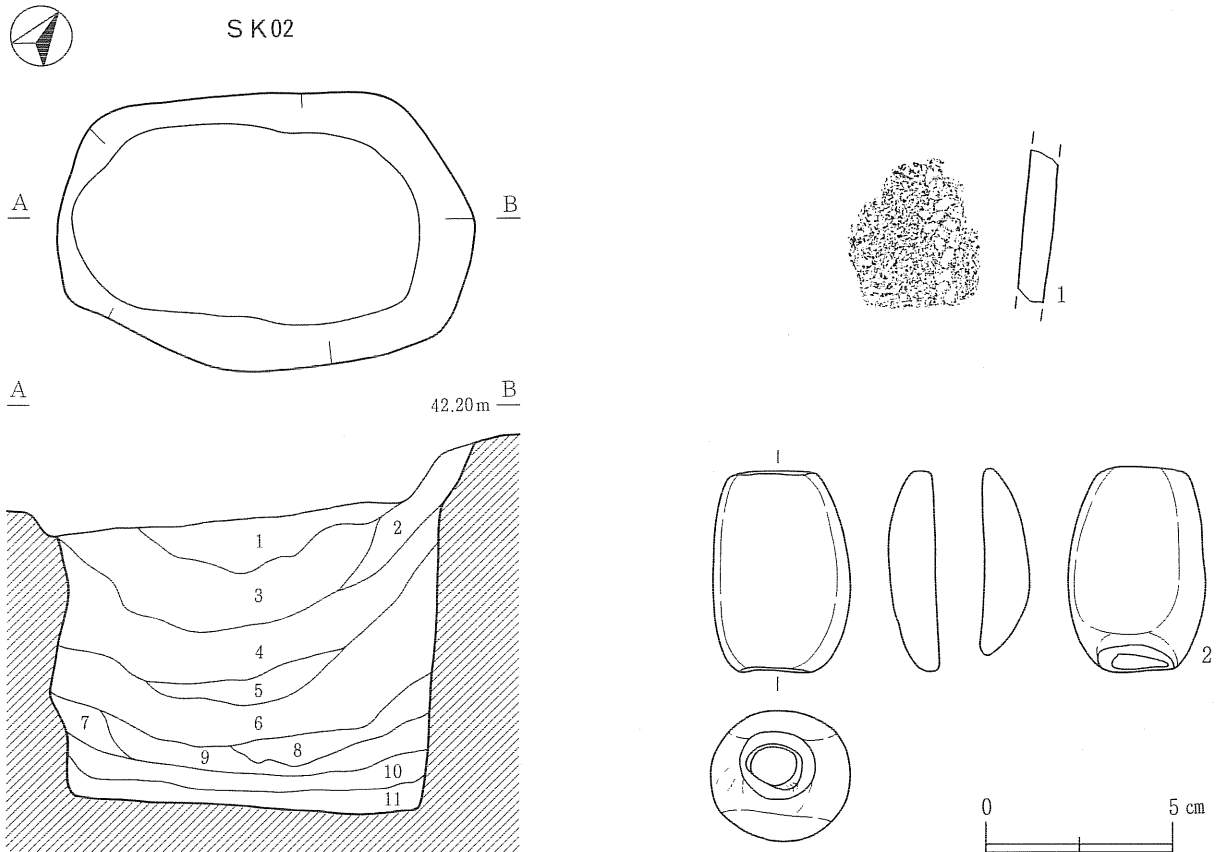
##### (2) 土坑

###### S K 02土坑 (第76図、図版45)

ME51グリッドにて検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸2.22m、短軸1.47m、深さ1.73mである。覆土は11層に分けられ、遺構内から遺物は出土しなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

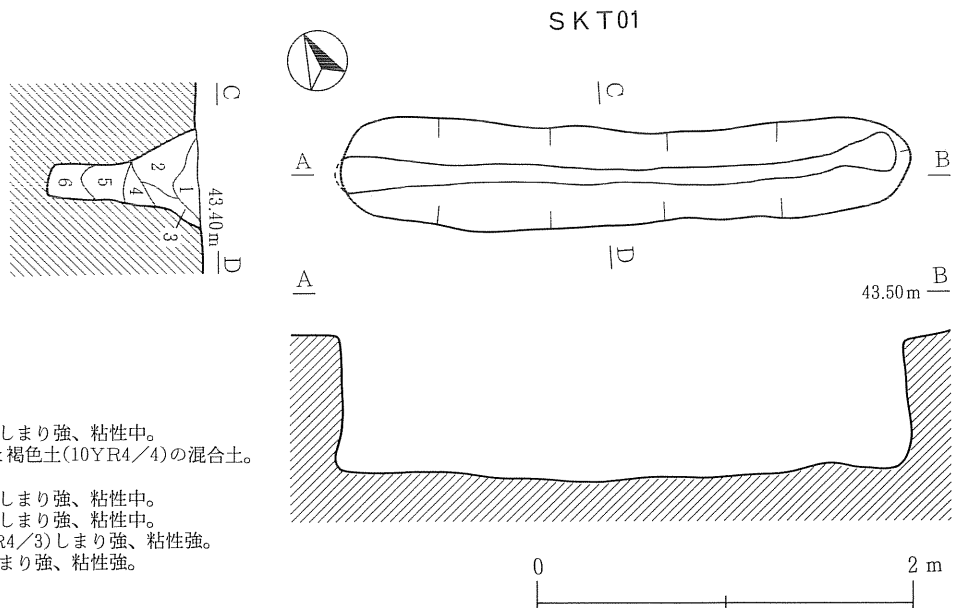
#### 2 出土遺物(第76図)

第76図1・2の縄文土器、土錘が遺構外から出土した。1の縄文土器は、摩滅が著しいがRL縄文が間をあけて縦位回転施文されている。2の土錘は、泉野冷水遺跡出土の土錘と同様、きわめて新しい時代の所産と観察される。



SK02 土坑 (A-B)

1. 黒褐色土 (10YR2/3)しまり中、粘性弱。
2. 暗褐色土 (10YR3/4)しまり弱、粘性弱。
3. 暗褐色土 (10YR3/3)しまり中、粘性弱。
4. 褐色土 (10YR4/4)しまり中、粘性弱。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)しまり弱、粘性弱。
6. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)しまり弱、粘性弱。
7. 褐色土 (10YR4/4)しまり弱、粘性弱。
8. 明褐色土 (7.5YR5/8)しまり弱、粘性弱。
9. 褐色土 (10YR4/6)しまり弱、粘性弱。
10. 褐色土 (10YR4/4)しまり中、粘性中。砂質土を含む。
11. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)しまり強、粘性中。砂質土を含む。



SKT01 陥し穴 (A-B)

1. 黒褐色土 (10YR2/3)しまり強、粘性中。
2. 暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/4)の混合土。しまり強、粘性中。
3. 暗褐色土 (10YR3/3)しまり強、粘性中。
4. 暗褐色土 (10YR3/4)しまり強、粘性中。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)しまり強、粘性強。
6. 褐色土 (10YR4/4)しまり強、粘性強。

第76図 SK02土坑、SKT01陥し穴、遺構外出土土器・土製品



## 第3章 まとめ

調査の結果、中野遺跡では土坑1基、陥し穴1基の計2基の遺構を検出した。SK02土坑は調査区全体の北西に位置し、深さが1.9mと非常に深い。SKT01陥し穴は溝状の形態を成し、この1基が調査区中央南側にて単独で確認されたのみであった。また、本遺跡では遺物がほとんど出土せず、僅かに縄文時代の土器片1点と土錘1点が出土したに止まった。

以上、検出した遺構の種類から、中野遺跡は狩猟場としての性格を有していると言える。また、僅かながら出土した遺物から、遺跡の時期は縄文時代であると判断される。

中野遺跡は地形上、相川と大增川に挟まれた標高約43mの海成段丘上に立地しており、遺跡の西側段丘下を流れる相川の対岸には泉野冷水遺跡が立地する。なかでも、泉野冷水遺跡C区は相川の直上にあり中野遺跡と非常に近い距離に位置する。中野遺跡と泉野冷水遺跡は、出土した遺物から同じ縄文時代に共存した遺跡であると言える。既述の通り、泉野冷水遺跡の主要な性格は集落跡であると考えられ、さらに昭和49(1974)年に男鹿市教育委員会が調査した泉野遺跡も、この泉野冷水遺跡C区の真北に位置しており、やはり集落跡としての性格を有している。これら隣接する同時代の遺跡からも、中野遺跡は、泉野遺跡や泉野冷水遺跡などの集落に居住した人々が狩猟場として利用した場所であったと考えられる。

### 《参考文献》

秋田県教育委員会「大畑潜沢Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ-北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡・北田山田ヶ沢Ⅱ

遺跡・大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡-』秋田県文化財調査報告書第205集 平成3(1991)年

今村啓爾「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2 雄山閣 昭和58(1983)年

田村壮一「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 昭和62(1987)年

坂本真弓・杉野森淳子「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター 平成9(1997)年



空から見た泉野冷水遺跡・中野遺跡(南→北)



1. 泉野冷水遺跡・中野遺跡遠景 (西→東)



2. 泉野冷水遺跡A区近景 (西→東)



1. 泉野冷水遺跡A区作業風景（北東→南西）



2. 泉野冷水遺跡A区作業風景（北西→南東）



1. 泉野冷水遺跡B区遠景 (東→西)



2. 泉野冷水遺跡C区遠景 (東→西)



1. S I 01 竪穴住居跡 (北→南)



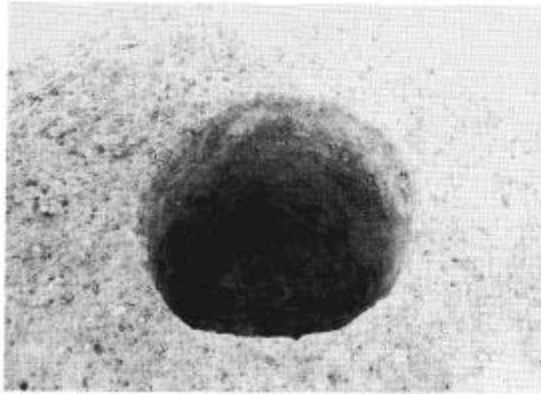
2. S I 01 竪穴住居跡炉 (東→西)



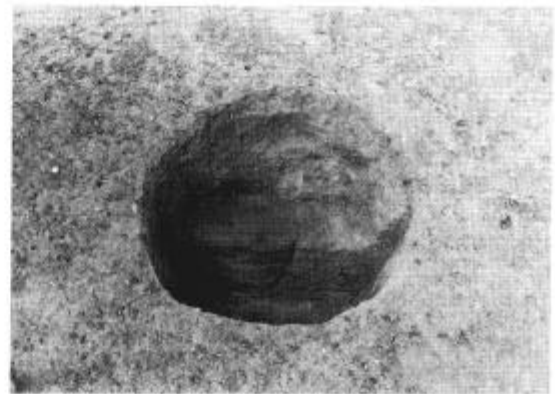
1. S I 01竪穴住居跡炉(北→南)



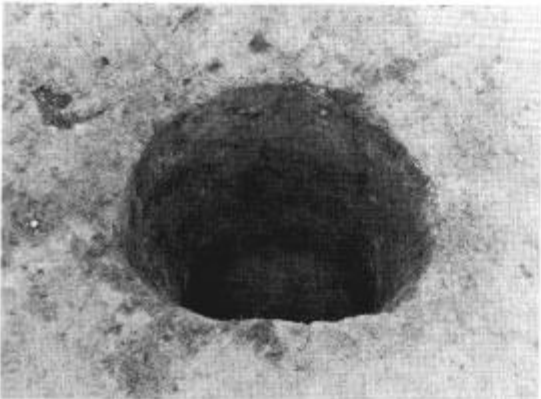
2. S I 01竪穴住居跡炉埋設土器(北東→南西)



1. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P1 (東→西)



2. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P1 断面 (東→西)



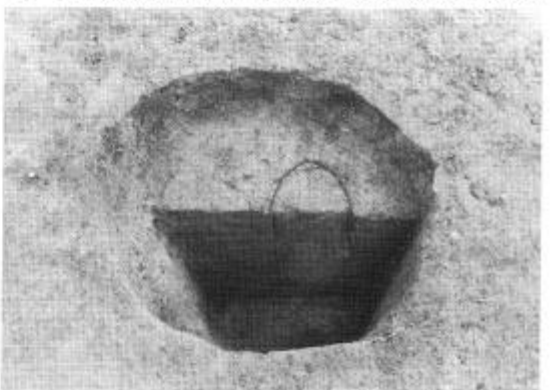
3. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P2 (南東→北西)



4. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P2 断面 (南東→北西)



5. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P3 (東→西)



6. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P3 断面 (東→西)



7. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P4 (南→北)



8. S I 01 竪穴住居跡-柱穴P4 断面 (南→北)





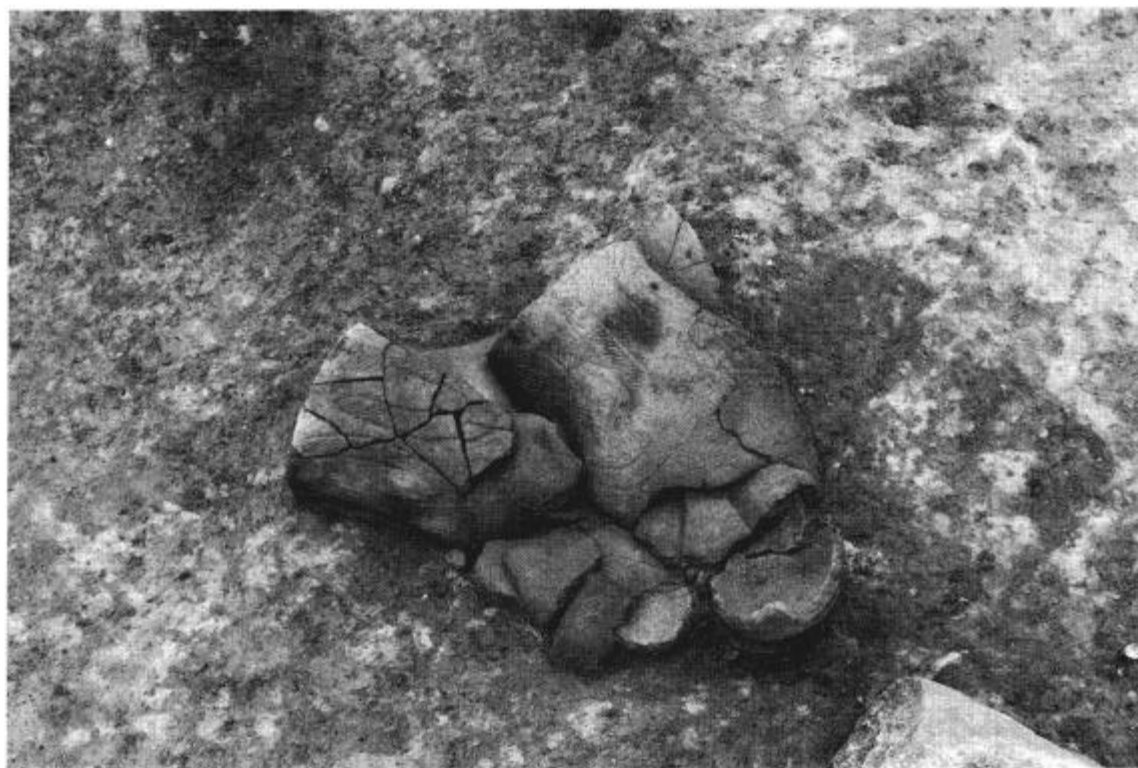
1. S I 05 竪穴住居跡 (北→南)



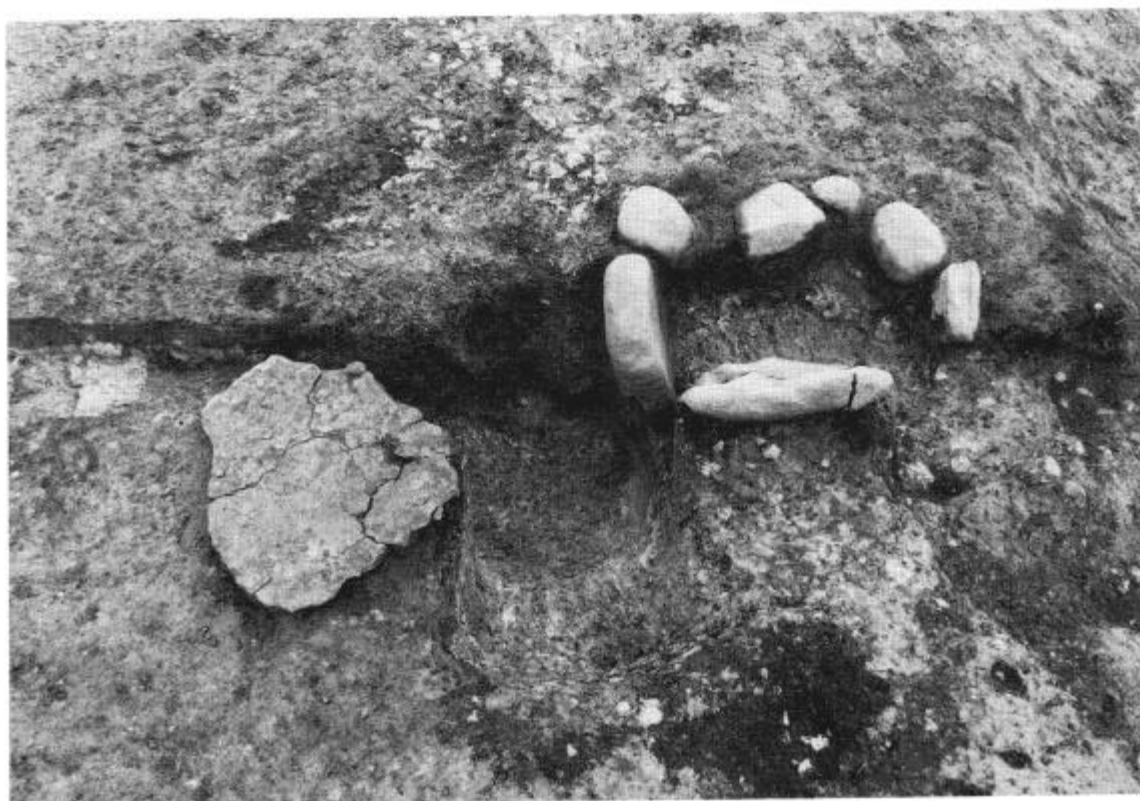
2. S I 05 竪穴住居跡炉 (南→北)



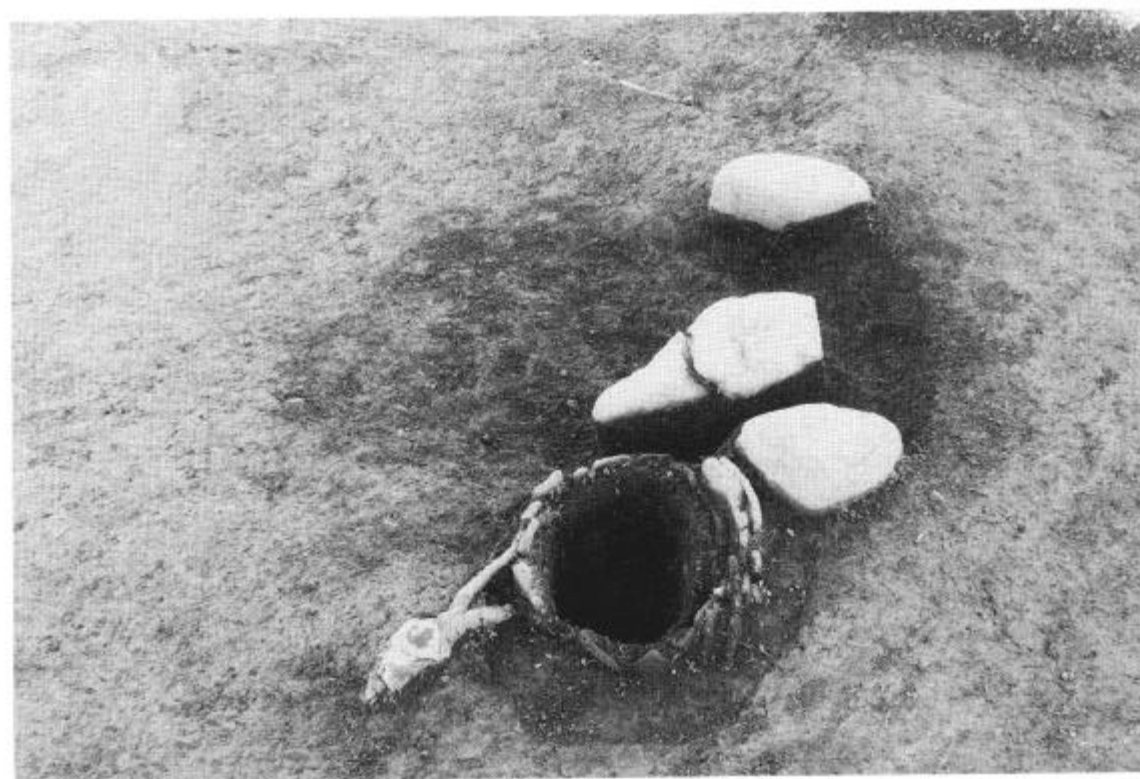
1. S I 05 竪穴住居跡炉 (北→南)



2. S I 05 竪穴住居跡出土土器 (南→北)



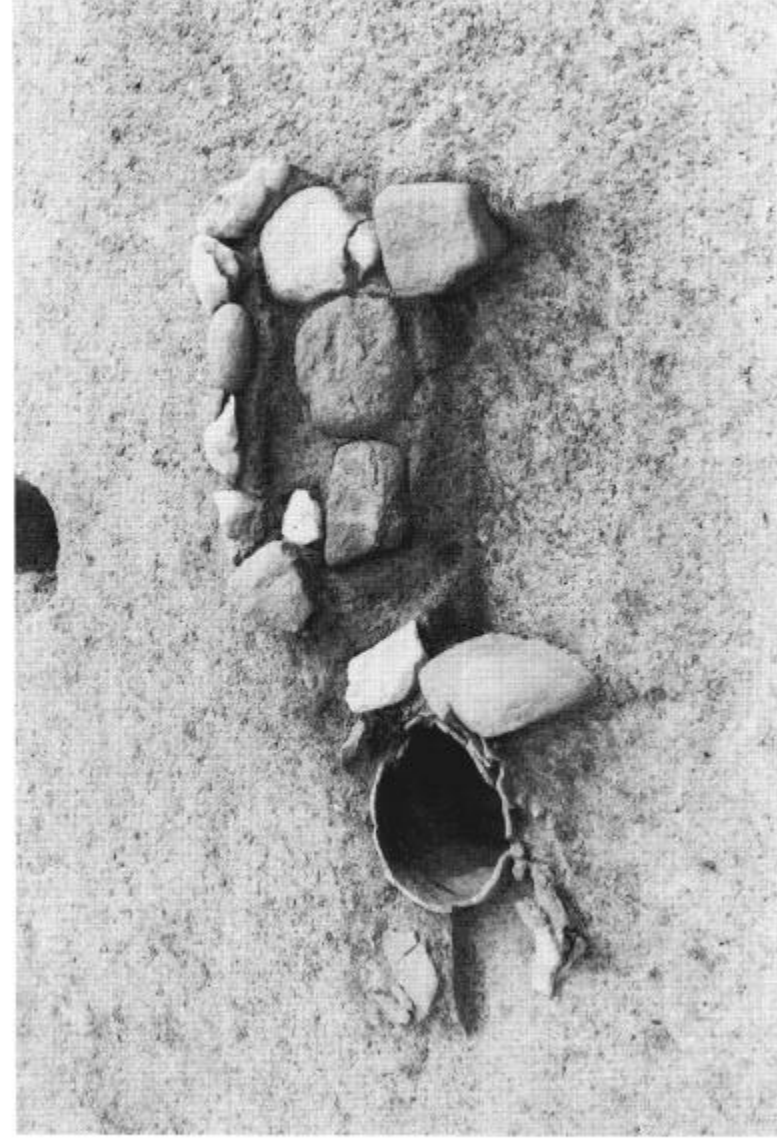
1. S I 10 竪穴住居跡炉 (南東→北西)



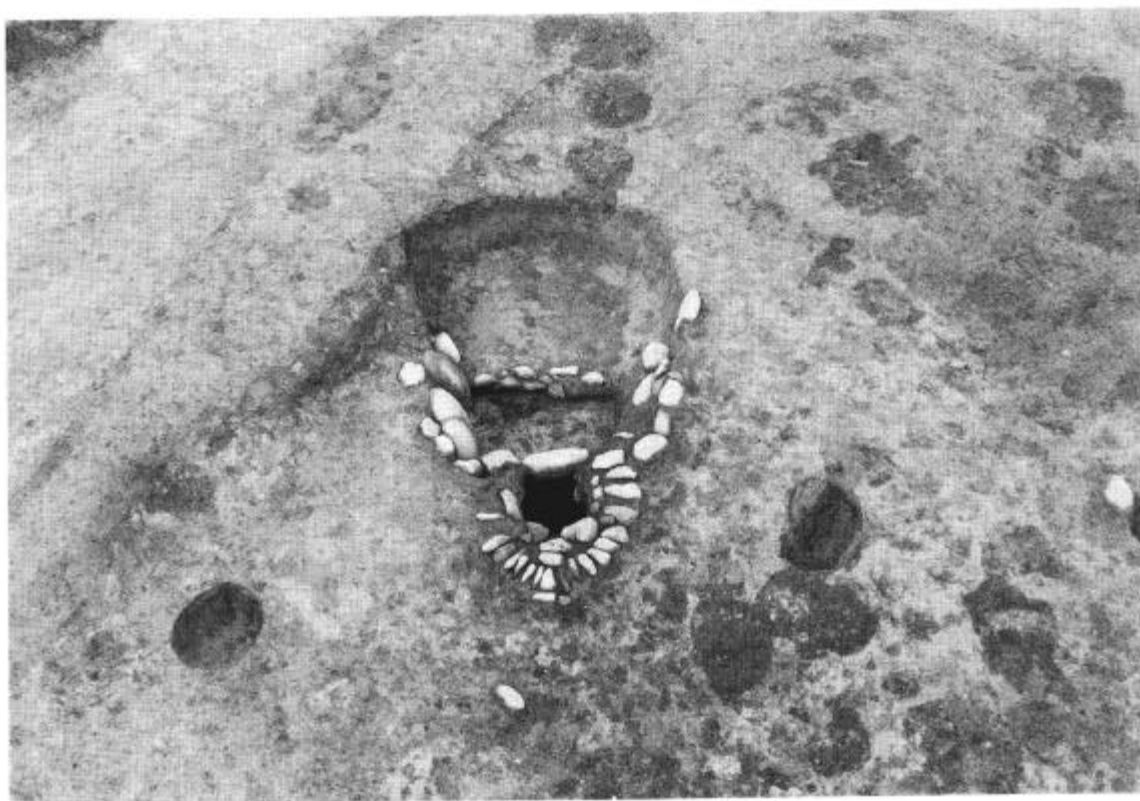
2. S I 13 竪穴住居跡炉 (西→東)



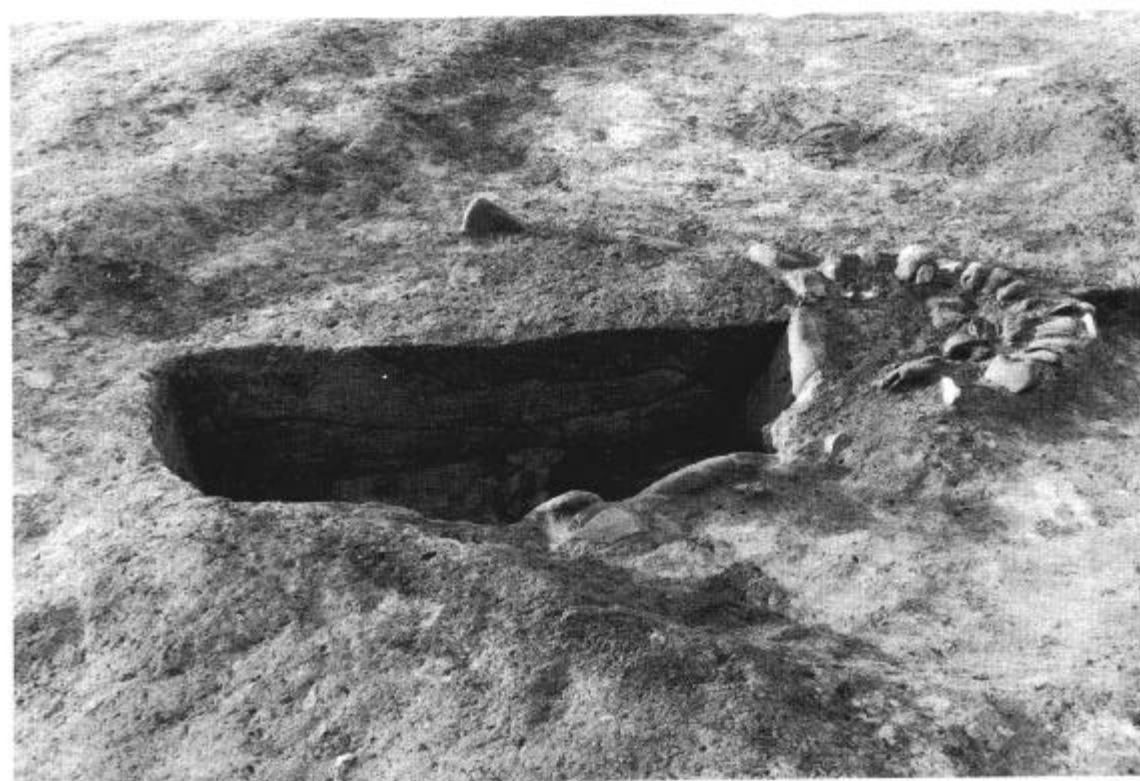
1. S I 15 竪穴住居跡炉 (南→北)



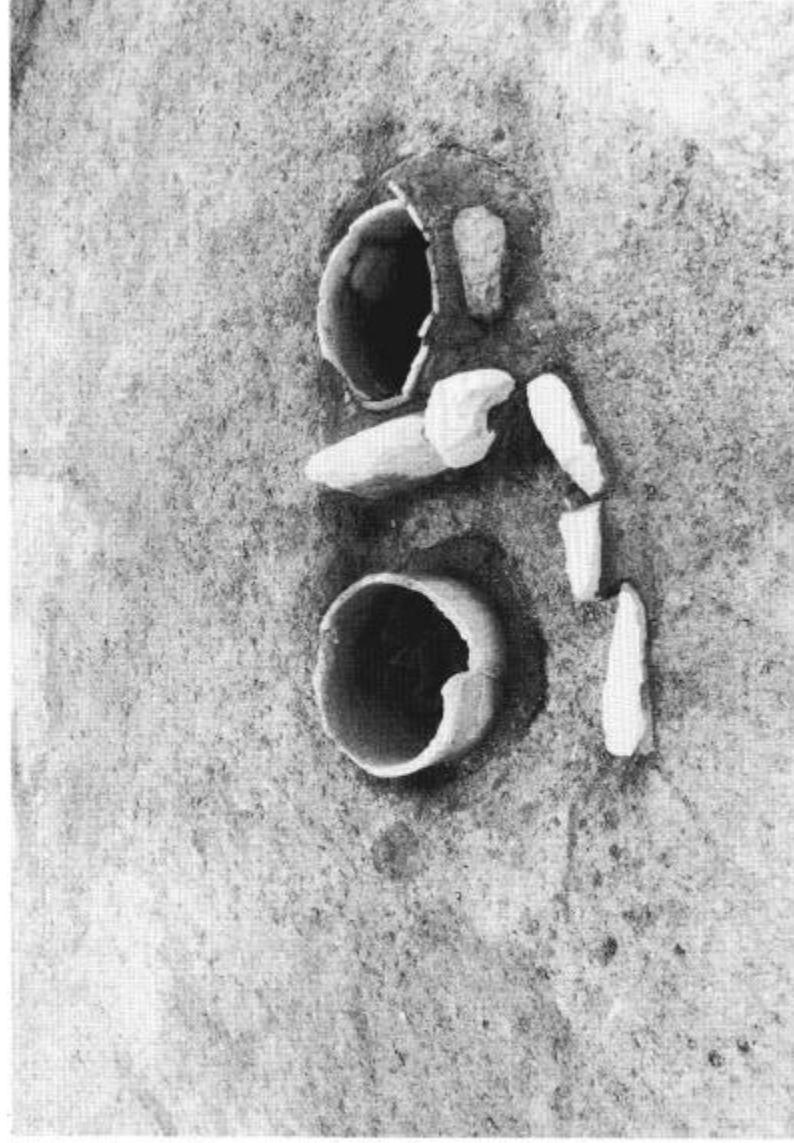
2. S I 16 竪穴住居跡炉 (西→東)



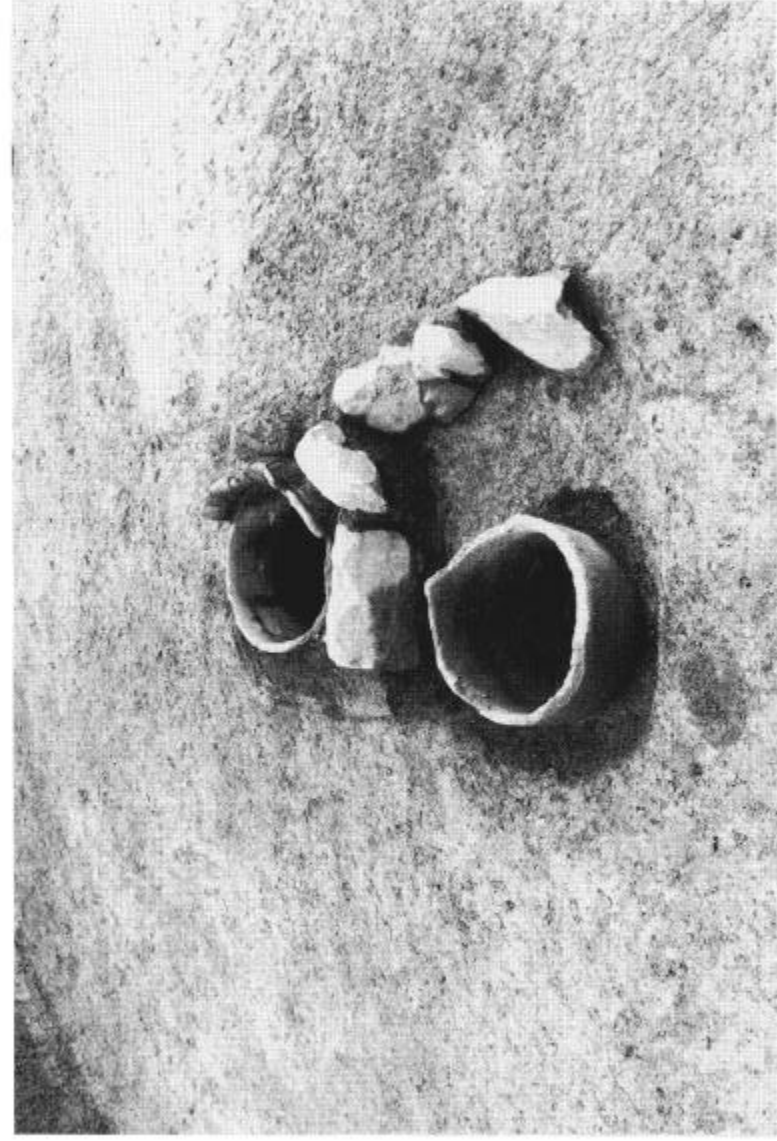
1. S I 21 竪穴住居跡炉 (北東→南西)



2. S I 21 竪穴住居跡炉 (南東→北西)



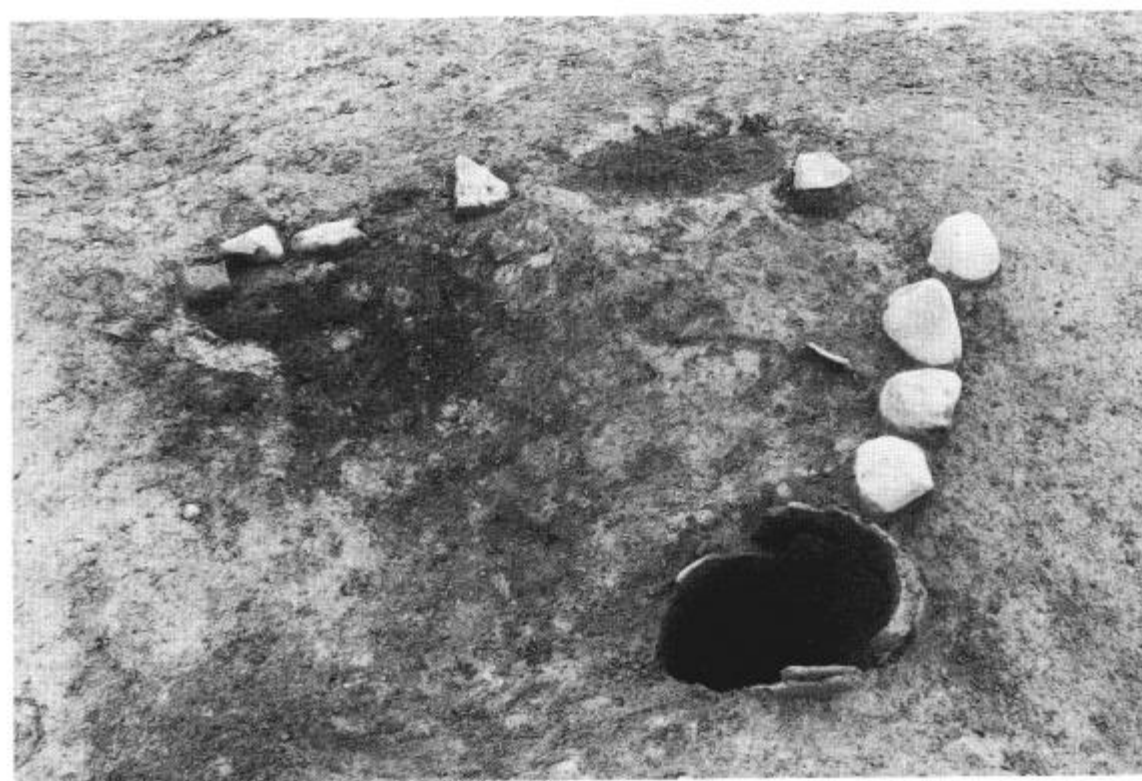
1. S I 23 竪穴住居跡炉 (南東→北西)



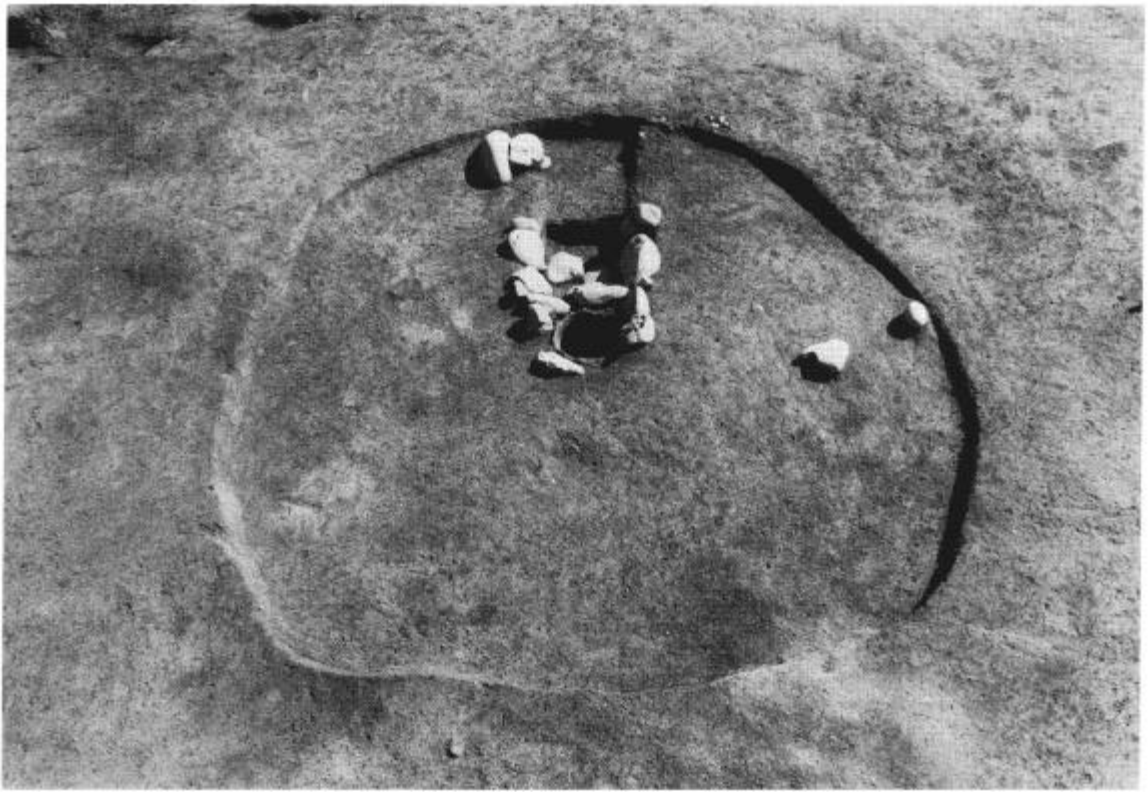
2. S I 23 竪穴住居跡炉 (南西→北東)



1. S I 24・25・41 竪穴住居跡炉 (北東→南西)



2. S I 25・41 竪穴住居跡炉 (北東→南西)

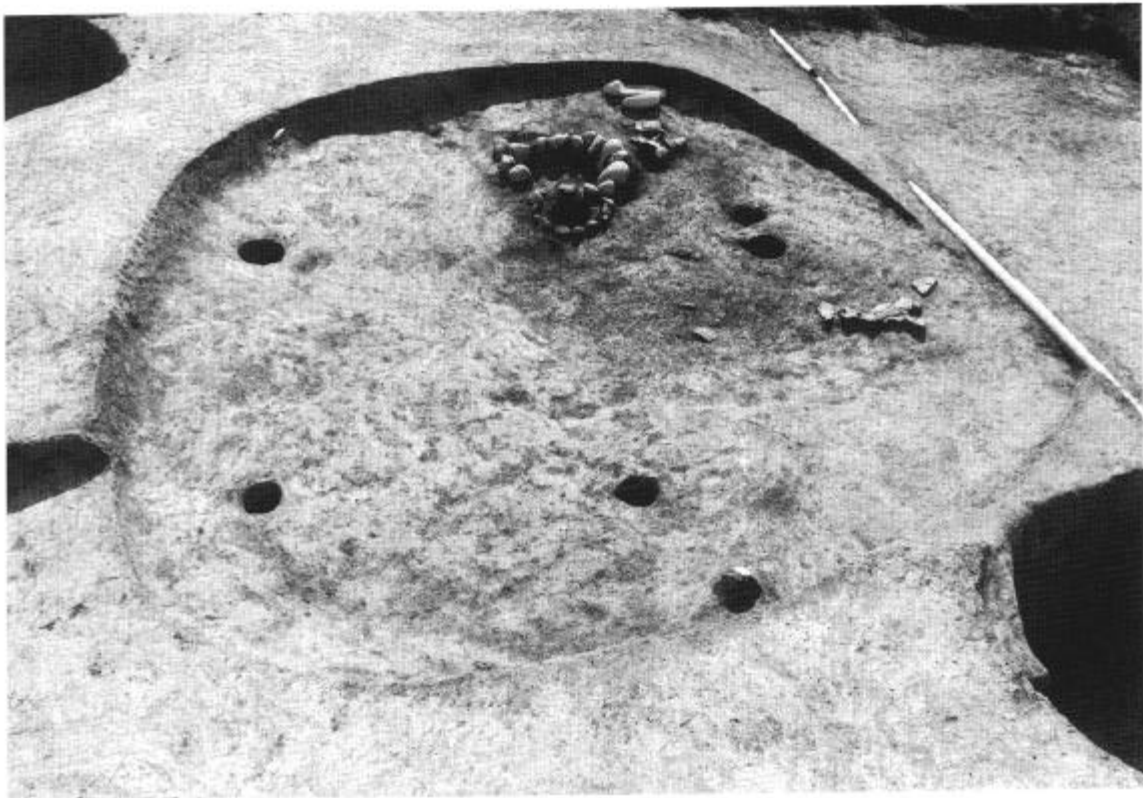


1. S I 32 竪穴住居跡 (北西→南東)

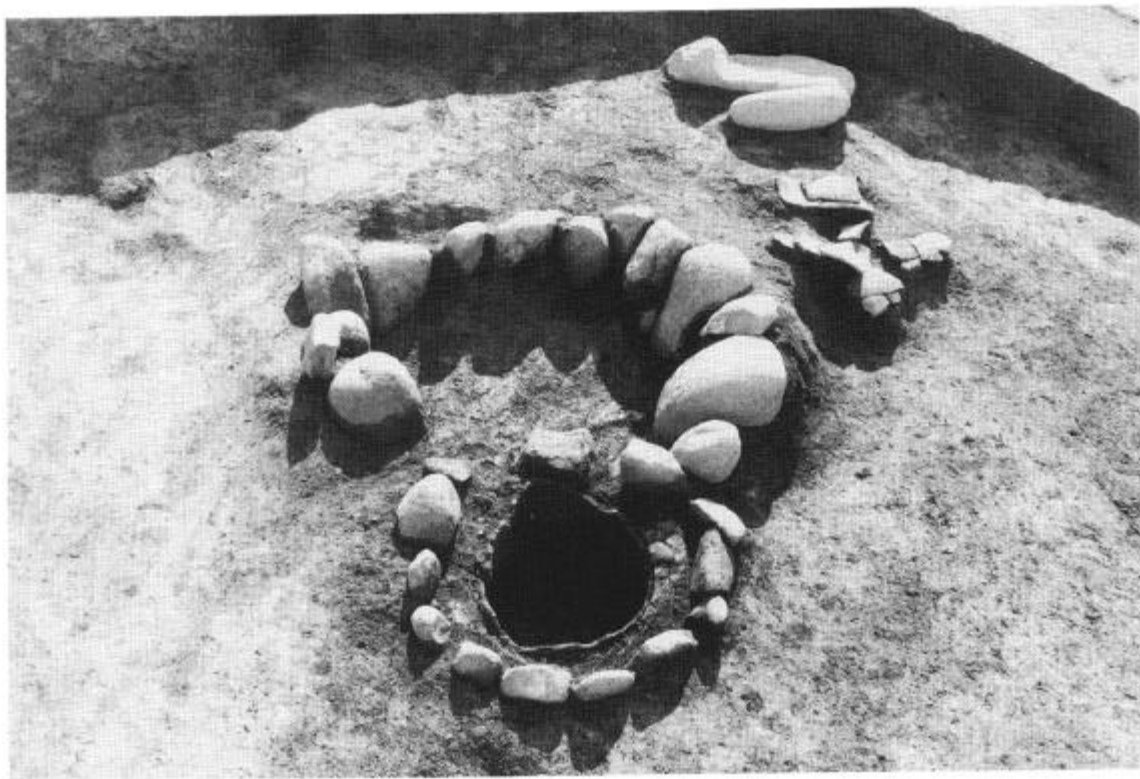


2. S I 32 竪穴住居跡炉 (北西→南東)

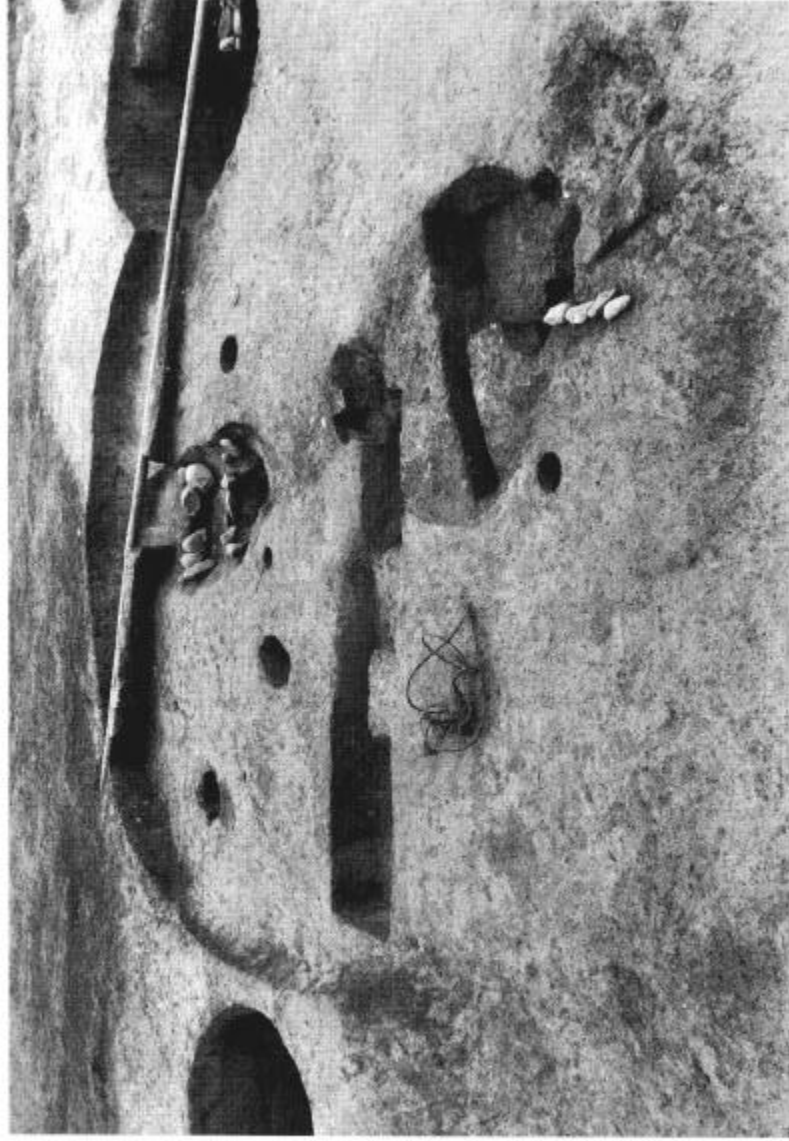




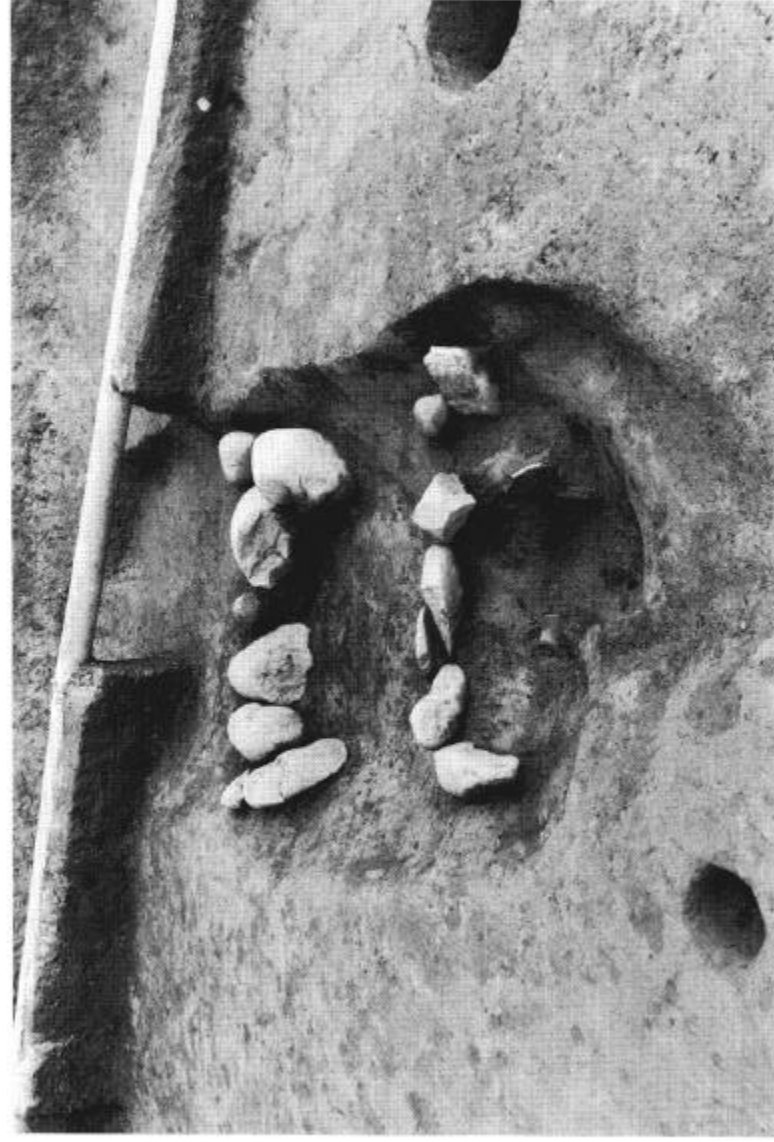
1. S I 34 竪穴住居跡 (北→南)



2. S I 34 竪穴住居跡炉 (北→南)



1. S I 38 竪穴住居跡 (西→東)



2. S I 38 竪穴住居跡 (西→東)



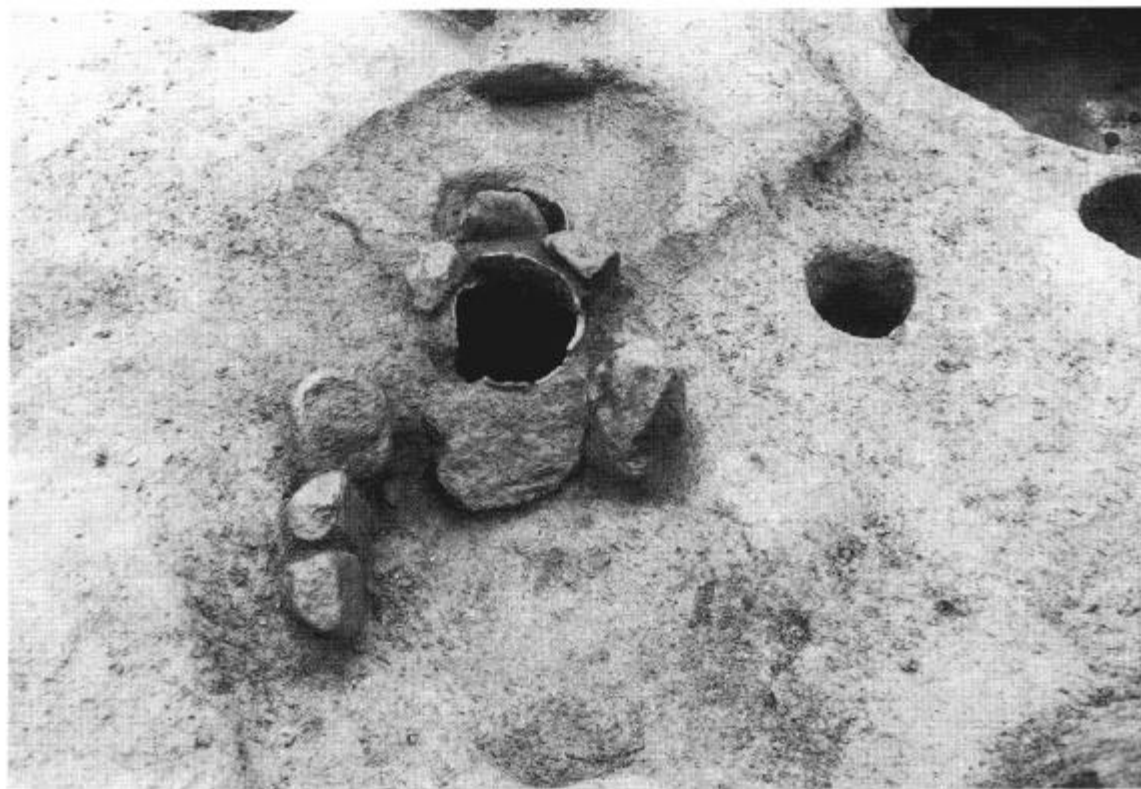
1. S I 42・43 竪穴住居跡、S K F 02 フラスコ状土坑 (東→西)



2. S I 42・43 竪穴住居跡炉 (西→東)



3. S I 42・43 竪穴住居跡炉 (東→西)



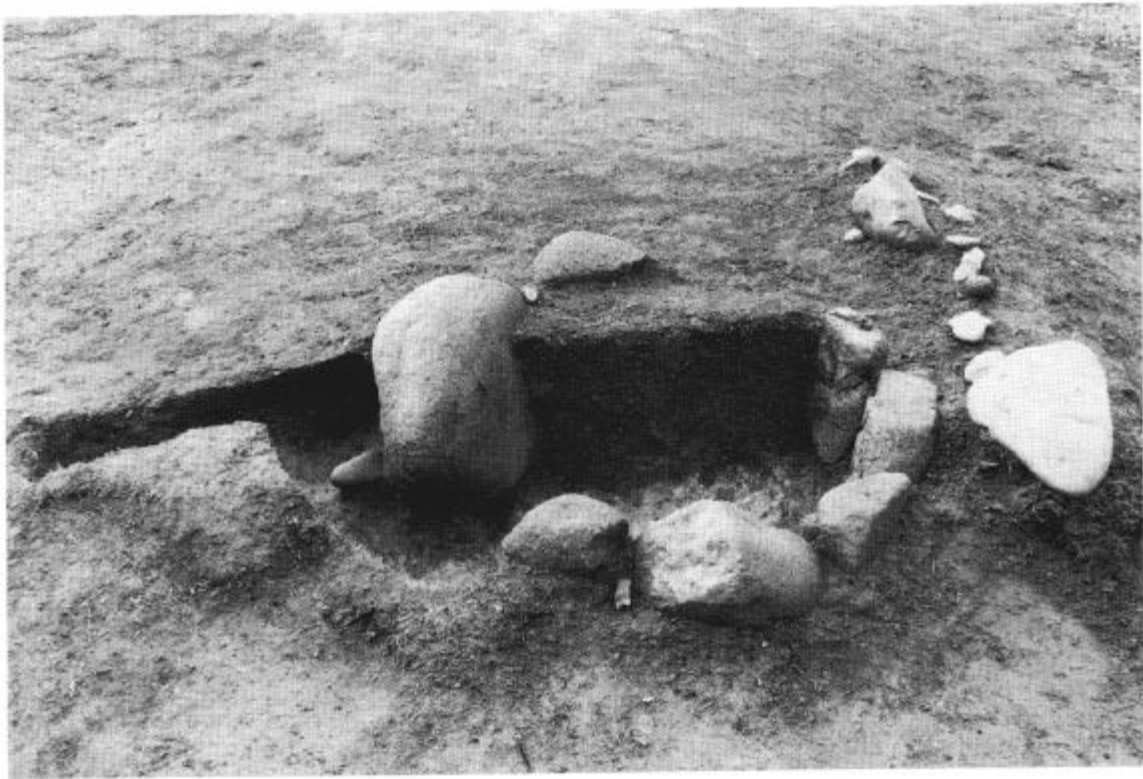
1. S I 42 竪穴住居跡炉 (東→西)



2. S I 43 竪穴住居跡炉 (西→東)



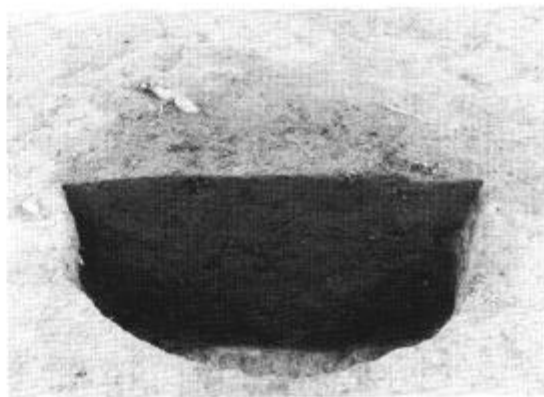
1. S I 60 竪穴住居跡炉 (西→東)



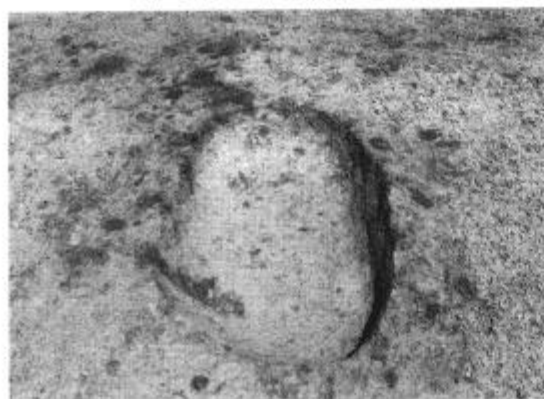
2. S X 14 (南→北)



1. SK17土坑 (南西→北東)



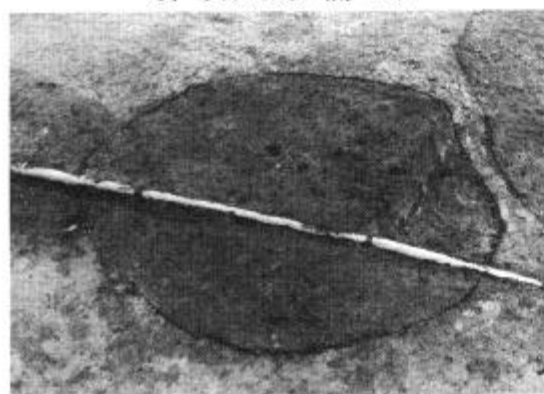
2. SK17土坑断面 (南西→北東)



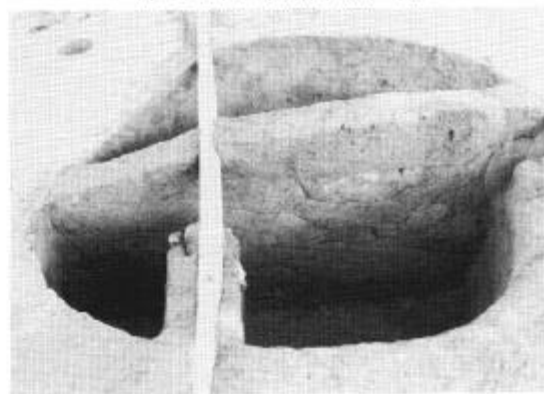
3. SK18土坑 (南→北)



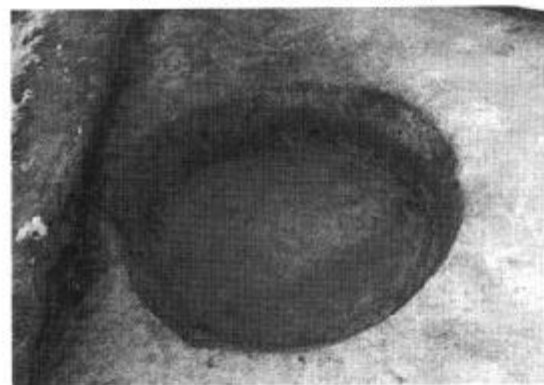
4. SK18土坑断面 (西→東)



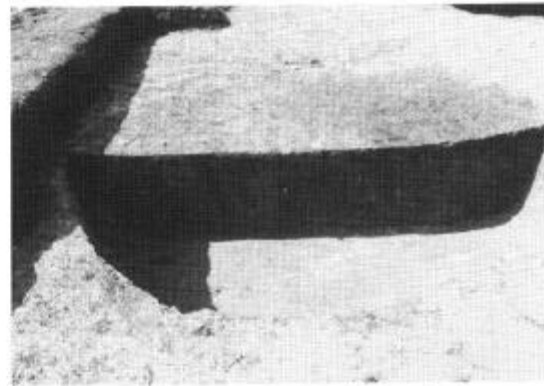
5. SK33土坑 (南西→北東)



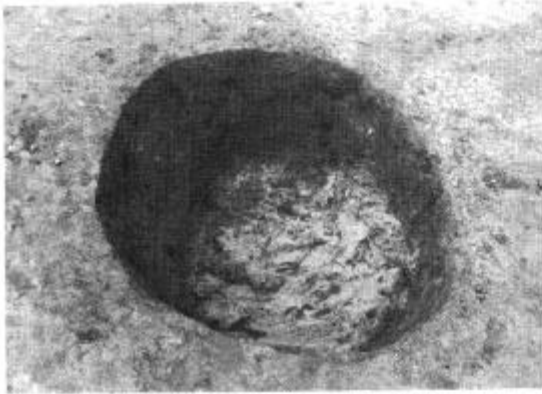
6. SK33土坑断面 (南→北)



7. SK35土坑 (東→西)



8. SK35土坑断面 (東→西)



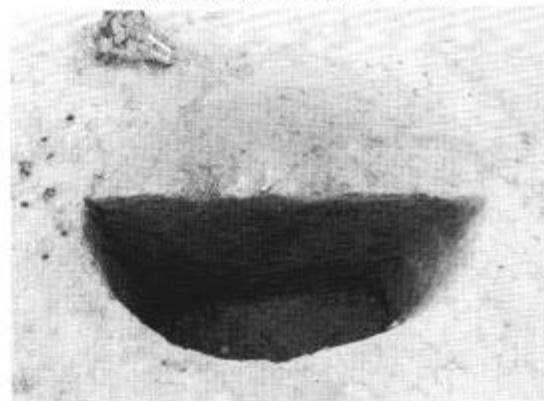
1. SK36土坑 (南西→北東)



2. SK36土坑断面 (南西→北東)



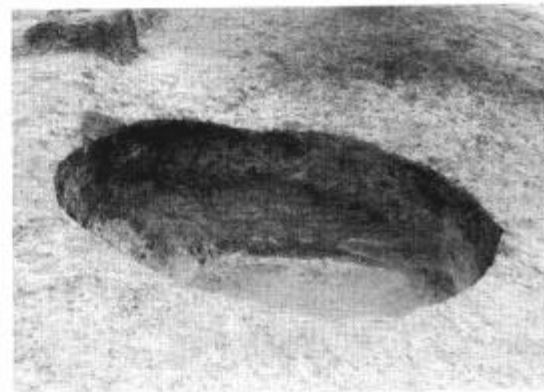
3. SK37土坑 (南西→北東)



4. SK37土坑断面 (南西→北東)



5. SK56土坑 (東→西)



6. SK56土坑 (南→北)



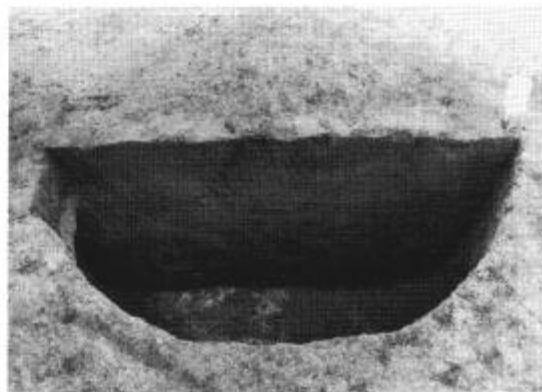
7. SKF02フラスコ状土坑 (南東→北西)



8. SKF02フラスコ状土坑断面 (南東→北西)



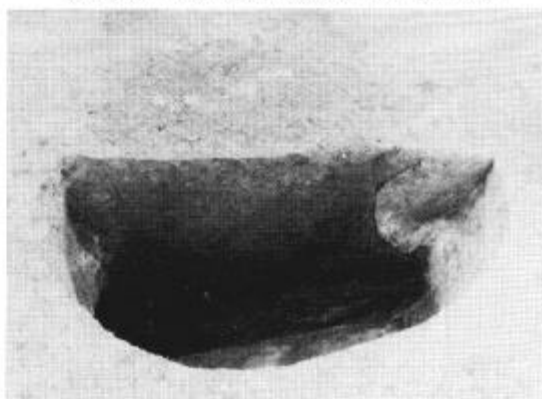
1. SKF04フラスコ状土坑 (南西→北東)



2. SKF04フラスコ状土坑断面 (南→北)



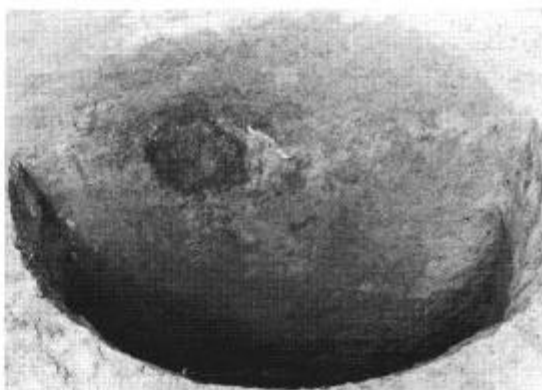
3. SKF22フラスコ状土坑 (東→西)



4. SKF22フラスコ状土坑断面 (東→西)



5. SKF26フラスコ状土坑 (南東→北西)



6. SKF26フラスコ状土坑断面 (南東→北西)



7. SKF19陥し穴 (北西→南東)



8. SKT19陥し穴 (南東→北西)





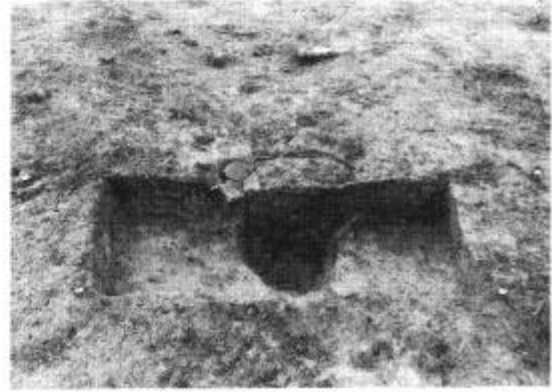
1. SKF12フラスコ状土坑 (南東→北西)



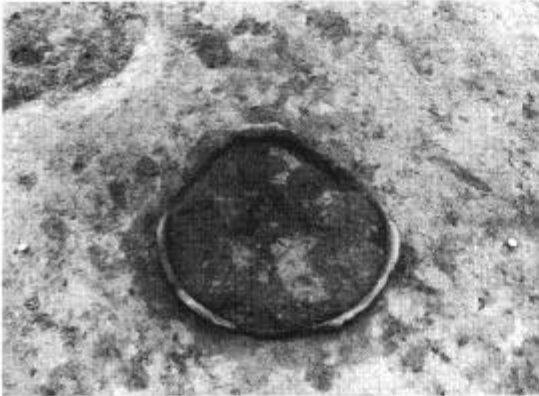
2. SR07土器埋設遺構 (南東→北西)



1. SR03土器埋設遺構(東→西)



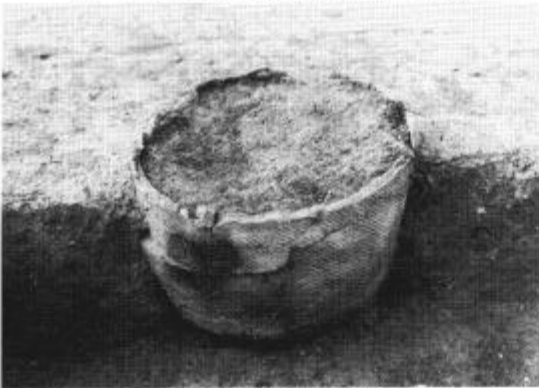
2. SR03土器埋設遺構断面(東→西)



3. SR11土器埋設遺構(南西→北東)



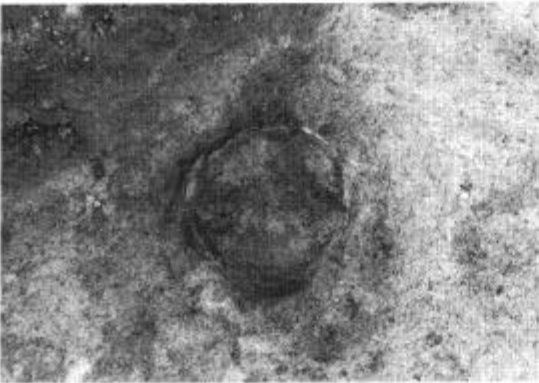
4. SR11埋設遺構断面(南西→北東)



5. SR31土器埋設遺構(南東→北西)



6. SR31土器埋設遺構断面(南東→北西)



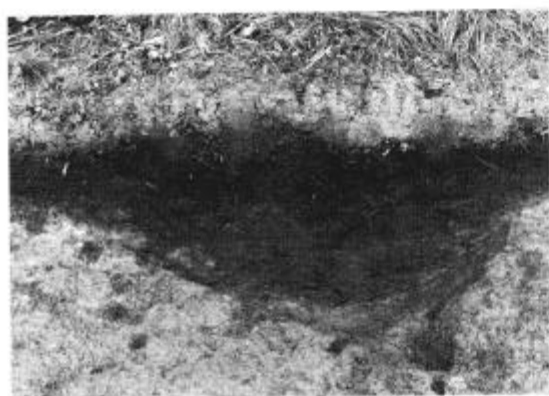
7. SR57土器埋設遺構(南西→北東)



8. SR57土器埋設遺構断面(南西→北東)



1. B区S I 02竪穴住居跡（東→西）



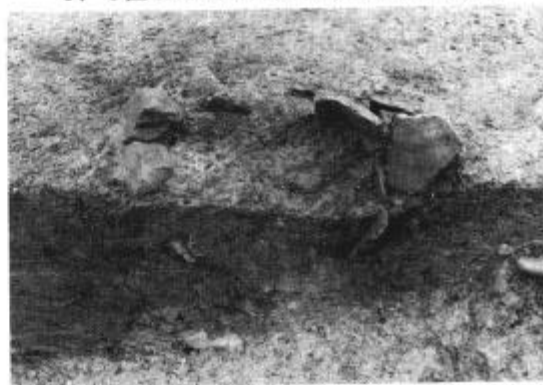
2. B区S K 10土坑（南→北）



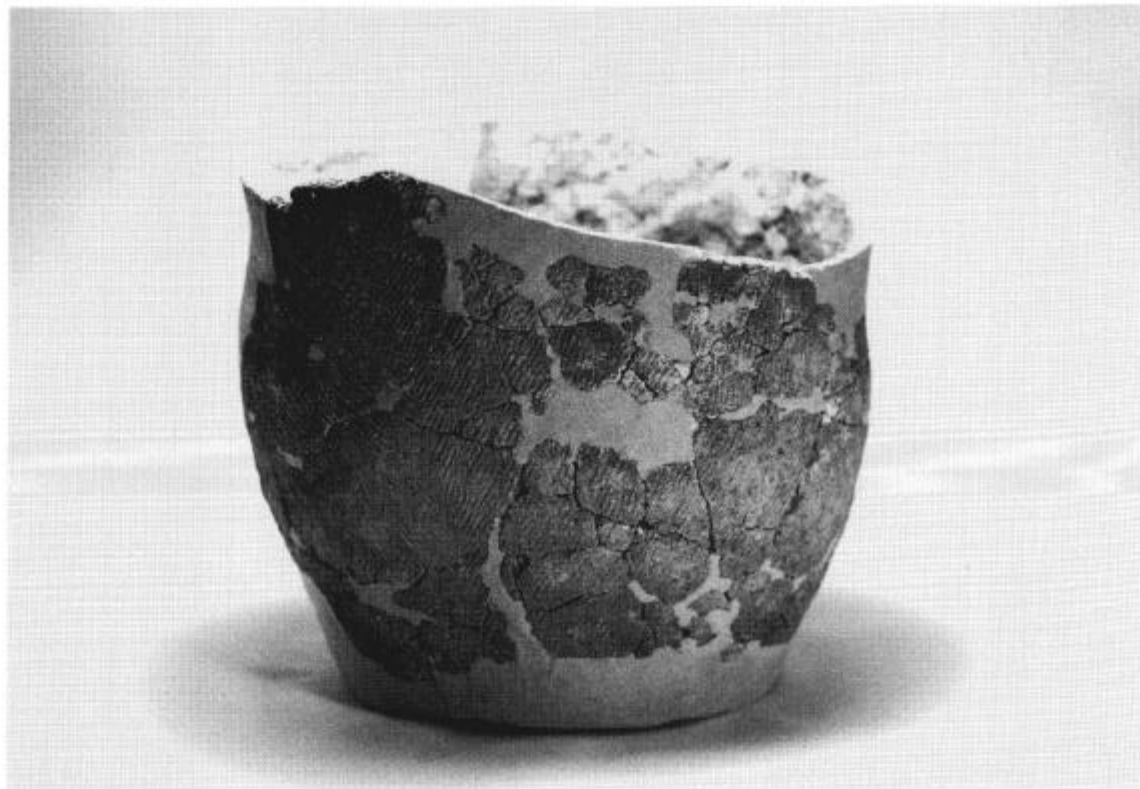
3. C区S I 01竪穴住居跡炉（南東→北西）



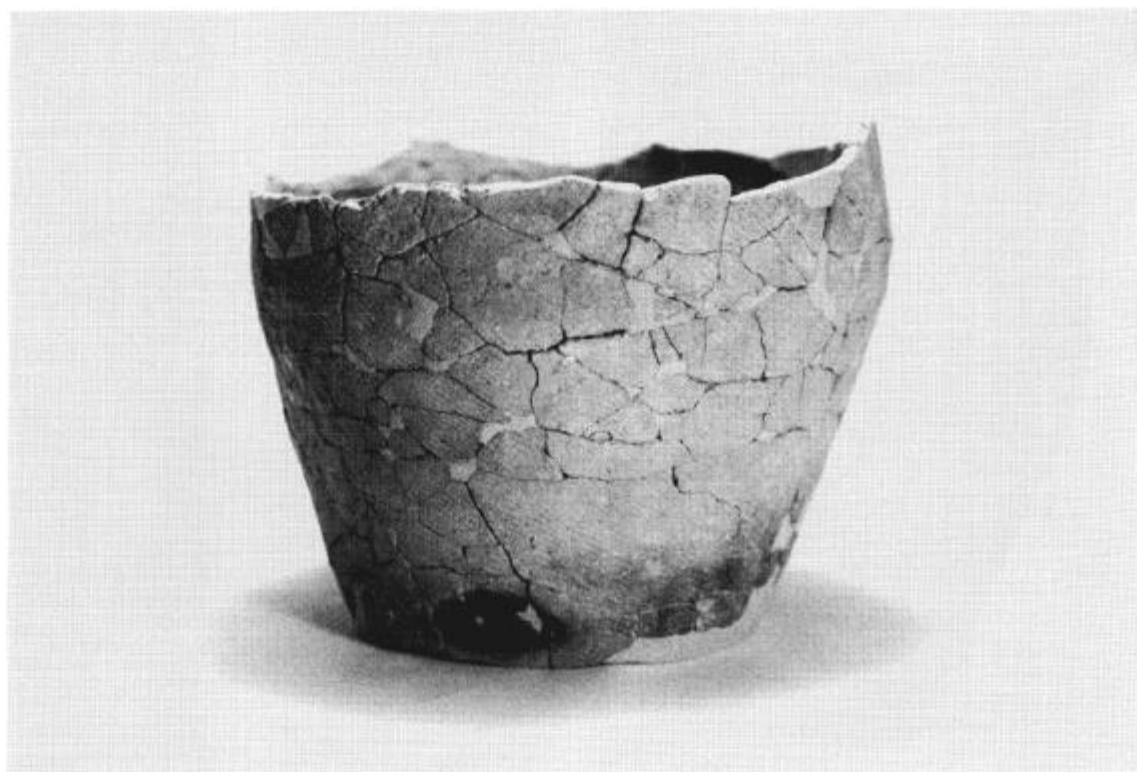
4. C区S K 02土坑（南東→北西）



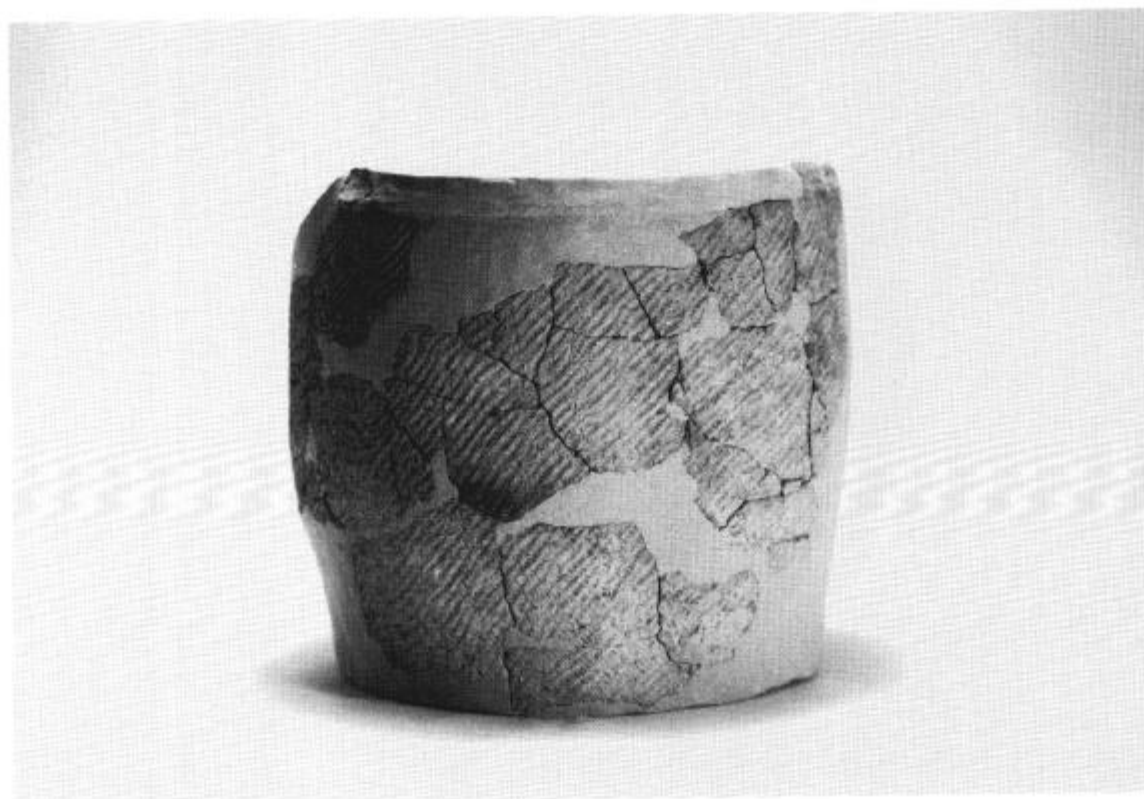
5. C区S R 03土器埋設遺構（西→東）



1. S I 01 竪穴住居跡炉埋設土器



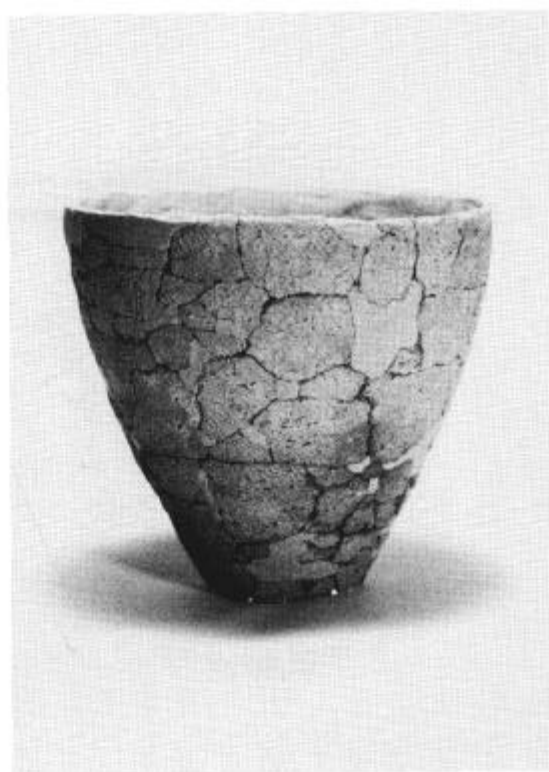
2. S I 05 竪穴住居跡炉埋設土器



1. S I 05 竪穴住居跡出土土器



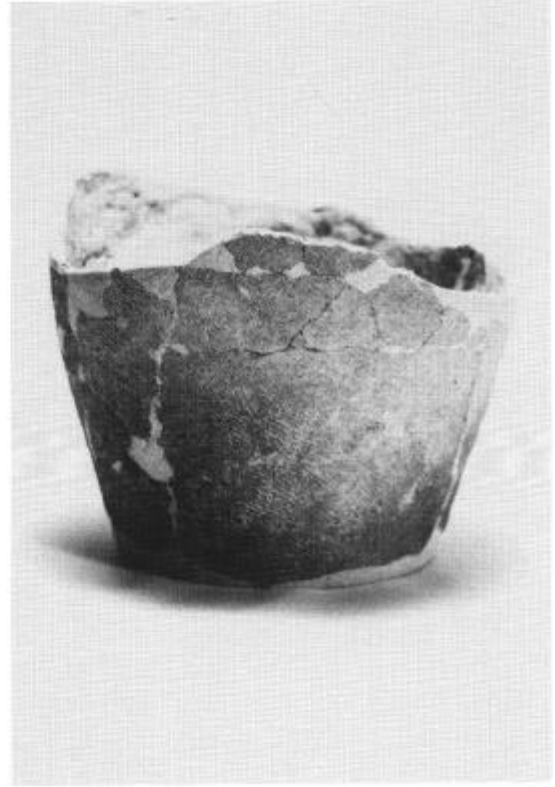
2. S I 05 竪穴住居跡出土土器



3. S I 10 竪穴炉埋設土器



1. S I 13 竪穴住居跡炉埋設土器



2. S I 15 竪穴住居跡炉埋設土器



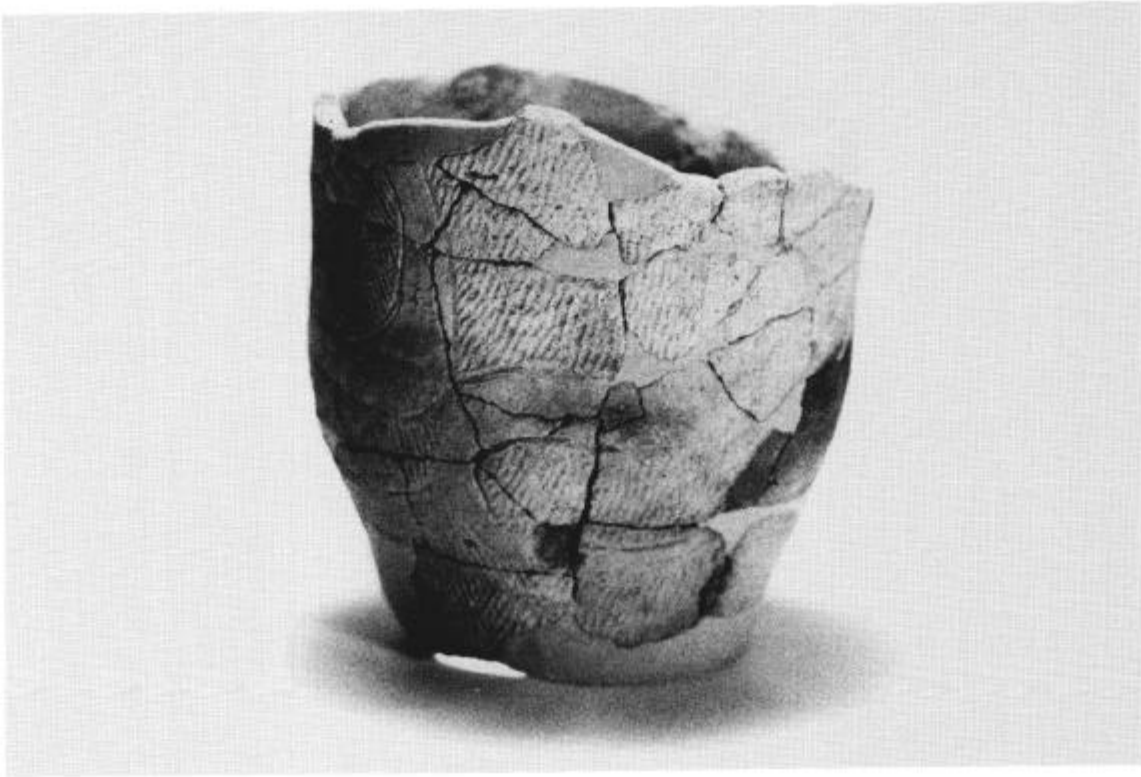
3. S I 16 竪穴住居跡炉埋設土器



1. S I 21 竪穴住居跡炉埋設土器



2. S I 23 竪穴住居跡炉埋設土器



3. S I 23 竪穴住居跡炉出土土器



1. S I 24 竪穴住居跡炉埋設土器



2. S I 25・41 竪穴住居跡出土土器



3. S I 25 竪穴住居跡炉埋設土器

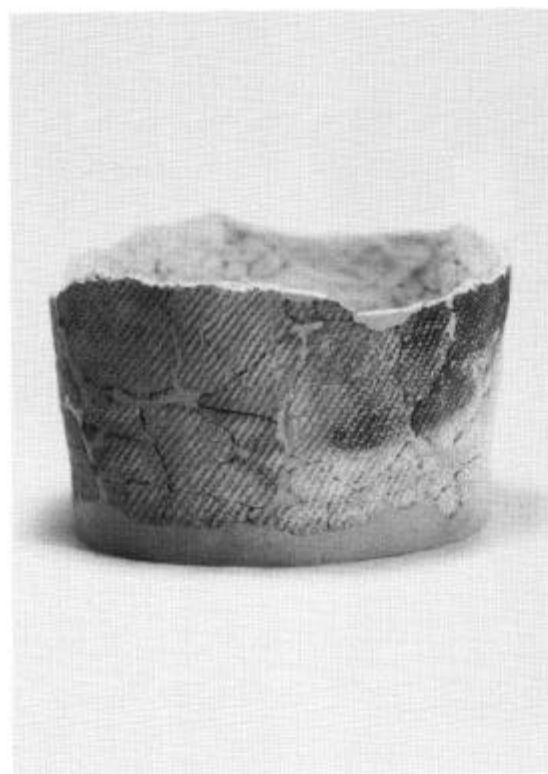




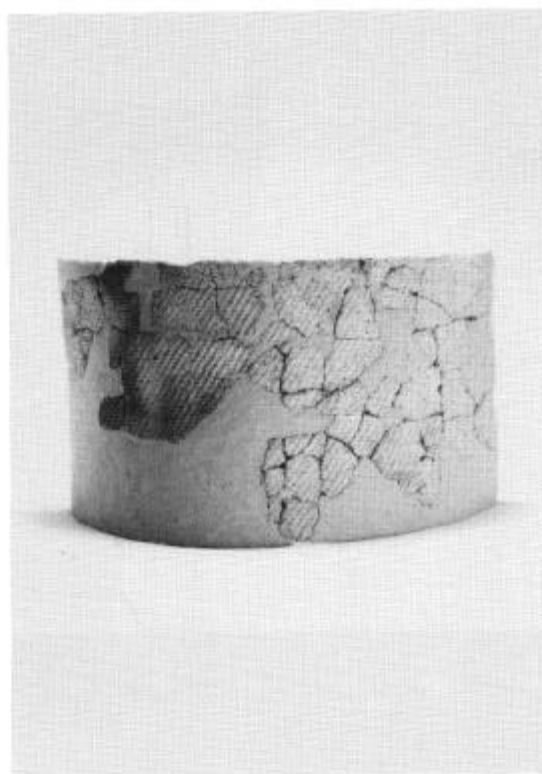
1. S I 32 竪穴住居跡炉埋設土器



2. S I 34 竪穴住居跡出土土器



3. S I 34 竪穴住居跡炉埋設土器



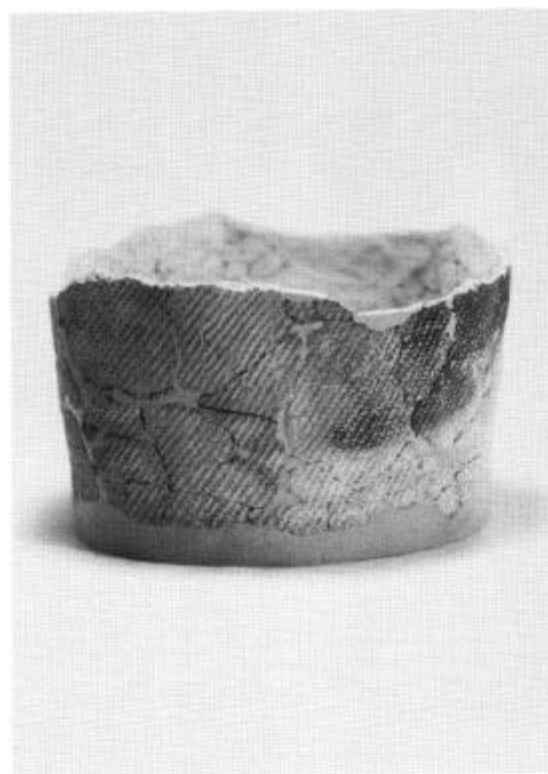
4. S I 34 竪穴住居跡炉出土土器



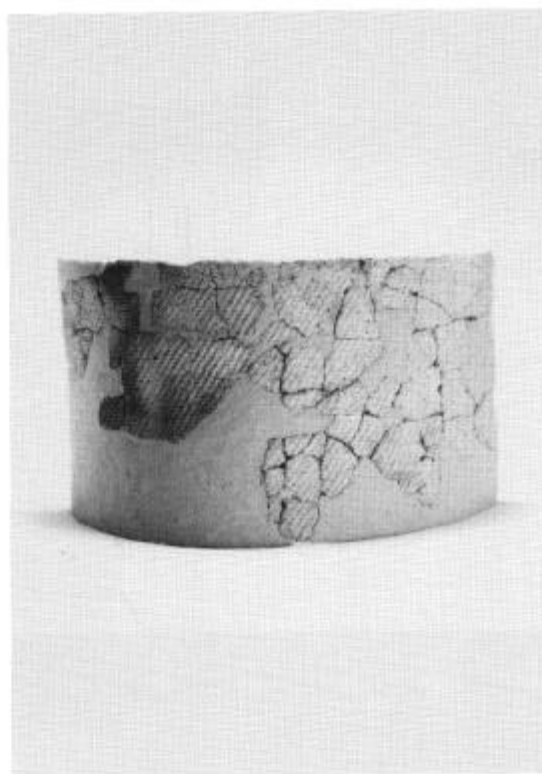
1. S I 32 竪穴住居跡炉埋設土器



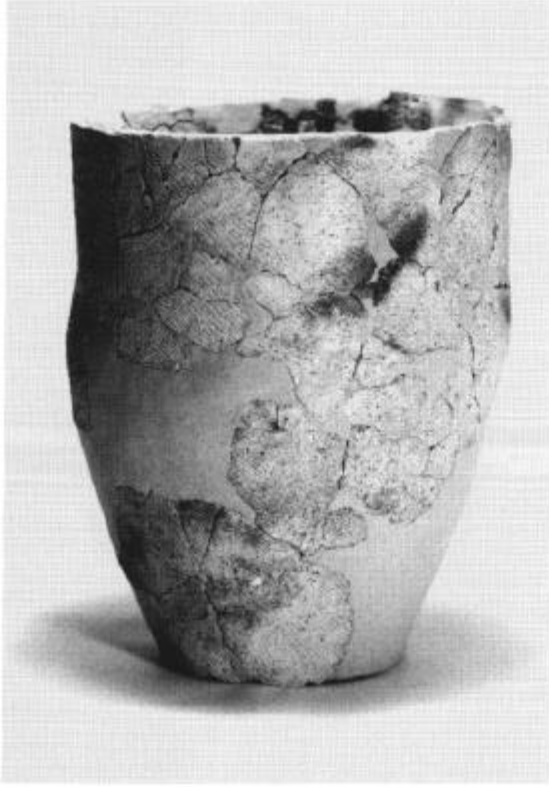
2. S I 34 竪穴住居跡出土土器



3. S I 34 竪穴住居跡炉埋設土器



4. S I 34 竪穴住居跡炉出土土器



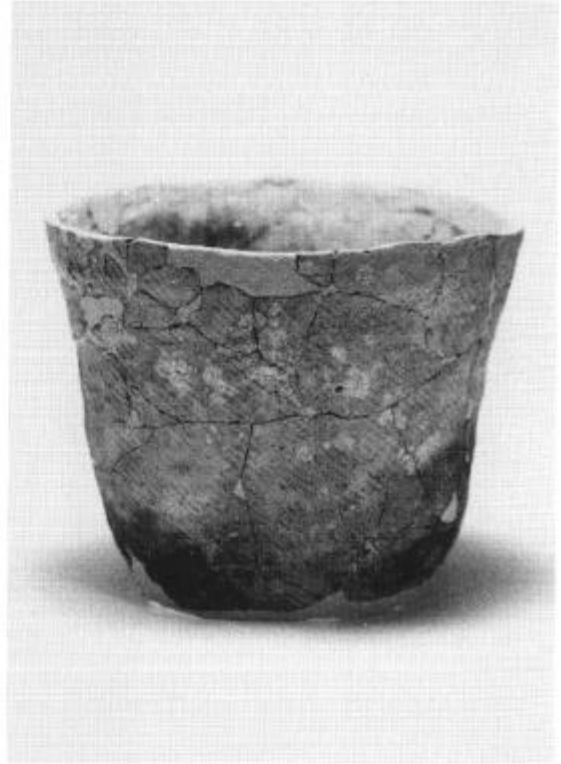
1. S I 42 竪穴住居跡出土土器



2. S I 42 竪穴住居跡炉埋設土器



3. S I 42 竪穴住居跡炉埋設土器



4. S I 60 竪穴住居跡炉埋設土器



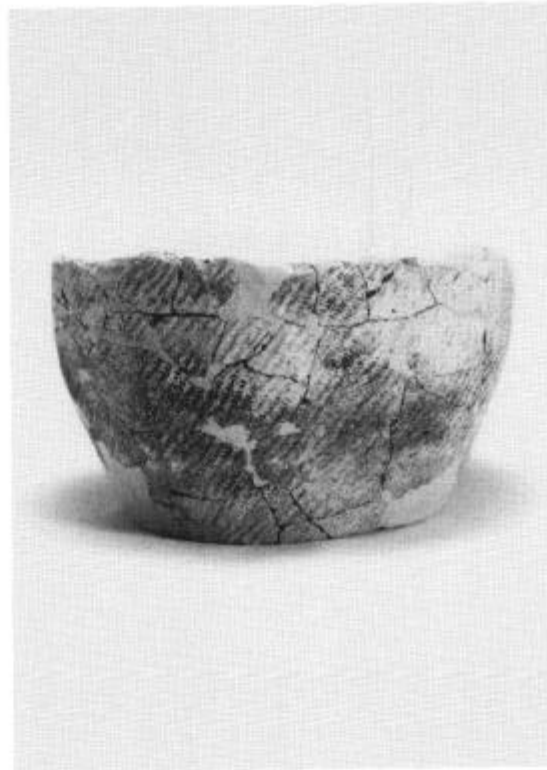
1. SKF12フラスコ状土坑出土土器



2. SR07土器埋設遺構出土土器



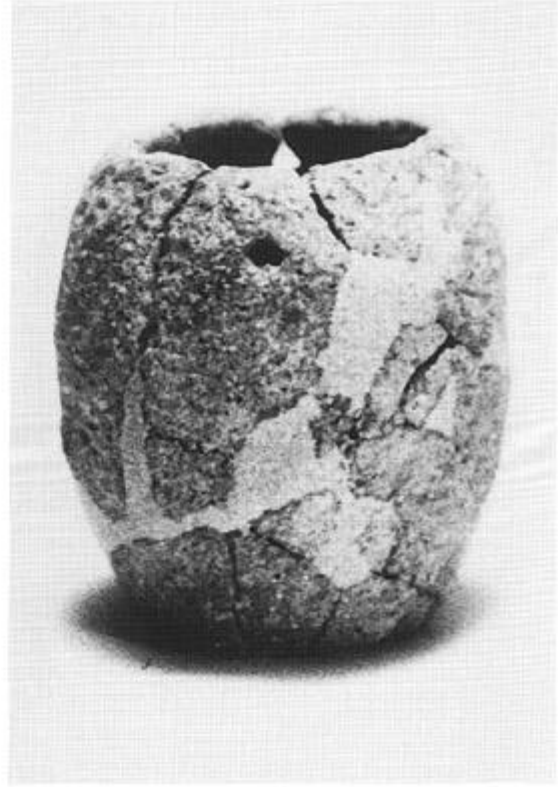
3. SR31土器埋設遺構出土土器



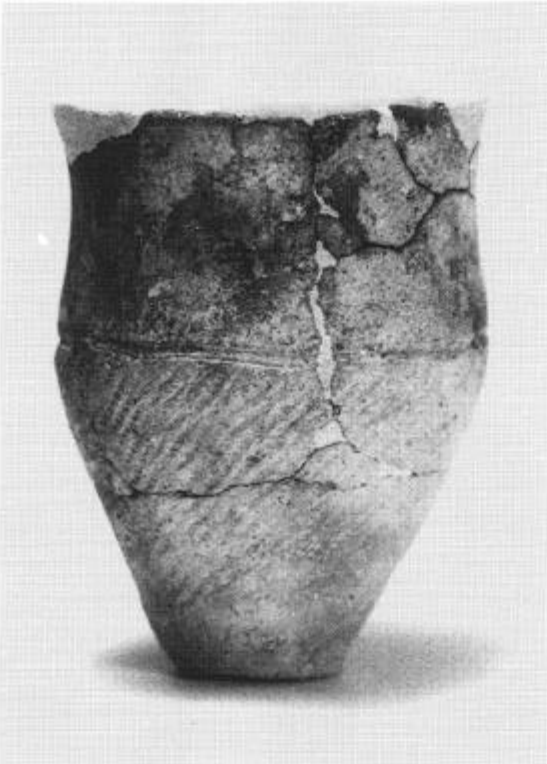
4. SR57土器埋設遺構出土土器



1. S I 23 竪穴住居跡炉出土小型土器



2. S I 32 竪穴住居跡出土小型土器



3. S I 42 竪穴住居跡出土小型土器



4. S K F 12 フラスコ状土坑出土小型土器



1. L P52地区出土土器



2. L P52地区出土小型土器



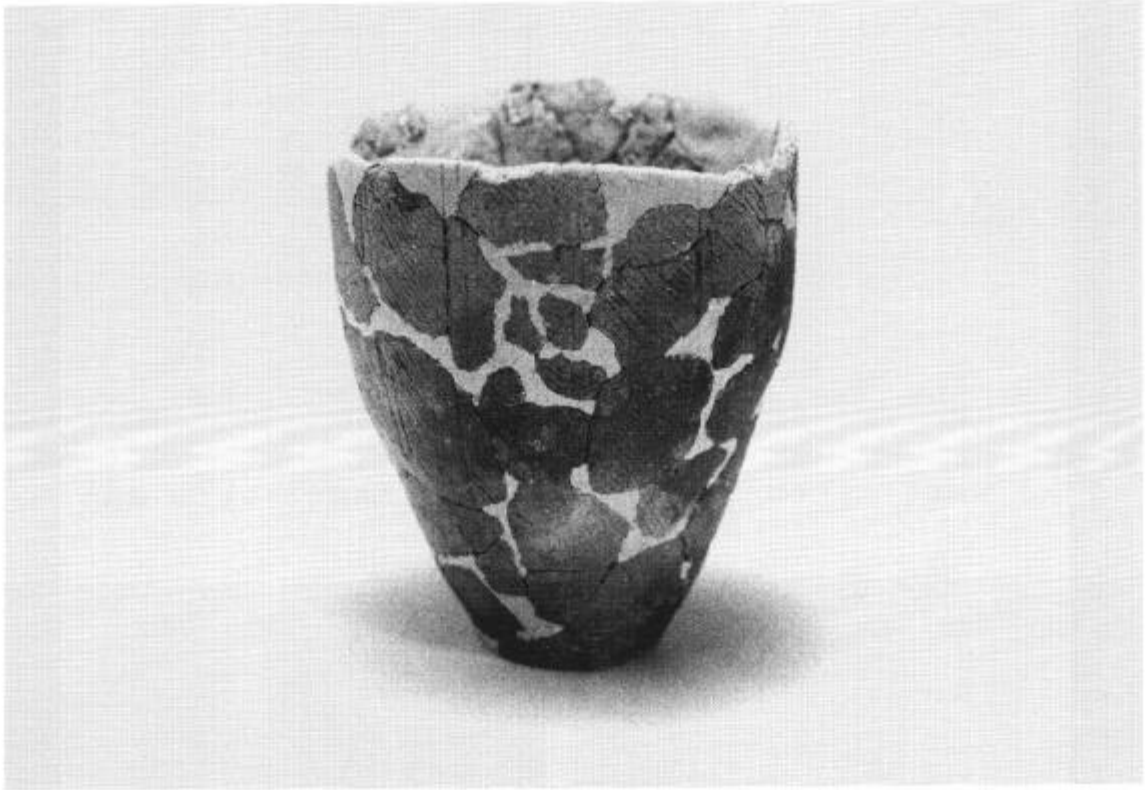
3. MD51地区出土土器小型



4. L N48地区出土小型土器



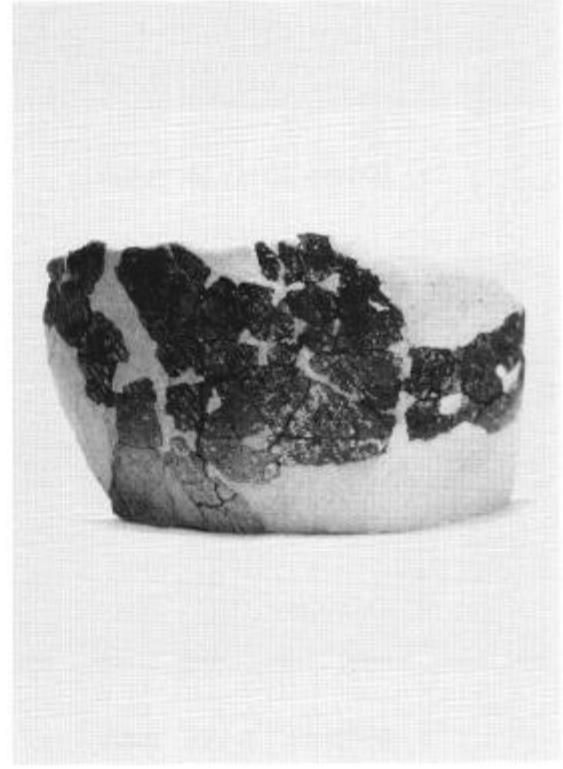
5. L P51地区出土小型土器



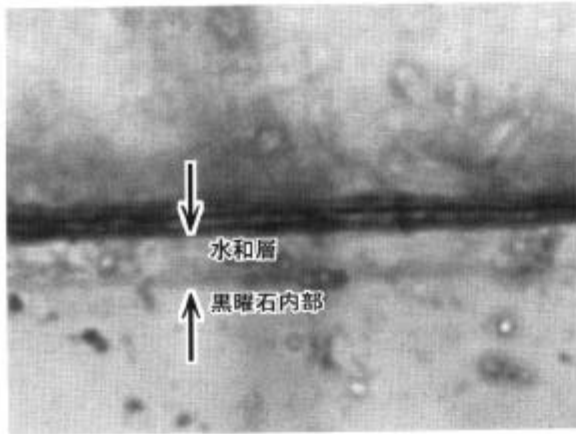
1. B区S I 02竪穴住居跡炉埋設土器



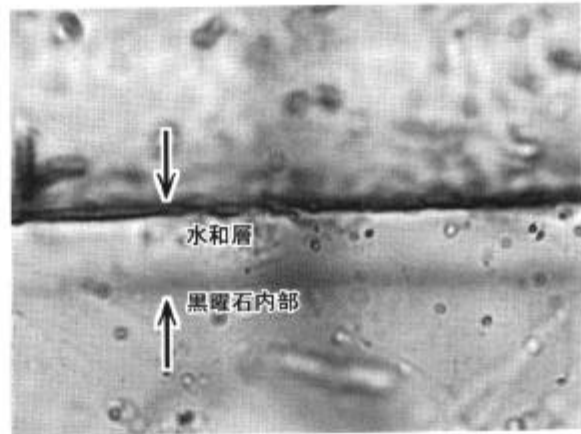
2. B区S I 02竪穴住居跡出土土器



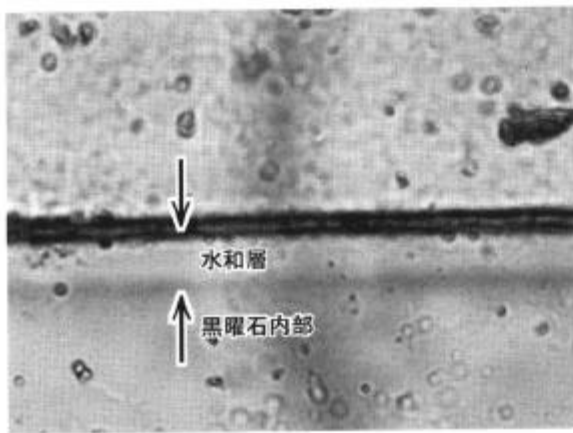
3. C区S I 01竪穴住居跡炉埋設土器



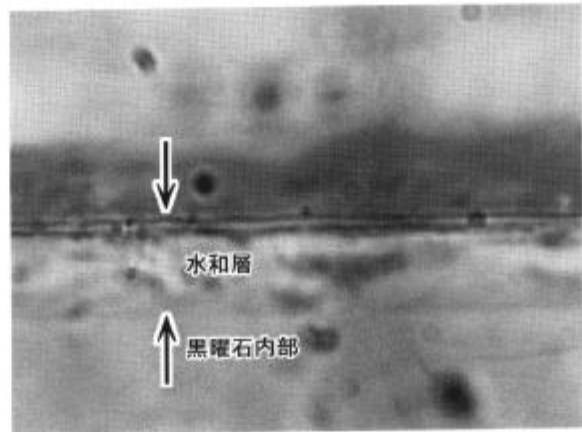
1. 試料番号 1 ; SKF02 遺構内



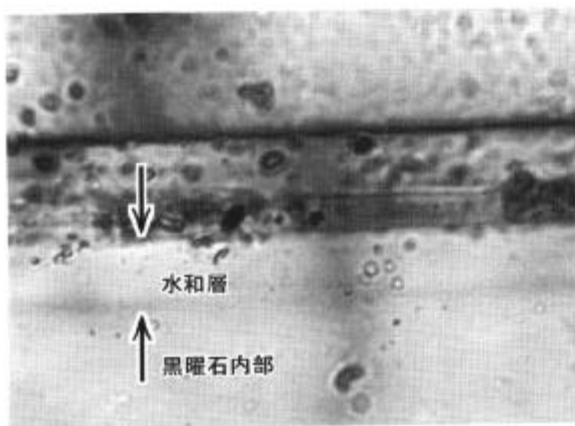
2. 試料番号 2 ; SKF04 遺構内



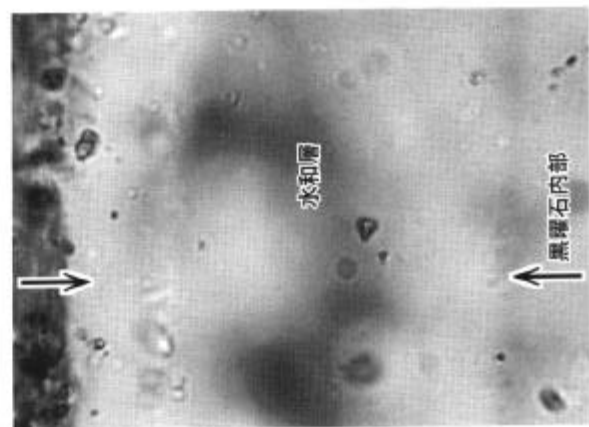
3. 試料番号 3 ; SI05 遺構内



4. 試料番号 4 ; SI15 遺構内



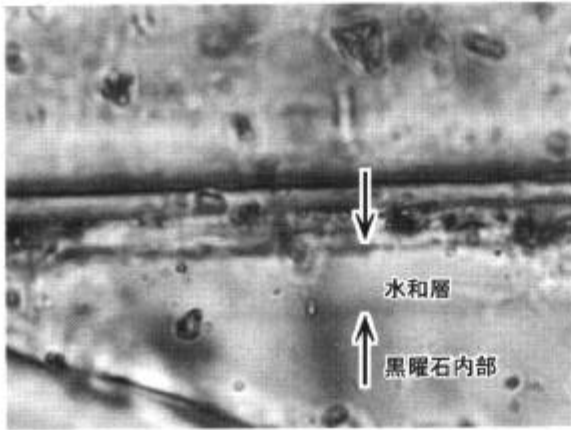
5. 試料番号 5 ; SI21 遺構内



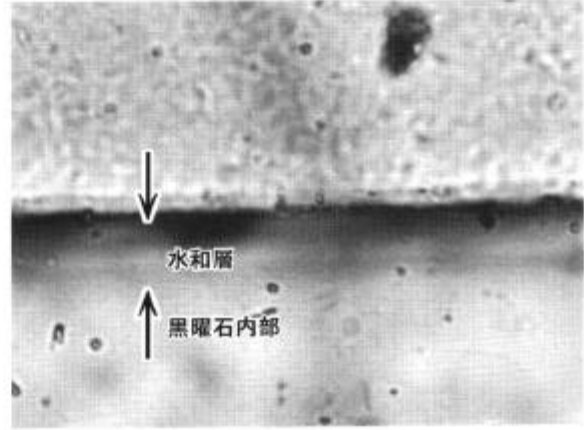
6. 試料番号 6 ; SI32 遺構内

10  $\mu$  m

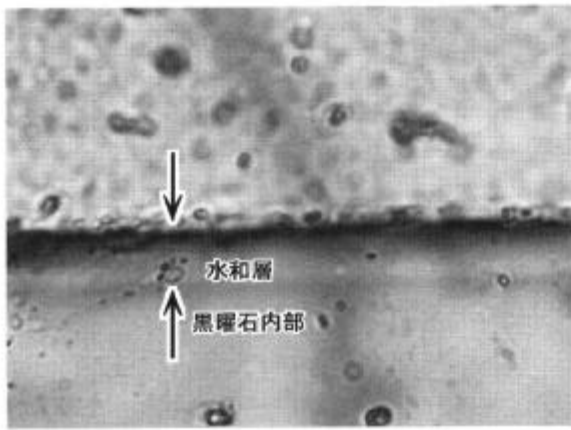




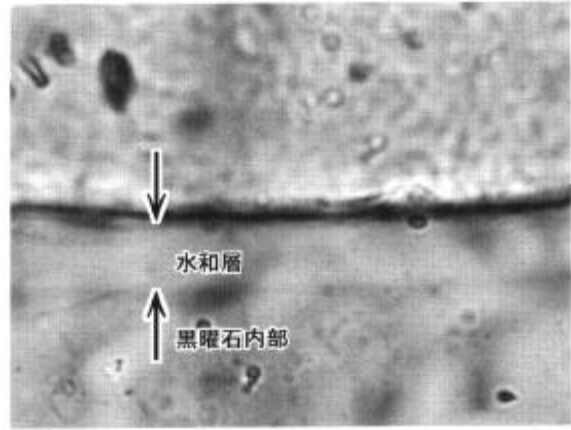
7. 試料番号7 ; S I 34 遺構内



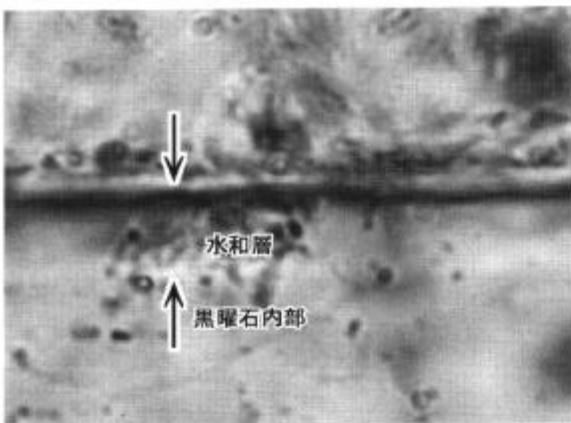
8. 試料番号8 ; S I 42 遺構内



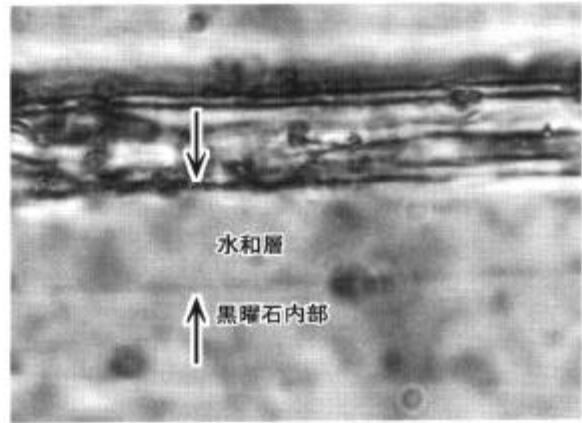
9. 試料番号9 ; S K P 59 遺構内



10. 試料番号10 ; K M 54 遺構外

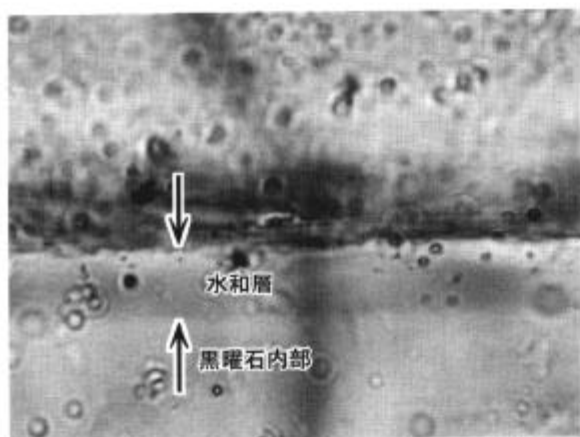


11. 試料番号11 ; K N 53 遺構外

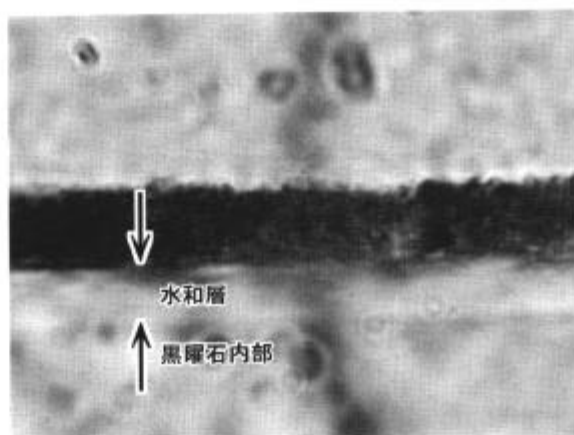


12. 試料番号12 ; K P 53 遺構外

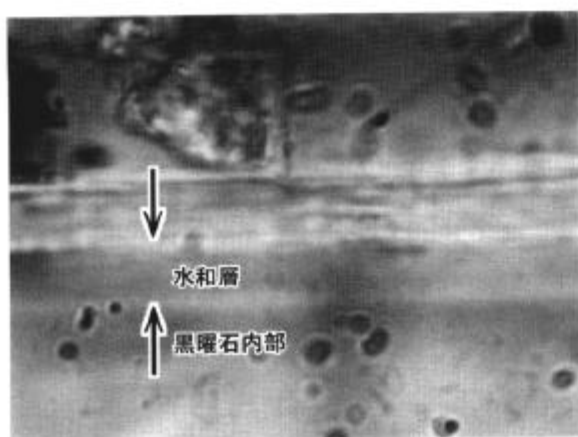
10  $\mu$  m



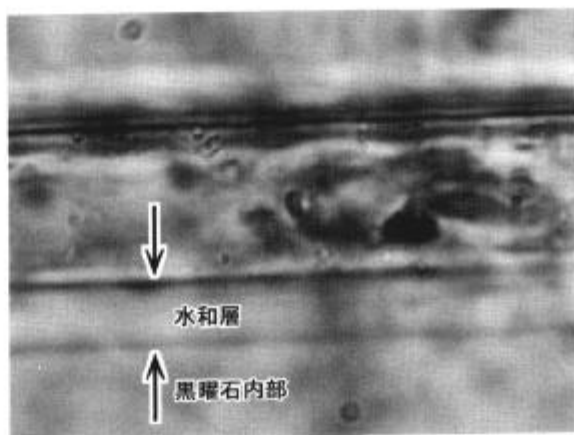
13. 試料番号17 ; L O48 遺構外



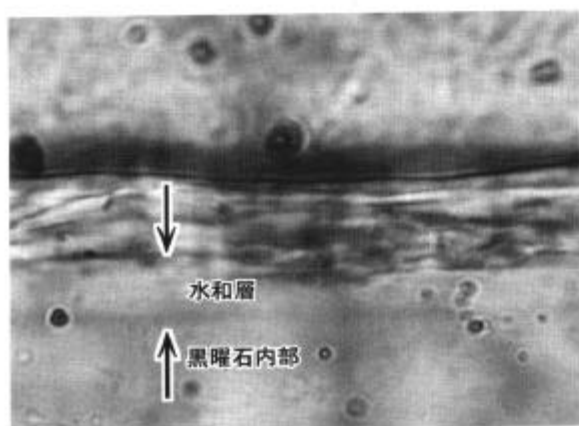
14. 試料番号21 ; L Q52 遺構外



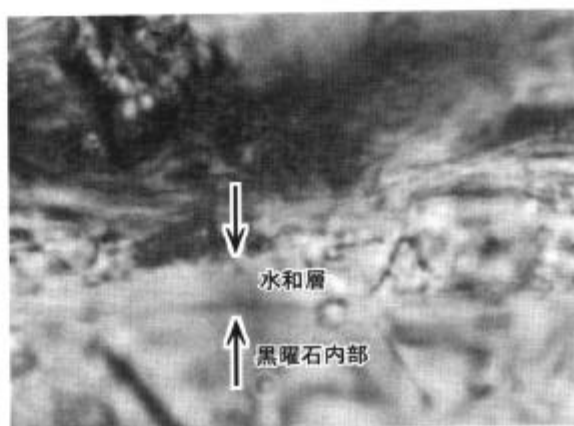
15. 試料番号23 ; L S51 遺構外



16. 試料番号26 ; M A51 遺構外

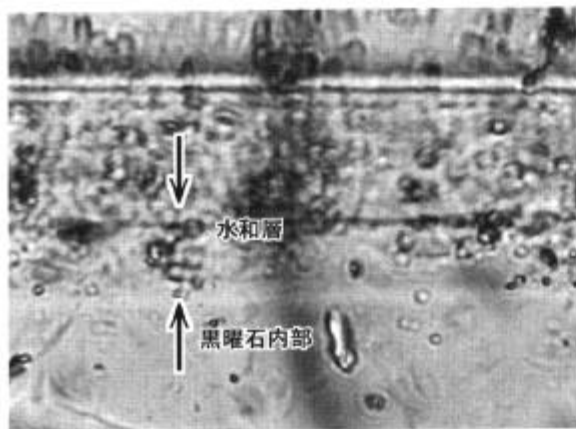


17. 試料番号28 ; M B52 遺構外

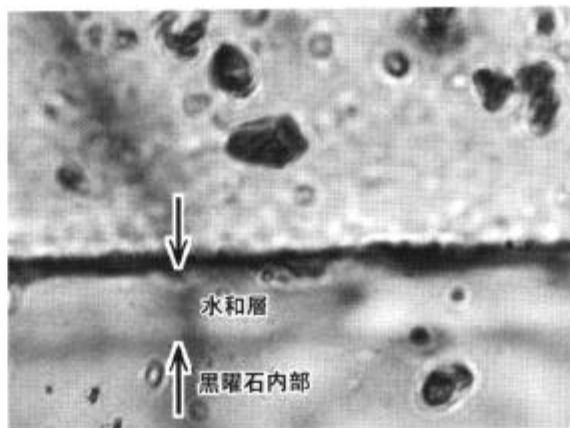


18. 試料番号32 ; M C52 遺構外

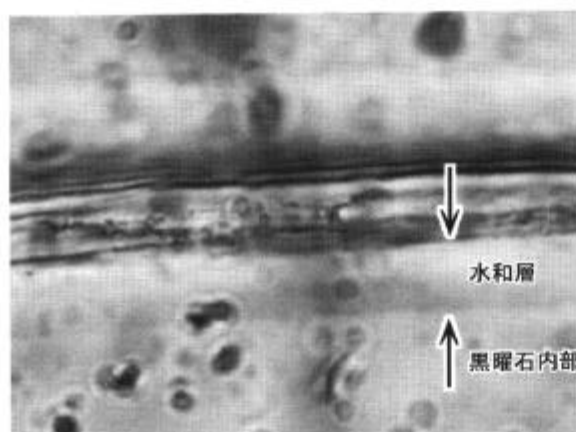
10  $\mu$  m



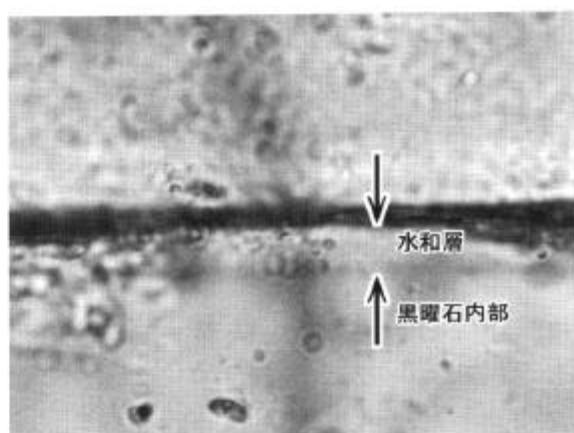
19. 試料番号33 ; M L 52 遺構外



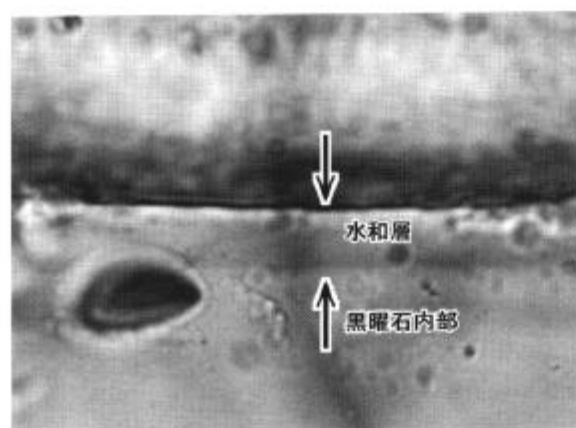
20. 試料番号35 ; M M 51 遺構外



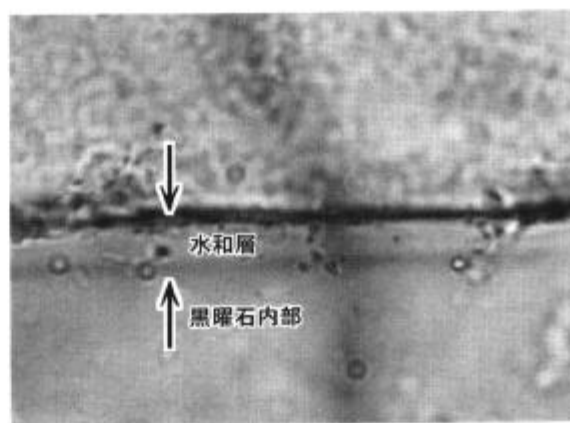
21. 試料番号36 ; M M 53 遺構外



22. 試料番号38 ; I D 48 遺構外

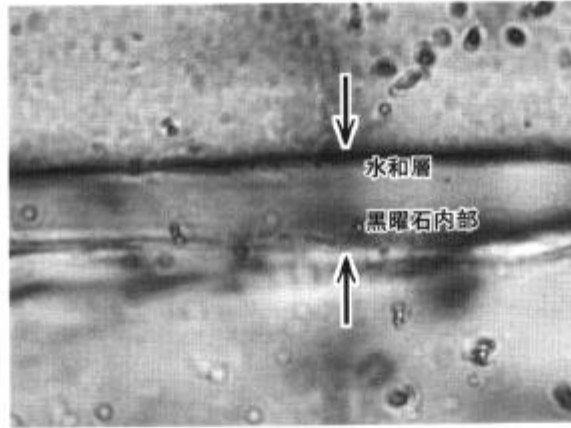


23. 試料番号40 ; I F 49 遺構外



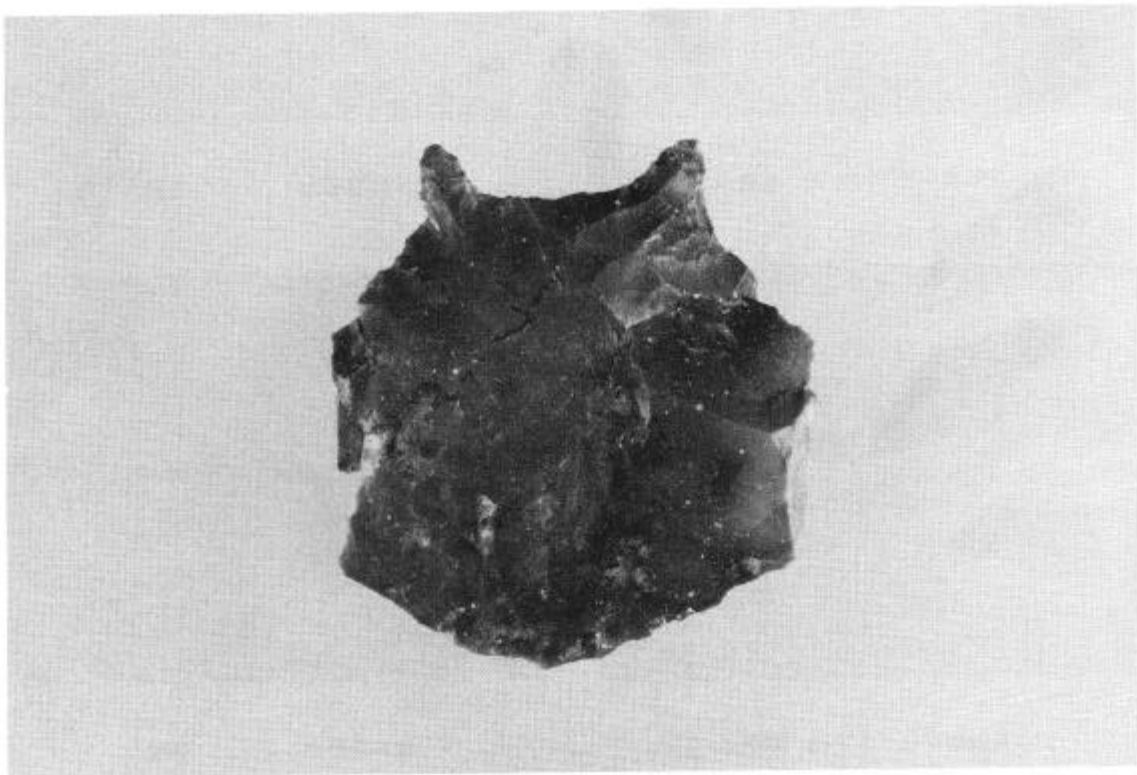
24. 試料番号41 ; I F 50 遺構外

10  $\mu$  m



19. 試料番号42; 脇本～船越海岸採取(比較サンプル)

10  $\mu$  m



泉野冷水遺跡A区SK18土坑出土石錐



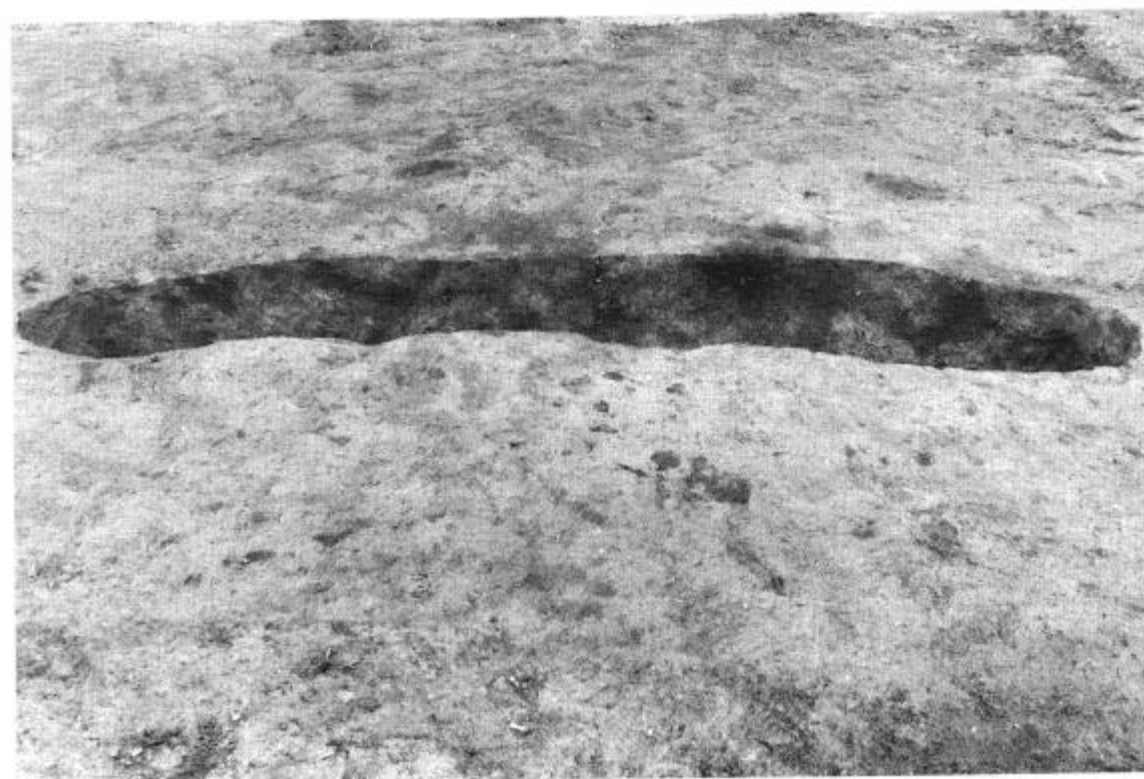
1. 中野遺跡遠景（南西→北東）



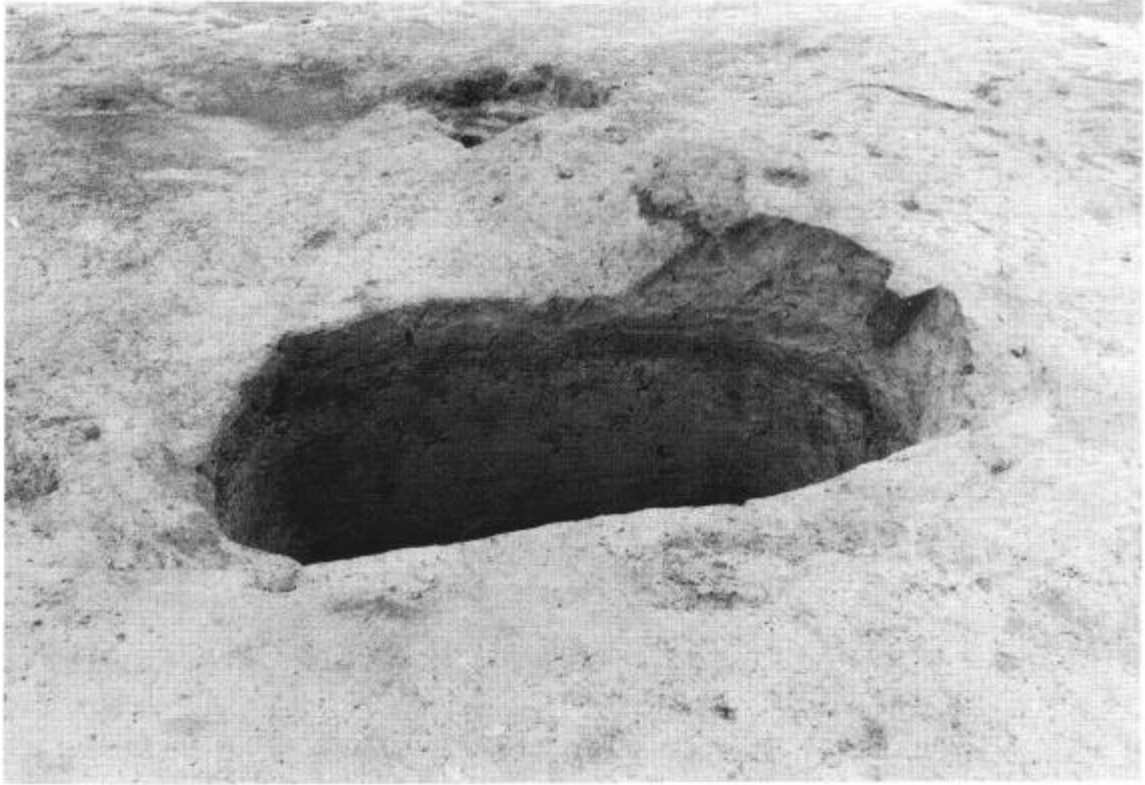
2. 中野遺跡近景（西→東）



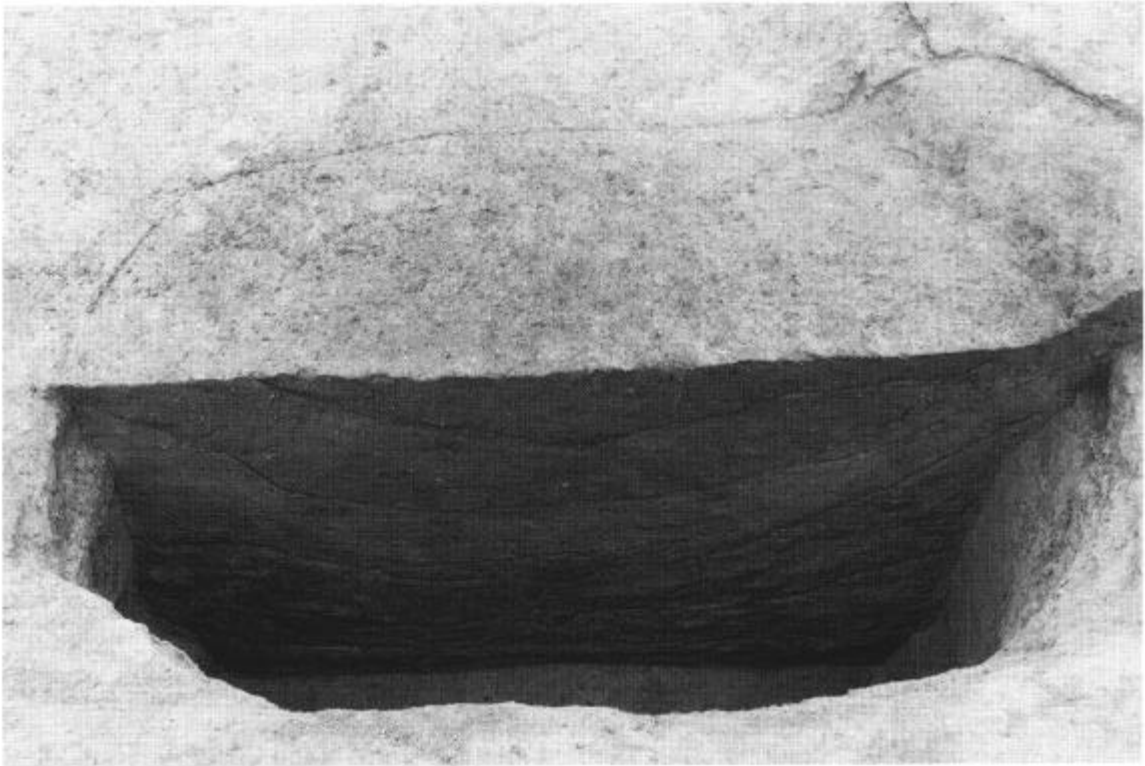
1. SKT01陥し穴 (北西→南東)



2. SKT01陥し穴 (北東→南西)



1. SK02土坑(南西→北東)



2. SK02土坑断面(南西→北東)

報告書抄録

ふりがな	いずみのひやみずいせき・なかのいせき							
書名	泉野冷水遺跡・中野遺跡							
副書名	主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第312集							
編著者名	石澤宏基・栗澤光男・熊谷 誠・平田有宏							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いずみのひやみず 泉野冷水	あきたけんおがし 秋田県男鹿市 きたうらあいゆわあざ 北浦相川字 いずみの ほか 泉野10-3外	05206	6-179	39° 57' 09"	139° 47' 27"	19980608 ) 19981118	5,000㎡	主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
なかの 中野	あきたけんおがし 秋田県男鹿市 きたうらあいゆわあざ 北浦相川字 なかの ほか 中野11外	05206	****	39° 57' 05"	139° 47' 44"	19980907 ) 19981002	1,600㎡	主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
泉野冷水	集落跡 狩場跡	縄文時代中期	堅穴住居跡	19軒	縄文土器	台地縁辺部に堅穴住居跡・土坑・フラスコ状土坑・土器埋設遺構・陥し穴などを設けて営まれた縄文時代の集落跡および狩猟場である。		
			土坑	9軒	石器			
			フラスコ状土坑	5基	など			
			陥し穴	1基				
			土器埋設遺構	6基				
			その他の遺構	1基		計41遺構		
中野	狩場跡	縄文時代	土坑	1基	縄文土器	平坦な台地面に陥し穴・土坑を設けた縄文時代の狩猟場である。		
			陥し穴	1基	土製品			
				計2遺構	など			



## あとがき

発掘調査から報告書の刊行まで、実に多くの方々から御支援、御協力を賜り、誠にありがとうございました。ここに、発掘調査および整理作業に携わった皆さまのお名前を記し、感謝の意を表します。

【発掘調査参加者】 浅井武雄 浅井春雄 小林栄一 小林利男 猿田 誠 菅原文之助  
菅原 嘉 夏井義孝 眞壁義勝 関銀一郎 細井勝春 湊 弘明  
池田秀雄 佐藤茂敏 舩山 武 鎌田勝広 鎌田 照 塚本 正  
浅井マサ子 石川淳美 石川ミツエ 大高初子 大淵とき子 古仲明美  
佐藤ミツ 嶋宮英子 菅原フチエ 竹内淳子 武田澄子 細井久美子  
畠山ゆかり 眞壁カヂエ 眞壁ツタ 松本ヒサエ 古仲英子 白幡カツ子

【整理作業参加者】 越後谷洋子 川原礼子 草薨清美 草薨美香 小松睦子 後藤由美子  
佐藤節子 佐藤蘭子 鈴木 幸 鈴木孝子 竹村和子 原 陽子  
藤田悦子 中島広美 長澤千可子 渡邊節子 藤原堅晃